西ノ辻遺跡12～15次調査概要報告

Nishinotsuji

—東大阪市東石切・西石切町所在—

2001年12月

大阪府教育委員会

財団法人　東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市神並・西ノ辻・鬼虎川の３遺跡は，生駒山地西麓に所在します。３遺跡は，昭和55年から大阪府教育委員会・東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会によって発掘調査されてきました。３遺跡に新鉄道（東大阪生駒電鉄）の建設，国道308号の拡幅および阪神高速道路の延伸等の土木工事が計画されたためです。

発掘調査の結果，珍しい遺物が多数出土し，各種の遺構も多数検出され，遺跡の重要性がさらに高くなりました。

今回発表する調査概要は，昭和58年度に実施された大阪府教育委員会による西ノ辻遺跡の調査結果並びに遺物整理報告です。

この調査では，弥生時代の方形周溝墓，縄紋～鎌倉時代の自然河川，鎌倉時代の土壙墓や井戸・柱穴群，室町時代の配石遺構等の遺構が多数検出され，地域史にとって貴重な学術資料を得ることが出来ました。

また，遺物整理の結果，中世の飲食器の変遷，あるいは井戸中から多数出土した木製品の変遷が明らかになる等，貴重な成果を多数上げることができました。

本調査概要を通じて，文化財に対する理解をますます深めていただければ幸いです。

平成14年３月31日

大阪府教育委員会
財団法人東大阪市文化財協会

例　　言

1．本書は、大阪府並びに東大阪生駒電鉄株式会社が建設を進めていた国道308号線及び都市計画道路築港枚岡線並びに都市高速鉄道東大阪線の建設予定地内に所在する神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡の発掘調査概要報告並びに遺物整理報告である。

2．本調査並びに遺物整理は，大阪府教育委員会が大阪府土木部の委託を受けて実施したものである。

3．本調査は大阪府教育委員会文化財保護課技師西口陽一・宮崎泰史を担当者とし，調査員蜂屋晴美・瀬川眞美子が輔けた。遺物整理は，調査員津田美智子・市川秀之・森島康雄・浜田延充が輔けた。

4．調査並びに遺物整理にあたっては，東大阪市教育委員会文化財課の職員，財団法人東大阪市文化財協会の職員の方々に有益な助言と多大な協力を得た。記して感謝する。

5．出土した石硯については，北畠雙耳・五鼎の両先生と四代目土井惣佐衛門氏，木簡については藤沢一夫先生・奈良大学講師木下密運先生・奈良国立文化財研究所綾村宏氏，人骨については池田次郎先生，地層および動物遺存体については大阪市自然史博物館の那須孝悌氏，樽野博幸氏，縄紋土器については宮野淳一氏，中世土器については橋本久和・尾上実の両氏から懇切なる教示を得た。記して感謝する。

6．本書の遺構写真の一部及び遺物写真については，阿南辰秀・伊藤慎司氏にお願いした。御尽力された両氏に感謝する。

7．発掘調査の補助並びに遺物整理作業にあたられたのは、以下の方々である。記して感謝する。
芦田尚子・稲田美和・石野かおる・乾野貴子・岩畦幸子・上田裕子・大宮和美・岡田聖一・川瀬貴子・倉橋公栄・小林早智子・讃岐真理子・白石由香・鈴木寛子・高芝泰彦・財部祐介・竹田操・田中いつき・土橋学・中川須美子・中西久美・西原稔美・西田大輔・布目久夫・樋口浩子・福田英輝・古道ヒサエ・堀ノ内泉・宗戸芳子・村田博樹・矢部みどり・安居勝善・山本裕子・横山真弓・横山直美・吉村卓・吉村早苗・中川美由紀・橋村一也

8．本書の作成にあたっては，上記の方々の他に，堀江門也，玉井功，松田順一郎，別所秀高，鍋島隆宏，河本美穂，高田真由美，江尻奈美子の協力を得た。記して感謝します。

9．本調査にあたっては，写真・遺物実測図等の記録を作成すると共に，カラースライドを作成した。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．本調査の地区名は，年度の数字の次に１区・２区・・・と仮称した。遺跡名の略称としては，神並をＫＵＭ，西ノ辻をＮＴＺ，鬼虎川をＫＴＲとした。したがって，今回調査した地区分は，西からＮＴＺ58－２区，ＮＴＺ58－３区，ＮＴＺ58－５区，ＮＴＺ58－７区となる。調査時での呼称及び遺物のナンバーリングもこれに準じている。

　年次で表記すれば，ＮＴＺ58－２区は西ノ辻遺跡13次調査，ＮＴＺ58－３区西ノ辻遺跡15次調査は，ＮＴＺ58－５区は西ノ辻遺跡12次調査，ＮＴＺ58－７区は西ノ辻遺跡14次調査となる。

2．標高は，東京湾標準潮位（Ｔ．Ｐ．）を基準とし，m単位で表示している。

3．本書に掲載している遺物は，一連の通し番号を付している。この番号は，本文挿図・図版写真・法量表ともに共通する。

4．遺物実測図の縮尺は，土器については原則として１／４，石器については１／２とし，適時縮尺を変えている。

5．遺構の計測は適時m，cmを併用し，遺物についてはcm，mmを併用している。

西ノ辻遺跡12～15次調査概要報告

Nishinotsuji

－東大阪市東石切・西石切町所在－

都市計画道路築港枚岡線並びに東大阪線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境 …… 1

第Ⅱ章　調査に至る経過 …… 3

第Ⅲ章　58－3区の調査成果 …… 5

第1節　層　位 …… 5

第2節　検出された遺構 …… 8

第1項　中世の遺構 …… 8

井戸 …… 8

柱穴群 …… 12

土器群・石列 …… 12

木組み遺構 …… 14

土壙墓 …… 14

第2項　弥生時代～中世の遺構 …… 15

自然河川 …… 15

第3節　検出された遺物 …… 17

第1項　縄紋～弥生時代の遺物 …… 17

縄紋土器 …… 17

弥生土器 …… 18

弥生時代以前の石器 …… 21

第2項　古墳時代～中世の遺物 …… 21

中世の石製品…… 21
古墳～平安時代の土器…… 30
中世の土器…… 30
中世の土錘…… 40
中世の木製品…… 40
金属製品…… 44
第４節　小結 …… 45

第Ⅳ章　58－５区の調査成果…… 47
第１節　層　位 …… 47
第２節　検出された遺構…… 48
第１項　中世の遺構 …… 48
井戸…… 48
土坑…… 52
柱穴群…… 53
第２項　弥生時代～中世の遺構…… 55
自然河川…… 55
第３節　検出された遺物 …… 55
第１項　弥生時代以前の遺物…… 55
弥生時代以前の石器…… 55
第２項　古代～中世の遺物 …… 55
中世の石製品…… 55
古代～中世の土器…… 57
中世の土錘…… 60
中世の木製品…… 60
金属製品…… 63
第４節　小　結 …… 63

第Ⅴ章　58－７区の調査成果…… 65
第１節　層　位 …… 65
第２節　検出された遺構 …… 66
第１項　古代～中世の遺構…… 66
井戸…… 66
土坑…… 74

柱穴群…… 76
配石遺構…… 76
スキ跡…… 78
第２項　弥生時代の遺構 …… 78
方形周溝墓…… 78
第３節　検出された遺物 …… 80
第１項　弥生時代以前の遺物…… 80
弥生土器…… 80
弥生時代以前の石器…… 80
第２項　古代～中世の遺物 …… 83
中世の石製品…… 83
古代～中世の土器…… 85
中世の土錘…… 110
古代～中世の木製品…… 111
金属製品…… 122
第４節　小　結 …… 123

第Ⅵ章　58－２区の調査成果…… 125
第１節　概　要 …… 125
第２節　縄紋土器 …… 126
第３節　小　結 …… 135

第Ⅶ章　まとめ …… 137

西ノ辻遺跡12～15次調査概要報告

図　版

図版１　58－３区　遺構　全景（上方が北）
図版２　58－３区　中世　遺構
　ａ．井戸１　刀子出土状況
　ｂ．井戸１　白磁坏出土状況
　ｃ．井戸１　曲物桶出土状況
図版３　58－３区　中世　遺構
　ａ．井戸２　全景（南西から）
　ｂ．井戸３　土層断面（西から）
図版４　58－３区　中世　遺構
　ａ．井戸３　曲物桶底板出土状況
　ｂ．井戸４　土層断面（北から）
　ｃ．井戸４　銅釘出土状況（北東から）
図版５　58－３区　中世　遺構
　ａ．井戸５　土層断面
　ｂ．井戸６　土層断面（南から）
　ｃ．井戸６　曲物桶出土状況（北から）
図版６　58－３区　中世　遺構
　ａ．井戸７　ザル出土状況
　ｂ．井戸８・９　全景（南東から）
図版７　58－３区　中世　遺構
　ａ．井戸10　検出状況（東から）
　ｂ．井戸10　土層断面（北東から）
　ｃ．井戸10　瓦器椀出土状況
図版８　58－３区　遺構
　ａ．包含層　緑色片岩製石硯出土状況
　ｂ．包含層　蓮華紋軒丸瓦出土状況
　ｃ．包含層　馬の頭蓋骨出土状況（北から）
図版９　58－３区　中世　遺構
　ａ．土器群・石列出土状況(北から)
　ｂ．土器群出土状況（東から）
図版10　58－３区　中世　遺構
　ａ．土器群・石列　石櫃出土状況（南東から）
　ｂ．土器群・石列　地覆石出土状況（西から）
　ｃ．土器群・石列　杭と棒出土状況（北から）
図版11　58－３区　遺構
　ａ～ｄ．自然河川　馬骨出土状況
　ｅ．自然河川　かまど・羽釜出土状況
図版12　58－３区　中世　遺構
　ａ．土壙墓　全景（南から）
　ｂ．土壙墓　近景（南東から）
図版13　58－３区　遺構
　ａ．自然河川　南壁土層断面（東半）
　ｂ．同上（西半）
図版14　58－３区　遺構
　ａ．弥生包含層　弥生土器（甕），
　　蛤刃石斧出土状況
　ｂ．自然河川　東壁土層断面（南半）
　　（北西から）
図版15　58－３区　遺構
　ａ．自然河川　西側土層断面（東から）
　ｂ．弥生時代自然河川　全景（北から）
図版16　58－３区　縄紋～弥生時代　土器・土製品
　ａ．縄紋土器　ｂ．弥生土器、土製円板
図版17　58－３区　弥生時代　土器
　ａ・ｂ．弥生土器
図版18　58－３区　弥生時代　土器
　弥生土器
図版19　58－３区　縄紋～弥生時代　石器
　ａ．石鏃，削器，石槍，石錐，叩き石，
　　石核，鉄剣型石剣
　ｂ．柱状片刃石斧，扁平片刃石斧，
　　太型蛤刃石斧，磨石，石庖丁，砥石
図版20　58－３区　弥生時代　石器
　ａ・ｂ．不定形刃器
図版21　58－３区　弥生時代　石器
　ａ・ｂ．不定形刃器
図版22　58－３区　中世　石製品
　ａ．砥石・石鍋　ｂ．大型砥石
図版23　58－３区　中世　石製品
　ａ．地覆石　ｂ．硯
図版24　58－３区　古墳時代～中世　土器・石製品
　ａ．硯
　ｂ．土師器甑，かまど，土師器羽釜
図版25　58－３区　中世　土器
　ａ．井戸９　瓦器椀
図版26　58－３区　中世　土器
　ａ．井戸３　土師質羽釜・瓦質三足，
　　井戸６　東播系ねり鉢，井戸５　瓦器小皿
　ｂ．井戸８　瓦質すり鉢・陶器鉢・土師質羽釜
図版27　58－３区　中世　土器

a．井戸10　瓦器椀
b．井戸1　瓦質釜・壺・すり鉢
図版28　58－3区　中世　土器
井戸1　白磁八角坏，井戸6　土師質羽釜，
自然河川　瓦器椀，
土器群　土師質羽釜，
土器群　瓦器椀・土師質小皿，
包含層　瓦器椀・山茶椀
図版29　58－3区　中世　木製品
a．土器群　曲物桶，井戸5　曲物桶，
井戸9　曲物桶
b．井戸7　かご復原案
図版30　58－3区　中世　木製品
a．井戸6　杓子
b．井戸6　用途不明木製品
図版31　58－3区　中世　木製品
a．井戸6　曲物桶
b．井戸3　曲物桶・方形曲物桶
図版32　58－3区　中世　木製品
a．井戸3　柄
b・c．井戸1　曲物桶
図版33　58－3区　中世　木製品
a．井戸1　草履・羽子板状木製品
b．井戸2　草履・木球，
井戸4　用途不明木製品
図版34　58－3区　中世　木製品・金属製品
a．包含層　用途不明木製品，木球，箸
b．包含層　古銭・鉄ノミ，井戸4　銅釘，
井戸5　鉄刀子，井戸1　刀子，
自然河川　かすがい
図版35　58－5区　遺構
a．全景（上方が北）
b．遺構検出状況（南から）
図版36　58－5区　中世　遺構
a．井戸1　全景（北から）
b．井戸1　土層断面（東から）
c．井戸1　瓦器椀出土状況
図版37　58－5区　中世　遺構
a．井戸2　全景（南西から）
b．井戸2　土層断面（南西から）
図版38　58－5区　中世　遺構
a．井戸3　全景（南西から）
b．井戸3　土層断面（西から）
図版39　58－5区　中世　遺構
a．井戸3　鼈，亀，タニシ出土状況
b．井戸3　亀出土状況
図版40　58－5区　中世　遺構
a．井戸4　全景（南から）
b．井戸4　土層断面（東から）
図版41　58－5区　中世　遺構
a．井戸5　全景（北から）
b．井戸5　土層断面（東から）
c．井戸5下層　ヒョウタン出土状況
図版42　58－5区　中世　遺構
a．井戸5　瓦質三足出土状況（西から）
b．井戸5　瓦器椀，短刀出土状況
c．井戸5　曲物桶出土状況
図版43　58－5区　中世　遺構
a．土坑1　全景（南から）
b．土坑1　馬骨出土状況（南西から）
図版44　58－5区　中世　遺構
a．土坑1　渥美焼広口壺出土状況（南西から）
b．土坑1　土層断面（西から）
図版45　58－5区　中世　遺構
a．自然河川　石列　全景（北東から）
b．自然河川　全景（西から）
図版46　58－5区　中世　遺構
a．自然河川　牛の下顎骨出土状況
b．自然河川　瓦器椀出土状況
c．自然河川北肩・井戸・柱穴群　検出状況
（南から）
図版47　58－5区　遺構
a．弥生時代自然河川　全景（北西から）
b．調査区東端　ため池　全景（北西から）
図版48　58－5区　縄紋時代～中世　石器・石製品
a．削器，石槍，石錐，不定形刃器，砥石
図版49　58－5区　中世　土器
井戸2　瓦質三足・瓦器椀，
井戸5　瓦器椀・土師質小皿・白磁皿
井戸5　瓦質三足，井戸1　瓦器椀，
井戸4　備前焼壺
図版50　58－5区　中世　土器
a．井戸3　瓦質羽釜，備前焼すり鉢，
井戸4　灯明皿，瓦質すり鉢・火鉢
b．土坑1　渥美焼広口壺，穴あき土師質小皿，
土師質小皿
図版51　58－5区　中世　土器・土錘・短刀
a．東西溝　瓦器椀，山茶碗，緑釉陶器坏，
白磁碗
b．土錘，井戸5　短刀
図版52　58－5区　中世　木製品
a．井戸5　曲物桶

b．井戸５　曲物桶
図版53　58－５区　中世　木製品
a．井戸５　曲物桶，漆器椀
b．井戸５　草履・用途不明木製品，
井戸１　下駄
図版54　58－５区　中世　木製品
a．井戸１　曲物桶
b．井戸４　曲物桶
図版55　58－７区　遺構
a．全景（上方が北）
b．全景（西から）
図版56　58－７区　中世　遺構
a．井戸１　上層遺物出土状況（西から）
b．井戸１　中層遺物出土状況（北から）
c．井戸１　下層遺物出土状況（西から）
図版57　58－７区　中世　遺構
a．井戸２　全景（南西から）
b．井戸２　枠板相互を鉄釘でとめている状況
（南西から）
図版58　58－７区　中世　遺構
a．井戸２　上段井側　枠材検出状況（南西から）
b．井戸２　上段井側　枠材の外側に残る
手斧痕（南西から）
図版59　58－７区　中世　遺構
a．井戸２　上段井側内　柄杓と土師質羽釜
出土状況（南から）
b．井戸２　下段井側内　遺物出土状況
（南から）
図版60　58－７区　中世　遺構
a．井戸３　１回目土器群出土状況（西から）
b．井戸３　１回目土器群出土状況　近景（北から）
図版61　58－７区　中世　遺構
a．井戸３　２回目土器群出土状況（南東から）
b．井戸３　３回目土器群出土状況（南東から）
c．井戸３　下層曲物桶出土状況
図版62　58－７区　中世　遺構
a．井戸４　土層断面（西から）
b．井戸６　木製品出土状況（西から）
図版63　58－７区　中世　遺構
a．井戸７　土層断面（南側）　（東から）
b．同上（中央）　（東から）
c．同上（北側）　（東から）
図版64　58－７区　中世　遺構
a．井戸７　１回目土器群出土状況（東から）
b．井戸７　井戸を囲む柱穴群検出状況（西から）
図版65　58－７区　中世　遺構
a．井戸７　木簡，タニシ出土状況（北東から）
b．井戸７　木簡，タニシ出土状況（北西から）
図版66　58－７区　中世　遺構
a．井戸７　漆器椀出土状況
b．井戸７　鉄斧出土状況
c．井戸７　漆器椀出土状況
d．井戸７　漆器椀出土状況
e．井戸７　曲物桶，羽子板状木製品出土状況
（西から）
f．井戸７　漆器椀，曲物桶出土状況（西から）
図版67　58－７区　中世　遺構
a．井戸８　全景（南から）
b．井戸８　曲物桶底板と灰釉陶器出土状況
c．井戸８　３匹の亀検出状況
d．井戸８　瓦質三足と曲物桶出土状況
e．井戸８　白磁と曲物桶底板出土状況
f．井戸８　白磁と曲物桶底板出土状況
図版68　58－７区　中世　遺構
a．井戸８　釣瓶出土状況
b．同上　近景
c．井戸９・４　全景（北から）
図版69　58－７区　中世　遺構
a．井戸10　１回目土器群出土状況（南東から）
b．井戸10　２回目土器群出土状況（南西から）
c．井戸10　３回目土器群出土状況（西から）
図版70　58－７区　中世　遺構
a．井戸10　４回目土器群出土状況（南から）
b．井戸10　曲物桶出土状況
c．井戸10　土層断面（南から）
図版71　58－７区　平安時代　遺構
a．土坑１　全景（南西から）
b．土坑１　最下層　礫・土器出土状況（西から）
図版72　58－７区　平安時代　遺構
a．土坑１（東側）　土層断面（西から）
b．土坑１（西側）　土層断面（南から）
図版73　58－７区　平安時代　遺構
a．土坑１　西端隅の最下層
黒色土器椀出土状況（南東から）
b．土坑１　東端隅トンネル検出状況（南から）
図版74　58－７区　平安時代　遺構
a．土坑１　西端トンネル検出状況（東から）
b．土坑１　西端トンネルの続き（西から）
c．土坑１　西端トンネル検出状況（西から）
図版75　58－７区　中世　遺構
a．北西端　柱穴群（南から）
b．中央北端　柱穴群（南から）

図版76　58－7区　中世　遺構
a．配石遺構1　全景（西から）
b．配石遺構1　全景（北から）
図版77　58－7区　中世　遺構
a．配石遺構1　五輪塔出土状況（東から）
b．配石遺構1　巴紋軒丸瓦出土状況（南から）
c．配石遺構1　全景（北から）
図版78　58－7区　中世　遺構
a．配石遺構2　全景（北から）
b．配石遺構2　全景（西から）
c．調査区東端　鋤跡　全景（西から）
図版79　58－7区　弥生時代　方形周溝墓
a．2号方形周溝墓　全景（東から）
b．同上　高坏形土器　出土状況（南から）
c．同上　甕形土器　出土状況
図版80　58－7区　縄紋～弥生時代　石器・土器
a．2号方形周溝墓　高坏
b．石鏃，石槍，石錐
図版81　58－7区　弥生時代～中世　石器・石製品
a．石庖丁，用途不明，石核
b．不定形刃器，砥石
図版82　58－7区　中世　石製品
a．砥石　b．石硯
図版83　58－7区　中世　石製品
a．井戸7　石硯
b．井戸7　「□福二年」銘入り石硯
図版84　58－7区　中世　土器
井戸1　瓦器椀
図版85　58－7区　中世　土器
a．井戸1　瓦器椀
b．井戸1　瓦器小皿
c．井戸1　土師質小皿
図版86　58－7区　中世　土器
a．井戸1　土師質大皿，東播系ねり鉢
b．井戸10　瓦器椀
図版87　58－7区　中世　土器
井戸10　瓦器椀・小椀・小皿，土師質大皿・
小皿・高台付皿，東播系ねり鉢
図版88　58－7区　中世　土器
井戸10　かまど，土師質羽釜
図版89　58－7区　中世　土器
井戸2　瓦器椀・瓦器小皿，土師質小皿・羽釜，
白磁碗，東播系ねり鉢
図版90　58－7区　中世　土器
a．井戸3　瓦器椀
b．井戸3　土師質小皿
図版91　58－7区　中世　土器
井戸3　瓦器椀・小皿，東播系ねり鉢，
土師質大皿，瓦質三足
図版92　58－7区　中世　土器
a．井戸3　瓦質三足，土師質羽釜
b．井戸3　青白磁碗
図版93　58－7区　中世　土器
井戸4　瓦器椀，土師質小皿・羽釜，常滑焼甕
図版94　58－7区　中世　土器
井戸7　瓦器椀，土師質小皿，瓦器小型壺
図版95　58－7区　中世　土器
井戸7　土師質鍋・羽釜
図版96　58－7区　中世　土器
a．井戸7　瓦質羽釜，常滑焼大甕，
青白磁椀・皿・合子・壺
b．井戸8　小型瓦質三足，白磁台付皿
図版97　58－7区　中世　土器
a．井戸11　瓦質羽釜・甕，備前焼すり鉢
b．配石遺構1　土師質羽釜，備前焼甕，
瓦質桶型土器
配石遺構2　青磁碗
包含層　瓦質片口付羽釜
図版98　58－7区　平安時代　土器
土坑1　黒色土器椀，土師器椀・皿・鍋・片口
図版99　58－7区　平安時代　土器
a．土坑1　緑釉陶器，灰釉陶器
b．土坑1　墨書土師器
図版100　58－7区　平安～室町時代
金属製品・土錘
a．土坑1　古銭，井戸7　鉄鎌・釘・かすがい，
配石遺構1　熊手
b．土錘
図版101　58－7区　平安～鎌倉時代　木製品
a．土坑1　用途不明木製品，井戸6　曲物桶
b．井戸10　曲物桶
図版102　58－7区　中世　木製品
a．井戸10　曲物桶
b．井戸2　曲物桶
c．井戸2　杓子
図版103　58－7区　中世　木製品
a．b．井戸2　曲物桶
図版104　58－7区　中世　木製品
a．井戸2　曲物桶，用途不明木製品
b．井戸3　曲物桶
図版105　58－7区　中世　木製品
a．井戸3　曲物桶

b．井戸７　曲物桶
c．井戸７　曲物桶
図版106　58－７区　中世　木製品
a．b．井戸７　曲物桶
図版107　58－７区　中世　木製品
井戸７　漆器椀
図版108　58－７区　中世　木製品
井戸７　漆器椀，木簡
図版109　58－７区　中世　鉄斧・鉄鎌
a．井戸７　鉄斧，鉄鎌
b．井戸７　鉄斧（保存処理後）
図版110　58－７区　中世　木製品
a．井戸７　曲物桶，草履，箸
b．井戸７　羽子板状木製品
図版111　58－７区　中世　木製品
a．井戸４　下駄
b．井戸４　曲物桶，井戸８　曲物桶
図版112　58－７区　中世　木製品
a．b．井戸８　曲物桶
図版113　58－７区　中世　木製品
井戸８　釣瓶
図版114　58－２区（北）　遺構
a．３層上面（西から）
b．４層上面（西から）
c．５層上面（西から）
d～e．５層上面　近景（南から）
図版115　58－２区（北）　平安時代　遺構
a．６層上面（西から）
b．井戸１（東から）
図版116　58－２区（北）　平安時代　遺構
a．井戸１　近景（北東から）
b．井戸１　墨書木製品出土状況（北から）
図版117　58－２区（北）　弥生～奈良時代　遺構
a．自然河川　全景（西から）
b～e．自然河川　近景（南から）
図版118　58－２区（北）　弥生時代中期　遺構
a．自然河川８　全景（西から）
奥は自然河川７
b～d．自然河川８　近景（南から）
e．自然河川７　近景（南西から）
図版119　58－２区（北）　弥生時代中期　遺構
a．自然河川８　土層断面（西から）
６ライン沿い断面
b．自然河川８　土層断面（南から）
図版120　58－２区（北）　縄紋～弥生時代　遺構
a．自然河川９　全景（西から）
b．自然河川９　全景（東から）
図版121　58－２区（北）　縄紋～弥生時代　遺構
a．自然河川９　全景（西から）
b．自然河川８・９　土層断面（南東から）
図版122　58－２区（北）　縄紋～弥生時代　遺構
a．自然河川　土層断面（南から）
b．自然河川　土層断面（南から）
図版123　58－２区（北）　縄紋時代　遺構
a．自然河川９　土層断面（西から）
６ライン沿い断面
b．自然河川９　縄紋土器出土状況
図版124　58－２区（南）　遺構
a．３層上面（西から）
b．３層上面　近景（北から）
図版125　58－２区（南）　遺構
a．４層上面（西から）
b．５層上面（西から）
c．６層上面（西から）
図版126　58－２区（南）　中世　遺構
a．中世自然河川２　下層　馬・牛骨出土状況
（北から）
b．同　上　近景（東から）
図版127　58－２区（南）　弥生～古墳時代　遺構
a．古墳時代第１遺構面（西から）
b．古墳時代第２遺構面（西から）
c．古墳時代第３遺構面（西から）
d．弥生時代後期（西から）
e．最終遺構面（西から）
f．甕棺墓
図版128　58－２区（南）　縄紋～弥生時代　遺構
a．自然河川（南から）
b．縄紋時代自然河川（南から）
図版129　58－２区　縄紋時代　土器
a．早期土器・中期土器
b．中期～晩期土器
図版130　58－２区（南）　弥生時代中期　土器
a．甕棺　台付鉢（蓋）
b．甕棺　甕（身）
図版131　58－２区　弥生時代中期～古墳時代　土器
a．壺棺
b．自然河川７（北）　小型土器
c．自然河川７（北）　磨製石剣
自然河川８　磨製石剣
自然河川７（南）　坏身
自然河川５（南）　坏蓋
図版132　58－２区（北）　弥生時代中期

～奈良時代　木製品
自然河川　槽
図版133　58－2区（北）　平安時代　木製品
井戸1　墨書木製品
図版134　58－2区（北）　平安時代　土器
自然河川　瓦器椀，瓦器小皿，土師質小皿
井戸1　瓦器椀，土師質小皿
図版135　58－2区（南）　平安時代　動物遺存体
中世自然河川2下層　馬頭蓋骨

挿　図

第1図　周辺遺跡分布図（1／25000）…… 1
第2図　調査区位置図（1／3000）…… 3
第3図　58－3区 古銭拓本（1／1）…… 5
第4図　58－3区 土層断面図（1／80）…… 6
第5図　58－3区 遺構 平面図（1／200）…… 7
第6図　58－3区 井戸1～6 平面・断面図（1／60）…… 9
第7図　58－3区 井戸7～10 平面・断面図（1／60）…… 11
第8図　58－3区 調査区南半分 柱穴群 平面図（1／120）…… 13
第9図　58－3区 土器群 平面図（1／25）…… 14
第10図　58－3区 土壙墓 平面・断面図（1／20）…… 15
第11図　58－3区 弥生時代中期自然河川 平面図（1／80）…… 16
第12図　58－3区 縄紋土器 実測図（1／2）…… 17
第13図　58－3区 弥生土器 実測図（1／4）…… 19
第14図　58－3区 弥生土器 実測図（1／4）…… 20
第15図　58－3区 弥生石器 実測図（1／2）…… 22
第16図　58－3区 弥生石器 実測図（1／2）…… 23
第17図　58－3区 弥生石器 実測図（1／2）…… 24
第18図　58－3区 弥生石器 実測図（1／2）…… 25
第19図　58－3区 弥生・中世石器 実測図（1／2）…… 26
第20図　58－3区 中世大型砥石・地覆石 実測図（1／4）…… 27
第21図　58－3区 石硯 実測図（1／2）…… 30
第22図　58－3区 石櫃 実測図（1／8）…… 31
第23図　58－3区 古墳～平安時代土器 実測図（1／4）…… 32
第24図　58－3区 古墳～平安時代土器 実測図（1／4）…… 33
第25図　58－3区 井戸7・9・3・6 出土土器 実測図（1／4）…… 35
第26図　58－3区 井戸5・10・4・2・8・1 出土土器 実測図（1／4）…… 36
第27図　58－3区 土器群 出土土器 実測図（1／4）…… 38
第28図　58－3区 土器群 出土土器 実測図（1／4）…… 39
第29図　58－3区 自然河川・包含層 出土土器 実測図（1／4）…… 39
第30図　58－3区 土錘 実測図（1／4）…… 40
第31図　58－3区 井戸7出土かご 実測図（1／4），同復原案 …… 40
第32図　58－3区 井戸9・3・6出土木製品 実測図（1／4）…… 41
第33図　58－3区 井戸1・2・4・5，包含層 出土木製品 実測図（1／4）…… 43
第34図　58－3区 金属製品 実測図（1／2）…… 45
第35図　58－5区 南壁中央部分 土層断面図（1／40）…… 47
第36図　58－5区 遺構 平面図（1／200）…… 49～50
第37図　58－5区 井戸1～5平面・断面図（1／60）…… 51
第38図　58－5区 土坑1 平面・断面図（1／25）…… 53
第39図　58－5区 自然河川 平面図（左），列石平面図（右）（1／80）…… 54
第40図　58－5区 石器・石製品 実測図（1／2）…… 56
第41図　58－5区 井戸1～5 出土土器 実測図（1／4）…… 58
第42図　58－5区 土坑1 出土土器 実測図（1／4）…… 59
第43図　58－5区 自然河川 出土土器 実測図（1／4，1／2）…… 60
第44図　58－5区 土錘 実測図（1／4）…… 60
第45図　58－5区 井戸5・1 出土木製品 実測図（1／4）…… 61
第46図　58－5区 井戸4・6 出土木製品

実測図（1／4）…… 62
第47図　58－5区 金属製品 実測図（1／2）…… 63
第48図　58－7区 北壁 土層断面図（1／40）…… 65
第49図　58－7区 遺構 平面図
（1／200）…… 67～68
第50図　58－7区 井戸1～5 平面・断面図
（1／60）…… 69
第51図　58－7区 井戸7～10 平面・断面図
（1／60）…… 72
第52図　58－7区 土坑1 平面・断面図
（1／120）…… 75
第53図　58－7区 土坑1 出土陶硯（4／3）…… 75
第54図　58－7区 土坑1 出土銭貨 拓本
（1／1）…… 76
第55図　58－7区 配石遺構1 平面・断面図
（1／60）…… 77
第56図　58－7区 配石遺構1 出土巴紋軒丸瓦
拓本（1／3）…… 78
第57図　58－7区 配石遺構2 平面・断面図
（1／60）…… 78
第58図　58－7区 2号方形周溝墓 平面図
（1／80）…… 79
第59図　58－7区 2号方形周溝墓 出土弥生土器
実測図（1／4）…… 80
第60図　58－7区 石器 実測図（1／2）…… 81
第61図　58－7区 石器 実測図（1／2）…… 82
第62図　58－7区 井戸7 出土石硯 実測図
（1／1）…… 83
第63図　58－7区 配石遺構1 出土 五輪塔
実測図（1／4）…… 83
第64図　58－7区 井戸6 出土土器 実測図
（1／4）…… 85
第65図　58－7区 井戸1 出土土器 実測図
（1／4）…… 86
第66図　58－7区 井戸1 出土土器 実測図
（1／4）…… 87
第67図　58－7区 井戸10 出土土器 実測図
（1／4）…… 89
第68図　58－7区 井戸10 出土土器 実測図
（1／4）…… 90
第69図　58－7区 井戸10 出土土器 実測図
（1／4）…… 91
第70図　58－7区 井戸10 出土土器 実測図
（1／4）…… 92
第71図　58－7区 井戸10 出土土器 実測図
（1／4）…… 93
第72図　58－7区 井戸10 出土土器 実測図
（1／8）…… 94
第73図　58－7区 井戸2 出土土器 実測図
（1／4）…… 95
第74図　58－7区 井戸3 出土土器 実測図
（1／4）…… 97
第75図　58－7区 井戸3 出土土器 実測図
（1／4）…… 98
第76図　58－7区 井戸3 出土土器 実測図
（1／4）…… 99
第77図　58－7区 井戸4・9 出土土器 実測図
（1／4）…… 100
第78図　58－7区 井戸7 出土土器 実測図
（1／4）…… 102
第79図　58－7区 井戸7 出土土器 実測図
（1／4）…… 103
第80図　58－7区 井戸7 出土土器 実測図
（1／4）…… 104
第81図　58－7区 井戸7 出土土器 実測図
（1／4）…… 105
第82図　58－7区 井戸8・11 出土土器
実測図（1／4）…… 107
第83図　58－7区 土坑1 出土土器 実測図
（1／4）…… 108
第84図　58－7区 土坑1 出土墨書土器
実測図（1／2）…… 109
第85図　58－7区 配石遺構・包含層 出土土器
実測図（1／4，1／2）…… 110
第86図　58－7区 土錘 実測図（1／4）…… 111
第87図　58－7区 土坑1・井戸6・10・2
出土木製品 実測図（1／4）…… 113
第88図　58－7区 井戸2・3・7
出土木製品 実測図（1／4）…… 114
第89図　58－7区 井戸7 出土木製品
実測図（1／4）…… 116
第90図　58－7区 井戸7 出土木製品
実測図（1／4）…… 117
第91図　58－7区 井戸7 出土鉄斧
実測図（1／4）…… 118
第92図　58－7区 井戸7 出土木簡
実測図（1／2）…… 119
第93図　58－7区 井戸7・4・5 出土木製品
実測図（1／4）…… 120
第94図　58－7区 井戸8 出土木製品
実測図（1／4）…… 121
第95図　58－7区 金属製品 実測図

(1／2) …… 122
第96図　58－2区（北）自然河川
出土絵画土器拓本（1／1）…… 125
第97図　58－2区（北）平安時代の遺構
平面図（1／200）…… 127
第98図　58－2区（北）弥生時代～
奈良時代の遺構 平面図（1／200）…… 127
第99図　58－2区（北）弥生時代中期の
遺構 平面図（1／200）…… 128
第100図　58－2区（北）縄紋時代の遺構
平面図（1／200）…… 128
第101図　58－2区（南）平安時代～
鎌倉時代の遺構 平面図（1／200）…… 129
第102図　58－2区（南）縄紋時代～
古墳時代の遺構 平面図（1／200）…… 129
第103図　58－2区（南）古墳時代第1面の
遺構 平面図（1／200）…… 130
第104図　58－2区（南）古墳時代第2面の
遺構 平面図（1／200）…… 130
第105図　58－2区 縄紋土器 実測図（1）
(1／4) …… 131
第106図　58－2区 縄紋土器 実測図（2）
(871～879は1／3，880・881は1／4) …… 133
第107図　58－2区 縄紋土器 実測図（3）
(883・884・887は1／3，
882・885・886・888～891は1／4) …… 134
第108図　西ノ辻遺跡時代別主要遺構概略図…… 139

表

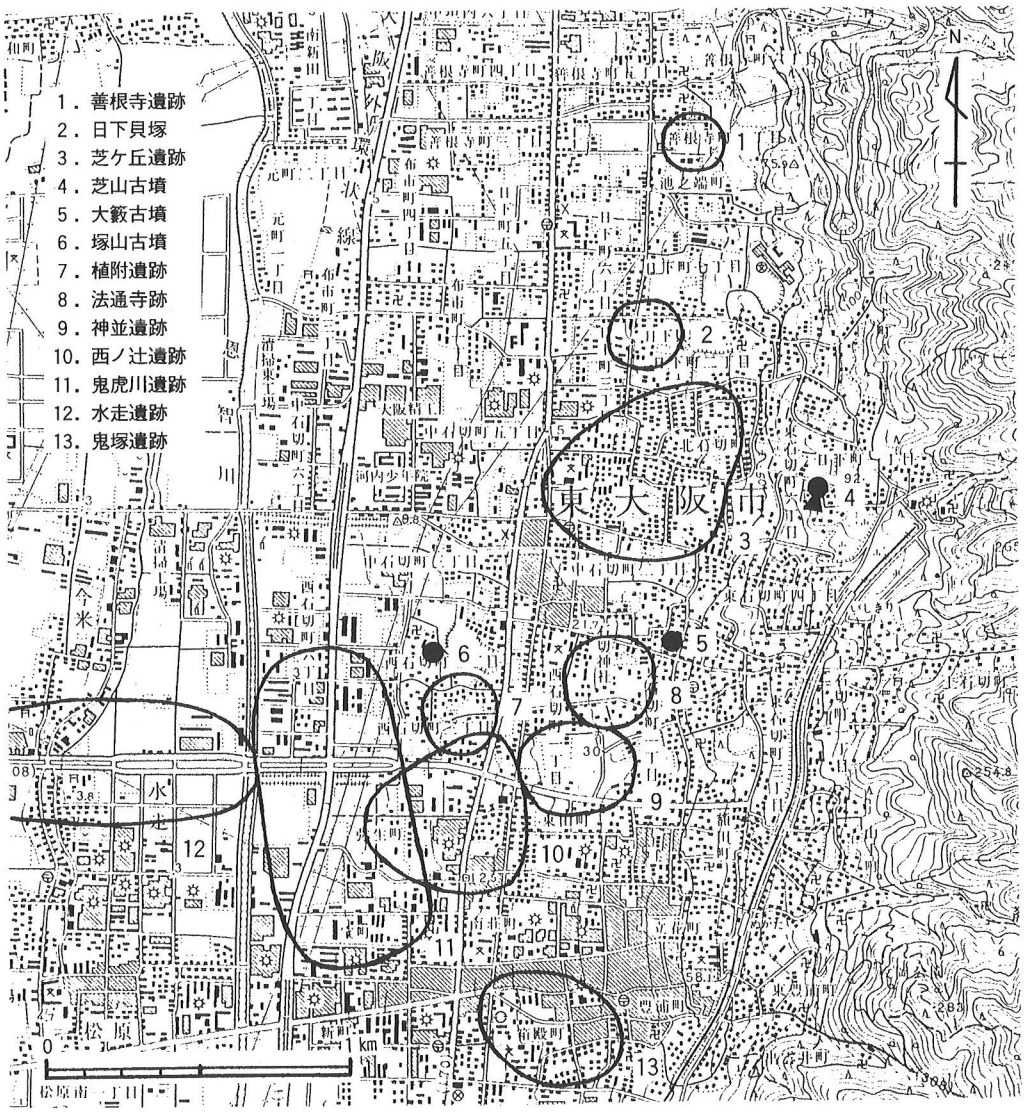
第1表　昭和58年度 西ノ辻遺跡 調査区一覧 …… 4
第2表　58－3区　出土石器観察表（1）…… 28
第3表　58－3区　出土石器・石製品観察表（2）… 29
第4表　58－5区　出土石器・石製品観察表 …… 55
第5表　58－7区　出土石器・石製品観察表 …… 84

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

大阪府の東側には南北に連なる生駒山地があり，稜線が奈良県との境になっている。河内平野が低く平らなだけに一際生駒山地が切り立って見える。

この生駒山地の主峰生駒山（標高642 m）の両麓に神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡が隣接して東西に並んでいる（第１図）。

（神並遺跡）　東大阪市東石切町１丁目に所在する縄紋から室町時代にかけての集落遺跡。中位段丘上に位置し，標高は約20～40m。これまで，数次の調査により，神宮寺式の土器・有舌尖



第１図　周辺遺跡分布図（1／25000）

頭器・土偶(註1)，弥生土器，古墳中期の製鉄遺構(註2)・人物埴輪(註3)・掘立柱建物跡，奈良(註4)・平安・鎌倉時代(註5)の掘立柱建物跡等が検出されている。

（西ノ辻遺跡）　東大阪市西石切町３丁目他に所在する縄紋から室町時代にかけての集落遺跡。低位段丘上に位置し，標高約７～20m。これまで，十数次の調査により，縄紋土器，弥生土器，方形周溝墓，甕棺・壺棺(註6)，古墳中期の木組暗渠・貯水施設(註7)，平安～室町時代の掘立柱建物跡・井戸・墓等が検出されている。

（鬼虎川遺跡）　東大阪市弥生町他に所在する旧石器から室町時代にかけての集落遺構。沖積地上に位置し，標高は約５～７m。これまで，二十数次の調査により，国府型ナイフ・翼状剥片，縄紋前期のクジラやフグの骨，弥生中期の方形周溝墓，古墳中・後期の掘立柱建物跡，中世の掘立柱建物跡・井戸等(註8)が検出されている。

以上の三遺跡の近辺には，旧石器が採集された千手寺山や正興寺山遺跡(註9)があり，縄紋時代では人骨出土で有名な日下貝塚や芝ヶ丘遺跡があり，弥生時代では，中垣内・植附・鬼塚遺跡があり，古墳時代では，中期の帆立貝形古墳かと推定される塚山古墳，後期の前方後円墳である芝山古墳，大藪古墳，神並古墳，墓尾古墳群等がある。奈良時代以降では，法通寺・客坊廃寺・河内寺跡等の寺院があり，中世(註10)では，「水走文書」で有名な水走遺跡や文永十年（1273）の紀年瓦を出土した神感寺跡，永仁二年（1294）の十三重石塔を出土した観音寺，永仁七年（1299）の十三重石塔を出土した興法寺跡の寺院(註11)がいずれも指呼の間に存在し，併せて，一大遺跡群を形成している。

（註１）下村晴文・橋本正幸「大阪府東大阪市神並遺跡出土の土偶と有舌尖頭器」『古代文化』35巻６号・昭和58年６月
（註２）大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要・Ⅰ』昭和59年３月
（註３）東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会『発掘20年のあゆみ』昭和62年３月
（註４）大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅲ』昭和61年３月
（註５）東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会『神並遺跡Ⅰ』昭和61年10月
（註６）大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅱ』昭和61年３月
（註７）(財)東大阪市文化財協会『甦る河内の歴史』（図録）昭和59年12月
（註８）大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川発掘調査整理概要・Ⅳ』昭和61年３月
（註９）藤井直正・都出比呂志・河内歴史研究グループ「原始古代の枚岡」『枚岡市史』３巻史料編（１）昭和41年３月
（註10）東大阪市立郷土博物館『中世のくらし』（図録）昭和59年３月
（註11）藤井直正『東大阪の歴史』松籟社　昭和58年４月

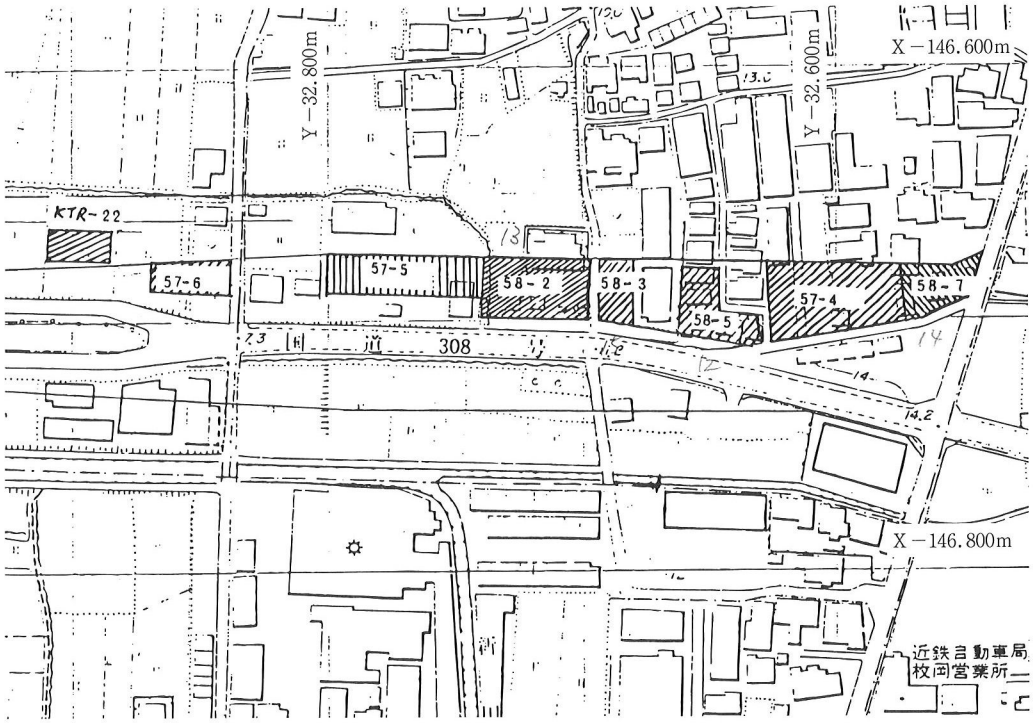
第Ⅱ章　調査に至る経過

東大阪生駒電鉄株式会社による東大阪線建設工事は，大阪府土木部による都市計画道路築港枚岡線（一般国道308号および府道石切大阪線）および阪神高速道路公団による阪神高速道路東大阪線道路の延伸工事と相まって，奈良県北部と大阪都心部の輸送の混雑緩和と利便の増加をはかると共に，東大阪ならびに大阪市内交通事情改善に寄与し，関連地域の開発に多大な貢献をするものと期待されていた。

ところが，これらの工事計画路線内には，西から水走・鬼虎川・西ノ辻・神並等の「周知の埋蔵文化財包蔵地」としての4遺跡が存在した。電鉄および道路工事は，地中深く基礎杭や橋脚を打設するため，遺跡を損壊することが明らかであった。

そこで，事業者たる東大阪生駒電鉄株式会社は大阪府教育委員会・東大阪市教育委員会に協議を求めた。三者協議の結果，計画路線内の遺跡地はすべて，文化財保護法の規定により，発掘調査を実施し，遺跡保存のため基礎資料を作成することとなった。

以来，昭和55年の鬼虎川遺跡第Ⅰ期発掘調査に始まり，神並・西ノ辻・鬼虎川の3遺跡を数年にわたって，大阪府教育委員会・東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会および国道308号線関係遺跡調査会の手で発掘調査してきている。その成果の一端は，昭和59年12月に『甦る河



第2図　調査区 位置図（1／3000）

第１表　昭和58年度　西ノ辻遺跡　調査地区一覧

調査年次	調査地区名	調査面積	主な遺構・遺物
西ノ辻遺跡12次	NTZ58－５区	614m²	自然河川(弥生時代～南北朝)，柱穴群・土坑・井戸(平安～室町時代)
西ノ辻遺跡13次	NTZ58－２区	1082m²	自然河川(縄紋～近世)，甕棺・壺棺(弥生)，磨製石剣・絵画土器(弥生中期)，馬・牛・犬(平安～室町)
西ノ辻遺跡14次	NTZ58－７区	575m²	方形周溝墓(弥生中期)，井戸(平安～室町)，木簡・硯・漆器椀・鉄斧・鉄鎌(鎌倉)，釣瓶(室町)
西ノ辻遺跡15次	NTZ58－３区	312m²	自然河川(弥生～南北朝)，土壙墓(平安～鎌倉)，井戸(平安～室町)，縄紋土器，石櫃，長年大寶

内の歴史（国道308号線関係遺跡発掘調査中間報告展）』を開催し，また，各調査区終了毎に現地見学会を開催等して，広く府民の供覧を得ている。

なお，当該路線内の調査の地区割については，鬼虎川・西ノ辻遺跡は北側部分を大阪府が，南側を東大阪市が主として担当した。神並遺跡は，中央部を大阪府が，その東西端を東大阪市が担当した。

本書は，昭和58年度に行われた大阪府教育委員会による西ノ辻遺跡の発掘調査概要並びに遺物整理概要を報告するものである（第２図，第１表）。

第Ⅲ章　58－3区の調査成果

第1節　層　位

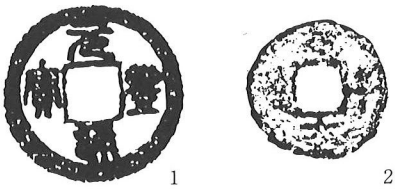
本調査区の基本的な層序は次の通りである（第4図）。現地表面の標高は，T．P．＋10.73m。調査前までは，2階建てのコーポが建っていた。地表下2mは，新盛土であった。その下に厚さ15～20cmの黒灰色粘質土層があり，よく肥えた土であったのと染付（そめつけ）の土器片が少々出土したので，近・現代の耕土層と思われた。その下に厚さ7～10cmの緑茶色粘質土層があり，ほとんど水平に堆層していたので，床土層と思われた。その下に厚さ20cm程の緑褐色粘質土層があり，中世の土器細片や弥生土器の細片等が含まれていた。遺物包含層と思われる。同層中から調査区中央部西端で馬のほぼ完形の頭蓋骨（とうがいこつ）や緑色片岩製の石硯（第21図131）や蓮華紋軒丸瓦、長年大寶（第3図2）等が出土した（図版8）。

この遺物包含層を除去すると，調査区北西部では，ただちに遺構面並びに地山層が現われたが（第5図），南半分では，一段（10～20cm）下がって，中世の土器片を少々含む茶褐色粘質土層が水平に堆積していた。

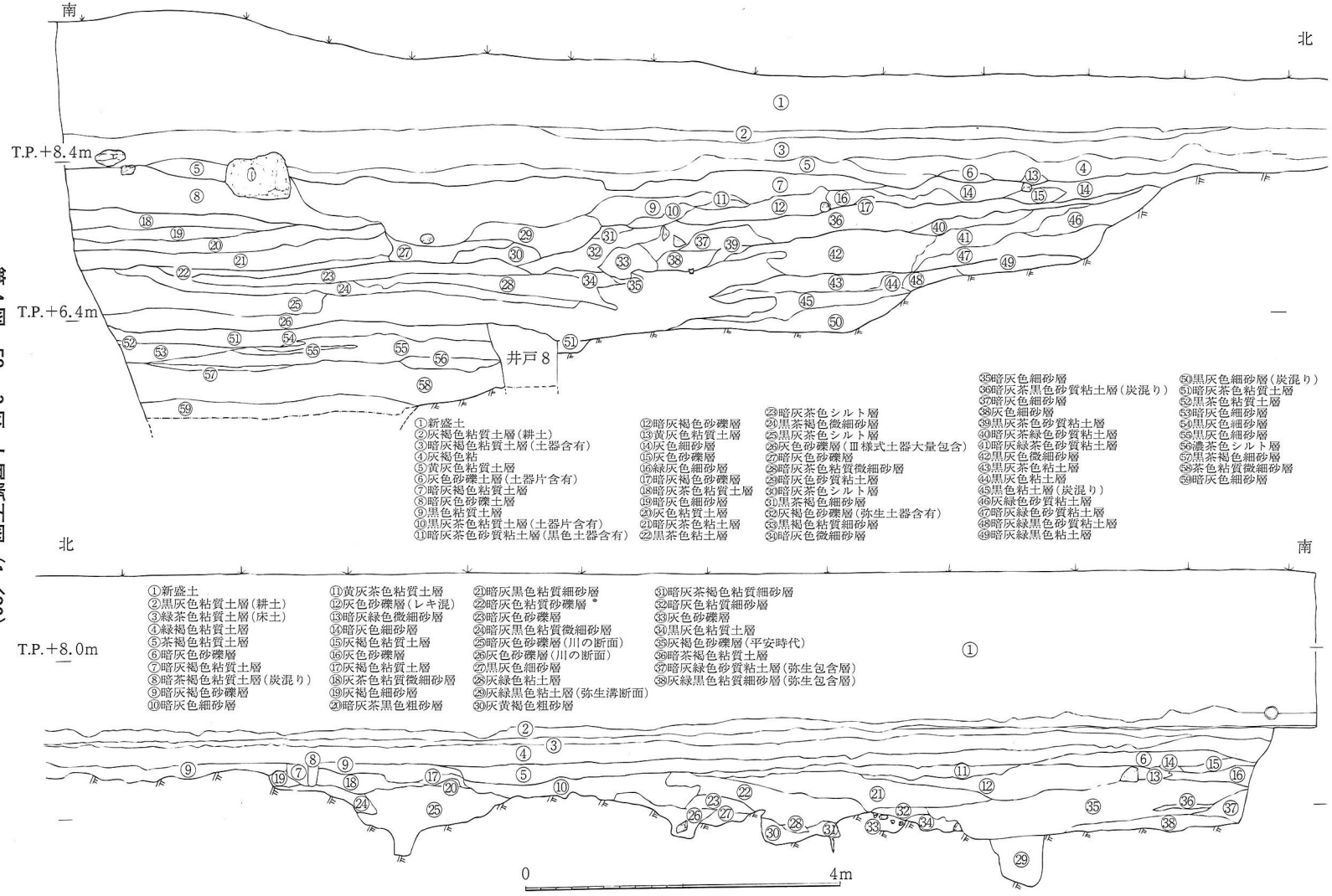
調査区北半分では，その東端に南北に井戸が3基並んで検出された。その他の部分には，まばらに柱穴等が検出された。調査区南半部で，さらに包含層を掘削し続けると，南端部から北に7m幅で灰色砂礫層が検出され，東西方向の自然河川と思われた。砂礫層中から灰釉碗（かいゆうわん）・内黒土師器・緑釉（りょくゆう）陶器・骨等が多量に出土した。また，調査区北西隅で南北の小さな段が検出され，段の下から人か猿の頭蓋骨片が少量検出された。古墳時代後期の須恵器が集中出土したので，あるいはその時期のものかと思われる。

調査区南半部の砂礫層を除去すると，井戸が4基検出され，東西方向に石列・土器群等も検出された（第8図、図版9）。砂礫層中には，弥生時代中期の土器やサヌカイト製石槍・亀の甲羅（こうら）・馬骨等が含まれていた。なお，石列中には穴のあいた石や大型砥石、地覆石等が混在していた。また，調査区南端部中央には，杭を打ち込み，横棒を固定した遺構も検出された。以上すべて，平安時代末期の自然河川の北肩に並べられたものと推定された。

さらに，東西自然河川を掘削すると，調査区中央部にて東西方向の流路と南東から北西方向の流路（溝101）が検出された（第5図、図版1）。溝101から，移動式かまどと羽釜（はがま）が接して検出された（図版11e）。他に出土した土器がすべて細片なのに，これだけ大破



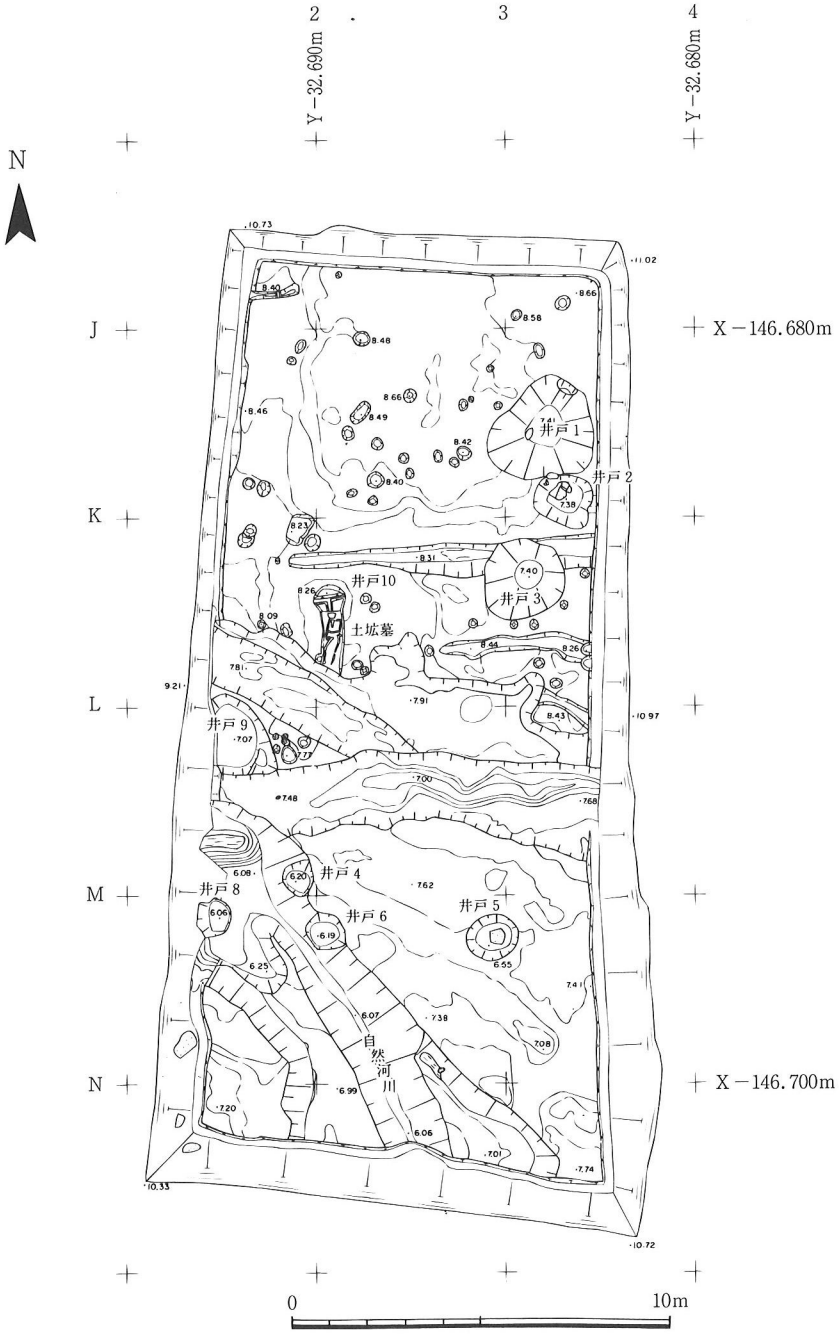
第3図　58－3区 古銭拓本（1／1）



第4図　58－3区　土層断面図（1／80）

片で固まって出土したことから，岸辺で行なわれていた祭りなどに関係するものかと思われた。

調査区南端では，南東から北西へ流れる幅３～７ｍの自然河川の流路が検出され（第11図，図版15），内部に詰まった砂礫層から弥生時代中期の土器や石器片が大量に出土した。また，調査区南西隅部は，さらに下がることが判明し，地表面下4.6ｍまで掘削して，初めて地山面に到達した。



第５図　58－３区 遺構 平面図（1／200）

第2節　検出された遺構

本調査区で検出されたのは，調査区南半部で弥生時代～南北朝時代の自然河川、平安時代の石列・土器群と調査区北半部で，柱穴群・調査区各所で井戸11基，土壙墓1基等であった。以下，主要な遺構と遺物を略述する。

第1項　中世の遺構

井戸

本調査区（西ノ辻15次調査）で検出された井戸は総数10基で，時期別の内訳は平安時代2基，鎌倉時代末1基，鎌倉時代末～南北朝時代2基，南北朝時代5基である。井戸9以外は，いずれも深さが2mを超えるため，下層の調査は人力と機械力（ユンボ）を併用して行った。その際に，豊富な遺物を検出している。また，検出された井戸の土壌を1基につきコンテナ3～5箱分採取し，水洗選別した際にカエル・ネズミ・カメ・サカナ，種子，昆虫の羽根等の動植物遺存体等を多量に検出した。

井戸1

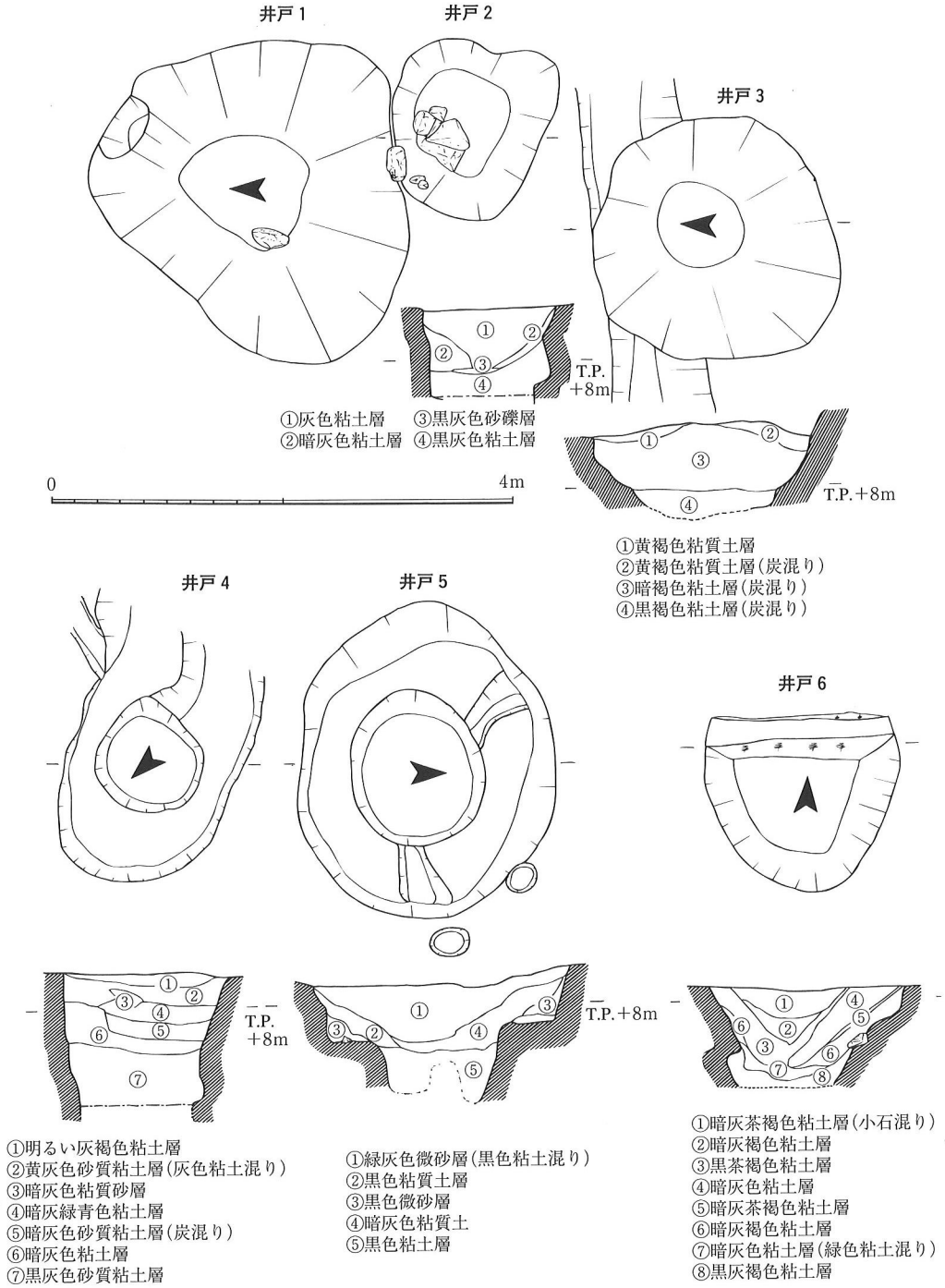
調査区北東寄りにおいて検出した（第6図，図版2）。平面プランは東西2.7m，南北2.9mの歪な楕円形で，底まで枠等はなく，素掘りのままであった。検出面下1mで，径2mの大きさになり，以下は同じ大きさであった。検出面からの深さは4.1mをはかる。断面形態は擂鉢状の緩やかな傾斜から段をもって急に深く落ち込む二段掘りで，坑底のレベルはT.P.+4.4m。

検出面下1mで西壁に接して，長さ35cmの楕円形の石が1個落ちており，内部には暗灰黒色粘土層が充満していた。底までの途中に，銅板を柄に巻いた鉄刀子（第34図271）や八角形の白磁坏（第26図196）・曲物桶（まげものおけ）の底板完形品（第33図249）・赤間石（あかまいし）製の石硯（第21図130）などが出土した（図版2）。瓦器椀（がきわん）・壺，瓦質（がしつ）羽釜・すり鉢，瓦等が出土し，南北朝～室町時代のものと推定された。

井戸2

調査区北東で，井戸1の南に接して検出された（第6図，図版3a）。井戸の径は東西1.5m，南北1.6mの台形で，底まで枠組みはなく素掘りのままであった。坑底のレベルはT.P.+4.61m。検出面下80cmで，径15～45cmの大小不揃いな扁平な石を6個積み重ねていた。掘方の北側に接して固めて置かれていたので，ちょうど踏み台にでも使っていた様子である。内部には，検出面下50cmまでには，黒灰色粘土層が充満し，その上には，黒灰色砂礫層や暗灰色粘土層が周囲から徐徐に埋もれた状態で堆積し，最終的には灰色粘土層で埋まっていた。深さは2.0m＋α。

内部から土師質（はじしつ）皿・羽釜，瓦質火鉢，東播系練鉢（とうばんけいねりばち），青磁等が破片で出土し，南北朝時代のものと推定された。



第６図　58－３区 井戸１～６ 平面・断面図（1／60）

なお，北接する井戸１との境には，長さ32㎝の長方体の石が１個，やや南西寄りに小石が２個固まって，置かれていた。何に使用したのか不明。

井戸3

調査区北東で，井戸2の南西1.3mで検出された（第6図，図版3b・4a）。井戸の径は東西2.1m，南北2.1mの楕円形で，底まで枠などはなく，素掘りのままであった。検出面下1.3mで，径1.5mの大きさになり，以下は同じ大きさであった。深さは3.7m。この井戸も井戸1同様，上半部が崩壊して広くなったものと思われた。坑底のレベルはT.P.+5.04m。

検出面下70cmまでは，炭混じりの暗褐色粘土層や黄褐色粘質土層が堆積しており，水平に堆積することから，一時に埋められたものと推定された。検出面下70cm以下は，黒褐色粘土層がぎっしり詰まっており，内部から，瓦器椀，土師質皿・羽釜，瓦質三足（さんそく），東播系練鉢，砥石（といし）（第19図121）等と共に，曲物桶底板完形品が2枚，ほぼ完形品で検出された（図版4a）。共に釣瓶（つるべ）に使われた曲物桶の底板が使用の際抜け落ちたものらしい。出土土器から鎌倉末～南北朝の井戸と推定された。

井戸4

調査区南西部で検出された（第6図，図版4b・c）。井戸の径は2.42×1.49mの長楕円形で，底まで枠等はなく，素掘りのままであった。坑底のレベルはT.P.+6.14m。検出面下1.2mで，段が形成され，井戸の掘方は径90～95cmの円形になってしまう。内部には，検出面下1.2mまでは，10～15cmまでの明るい灰褐色粘質土層や黄灰色砂質粘土層・暗灰緑青色粘土層・暗灰色砂質粘土層・暗灰色粘土層が順番に堆積しており，一時に埋められたものと推定された。深さは2.06m。検出面下80cmで銅釘が1本立った状態で検出された（図版4c）。検出面下60cm以下は，黒灰色砂質粘土層がぎっしり詰まっていた。瓦器椀（第26図181），瓦質火鉢・すり鉢，瓦等が出土しており，南北朝の井戸と推定された。

井戸5

調査区南東部で検出された（第6図，図版5a）。井戸の径は東西2.77m，南北2.25mの楕円形で，底まで枠等はなく，素掘りのままであった。検出面からの深さは3.29mをはかる。断面形態は二段掘りで、検出面下42cmで，段が形成され，井戸の掘方は径1.2～1.4mの楕円形になってしまう。坑底のレベルはT.P.+5.0m。

検出面下50cmまでには，黒色微砂層，黒色粘質土層・暗灰色粘質土が周囲から埋まったような状態で堆積し，最終的には緑灰色微砂層で完全に埋っていた。検出面下50cm以下は，黒色粘土層がぎっしり詰まっていた。瓦器椀・小皿（第26図175・176），土師質皿，瓦質羽釜，鉄刀子等が出土しており，南北朝のものと推定された。

井戸6

調査区南西部で，井戸4の南側に接して検出された（第6図，図版5b・c）。井戸の径は東西1.7m，南北1.5mをはかる。底まで枠等はなく，素掘りのままであった。検出面からの深さは2.42mをはかり，坑底のレベルはT.P.+5.15m。検出面下80cmまでは，それぞれ厚さ6～26cmの暗灰色粘土層・暗灰褐色粘土層・暗灰茶褐色粘土層・暗灰色粘土層等が，周囲から埋まったような

状態で堆積し，最終的には小石混じりの暗灰茶褐色粘土層で完全に埋まっていた（図版５ｂ）。検出面下80㎝以下は，黒灰褐色粘土層がぎっしり詰まっていた。底近くから，曲物桶の完形品（第32図246）が底を斜め上にして出土した（図版５ｃ）。横に中央部に紐で縛ったような痕跡を持つ棒も出土した。瓦器椀，土師質羽釜，東播系練鉢，瓦質三足等が出土しており，鎌倉末～南北朝のものと推定された。

井戸７

調査区南西部で，井戸６の西側に接して検出された（第７図，図版６ａ）。井戸の径は東西1.5ｍ，南北1.1ｍの小さい楕円形で，底まで枠などなく，素掘りのままであった。深さは70㎝と非常に浅かった。内部には，黒褐色の粘質土が詰まっており，短期間の内に埋まったものらしい。底近くから，ザルの底だけが抜けたような状態で出土した（図版６ａ）。土師質小皿がほぼ完形品で出土しており，平安時代末のものと推定された。

なお，この井戸は下層に検出される弥生時代の自然河川の流路を掘削して作られたもので，この弥生時代の自然河川は，調査時にも著しく水が流れていた自然河川なので，井戸も浅く小さなものなので十分に間にあったことが，後日判明した。

井戸８

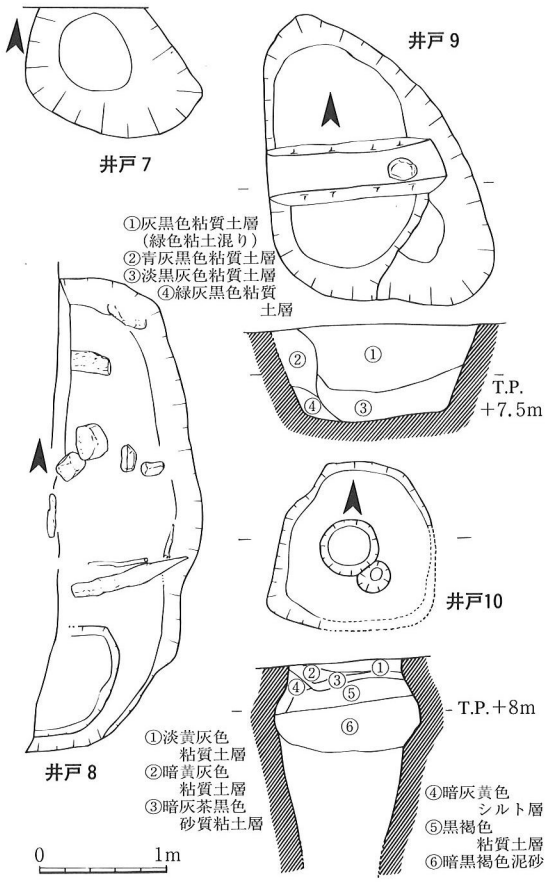
調査区南西部，壁際で検出された（第７図，図版６ｂ）。井戸の径は東西1.8m、南北2.1mの楕円形で，底まで枠などはなく，素掘りのままであった。深さは2.4m＋α。坑底のレベルはＴ.Ｐ.＋5.13m。

検出面下50㎝までは，黒茶褐色砂質粘土層が堆積しており，その上面近くには，長さ１ｍ，幅10㎝ほどの流木や長さ20～30㎝の石が，４個横１列に並べられたりしていた。

検出面下50ｍで段が形成され，南端に径90㎝程の歪な楕円形のさらに深くなる掘方部があった。瓦器椀，土師質小皿，白瓷系山茶碗等が出土しており，南北朝のものと推定された。

井戸９

調査区中央部，西壁際で検出された（第



第７図　58－３区 井戸７～10
平面・断面図（1／60）

7図，図版6b)。井戸の径は東西1.8m，南北2.3m以上の楕円形で，底まで枠等はなく素掘りのままであった。この井戸は，底まで75cmと非常に浅く，また青灰色シルト層を掘り込んでおり，水が湧きそうもなかった。また，断面で見ると，緑灰黒色粘質土層・青灰黒色粘質土層が堆積した上から，淡黒灰色粘質土層・灰黒色粘質土層（緑色粘土混じり）が詰っている土坑によって切られており，本来，井戸ではなく，土坑（どこう）であった可能性もある。ただし，その西半部が調査区外に伸びているため，詳細は不明。瓦器椀・皿，土師質皿，曲物底板等が出土しており，平安末期のものと推定された。

井戸10

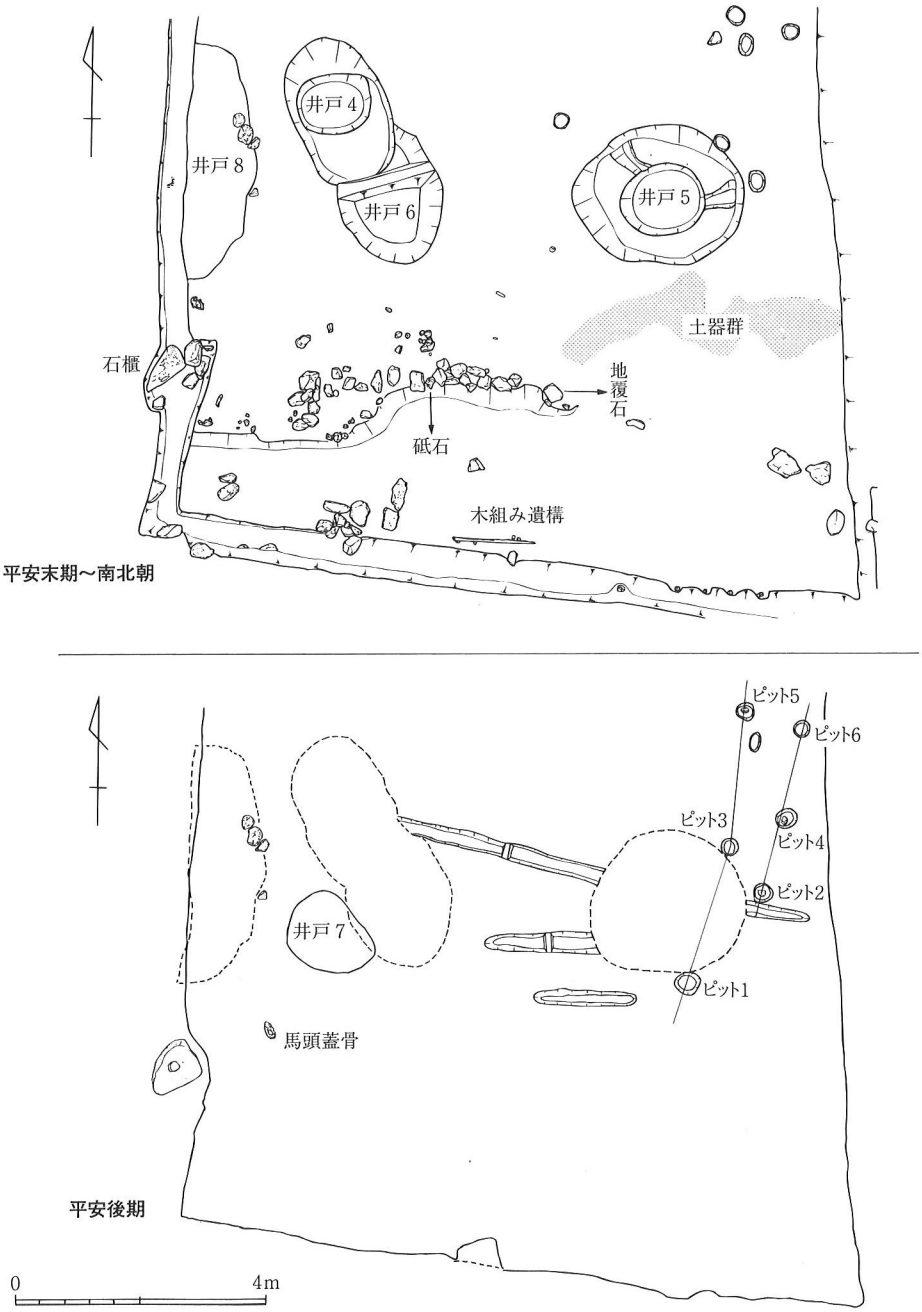
調査区中央部北西寄りで検出された（第7図，図版7）。井戸の径は東西1.7m，南北1.4m以上の楕円形で，底まで枠等はなく，素掘りのままであった。坑底のレベルはT.P.+4.914m。検出面下70cmまでは，暗黒褐色泥砂・黒褐色粘質土・暗灰黄色シルト等が厚さを違えて堆積していた。周囲から幾度も埋め続けられたものらしい。検出面下70cm以下は，暗灰黒色粘土層が充満しており，底近くから，瓦器椀，土師質皿，東播系練鉢等と共に，人の頭蓋骨の頂部破片が出土した。井戸10は，その南側に検出された土壙墓（どこうぼ）を切って掘られたことが，この人骨片の出土によって判明した。井戸の深さは，3.0m＋α。出土土器から，鎌倉末期のものと推定された。

柱穴群

調査区北半部を中心に大小百余個の柱穴群が検出された（第5図，図版1)。時期は，平安後期・平安末期・南北朝の三面存在した。平安後期の柱穴群は，調査区南東部および中央部で検出された。調査区中央部の柱穴群は，東西に流れる幅3m程の浅い自然河川の両岸に検出された。内に掘方が25～30cmで，径6～8cmの柱根の残存しているものが数個あり，建物跡が存在していたことは確実であるが，うまく建物を復元するまでには至らない。ただ，調査区南東部で検出された柱穴群は，磁北から約10度東に振って，南北に3個づつ，いずれも柱穴中に柱根をもつものが並ぶので，この位置に何らかの構築物のあったことが分かる（第8図)。またその西側には，幅20～30cmの細い浅い溝が3本東西方向に掘られている。平安末期と南北朝の柱穴は部分的にしか両者を区別できなかったが，調査区北半部を中心に検出された。しかし，井戸や後世の削平によって，まばらにしか検出できず，建物跡を復元できるものはなかった。

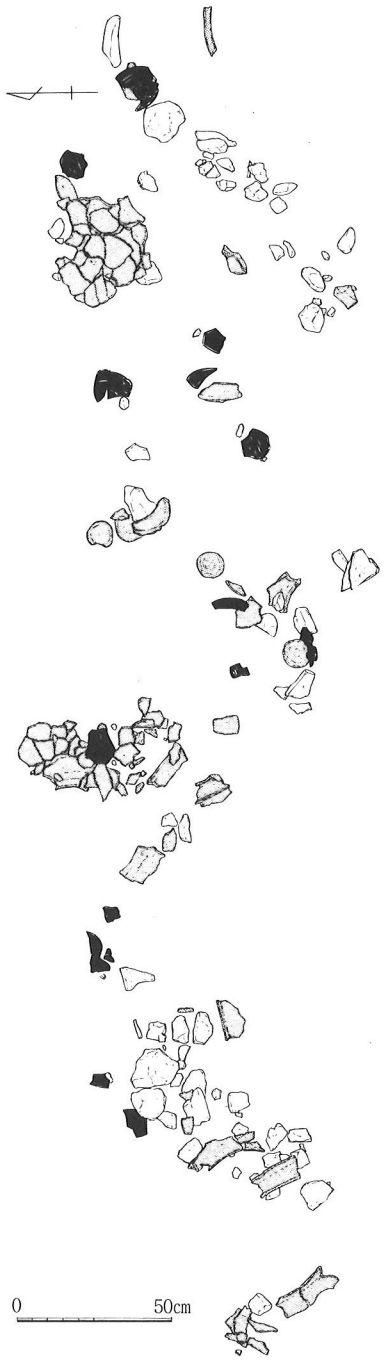
土器群・石列

調査区南部で東西に検出された（第8・9図，図版9)。内，東半部に幅70cm程，長さ4.5mの範囲に土器群が検出された。瓦器椀や土師質羽釜・皿，砥石（第20図126）等が出土している。西半部には，東西に高さ20～30cmの南側に落ちる段が検出され，その段上に幅30cm～1m程，長さ7m以上の範囲に石列が検出された（図版10a・b)。内に大型砥石や地覆石・石櫃の蓋等が混じっていた。単に石列中に石として存在したので，転用されたものらしい。地覆石は，近辺



第８図　58－３区 調査区南半分 柱穴群 平面図（1／120）

では，法通寺跡が存在するので，そこのものが運ばれてきたのだろうか。石櫃の蓋も重さ 430 kg もあるが，横倒しになっているので，本来の場所から動いている可能性がある。土器群も石列も



第9図　58－3区 土器群 平面図（1／25）
（アミは土師質土器，黒は瓦器）

平安時代末期の自然河川の北肩に並べられたもの，あるいは捨てられたものらしい。

木組み遺構

平安時代末期の土器群・石列の更に南側，川寄りの部分で，木組み遺構が検出された（第8図，図版10 c）。長さ88㎝，太さ4.5㎝のものを含めた長い先を矢のように尖らした杭を5本，地面に打ち込み，長さ140.5㎝，太さ4.5㎝，片方のみを幅3㎝，長さ4㎝の長方形に加工した樫の横木を止めている。止め方は西側に2本，東側に3本杭を打ち込み，横木が南北に動かないように固定していた。

検出された部分が川の北肩に当たるため，あるいは舟付き場の遺構であるのかも知れない。舟をつないでおく稽留杭と考える訳である。

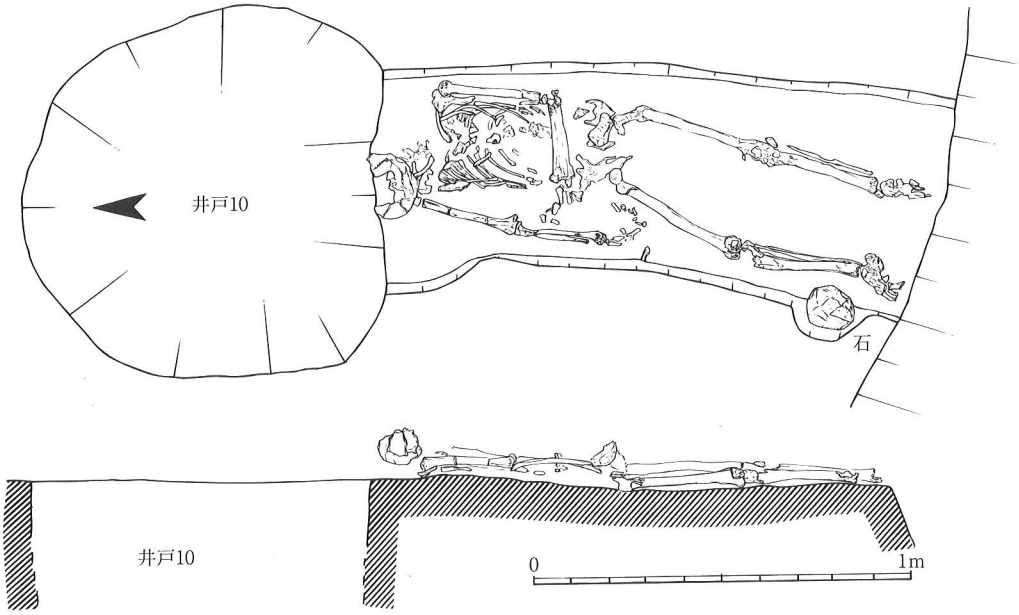
土壙墓

調査区中央部北西寄りで検出された（第10図，図版12）。木棺（もっかん）等の痕跡はなく，土坑中に人を直接埋めたものらしい。人骨の保存状態は良く，完存していた。副葬品等はなく，北枕であった。

京都大学の池田次郎先生の御教示に依ると，性別は男，年令は30才後半，身長は158～159㎝，「きゃしゃ」な人物ということであった。仰臥伸展葬で，左腕を腹の上に乗せ，やや右向きかげんであった。

土坑の掘方の状態は，北側が井戸10によって切られ，南側も後世の削平によって削られていたため，南北の長さは，1.7ｍ以上としか不明。幅は，50～60㎝，深さは12㎝，足元に少し余裕があるが，ほぼ掘方ぎりぎりに人を埋めたものらしい。

伴出遺物がないことから，年代を決定するのは困難であるが，人骨頭部を削って作られた井戸10の年代が瓦器椀や土師質皿の編年によって，鎌倉末期と判明しているので，この土壙墓の上限もそれよりは上がらない。大約，平安末～鎌倉時代頃のものと考えておきたい。



第10図　58－３区 土壙墓 平面・断面図（1／20）

第２項　弥生時代～中世の遺構

自然河川

調査区南半部で検出された（第11図）。南北朝には，ほぼ埋りきっており，下層の弥生時代の自然河川を流れる伏流水を狙って，井戸４・５・６・８等の井戸が掘られている（第８図）。鎌倉時代の遺物は，ほとんど出土せず，一気に平安時代末期に飛んでしまう。動物骨や土器片を大量に含んだ灰色砂礫層を除去すると，石列・土器群・木組み遺構等が検出される（図版９・10）。

更に厚さ60㎝程と灰褐色砂礫層を除去すると，弥生時代の自然河川流路が検出される。調査区南半部，北西から南東にかけて，幅４ｍ深さ１～1.5ｍの断面Ｖ字形の溝状の流路がまず検出された。溝底の深さは南北端と北西端と変りはなかったが，調査区の南の東大阪市の調査結果から，南東端から北西端へ流れる流路であることが判明した。この流路中に，弥生Ⅲ様式の土器及び石器が多量に包含されていた。柱状片刃石斧のほぼ完形品や太型蛤刃石斧（ふとがたはまぐりはせきふ）・石槍の破片等も出土した（図版14ｂ）。

この流路の南東部の隅には，長径1.5m，短径1.1m，深さ1.1mの楕円形土坑（井戸101）が検出された。井戸である可能性があった。

このⅢ様式の流路の西側の肩は，さらに下り，下から北西から南東への方向のやはり自然河川の流路が１本検出された（図版15）。流路を埋めている灰色砂礫層中からは，やはりⅢ様式の土器が出土した。

第11図　58－３区 弥生時代中期自然河川 平面図（1／80）

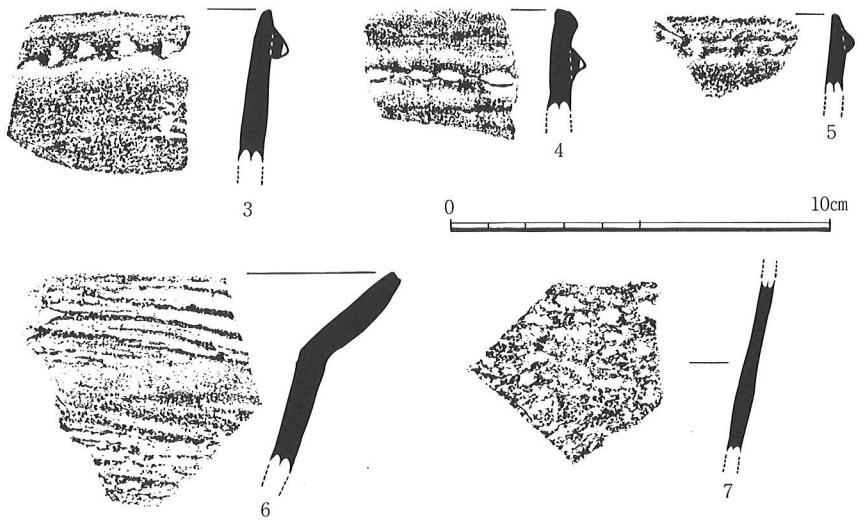
第３節　検出された遺物

第１項　縄紋～弥生時代の遺物

＜縄紋土器＞（第12図３～７，図版16ａ）

58－３区の縄紋土器は５点。そのうち，刻目突帯紋を有し，深鉢を呈すると思われるものが３点，二枚貝条痕のあるものが１点あり，いずれも縄紋時代晩期の土器で，弥生時代中期自然河川より出土である。また，すべて復原が困難な小破片にすぎない。以下，各土器の観察を記していく。

（３）口縁端部と突帯の調整を同時に行なったとみられる突帯を有し，刻み方は，ヘラで刻んだやや明瞭なＤ字である。色調は暗褐色を呈し，胎土は角閃石を非常に多く含む他，雲母も目立つ。生駒西麓産である。内・外面ともナデである。（４）やや厚い口縁の下に，少し垂れ下がったような突帯を持つ。突帯の刻みは，浅いが明瞭であり，ヘラを押しつけた長いＤ字である。色調は暗褐色，胎土は角閃石，雲母を多く含む生駒西麓産である。内・外面ともナデ調整。（５）口縁端部と突帯の調整を同時に行なったと思われる突帯を持ち，刻みは浅く不明瞭である。色調は暗褐色を呈し，胎土は角閃石，雲母が目立ち，生駒西麓産である。調整は内・外面ともナデと思われる。（６）は深鉢。口縁部には二枚貝による条痕がめぐり，屈曲部から胴部にかけては，荒いケズリが行なわれている。ケズリに用いられた工具であるが，条痕のように深く明瞭であること，胎土に２㎜前後の小石が多いことから，板状あるいはヘラ工具も考えられるが，これは繊維束を使用したものと考えたい。色調は黒味がかった暗褐色を呈し，胎土は角閃石，雲母が目立つ他，



第12図　58－３区 縄紋土器 実測図（1／2）

2㎜前後の長石，石英粒を多く含む生駒山麓産である。外面調整は上記の通り。内面は丁寧なナデである。（5）は深鉢の胴部と思われる。色調は黒が強い暗褐色，胎土は角閃石，雲母が非常に多い。生駒山麓産である。調整であるが，外面は繊維束による荒いケズリである。右上方に削っているものを，水平方向に削る帯が切っている状態が観察できる。内面はナデ調整。

以上の通りである。このうち，（4）のように口縁部がやや肥厚し，その下に刻目突帯が付くものについては，あまり報告されていないため，詳しい時期は不明である。（3・5）は，突帯の付け方に共通するものがあり，同時期と考えられる。（6・7）についても，胎土に小石が入るかはいらないかの違いはあるが，生駒山麓産であり，色調も外面調整も酷似することから同時期であろう。（4）は別として，（3・5）は長原式，（6・7）は滋賀里Ⅲの範疇にあるものと考えられる。

＜弥生土器＞（第13・14図8～34，図版16b～18）

調整区南半部の自然河川中から多量に出土した。（8～10）は調査区南西隅で検出された自然河川から出土したもの。（8）は細頸壺の口縁部。外面には，櫛描波状紋と直線紋を交互に密に施す。この櫛原体は上が2本で，少し間隔をあけ，下が5本の歯数である。その櫛を使い紋様を描いている。胎土は灰白色を呈し、摂津の土器か。（9）は生駒山麓産の壺。口縁内部および肩部に円形浮文がついている。（10）は生駒山麓産の壺。外面に簾状紋を一面に施す。

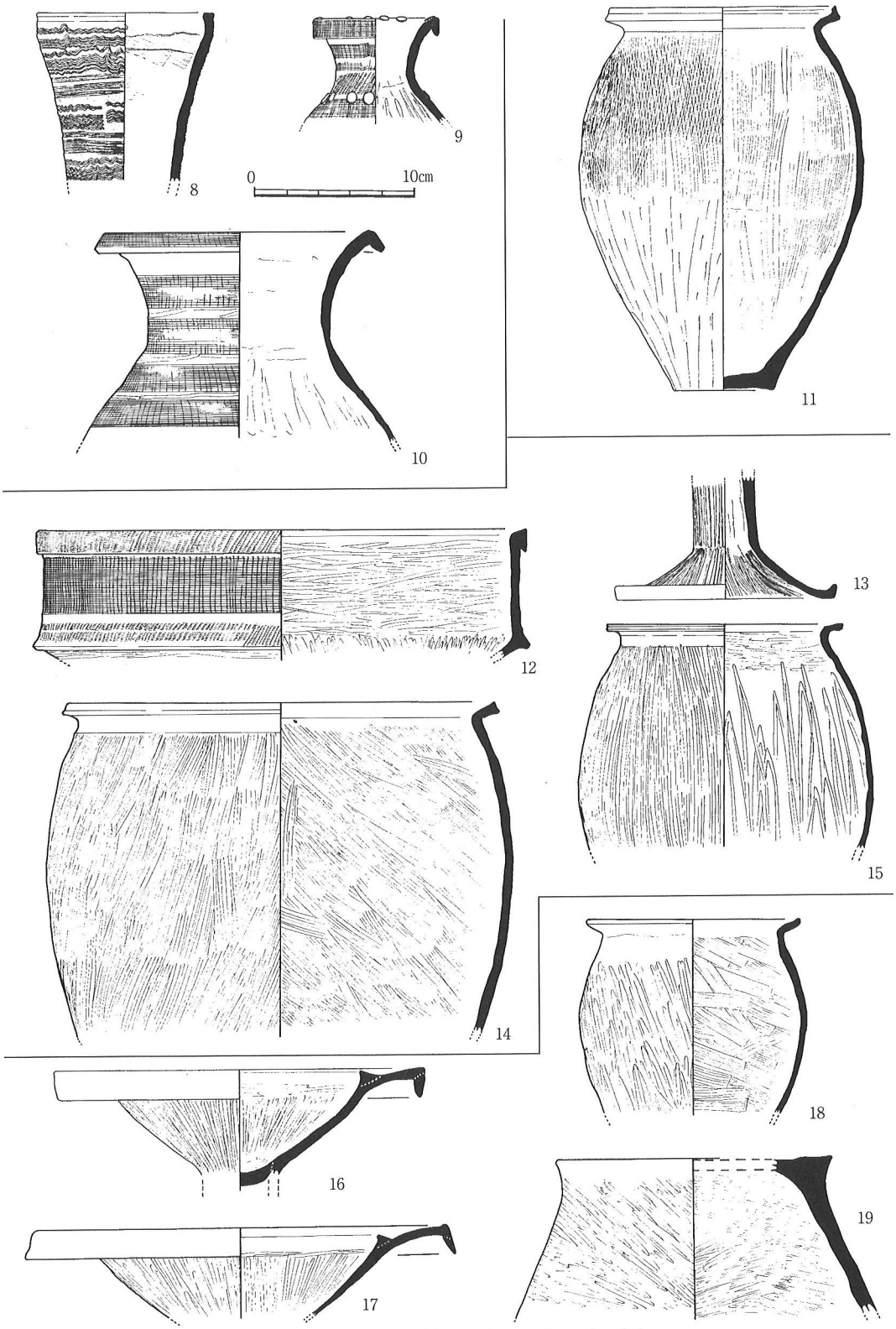
（11）は調査区南東隅の包含層中から出土したもの。井戸101の上層の埋土に相当する可能性がある。完形の生駒西麓産の甕。口縁部および胴部中位にはススの付着がみられ，黒褐色を呈す。底部には黒斑がみられる。

（12～15）は調査区南東隅で検出された井戸101から出土したもの。（12）は生駒西麓産の鉢。外面に幅広の櫛描簾状紋を施す。（13）は生駒西麓産の高坏。（14）は大型甕。内外面とともにハケ目を施す。摂津の土器。（15）は生駒西麓の甕。外面ハケ，内面は口縁部内面横方向の密なナデ。

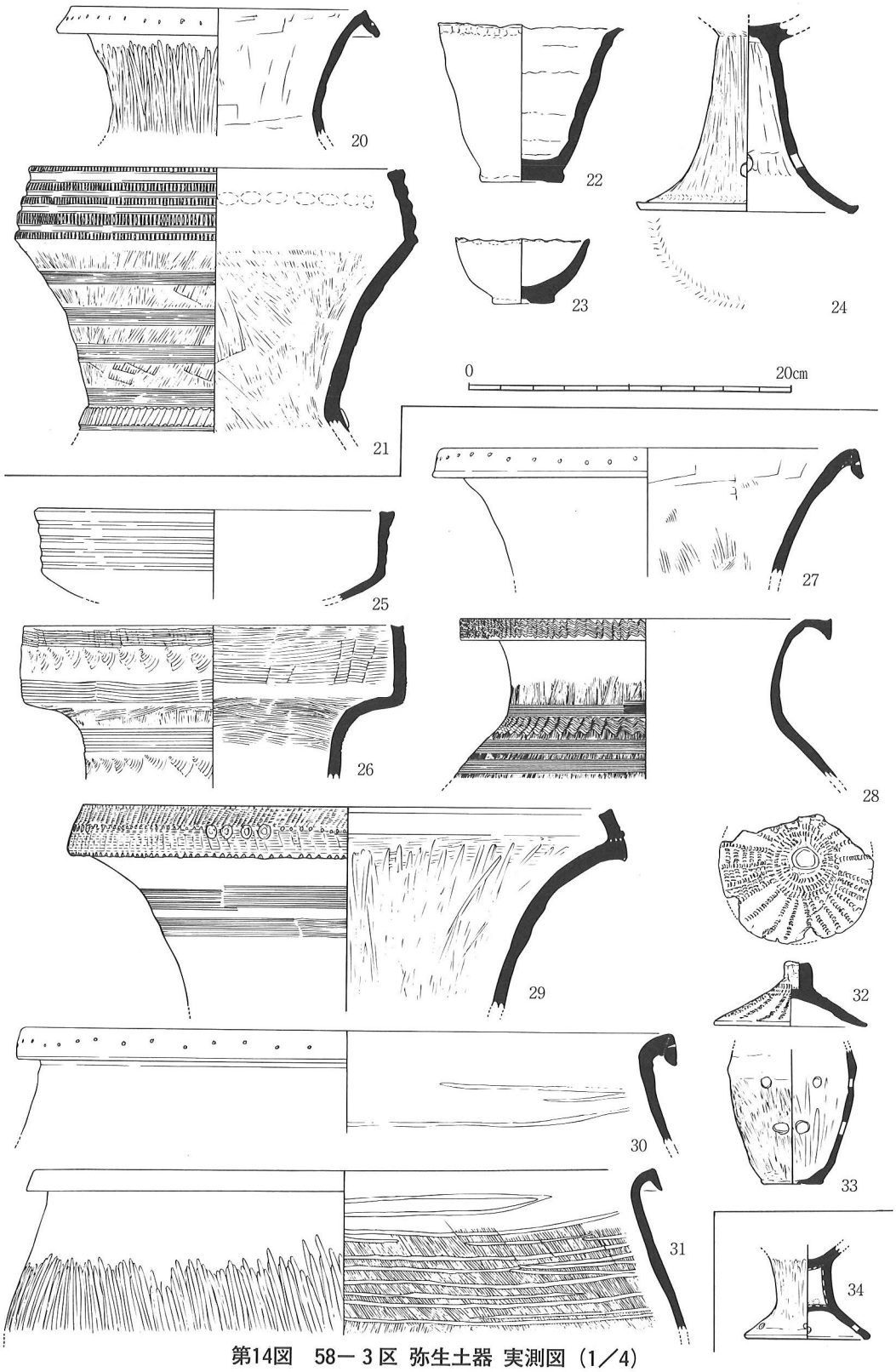
（16～19）は調査区西端自然河川の底から出土したもの。（16・17）は，生駒西麓産の高坏。（18）は生駒西麓産の甕。内面ハケ，外面は縦方向のナデ。（19）は生駒西麓産の回転台形土器。外面は細かいナデを斜めに密に施す。

（20～24）は調査区南端の弥生時代自然河川の上層から出土したもの。（20）は生駒西麓産の壺。口縁端部に刺突紋を施す。（21）は生駒西麓産の複合口縁をもつ壺。口縁端面には凹線を施した後，刻み目を施す。頸部には，櫛描直線紋を施し，肩部との間に刺突紋を施した突帯を貼付ける。（22）は生駒西麓産の小鉢。口縁端部に小さな指頭圧痕が連続して残る。（23）は生駒西麓産の浅鉢。口縁部は断続的なつまみ出しによって波状に作り上げている。（24）は生駒西麓産の高坏。脚部には穴が4個あり，裾近くに綾杉紋が施される。

（25～33）は調査区南半自然河川の西端で検出された流路から出土したもの。（25）は摂津地方産の高坏。口縁端面に凹線を4本施す。胎土は，長石・雲母・石英を含み赤橙色を呈す。（26）は生駒西麓産の複合口縁をもつ壺。口縁端部および頸部に櫛描簾状紋・扇形紋・直線紋を施す。内



第13図　58－３区 弥生土器 実測図（1／4）



第14図　58－3区 弥生土器 実測図（1／4）

面は横方向のハケ調整。(27) は，(20) とよく似た生駒西麓産の壺。口縁端部に列点紋を施す。(28) は摂津地方の壺。口縁端面に櫛描波状紋を施し，頸部に櫛描直線紋と波状紋を施す。胎土は，長石・石英・クサリ礫を含み，橙灰色を呈す。(29) は生駒西麓産の複合口縁部をもつ壺。口縁端部には櫛描簾状紋を２段にわたって施し，その間に列点紋を配し，所々に円形浮文を貼りつけている。口縁端部の上下の角部には刻み目まで施している。頸部には２段の櫛描直線紋を施している。(30) は生駒西麓産の甕。口縁端面に列点紋を施す。(20) や (27) と器種は違ってもよく似た作りで，同一人の作になるのかも知れない。(31) は生駒西麓産の甕。外面は縦方向のナデ，内面はハケ目の上を横方向に荒い間隔のナデ。(32) は生駒西麓産の蓋。御日様の輝きのような刺突紋を施す。(33) は生駒西麓産の小型の甕。腹部に穴が多数あいている。底部内面に白色の物質（カルシウム？）が付着している。用途不明。

(34) は中世の井戸６から出土したもの。自然河川を掘削した井戸であるので，自然河川中出土と同じである。生駒西麓産の高坏であるが，中空になった筒部中に小石が２個入っていて振るとコロコロと鳴る。珍品といえよう。

以上の弥生土器は，(21・25) が凹線紋（おうせんもん）をもつので中期末まで下る可能性があり，(19～24) も同時期と推定されるが，他は中期中頃のものである。

＜弥生時代以前の石器＞（第15～19図 35～118，図版19～21，第２・３表）

縄紋時代の石器が３点，弥生時代の石器が81点出土した。58－３区の調査面積は，312 ㎡であるが，実質的にはほとんどが調査区南半を東から西に流れている自然河川中（約 118 ㎡）から出土し，面積比は㎡当たり 0.7 個と非常に高い。

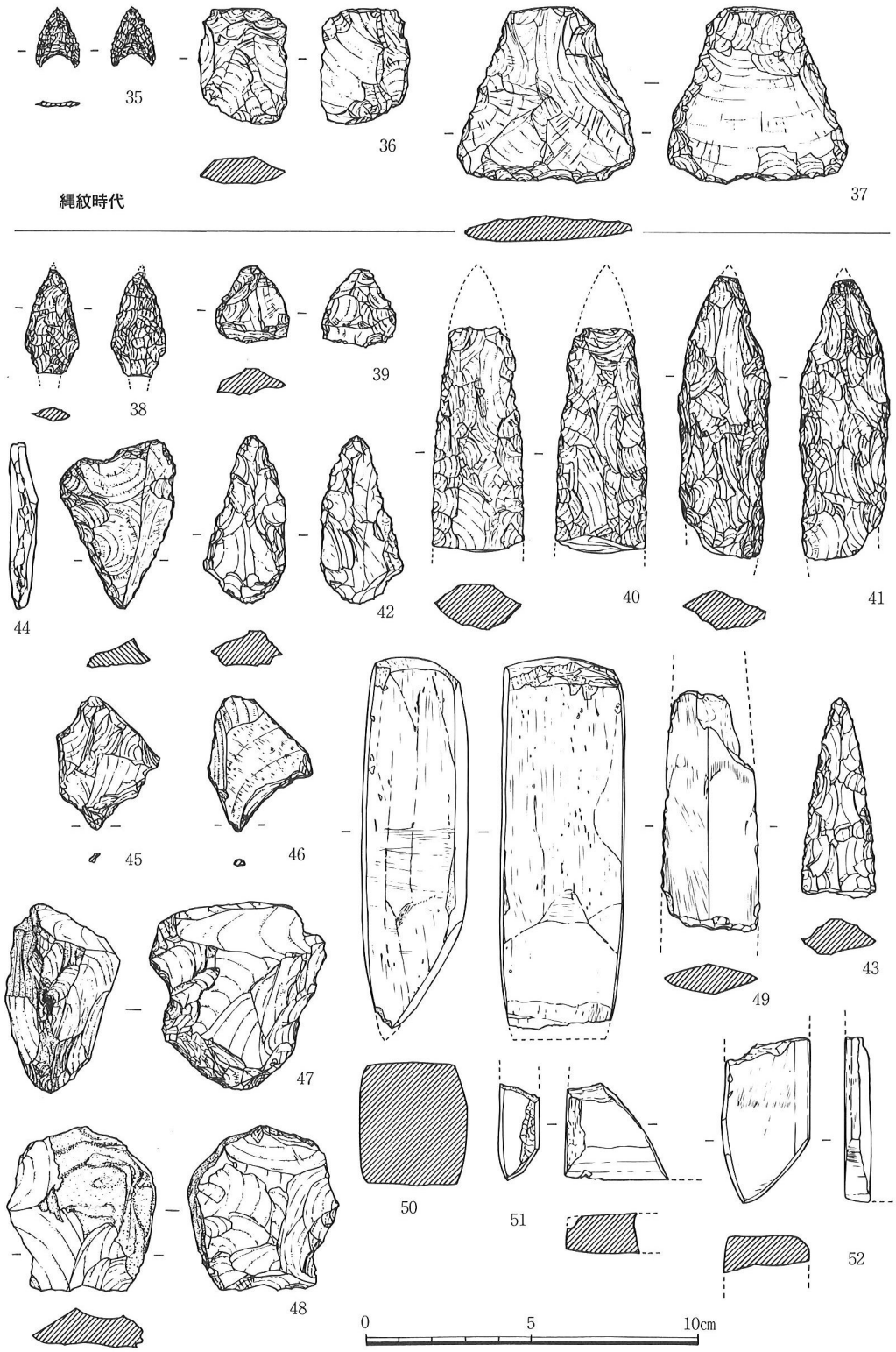
縄紋時代の石器 (35～37) は，弥生時代の自然河川中に混在していたものだが，赤茶褐色鉄石英製凹基式石鏃 (35) が珍しい。削器２点 (36・37) は，サヌカイトの風化が著しい。

弥生時代の石器 (38～118) は，自然河川および包含層中から出土したもので，自然河川で伴出した土器はⅢ・Ⅳ様式である。サヌカイト剥片も25点，301.5ｇ出土した。太型蛤刃石斧 (53) は，高槻市安満（あま）遺跡で製作された閃緑岩（せんりょくがん）製石斧と思われ，扁平片刃石斧 (50) もやはり安満遺跡で未製品等が発見されている灰緑色の石材と同一のものである。石庖丁は１点が高島石（粘板岩）で，３点が緑色片岩である。サヌカイト製不定形刃器が 59 点，1491.1ｇと非常に多い（第 17 ～ 19 図）。

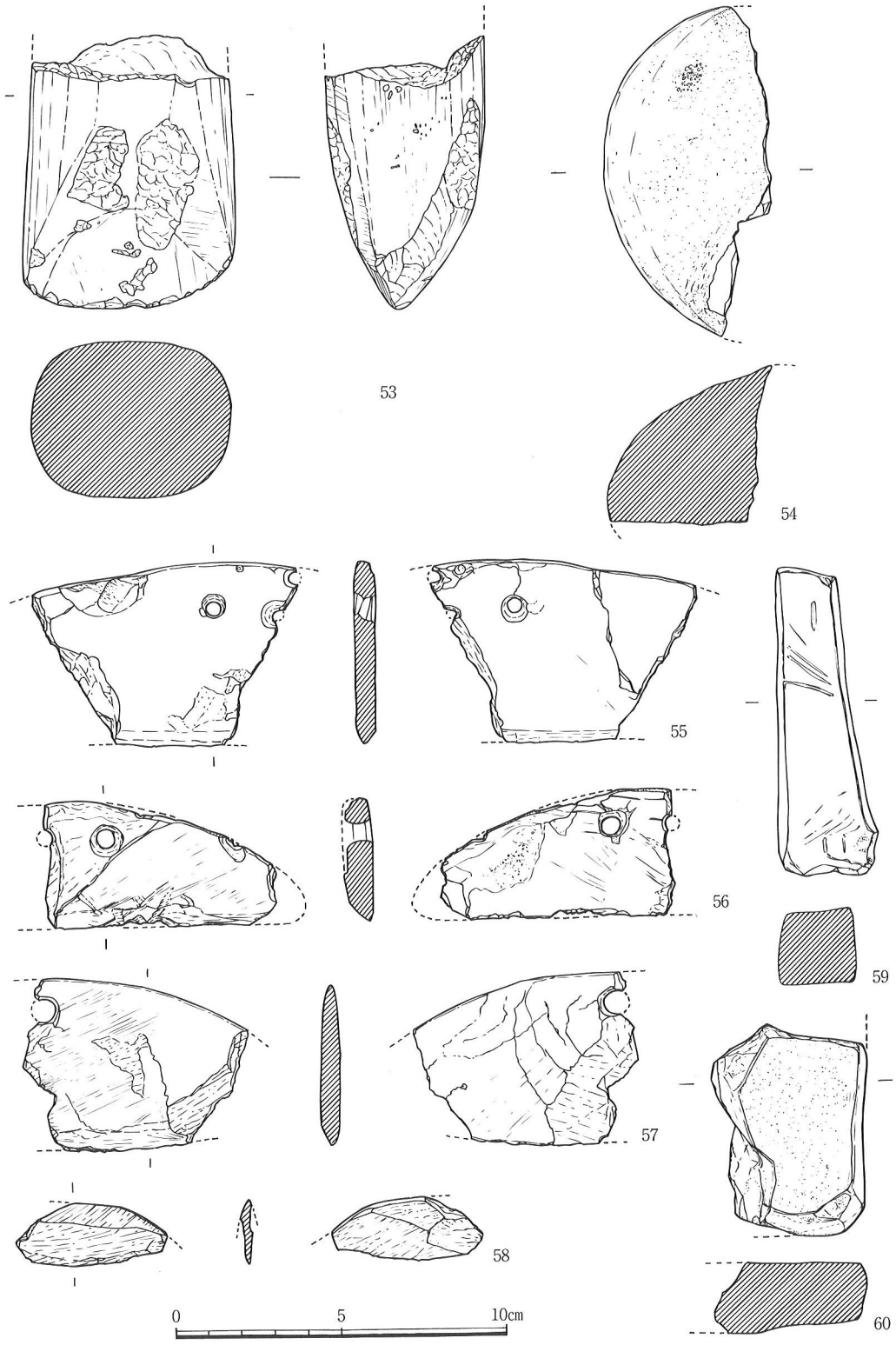
第２項　古墳時代～中世の遺物

＜中世の石器＞（第19～22図 119～132，図版22～24，第３表）

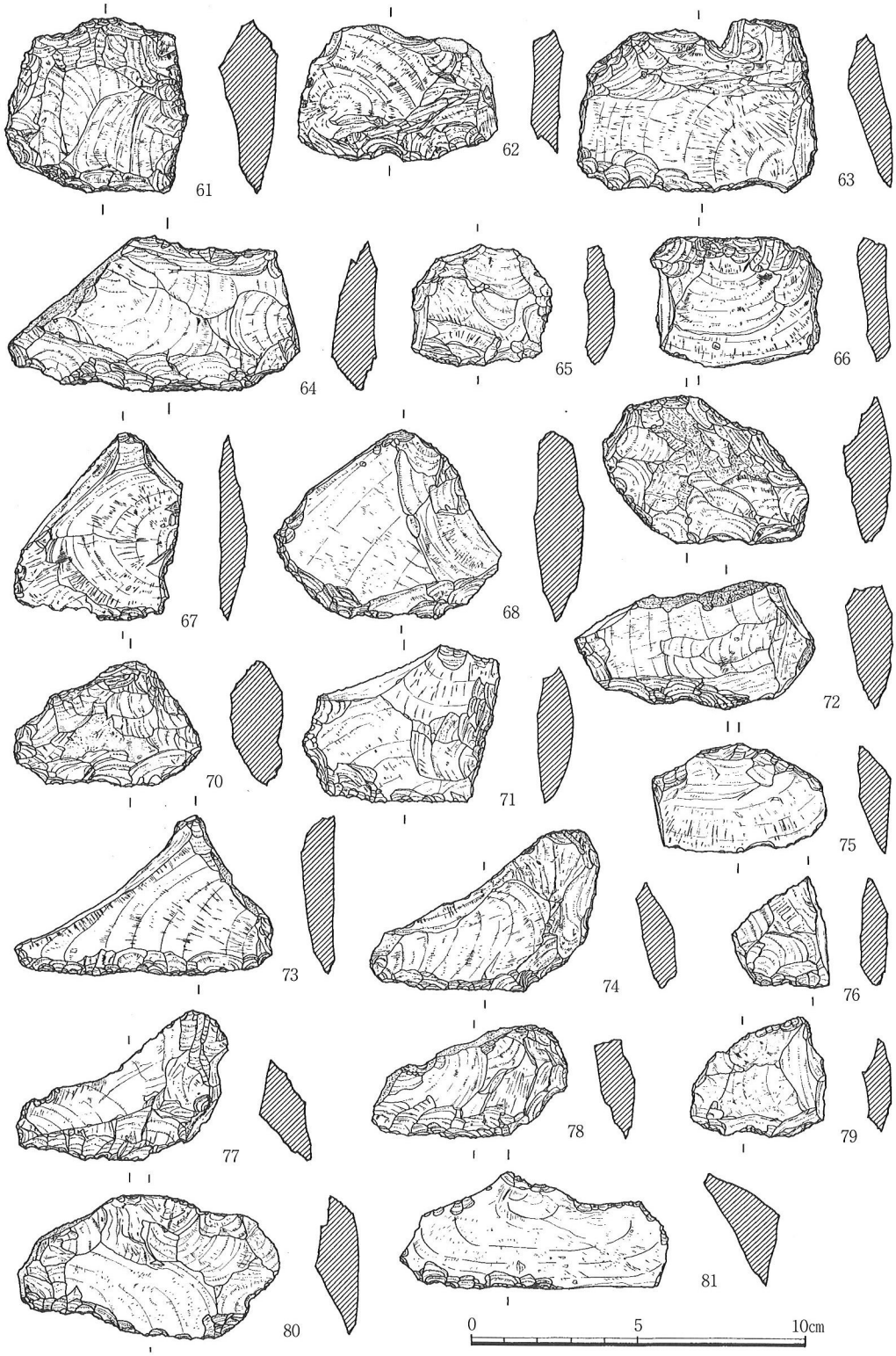
砥石が９点，石鍋１点，地覆石１点，石硯２点，石櫃１点が出土している。砥石は小型と大型に分かれ，小型は幅は4.5～6㎝位のものが多く，二上山産灰黄色凝灰岩が多用される。竜山石製地覆石 (129) は，寺の基壇等に使用されたものであろうか。石硯 (130・131) は共に南北朝時代



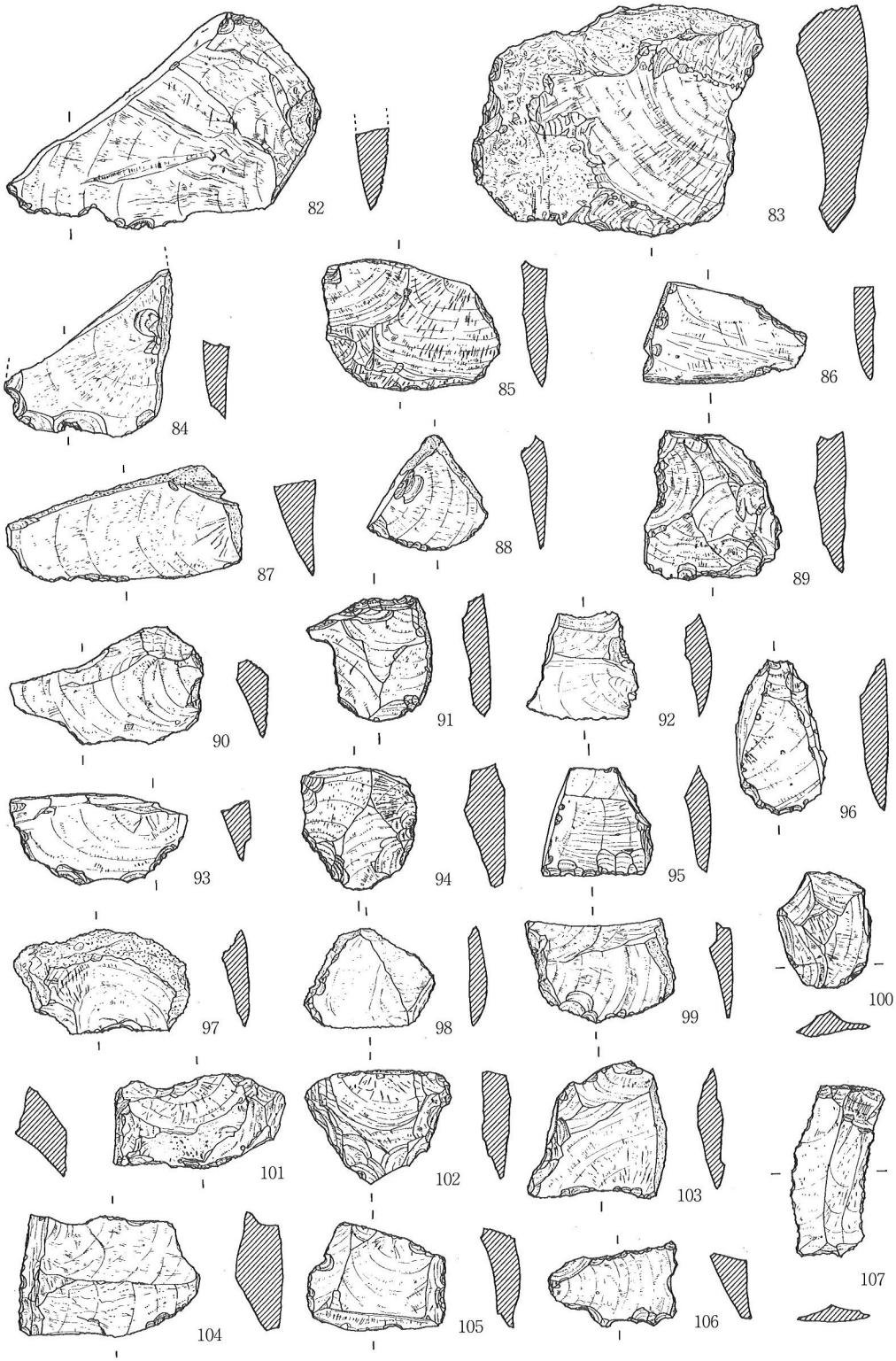
第15図　58－3区 弥生土器 実測図（1／2）



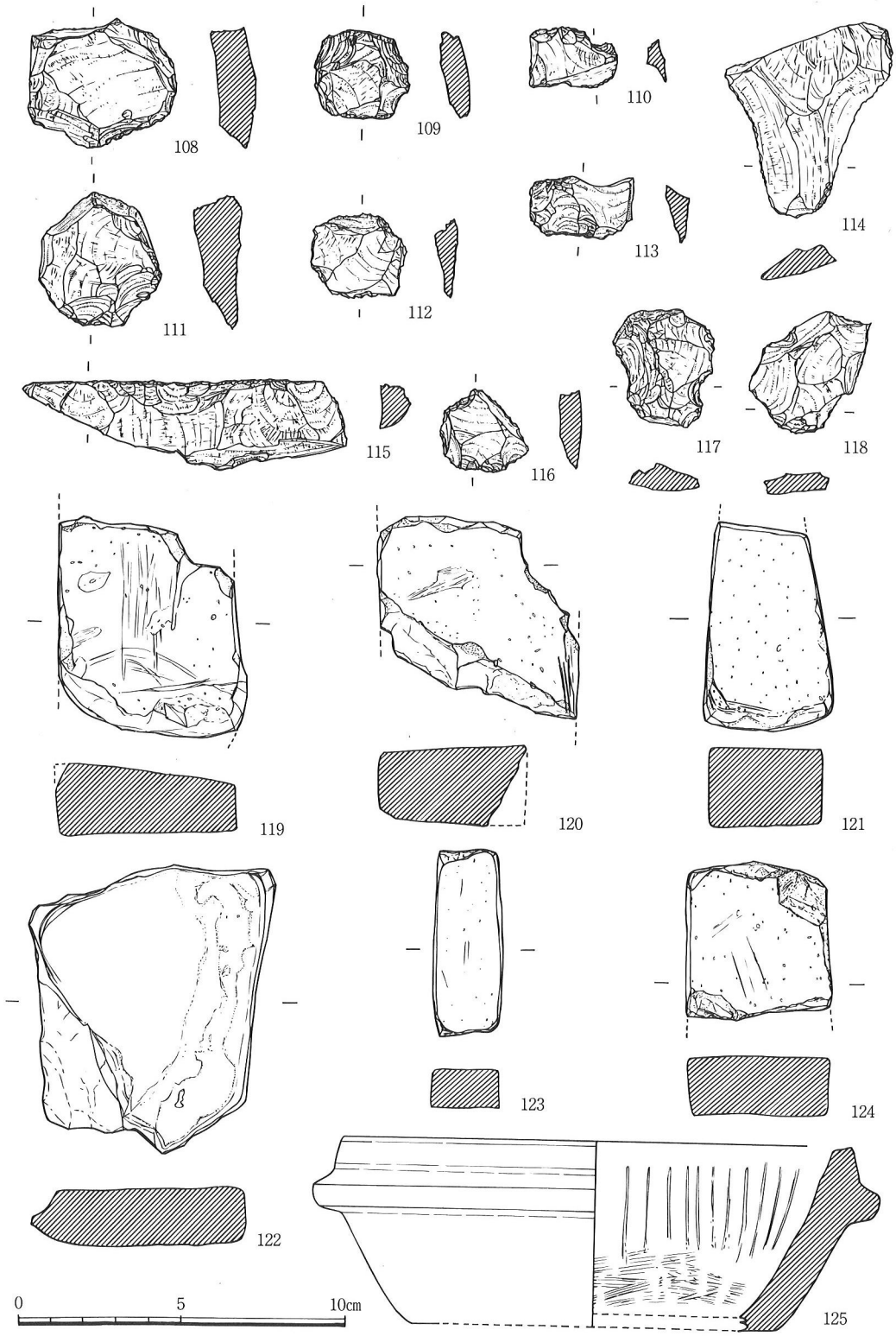
第16図　58－３区 弥生石器 実測図（1／2）



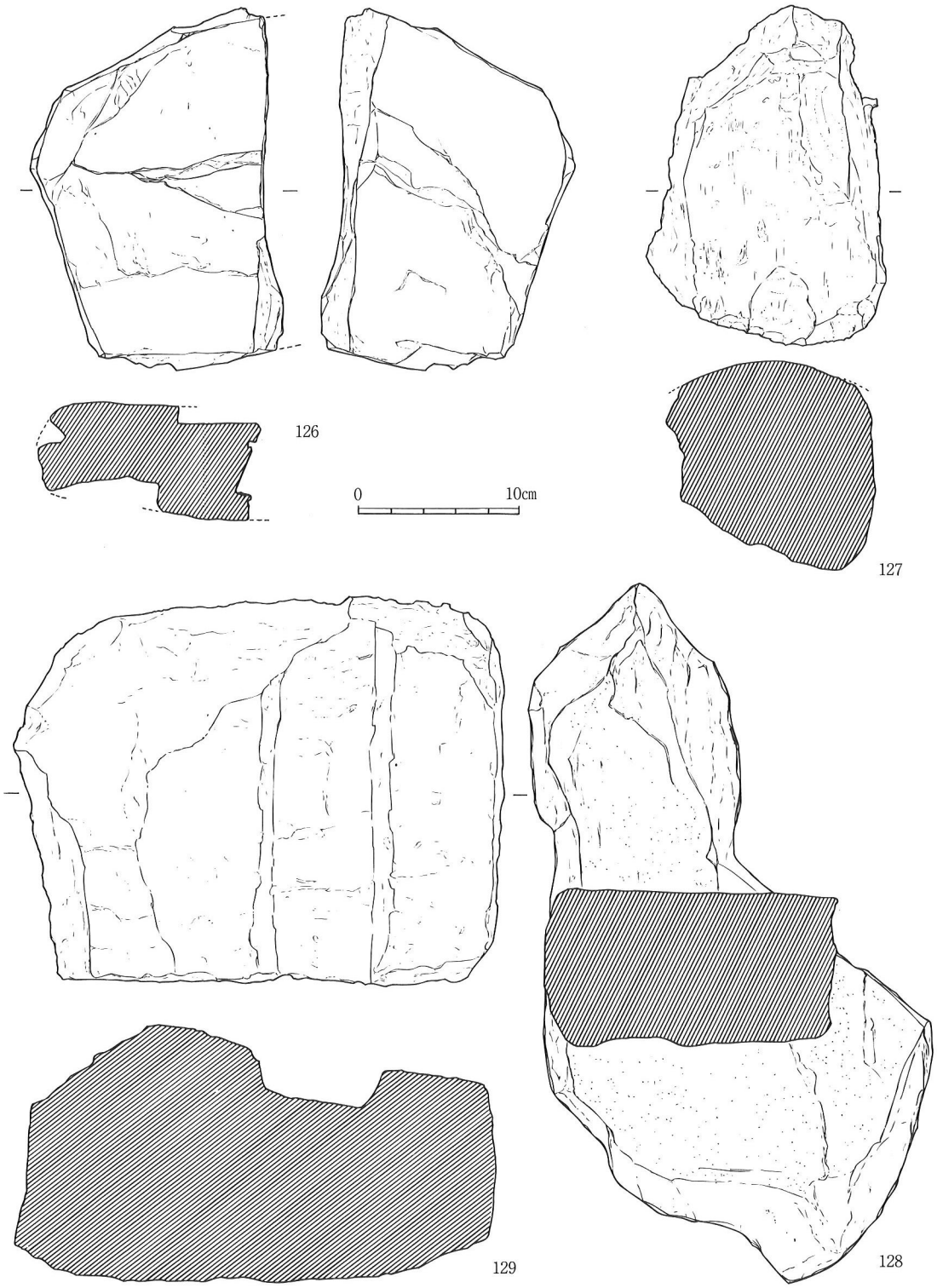
第17図　58－３区 弥生石器 実測図（1／2）



第18図　58－３区 弥生石器 実測図（1／2）



第19図　58－3区 弥生・中世石器 実測図（1／2）



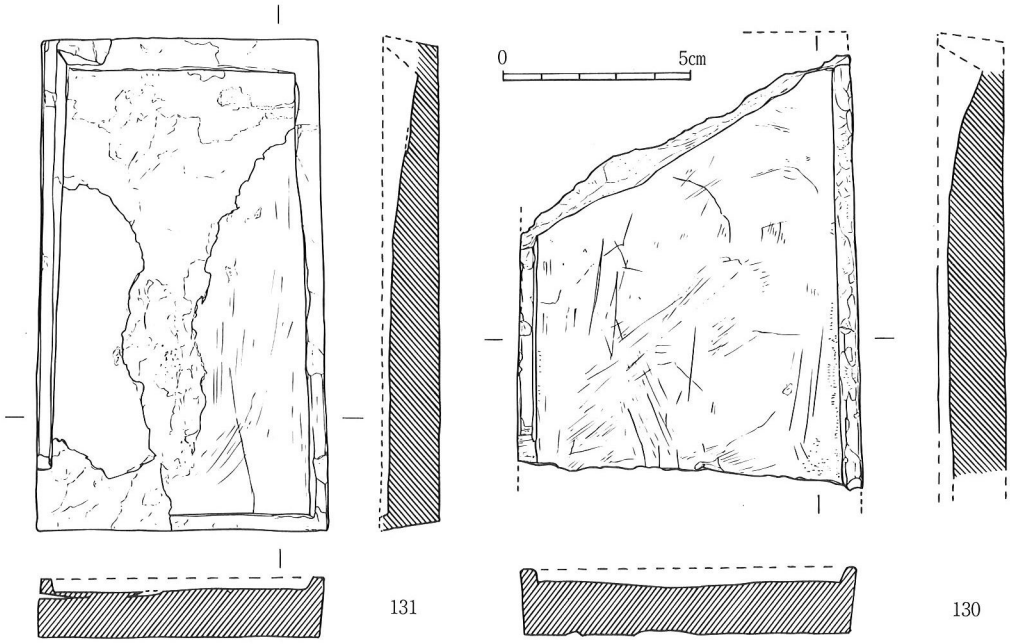
第20図　58－３区 中世大型砥石・地覆石 実測図（1／4）

第2表　58－3区 出土石器 観察表(1)

遺物番号	名　称	石　材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考	出土地区・層位
第15図35	石鏃	赤茶褐色石英	1.8	1.3	0.3	0.6	凹基無茎式	自然河川砂礫中
第15図36	削器	灰色サヌカイト	3.5	2.7	0.95	9.8	楔形石器	南東隅弥生包含層
第15図37	削器	濃灰色サヌカイト	5.3	5.4	1.5	34.2	一部表皮残存。周縁は表皮部以外は刃部。	自然河川南端
第15図38	石鏃	暗灰黒色サヌカイト	3.2	1.7	0.5	2.5	凸基無茎式	0－3地区 溝102
第15図39	石鏃	暗灰黒色サヌカイト	2.4	2.2	0.8	4.1	平基式	自然河川南端
第15図40	石槍	暗灰黒色サヌカイト	6.8	2.8	1.4	33.6	刃部体部共に磨滅。折れ口に二次加工。	0－4地区 包含層
第15図41	石槍	暗灰黒色サヌカイト	8.5	2.7	1.3	38.8	西側縁に磨きと叩きを施す部分がある。	N－2地区 溝102
第15図42	石槍	黒灰色サヌカイト	5.1	2.5	1.1	11.8	小型尖頭器	L－4地区 溝
第15図43	石槍	黒灰色サヌカイト	6.0	2.3	1.1	14.2	上面中央からの折れ。	0－2地区 溝102
第15図44	石錐	黒色サヌカイト	5.1	3.5	0.9	12.4	一部表皮残存。爪形石。端部に回転線条痕。	自然河川底
第15図45	石錐	暗灰色サヌカイト	4.1	3.1	1.0	10.7	著しく風化。縄紋時代のものを再加工。	自然河川南端
第15図46	石錐	暗灰色サヌカイト	4.1	3.2	0.4	4.4	先端部磨滅著しい。両面加工。	0－2地区 包含層
第15図47	叩き石	黒灰色サヌカイト	5.7	5.3	3.5	38.2	くぼんだ側縁を叩き石に転用。	ピット3
第15図48	石核	黒灰色サヌカイト	5.0	4.6	1.8	41.9	長さ1.5cm、幅3cmの剥片を3枚割り取る。	自然河川底
第15図49	鉄剣型石剣	灰色粘板岩	7.3	2.9	1.0	26.2	高島石製。両面に縦方向の傷あり。	南　東西溝
第15図50	柱状片刃石斧	黒緑色片岩	11.3	3.8	3.2	292.4	刃部に使用時の割れ。側面に紐痕あり。	弥生井戸101
第15図51	扁平片刃石斧	緑灰色片岩	3.0	3.2	1.2	14.6	破片	北西隅包含層
第15図52	柱状片刃石斧	黒緑色片岩	5.0	2.7	1.1	25.4	全面に縦方向の傷あり。石目で割れている。	自然河川西端砂利層
第16図53	太型蛤刃石斧	緑灰色閃緑岩	8.3	6.4	4.9	367.8	刃部に使用時の割れ。基部に調整時のへこみ。	南東隅弥生包含層
第16図54	磨石	閃緑岩？	10.1	4.2	4.8	255.5	全面つるつるで、焼けている。	自然河川南端砂礫層
第16図55	石庖丁	黒緑色緑色片岩	4.6	8.1	0.7	52.5	両刃。失敗穴1個あり。	自然河川南端砂礫層
第16図56	石庖丁	黒緑色緑色片岩	3.9	7.0	0.8	37.6	片刃。背部・刃部にネズミの歯形痕あり。	自然河川砂礫層下層
第16図57	石庖丁	暗緑色緑色片岩	5.3	6.8	0.7	34.1	片刃。両面に斜め方向の傷あり。	N－2地区 溝102
第16図58	石庖丁	黒色粘板岩	2.0	4.7	0.3	3.5	破片のため、詳細は不明。高島石製。磨製石鏃？	N－4地区 包含層
第16図59	砥石	緑灰色細砂岩	9.4	2.0	2.4	121.0	4面使用。刃物傷あり。和泉砂岩製。	自然河川
第16図60	砥石	灰白色細砂岩	6.5	4.5	2.2	94.3	4面使用。一部焼けている。	N－2地区 溝102
第17図61	不定形刃器	黒色サヌカイト	5.3	5.5	1.8	59.4	完全調整されている。	井戸101
第17図62	不定形刃器	黒色サヌカイト	4.1	6.0	1.6	34.9	背部に表皮をもつ。	N－2地区 溝102
第17図63	不定形刃器	黒色サヌカイト	5.3	7.3	1.9	69.7	背部に表皮をもつ。完全調整されている。	自然河川砂礫層
第17図64	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	4.7	8.8	1.4	70.6	完全調整されている。	自然河川
第17図65	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.7	4.2	1.0	17.6	背部に表皮をもつ。二上山製。	自然河川砂礫層下層
第17図66	不定形刃器	黒色サヌカイト	4.0	5.2	1.0	27.6	背部に表皮をもつ。	南東隅弥生包含層
第17図67	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	5.7	5.1	0.8	22.0	背部に表皮をもつ。	包含層
第17図68	不定形刃器	黒色サヌカイト	5.7	6.9	1.5	53.8	背部に表皮をもつ。	自然河川底
第17図69	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	4.5	6.2	1.6	41.5	完全調整されている。	自然河川南端
第17図70	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	3.8	5.7	1.6	36.1	縄紋時代の削器を再利用したもの。全周縁刃部。	自然河川砂礫層
第17図71	不定形刃器	黒色サヌカイト	4.8	6.0	1.3	35.4	背部に表皮をもつ。全周縁刃部。	南東隅弥生包含層
第17図72	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.9	7.2	1.5	42.6	背部に表皮をもつ。	N－2地区 溝102
第17図73	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	4.9	7.8	1.0	29.6	背部に表皮をもつ。	土壙墓下の包含層
第17図74	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	4.9	6.9	1.9	39.2	背部に表皮をもつ。直線刃。	自然河川砂礫層
第17図75	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.3	5.2	1.0	16.1	完全調整されている。	N－2地区 溝102
第17図76	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.4	2.9	1.0	8.1	背部に表皮をもつ。	溝101　A地点粗砂層
第17図77	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	4.5	6.4	2.4	39.1	縄紋時代の削器を再利用したもの。直線刃。	自然河川砂礫層下層
第17図78	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.4	5.9	1.2	24.1	背部に表皮をもつ。	自然河川砂礫層
第17図79	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.6	4.0	0.9	13.4	完全調整されている。全周縁刃部。	自然河川砂礫層
第17図80	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	4.4	7.9	1.3	49.7	背部に表皮をもつ。	自然河川砂礫層下層
第17図81	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.6	8.0	1.9	39.8	直線刃。	弥生井戸101
第18図82	不定形刃器	黒色サヌカイト	6.5	9.4	2.0	46.7	刃先の一部だけが、刃部。	東西溝南東端
第18図83	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	6.9	8.8	2.2	128.0	背部に表皮を持つ。	溝101

第３表　58－３区 出土石器・石製品　観察表（２）

遺物番号	名　称	石　　材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　　考	出土地区・層位
第18図84	不定形刃器	漆黒色サヌカイト	5.0	5.1	1.4	22.9	背部に表皮を持つ。	自然河川西端砂礫層
第18図85	不定形刃器	黒色サヌカイト	4.0	5.3	0.8	17.0	全周縁に刃部をもつ。	自然河川南端砂礫層
第18図86	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	3.1	4.9	0.8	12.2	旧石器～縄紋の剥片を再加工。刃部に横方向の磨き。	０－２地区 溝102
第18図87	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.4	7.0	1.3	26.4	背部に表皮をもつ。右利きの人用。	自然河川南端砂礫層
第18図88	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.5	3.6	0.7	6.4	背部に表皮をもつ。金山産。	溝102
第18図89	不定形刃器	黒色サヌカイト	4.5	4.1	0.9	19.0	二箇所に抉れ刃をもつ。	自然河川南端砂礫層
第18図90	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.5	5.8	1.4	23.4	背部に表皮をもつ。あまり剥片を加工せず。	自然河川西端砂礫層
第18図91	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	3.7	3.7	0.8	11.6	縄紋の剥片を再利用したエンドスクレイパー。	自然河川
第18図92	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.2	3.3	0.9	8.3	背部に表皮をもつ。ほとんど直線刃。	南東隅弥生包含層
第18図93	不定形刃器	黒色サヌカイト	2.7	5.3	0.9	13.8	石器未製品？	自然河川西端底
第18図94	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	3.7	3.4	1.2	16.1	エンドスクレイパー形。	包含層
第18図95	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	3.3	3.3	0.8	9.8	縄紋時代の削器を再加工。	自然河川
第18図96	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	4.7	2.7	0.8	12.6	縄紋時代の剥片を再加工。	自然河川
第18図97	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.1	5.2	0.9	15.0	背部に表皮をもつ。	自然河川西端砂礫層
第18図98	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.0	3.9	0.5	6.2	背部に表皮をもつ。	自然河川西端底
第18図99	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.1	4.4	0.9	10.1	背部に表皮をもつ。	南東隅弥生包含層
第18図100	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.6	2.8	1.0	8.4	側縁３辺刃部。	溝102
第18図101	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	2.8	5.2	1.6	24.2	旧石器・縄紋時代の剥片を再利用。左利きの人用。	溝101　Ａ地点　粗砂
第18図102	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.4	4.4	0.9	14.4	両側縁を刃部として使用。	溝102
第18図103	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	4.1	4.2	1.1	14.6	内湾する刃部をもつ。	自然河川肩包含層
第18図104	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.8	5.4	1.8	37.4	左側縁に刃部をもつ。	井戸６
第18図105	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.3	4.1	1.3	14.7	縄紋時代の剥片を再利用。	溝101　Ｂ地点　粗砂
第18図106	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	2.5	3.9	1.1	10.4	凹凸な刃部をもつ。	自然河川
第18図107	不定形刃器	黒色サヌカイト	5.1	2.5	0.7	7.1	縦剥ぎ右刃の両側縁を利用。	０－３地区　東西溝底
第19図108	不定形刃器	黒色サヌカイト	4.0	4.6	1.5	27.6	全周縁に刃部をもつラウンドスクレイパー。	自然河川砂礫層
第19図109	不定形刃器	黒色サヌカイト	2.7	2.9	0.8	8.6	背部に表皮をもつラウンドスクレイパー。	自然河川砂礫層
第19図110	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	1.9	2.7	0.6	3.8	背部に表皮をもつ。小型。	包含層
第19図111	不定形刃器	黒色サヌカイト	4.1	3.8	1.9	24.1	背部に表皮をもつ。小型。	Ｄ－３地区　東西溝底
第19図112	不定形刃器	黒色サヌカイト	2.6	2.9	0.7	5.8	背部に表皮をもつ。小型。	自然河川砂礫層
第19図113	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	1.9	3.2	0.8	4.8	横方向に使用した刃部をもつ。	自然河川底
第19図114	不定形刃器	黒色サヌカイト	6.0	5.2	1.3	28.8	丸くなるほど使用した刃部をもつエンドスクレイパー。	自然河川砂礫層
第19図115	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	2.8	9.9	1.4	36.6	背部に表皮をもつ。	自然河川底
第19図116	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	2.5	2.7	0.7	5.1	縄紋時代の剥片を再利用。	溝101　Ｂ地点　粗砂
第19図117	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.6	3.1	1.2	11.5	背部に表皮をもつ。	自然河川底
第19図118	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	3.8	3.7	1.0	15.4	背部に表皮をもつ。	自然河川砂礫層
第19図119	砥石	灰白色凝灰岩	6.7	5.5	3.0	126.7	四面使用。仕上げ砥。庖丁傷あり。	自然河川北西端下層
第19図120	砥石	灰乳白色凝灰岩	6.2	6.0	2.4	106.1	四面使用。仕上げ砥。庖丁傷あり。	包含層
第19図121	砥石	乳灰色凝灰岩	6.5	3.5	2.8	109.5	四面使用。仕上げ砥。庖丁傷あり。	井戸３
第19図122	砥石	暗灰褐色泥岩	8.8	6.8	1.6	112.5	上・側面を使用。	自然河川南端砂礫層
第19図123	砥石	暗黄緑色凝灰岩	5.8	2.0	1.1	28.4	四面使用。仕上げ砥。ほぼ完形品。	自然河川
第19図124	砥石	灰白色凝灰岩	4.3	4.4	1.6	75.4	四面使用。仕上げ砥。ほぼ完形品。	井戸10　上位
第19図125	石鍋	灰色滑石	5.7	15.6	1.2	210.9	内面削り調整。内外面共にスス付着。	自然河川砂礫層
第20図126	砥石	砂質片岩？	23.0	14.6	7.0	3500.0	両面中央部を使用。	土器群
第20図127	砥石	暗灰色硬質砂岩	21.5	15.2	15.2	5500.0	一面。曲面となり、使用。他欠損。	自然河川肩
第20図128	砥石	暗灰色硬質砂岩	45.0	25.6	13.2	15200.0	面の突出部磨滅。生駒石製。	自然河川肩
第20図129	地覆石	灰緑色凝灰岩	24.8	31.0	19.3		一部ノミ痕多数残存。裏面に溝あり。竜山石。	自然河川肩
第21図130	石硯	赤紫色夏岩	11.5	9.1	1.8	273.4	赤間石製。長方形。	井戸１　たちわり
第21図131	石硯	緑色片岩	13.1	7.8	1.6	265.9	やや台形。	包含層



第21図　58－3区 石硯 実測図（1／2）

の長方形石硯である（第21図）。石櫃（132）は幅68㎝，長さ86㎝，高さ42㎝，重さ420㎏で，とても重たく，類例の少ないものである（第22図）。

＜古墳～平安時代の土器＞（第23・24図 133～152，図版24b）

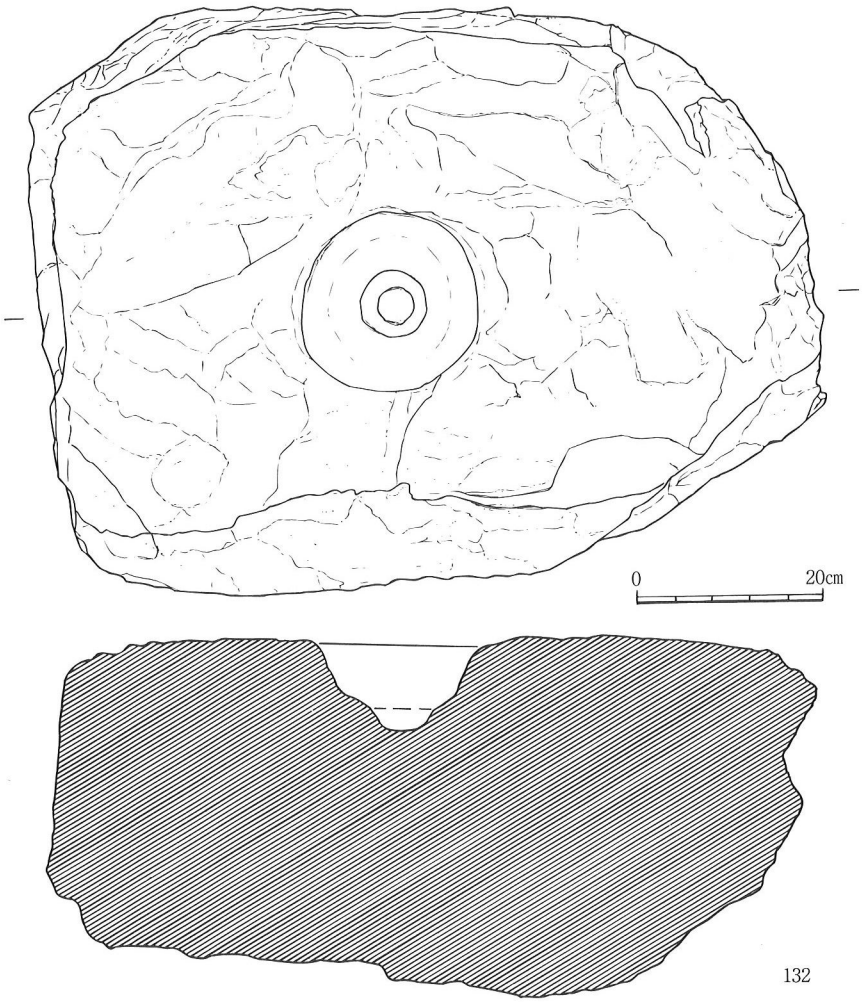
調査区中央で東西方向に検出された幅1.5～2ｍの自然河川中（溝101）から出土した。土師器羽釜や移動式かまどは大破片で固まって出土したもの。（133～135）は土師器甕。（136・137）は土師器羽釜。（135～137）は生駒西麓産。（138）は須恵器坏で古墳時代中期のもの。（139・140）は土師器小鉢。（141・142）は丸底の土師器鉢。（143）は土師器かまど。生駒西麓産。（144・147）は須恵器甕。（147）は口縁端面に櫛描列点紋，口頸部に凹線と櫛描波状紋を施す。（145）は須恵器𤮊。古墳時代後期のもの。（146）は土師器𤮊。古墳時代中期のもの。（148）は丸底の土師器鉢。口縁部のみをすべて打ち欠いている。（149～152）は土師器杯。（149）は底面下側に指頭圧痕があり，内面は暗紋。（150）は高台付きで，内面は暗紋。（151）は外面ヘラケズリ。（152）は内面に暗紋が美しく施される。

以上の土器は，古墳時代中期・後期，奈良時代，平安時代のものである。

＜中世の土器＞

井戸7（第25図 153）

土師質小皿1点のみが図化できた。外底面に板状圧痕が見られる。12世紀代のものと思われる。

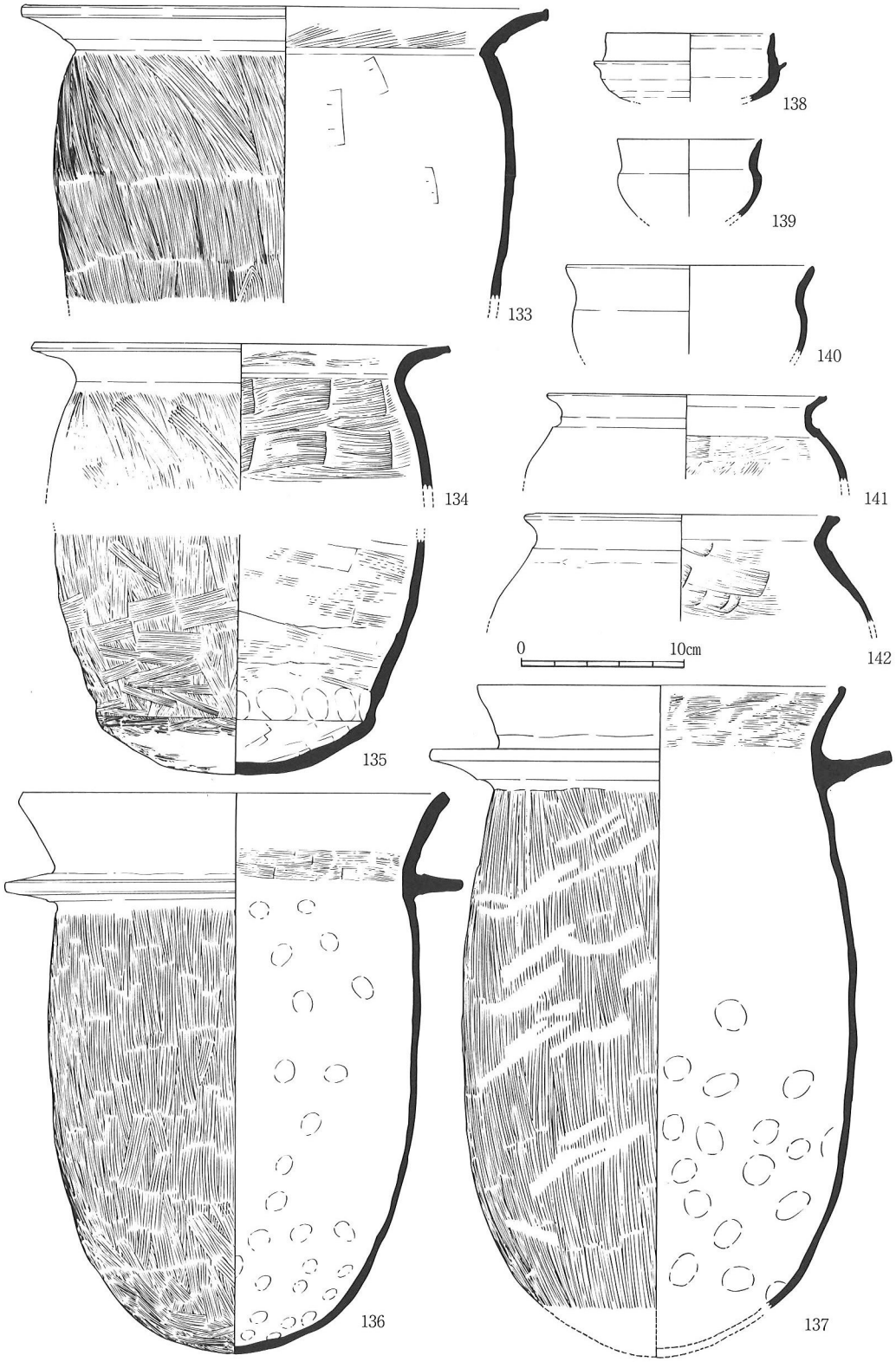


第22図　58－３区 石櫃 実測図（1／8）

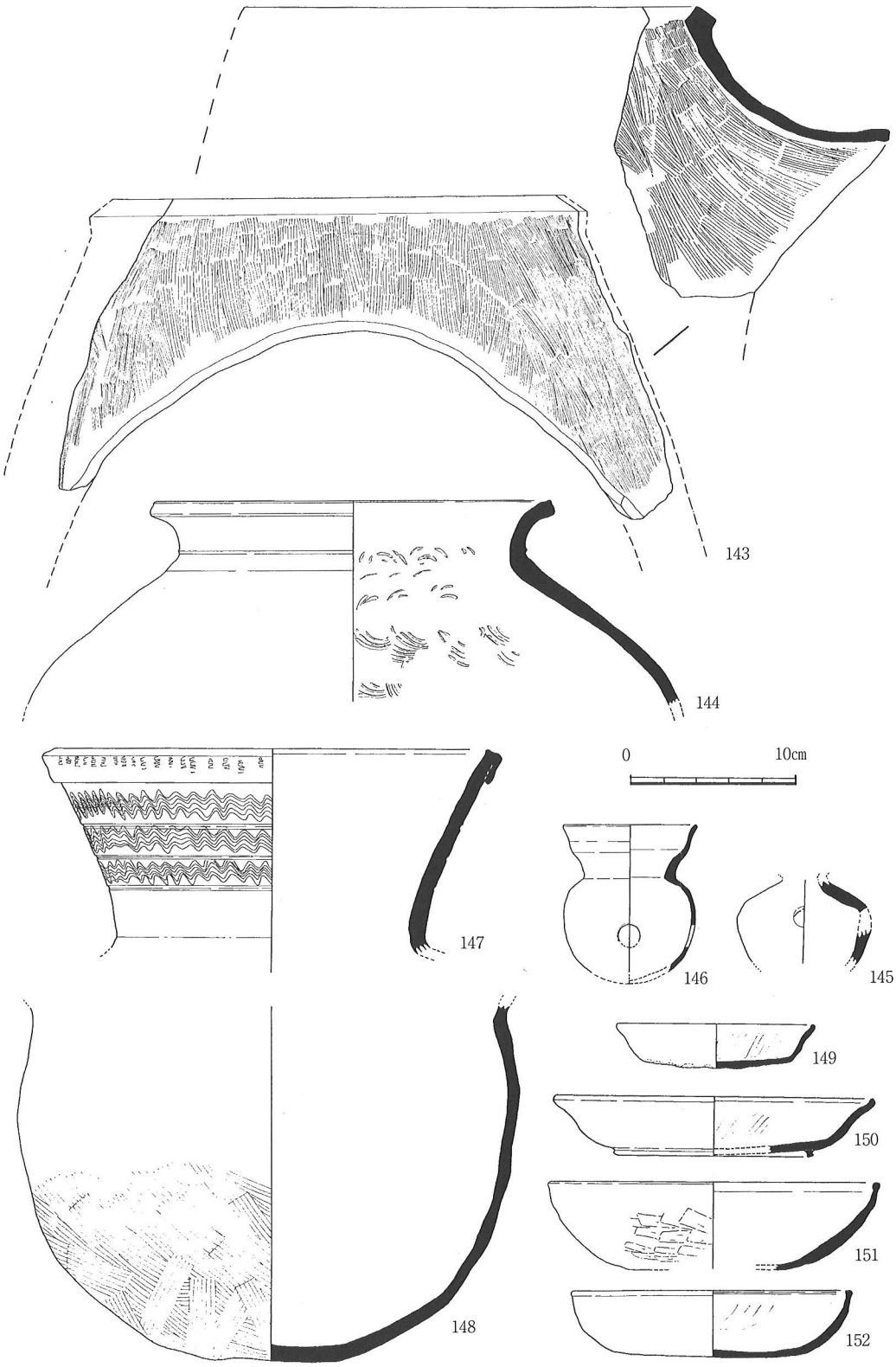
井戸９（第25図 154～163，図版25）

（154・155）は土師質小皿。（155）の口縁部はヨコナデによって大きく外反する。（156）は瓦器小皿。内底面には乱れたジグザグ状の暗紋（あんもん）が施され，口縁部内面には水平方向のヘラミガキが施されている。

（157～159）は和泉型瓦器椀[註1]。（157）の外面は，ヘラケズリの後６分割のヘラミガキが高台付近まで施される。口縁部はヨコナデにより外反するが，ヨコナデによって凹線上にへこんだ部分にはヘラミガキが施されない。内面のヘラミガキは見込みに平行線状に密に施した後，見込みから口縁内部にかけて乱方向に密に施されている。（158）は外面に分割性の認められるヘラミガキが粗く施され，内面には見込みに平行線状の暗紋を施した後，口縁部のヘラミガキが施されている。（159）は（158）に比べて内外面のヘラミガキが疎になっている。（157）がⅠ－２期，（158）



第23図　58－３区 古墳～平安時代土器 実測図（1／4）



第24図　58－３区 古墳～平安時代土器 実測図（1／4）

がⅡ－2期，(159) がⅡ－3期に相当する。

(160) は大和型もしくは楠葉型(くずはがた)とみられる瓦器椀の底部であるが，見込みには全く暗紋が施されていない。(161) は楠葉型瓦器椀(註2)。外面は規則的な分割ヘラミガキ，内面は密な圏線ミガキで，Ⅰ－2期にあたると考えられる。(162・163) は大和型瓦器椀(註3)。内面は条線間にややすき間のあく圏線ミガキ，外面は分割性の乱れたジグザグ状のヘラミガキが施され，Ⅱ－B型式ないしⅢ－A型式に相当する。

11世紀代の所産と見られる遺物が多いが，埋没は12世紀後葉と考えられる。

井戸3（第25図 164～171，図版26ａ）

(164) は大和型瓦器椀。外面は数条の水平方向のヘラミガキが施されるのみである。Ⅲ－C型式に相当する。(165) は和泉型瓦器椀。内面にのみ粗い渦巻状のヘラミガキが施される。Ⅳ－1期に相当する。

(166～168) は土師質小皿。口縁端部はヨコナデにより，尖り気味におさめている。(169) は土師質羽釜。鍔はその機能を果たすことが出来ないほどに退化している。外面にはススが付着している。(170) は瓦質三足。足が接続部から欠損しているが，剥離面にも厚くススが付着しており，足を欠いた後も使用されていたことがわかる。(171) は東播系練鉢。口縁端部外面に薄く自然釉がかかっている。13世紀後葉の埋没と考えられる。

井戸6（第25図 172～174，図版26ａ）

(172) は和泉型瓦器椀。内面に粗い渦巻き状の暗紋が施されているのみで，Ⅳ－2期ないしⅣ－3期のものと思われる。

(173) は東播系練鉢。(174) は土師質羽釜。胴部外面は斜め方向，内面はヨコ方向の板ナデが施される。14世紀前葉頃の埋没と思われるが，(173) は時期の遡るものであろう。

井戸5（第26図 175・176，図版26ａ）

(175) は瓦器小皿。口径8.0cmを測る。内面に5回のジグザグ状暗紋が施される。炭素の吸着はみられず，淡灰色を呈する。(176) は土師質小皿である。14世紀前葉の埋没と考えられる。

井戸10（第26図 177～180，図版27ａ）

(177～179) は和泉型瓦器椀。口径11.1～11.3cmを測る。内面の暗紋は粗い渦巻状で，高台は伴なわない。Ⅳ－3期ないしⅣ－4期に相当する。(180) は東播系練鉢。口縁端部外面に淡黄緑色の自然釉がかかる。いずれも最下層から出土した。14世紀前半頃の埋没と考えられる。

井戸4（第26図 181）

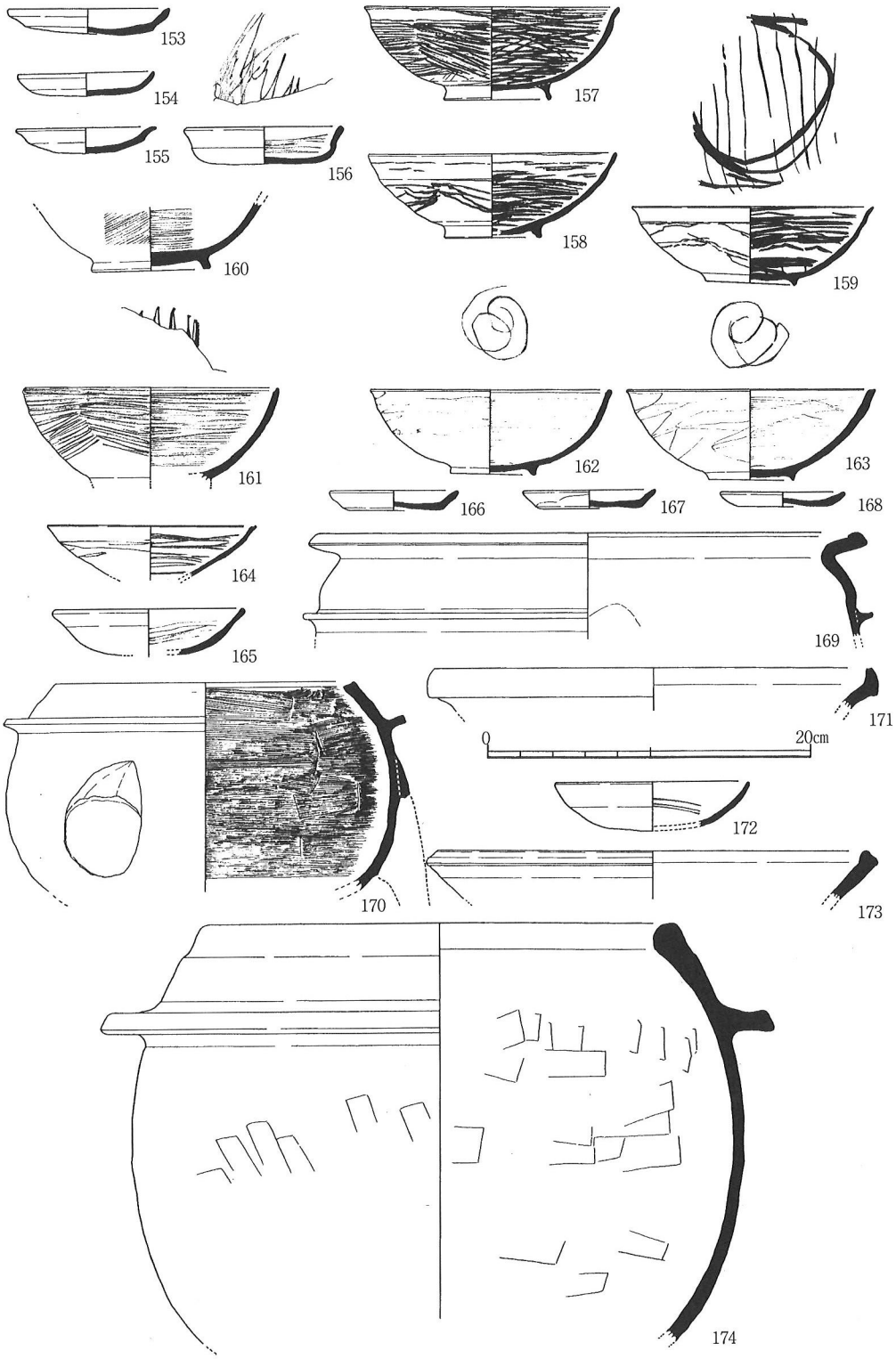
和泉型瓦器椀1個体だけが図化できた。口径10.0cm前後に復原でき、Ⅳ―5期に相当する。

井戸2（第26図 182）

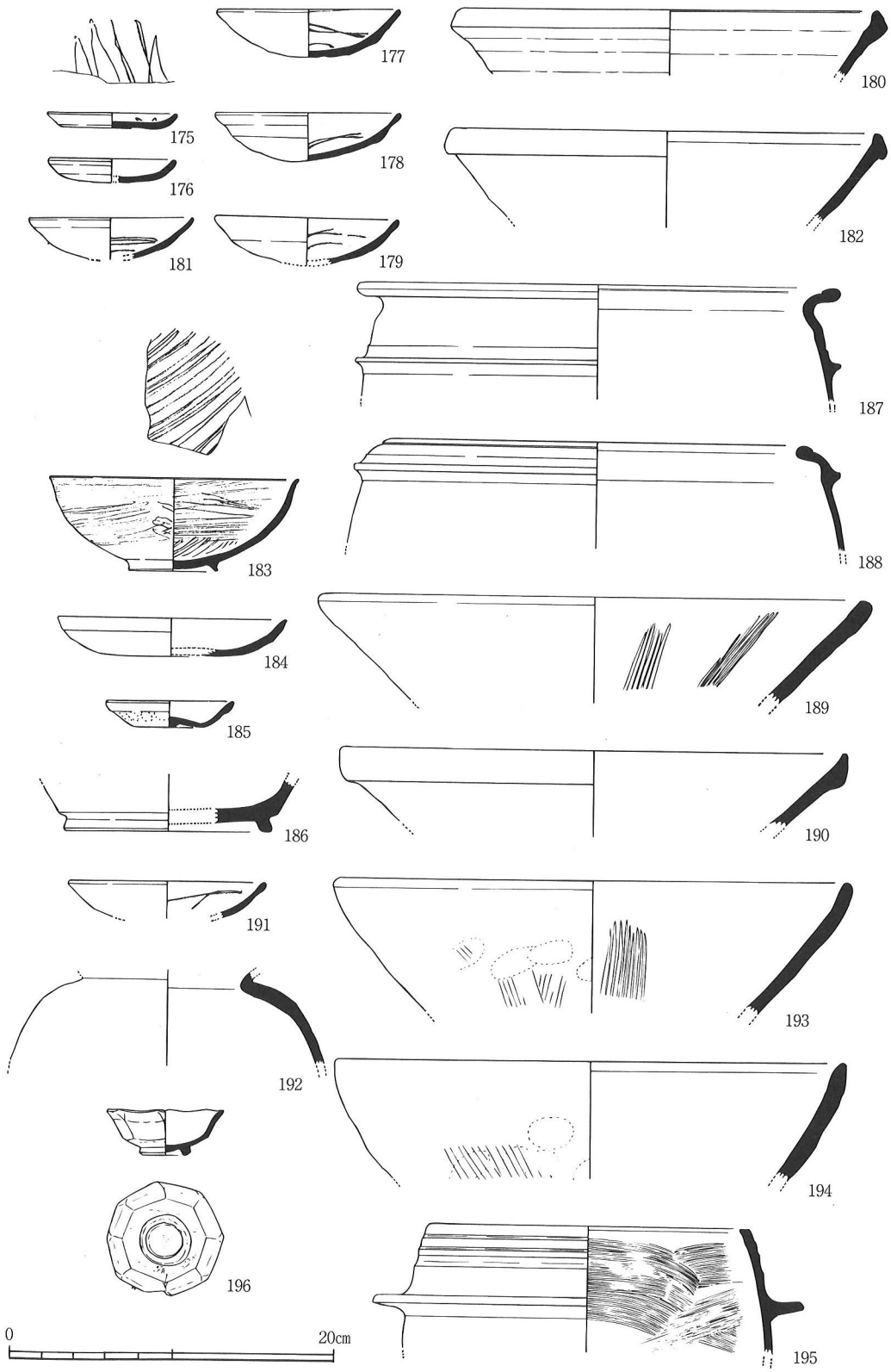
東播系練鉢1個体だけが図化できた。14世紀前半頃の所産と考えられる。

井戸8（第26図 183～190，図版26ｂ）

(183) は大和型瓦器椀。外面は分割ヘラミガキ，内面は密な圏線ミガキが施される。Ⅰ－C型



第25図　58－３区 井戸７・９・３・６ 出土土器 実測図（1／4）



第26図　58－3区 井戸5・10・4・2・8・1 出土土器 実測図（1／4）

式に相当する。これは井戸７のものの可能性もある。

(184) は土師質大皿。口縁部はゆるやかに内弯しながら立ち上がる。(185) は土師質小皿。口縁部のヨコナデの下端がやや肥厚している。(186) は陶器鉢と思われる。付け高台で，高台直近まで回転ヘラズリが施される。(187・188) は土師質羽釜。(187) は「く」字に外反する口縁部の端部を内側に折り返すもので，(188) は内弯する口縁部の外側に折り返すものである。ともに鍔は形骸化している。

(189・190) は瓦質すり鉢。(189) は大和地方に多く分布するもので，(190) は河内・和泉地方に多く分布するものである。14世紀中葉の埋没と考えられる。

井戸１（第26図 191～196，図版27ｂ・28ａ）

(191) は和泉型瓦器椀。口径 12.0 ㎝前後に復原される。(192) は瓦質壺。外面は細かい格子目タタキによって調整されている。

(193・194) は瓦質すり鉢。外面の下半に粗いハケメ調整が施されている。(195) は瓦質羽釜。やや内傾する口縁部の外面に３条の凹線が巡る。内面はハケ目調整，胴部外面はススが付着しているがヘラケズリが施されているようである。

(196) は口径７㎝，器高2.9㎝，底径2.7㎝をはかる白磁八角坏。釉調はやや黄味を帯び，細かい貫入がみられる。高台は露胎で，胎土に黒色微粒を含む。(194・195) は上層，他は下層からの出土である。下層は15世紀代，上層は16世紀代の埋没と考えられる。

土器群（第27・28図 197～213，図版28）

(197・198) は大和型瓦器椀。外面には規則的な分割ヘラミガキ，内面には密な圏線ミガキが施される。見込みにはジグザグ状暗紋が施されるが，(198) は２方向に重ねて格子状としている。ともにＩ－Ｃ型式に相当する。

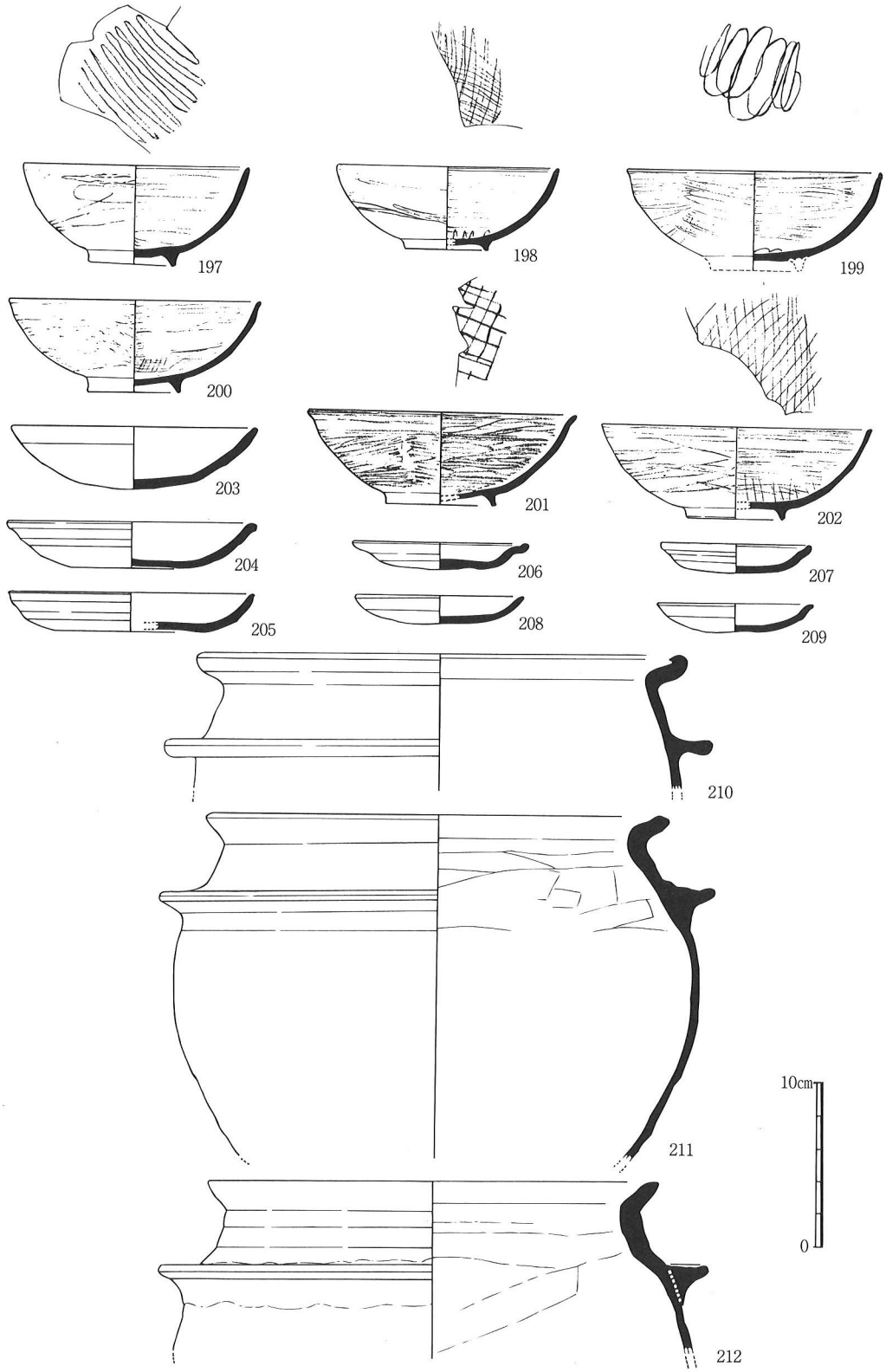
(199) は楠葉型。瓦器椀外面の分割ヘラミガキは間隔が空き，やや粗くなっておりＩ－３期に相当する。

(200～202) は和泉型瓦器椀。(200・201) の外面はヘラケズリの後，密なヘラミガキが施されるが，口縁部のヨコナデによって凹んだ部分にはヘラミガキが施されていない。Ｉ－２期に相当する。(202) は外面のヘラミガキの分割性がくずれ，内面のヘラミガキにもやや空白がみられる。Ｉ－３期に相当する。

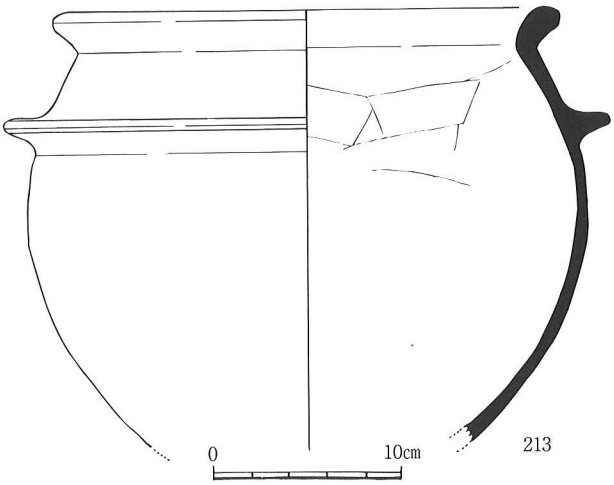
(203) は土師質坏。内面をハケ状の工具で軽く調整している。(204・205) は土師質大皿。口縁部は２回のヨコナデによって調整される。

(206～209) は土師質小皿。「て」字状口縁を呈するもの (206・207) と１回のヨコナデで端部を尖り気味におさめるもの (208・209) がある。

(210～213) は土師質羽釜。(210) は口縁端部を内側に折り返すもので，胴部内外面をナデ調整している。(211～213) は胴部内面にヨコ方向の板ナデが施される。黄橙色系の粗い胎土である。11世紀後半頃の時期が考えられる。



第27図　58－3区 土器群 出土土器 実測図（1／4）



第28図　58－３区 土器群 出土土器 実測図（1／4）

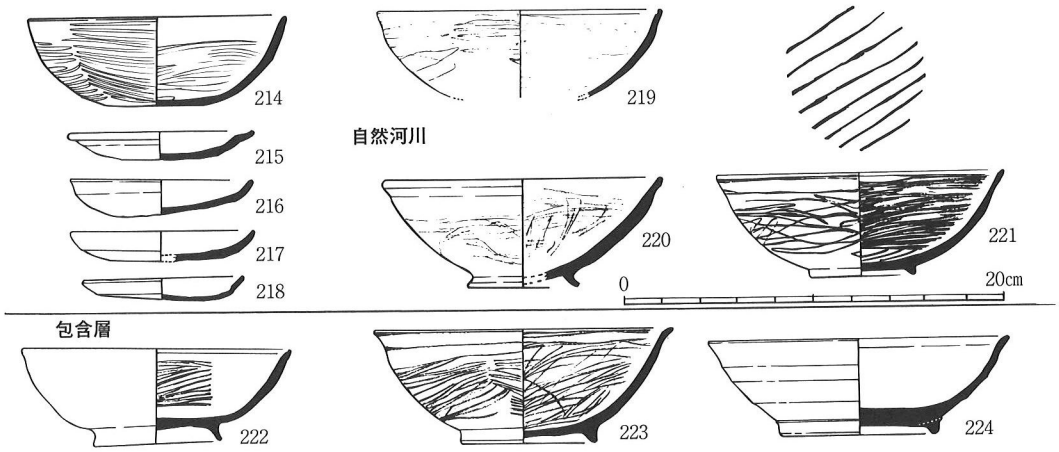
自然河川（第29図214～221，図版28）

自然河川からは大量の土器が出土しているが，時期的なまとまりもみられないため特徴的なものだけを示す。(214) は黒色土器Ｂ類椀。内外面ともていねいなヘラミガキが密に施される。外面は炭素が吸着せず暗褐色を呈する。(215～218) は土師質小皿。口径8.3～9.7cmを測る。(219) は大和型瓦器椀。Ⅱ－Ｂ形式に相当するものである。

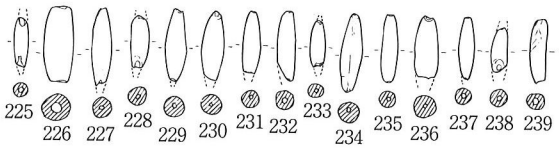
(220･221) は和泉型瓦器椀。(220) は直線的な体部を持ち，内面には乱方向のヘラミガキが施される。Ⅰ－１期にあたるものであろう。(221) は外面のヘラミガキの分割性が乱れ，粗くなっているが，内面は密なヘラミガキが施されている。Ⅰ－３期に相当する。

包含層（第29図 222～224，図版28）

(222) は黒色土器Ａ類椀。内面は密なヘラミガキを施し，外面は摩滅しているが，ヘラケズリが施されているようである。(223) は瓦器椀。ほぼ完形である。外面はヘラケズリの後，分割ヘラミガキが施され，内面は見込みから口縁に向かって放射状にヘラミガキが施されるが，ヘラミガキは粗く空白部が目立つ。瓦器出現直後のものと考えられる。(224) は山茶碗。付高台で底部外面に回転糸切痕が残る。



第29図　58－３区 自然河川・包含層 出土土器 実測図（1／4）



第30図　58－3区 土錘 実測図（1／4）

＜中世の土錘＞（第30図225～239）

調査区各所から15点の土錘（どすい）が出土した。(225) は自然河川土器群中（第8・9図）から出土した。(226～233) は自然河川から出土したもの。(226) は，他と比べて一回り太く大きい。以上は平安末期のもの。(234～238) は包含層から出土したもので，鎌倉～室町時代のもの。(239) は井戸3から出土したもので，鎌倉末～南北朝時代のもの。以上はすべて，1匁錘である。胎土も赤橙色を呈するものばかりで，摂津地方の産である。

＜中世の木製品＞（第31～33図240～267，図版29d）

58－3区からは，井戸や自然河川・包含層から木製品が約170点出土した。代表的なものを遺構ごとに以下略述する。

井戸7（第31図240，図版29b）

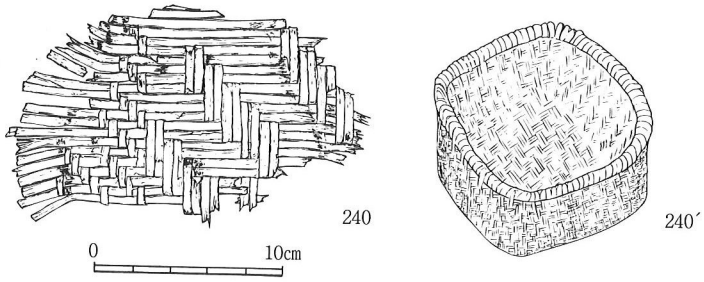
籠（240）　坑底から，籠の底の部分が上向きで出土した（図版6a）。残存長は12cm，幅19cm。網代編みの底の部分の破片である。復原すると第31図240′のようになるのであろうか。

井戸9（第32図241，図版29a）

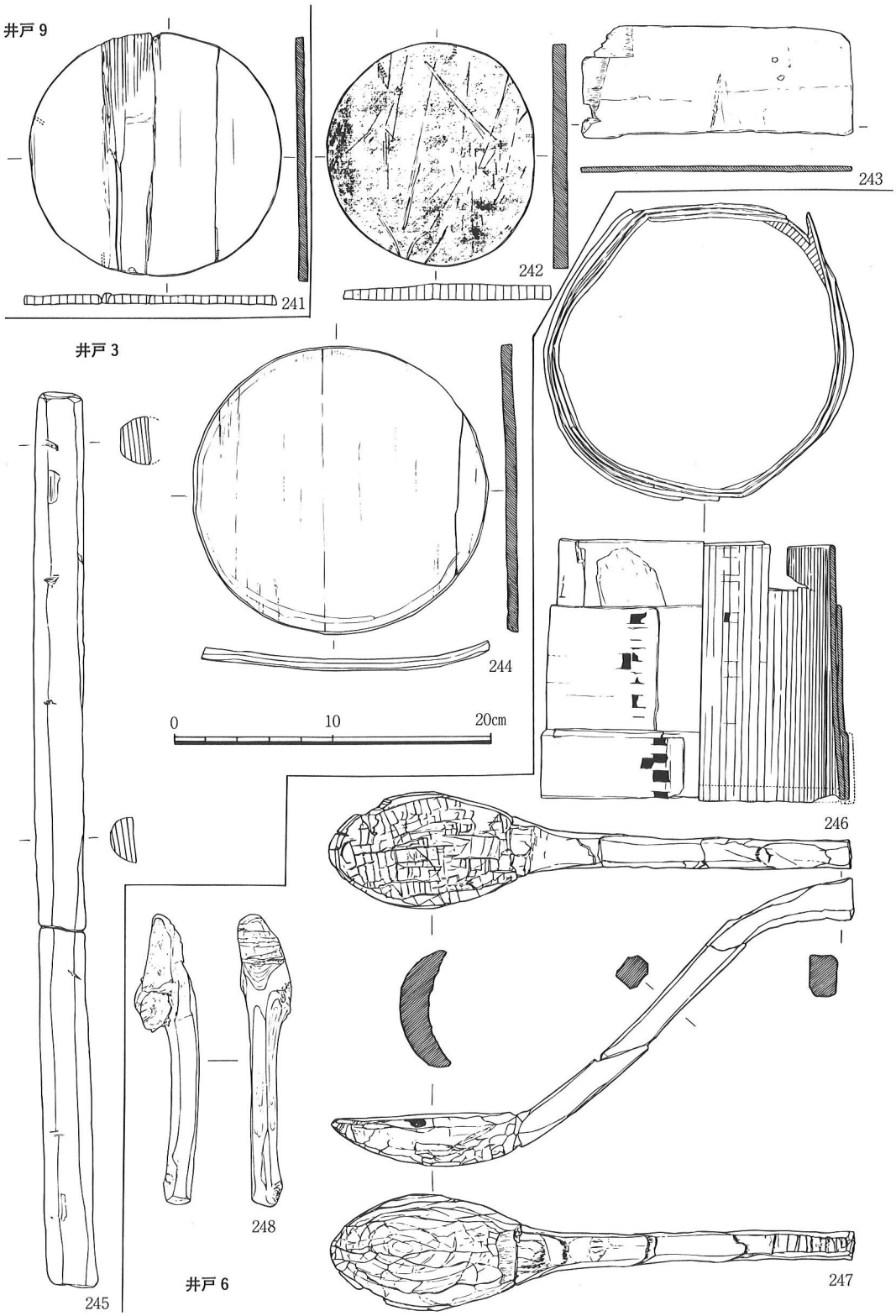
曲物底板（241）　直径は最大で15.4cm，平均で15.1cm，厚さ0.5cm。表裏面共に美しく仕上げられ，側面も表面からほぼ垂直に落とされている。表面には黒漆が一部に残る。

井戸3（第32図242～245，図版31b・32a）

下層から，曲物底版3点が出土している（図版4a）。方形が1点，円形が2点である。(243) は半欠の方形曲物底版で長さ17.2cm，厚さ0.3cm，残存幅7.0cm。径0.4cmの円孔が2つならんであけられている。(242・244) は共に完形の円形曲物底版である。(244) は直径18.1cm，厚さ0.7cm。表面は美しく仕上げられ，円周より約1cm内側に円形の段が残る。裏面には同一方向の刃物傷がついている。木釘穴はない。(242) は直径14.1cm～13.0cm，厚さ1.0cm～0.6cm。形状は，いびつな円形を示す。表裏面共，手斧でていねいに仕上げられ，表面には黒漆を施す。合計6ヶ



第31図　58－3区 井戸7出土かご 実測図（1／4），同復原案



第32図　58－３区 井戸９・３・６ 出土木製品 実測図（1／4）

所の木釘穴があるが，間隔はバラバラである。

柄（245）　残存長56.6cm，幅3.0cm。全体的に縦方向に割れており，断面は半月形となる。また長さも欠損のため不明である。一方の端部は丸く仕上げられている。柄として利用されたものと考えている。

井戸6（第32図246～248，図版30・31a）

円形桶（246）　下層から出土した（図版5c）。底版は残らず，側板のみ出土する。口径17.2cm，底板19.6cm，高さ16.5cm。側板は2重で，外側の側板の高さは12.2cm，内側との側板とは4.3cmの段差が生じるが，この段に蓋がはまったものと考えられる。外側の側板には内面のきざみ目はないが，内側の側板の内面には縦方向に平行のきざみ目が0.5cm幅にある。また2枚の側板のすきまを埋めるため，何枚かの薄板をはさんでいたようで，1枚のみ残存する。内側の側板は桜板で一列にとじ，外側も同じく桜皮で二列にとじる。

また下部には，さらにまわしの側板がまわる。高さ4.4cm。底板は残らず，木釘穴も存在しないが，底板のへこみ具合から考えて，クレゾコに止めていたと思われる。用途は，飯びつであることが推定される。

杓子（しゃくし）（247）　長さ33.0cm，最大幅7.3cm，柄部幅2.0cm，同厚さ1.6cm。主体部内面は，大ざっぱにえぐった後，幅1cm程度のノミで整形する。外面の調整は，内面より幅の広い工具を用いている。柄部は，断面長方形にした後に，角をとっている。

用途不明木製品（248）　長さ18.2cm。枝の部分は3面取りし，1面は樹皮を取り去る程度の加工にとどまる。幹は最低8回ぐらいたたいて切っている。

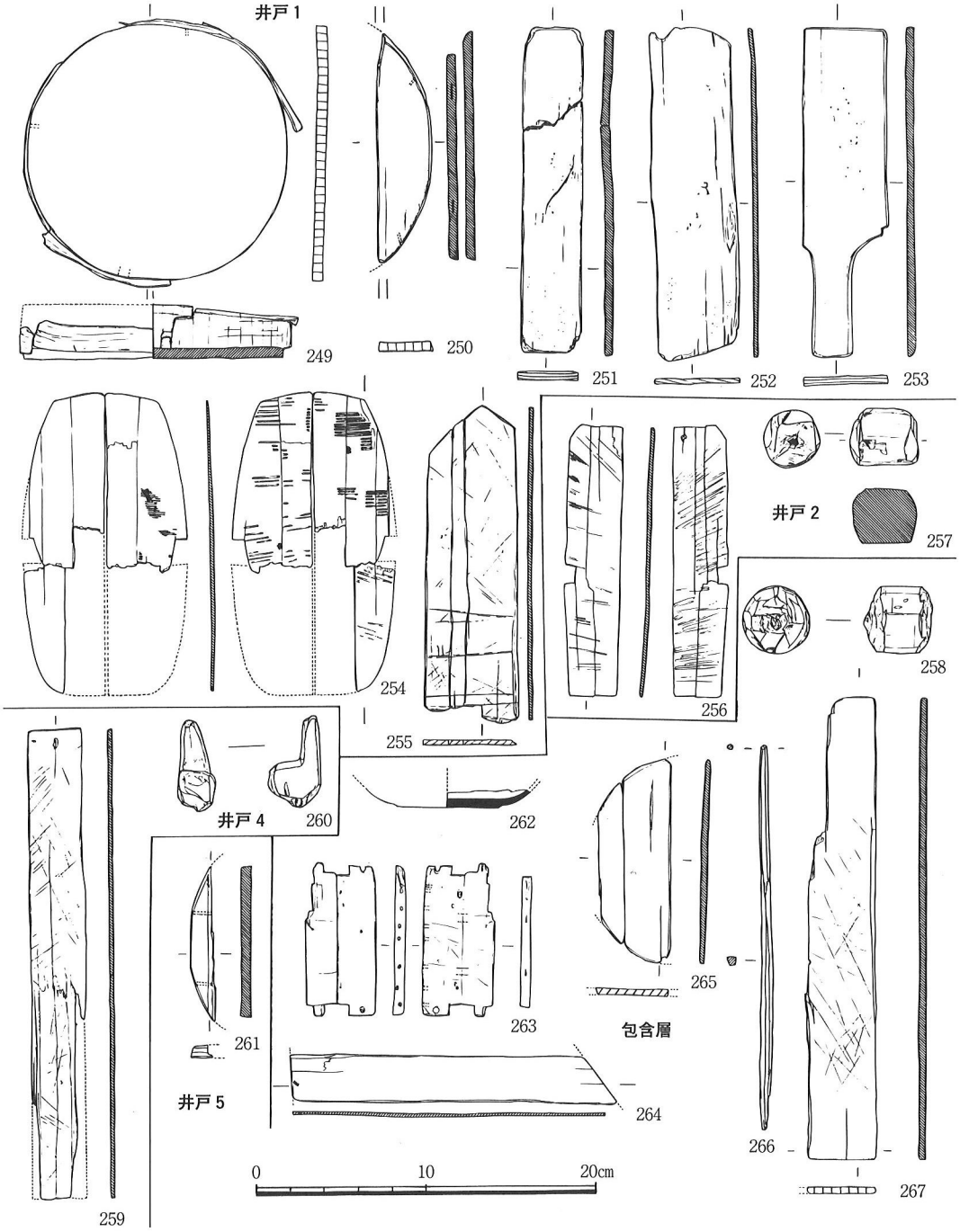
井戸1（第33図249～255，図版32b・32c・33a）

円形曲物　2点（249・250）出土している。（249）は，底板及び側板の一部が残るが，側板の残り具合が悪く，復原は困難である。底板は，直径15.1cm，厚さ0.6cm。側面には4ヵ所木釘穴がある。側板内面には浅く切り込みを入れる。また（250）は，底板の1／6程度が出土した。復原直径18.6cm，厚さ0.6cm。断面は人工的なもので2ヶ所長細い穴（長さ1cm）が掘られている。他の板と両釘で結合されていたと思われる。表面には黒漆が一面に施されている。

板状木製品　3点（251・252・255）出土している。（251）は長さ19.0cm，残存幅3.6cm，厚さ0.5cmで，方形曲物桶の可能性がある。（252）は長さ19.7cm，残存幅4.9cmで，厚さ0.3cmと薄い板である。墨書をしてある様だが，判読不可能。裏面には刃物傷が無数に入る。（255）は長さ19.3cm，幅5.5cm，厚さ0.3cm。（252）と同材の可能性がある。

羽子板（はごいた）状木製品（253）　一方が割れているが，製作時には左右対称であったと思われる。長さ19.3cm，残存最大幅4.9cm。もし左右対称であったとすると，復原幅6.4cmとなる。両面ともに釘で突いたような穴が多数残る。

草履（ぞうり）（254）　恐らく1枚の板を引きはいで作った2枚の板からなるが，うち1／2強が残存している。全体として小判形を呈し，中心部外側に，1.5cm×0.8cmの切り込みがある。一般にみら



第33図　58－３区 井戸１・２・４・５，包含層 出土木製品 実測図（1／4）

れる先端部内側の２個の円孔は見られない。欠損した側にあいていたものと考えられる。長さ17.5cm，幅9.5cm，厚さ0.2cm。両面とも藁圧痕・灰化した藁の付着がみられる。

井戸2（第33図256・257，図版33b）

草履の芯板が半分（1枚）だけ出土した。形状は，長さ15.8cm，幅3.6cm，厚さ0.2cmの長方形で，中央部がややふくらみをもち，円孔のある側の外側の先端がけずられている。また中央部よりやや後ろよりのところに，0.9cm×0.6cmの切り込みがある。表裏とも藁圧痕が残るが，中央部から後方部にかけては，中心軸に対してほぼ垂直の圧痕が残るのに対し，前方部ではその角度を大きくしている。(257) は木球。

井戸4（第33図259・260，図版33b）

板状木製品（259）　長さ27.5cm，幅3.3cm，厚さ0.3cmの薄板で，一方の端部に長さ0.5cm，幅0.1cmの長円形の孔がある。また表面には，刃物傷が乱方向無数についている。

用途不明木製品（260）　木の枝部を利用した用途不明の木製品。何かの木製品か。長さ5.4cm，幅3.2cm，厚さ2.2cm。

井戸5（第33図261）

井戸5の底部より，曲物底板1点（261）が出土している。残存長9.0cm，幅1.2cm，厚さ0.6cm。木釘穴2ヶ所が残るが，いずれも長さ1.2cm以上ある。残存長が小さいため，直径の復原は不可能である。

包含層（第33図262～267，図版34a）

木球（258）　木の枝を切って，その両端を外から内に，2～3段にはつって成形する。長さ4.0cm，直径4.0cm。

漆器（262）　皿ないし椀と思われる底部が出土した。残存が少なく全体の復原はできない。底部6.0cm，底部の厚さ0.5cm，その他の部分の厚さ0.2cm。内面に朱色，外面に黒色の漆を施す。

用途不明木製品（263）　2片に分かれ，お互いを平たい木釘で結合する。はぼ長方形の形状を有するが，長辺の一方には8ヶ所の小孔をあけ，また両短辺は突起及び小孔をもち，ほぼ対称形をなす。

曲物底板　2点（264・265）出土した。(264) は小型の円形曲物で，1／2弱が残る。復原直径13.2cm，厚さ0.4cmで，その大きさから考えて柄杓の底板と考えられる。木釘穴等はない。(265) は長さ27.3cm，残存幅4.0cmの板で，方形曲物底板の一部と思われる。

箸（266）　長さ22.7cm，厚さ0.6cmで，断面は一定しないが，中心部は台形，端部は丸い。

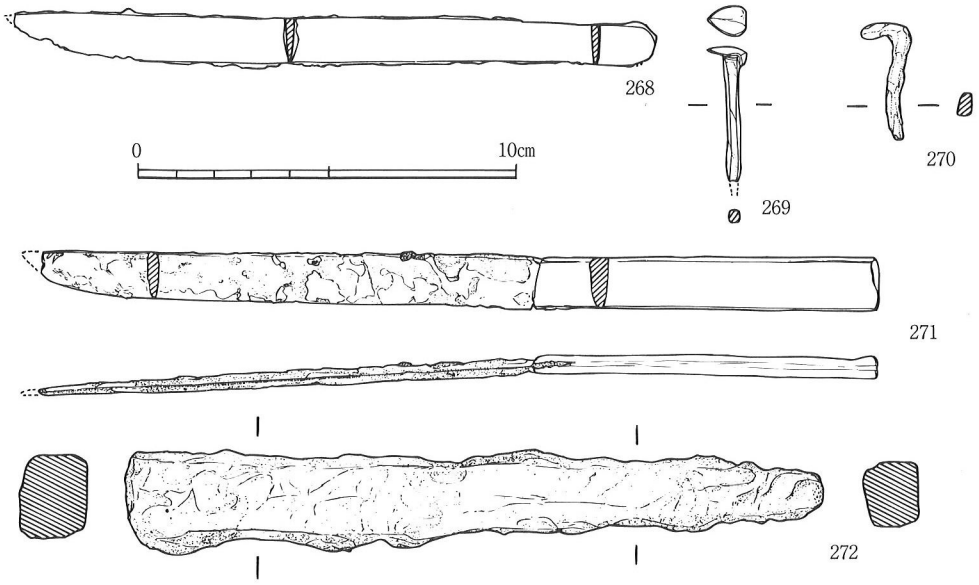
板状木製品（267）　長さ19.2cm，幅2.8cm，厚さ0.2cmの板であるが，端部に径0.1cm程度の小孔をあけ，桜皮を通している。逆の端部はななめに切断されている。

＜金属製品＞（第4図1・2，第34図268～272，図版34b）

58－3区から金属製品が7点出土している。

（1）は床土層から出土した元豊通寶。（2）は調査区中央部の包含層中より出土した皇朝十二銭（こうちょうじゅうにせん）の一つ長年大寶。

(268) は南北朝の井戸５出土の鉄製小刀。先端部を少し欠くが，ほぼ完形。刃部の長さ13.4cm，全長16.9cm。茎は長さ4.5cm。(269) は銅釘。南北朝の井戸４出土。頭部は別の板を接続したもので，ハート形である。残存長3.6cm，太さ0.3cm。蹄鉄を止めるための釘に酷似する。(270) は鉄製のかすがいの破片。自然河川の平安時代層から出土。残存長3.5cm，太さ0.6cm。全面にサビが付着している。(271) は南北朝～室町時代の井戸１出土の鉄製刀子。完形。全長22.5cm，そのうち13.6cmが刃部，茎部には銅板が巻つけてある。刃部最大幅1.4cm。(272) は中世包含層出土の鉄ノミ。長さ18.6cm，最大幅2.9cm。先端をやや尖らしている。石工用のノミか。



第34図　58－３区 金属製品 実測図（1／2）

第４節　小　結

本調査区（面積 312 m²）は，狭いわりに大量の遺物や遺構が検出され，残存状況もよかった。以下，主要点を列記する。

1．井戸10基を検出。すべて，素掘り，枠無しで，平安後期の井戸７，平安末期の井戸９，鎌倉末期の井戸10，鎌倉末～南北朝の井戸３・６，南北朝の井戸１・２・４・５・８に分けられる。鎌倉前・中・後期の井戸が検出されていない点，奇妙である。

2．井戸１からは，白磁八角坏・銅板把巻き刀子・赤間石製石硯，井戸４から頭部がハート形の銅釘，井戸６からは完形曲物桶，井戸７からはザル、井戸８からは白瓷系山茶碗等，珍しい遺物が多数出土した。

3．自然河川肩部の列石中から，巨大な石櫃の蓋や竜山石製地覆石等、普通の集落跡では使用されない遺物が出土し，近隣の法通寺跡との関係が伺えた。

4．平安～鎌倉時代の土壙墓が1基検出された。人骨の残存状況が良く，年令，性別，身長・体つきまで判明した点は貴重であった。それにしても，なぜ集団墓を形成せず，単独に男性が副葬品もなしで自然河川の岸辺に葬られたのか，疑問が残る。

5．平安～南北朝の柱穴群が検出されたので，集落跡の存在したことが判明し，西ノ辻遺跡の中世の集落構造の一端が伺えた点，貴重であった。

〔第Ⅲ章の註〕

（註1）和泉型瓦器椀については，尾上実「南河内の瓦器椀」（『藤沢一夫先生古稀記念古文化論叢』1983）の編年案に依った。

（註2）楠葉型瓦器椀については，橋本久和「中世土器研究予察」（『上枚遺跡発掘調査報告書』1980）の編年案に依った。

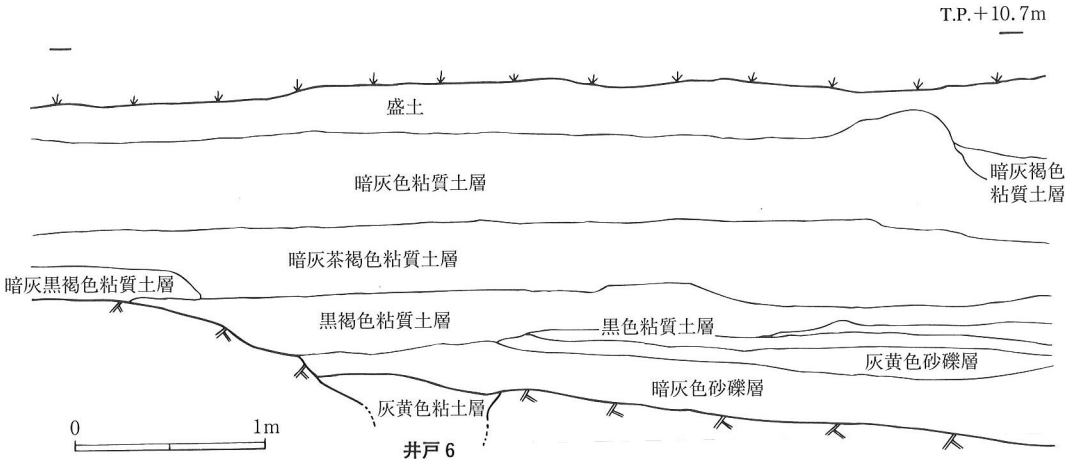
（註3）大和型瓦器椀については，川越俊一「大和地方出土の瓦器椀をめぐる二，三の問題（『奈良国立文化財研究所創立30周年記念　文化財論叢』1983）」の編年案に依った。

第Ⅳ章　58－5区の調査成果

第1節　層　位

本調査区の基本的な層序は次の通りである（第35図）。現地表面の標高はT．P．＋10.5mで，調査前までは建物が建っていた。

地表下20～50cmは，新盛土であった。その下に厚さ3～4cmの暗灰色粘質土層があり，よく肥えた土であったのと酸化鉄の沈着が認められたので，近・現代の耕土・床土層と思われた。その下に，厚さ20～80cmの暗灰色褐色粘質土があり，中世の土器細片等が含まれていた。遺物包含層である。この包含層は調査区全面に存在したが，調査区北半部では，この層を除去すると，すぐ柱穴・井戸・土坑等の遺構が現われた。調査区南半部では，この層を除去すると，東西方向に自然河川が検出された。この自然河川は，上層の厚さ50cm程の灰色礫層中に鎌倉時代後期の瓦器椀・羽釜・動物骨等を大量に含む。この層を除去すると，自然河川底に石列が現われた。石列は，自然河川西半部では東西方向に3列程断片的に並び，一部には南北方向の石列もあった。石列は自然河川西半部肩部に集中して検出されたから，護岸石列か洗濯場等の踏み石にでも使用されたのだろうか。自然河川中央部では，約10数個の石が南部1.1m東西1.5mの範囲に方形に集中していた。この石列を伴う自然河川をさらに50m程掘削すると，再び人頭大の石が幾つも散在的に検出され，同時に埋土である暗灰色砂礫層中から，平安後期の瓦器椀・羽釜等が動物骨と共に検出された。この層の下に，厚さ10～40cmの暗灰黄色細砂層が堆積し，除去すると東西方向の幅1～4m程の流路跡が検出された。摩滅した弥生中期の土器片等が出土した。調査区の南端部で東西方



第35図　58－5区 南壁中央部分 土層断面図（1／40）

向に検出された自然河川は，地表下約2.1ｍで硬い洪積層に当り地山面となる。自然河川の北肩を調査したことになる。

また，調査区南半部東寄り部は，表土・耕土・床土を除去すると，すぐ地山面であった。遺構もピットや溝が少数検出されたにすぎなかった。耕土中からキセルの雁首・サヌカイト製石錐が出土している。

なお，調査区南半部中央西寄りおよび調査区南半部北東端は，現代のかく乱を大きく蒙っており，調査区南半部東端では，大きな近・現代のため池を検出した（第36図）。

第２節　検出された遺構

第１項　中世の遺構

井戸

井戸１

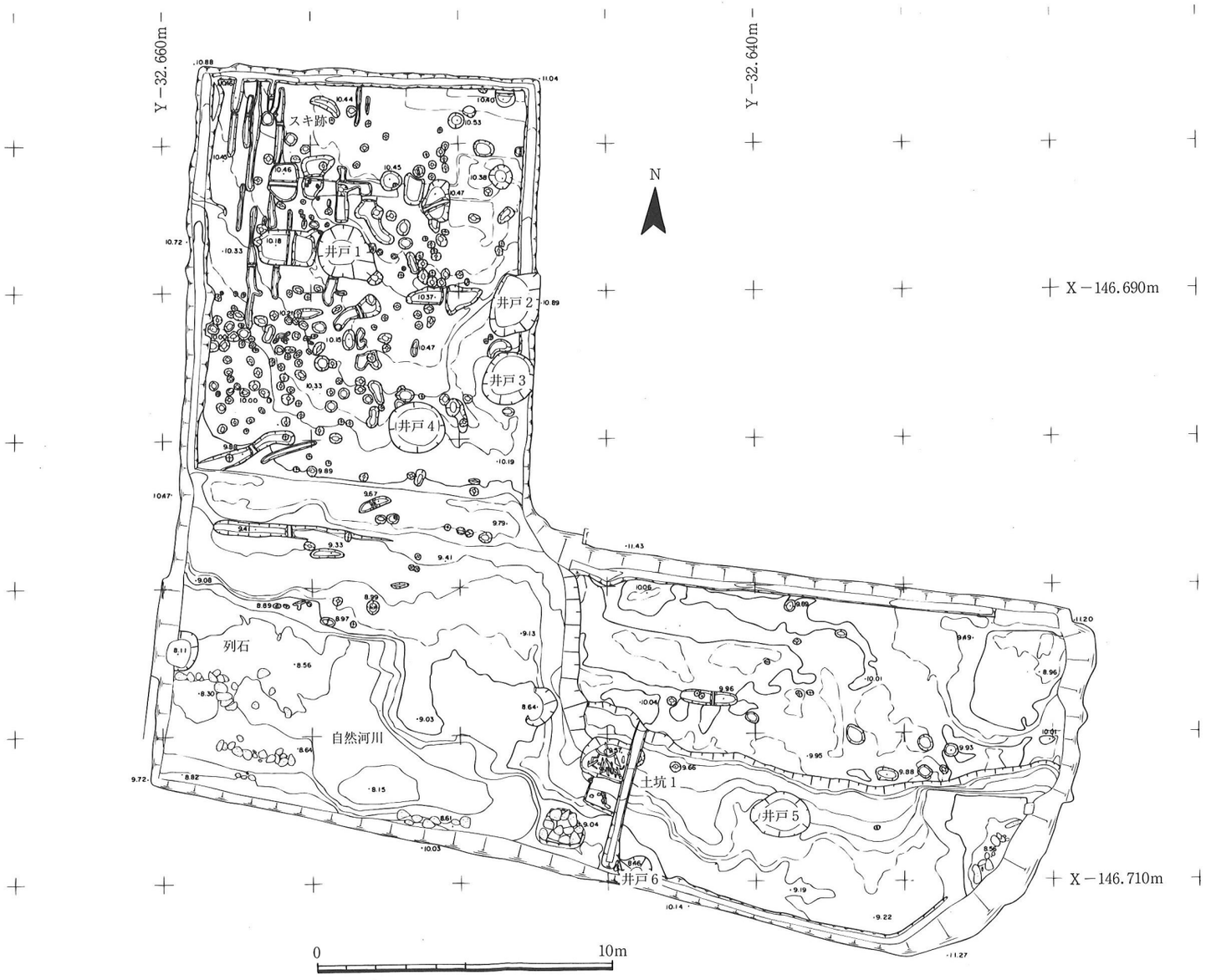
調査区北半部中央で検出された（第37図，図版36）。平面形は東西2.0ｍ，南北1.9ｍの隅丸方形で，南東隅が大きく外に伸びている。枠はなく，素掘りで，深さは4.7ｍ。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋8.69ｍ。埋土は，厚さ20㎝程の暗灰褐色粘質土層と炭混りの暗灰褐色粘質土層が落ち込むように堆積しており，その下に，厚さ60㎝の灰黄茶色粘土混りの暗灰褐色粘質土層が堆積していた。この層中には，瓦器椀や白磁碗片が含まれていた。この層を除去すると，井戸底南に拳大の石が約20個集中して検出された（図版36ａ）。踏み石にでも使用したのだろうか。立ち割りの際，瓦器椀や曲物桶２点が検出された（図版36ｃ）。井戸の年代は，鎌倉末期と推定された。

井戸２

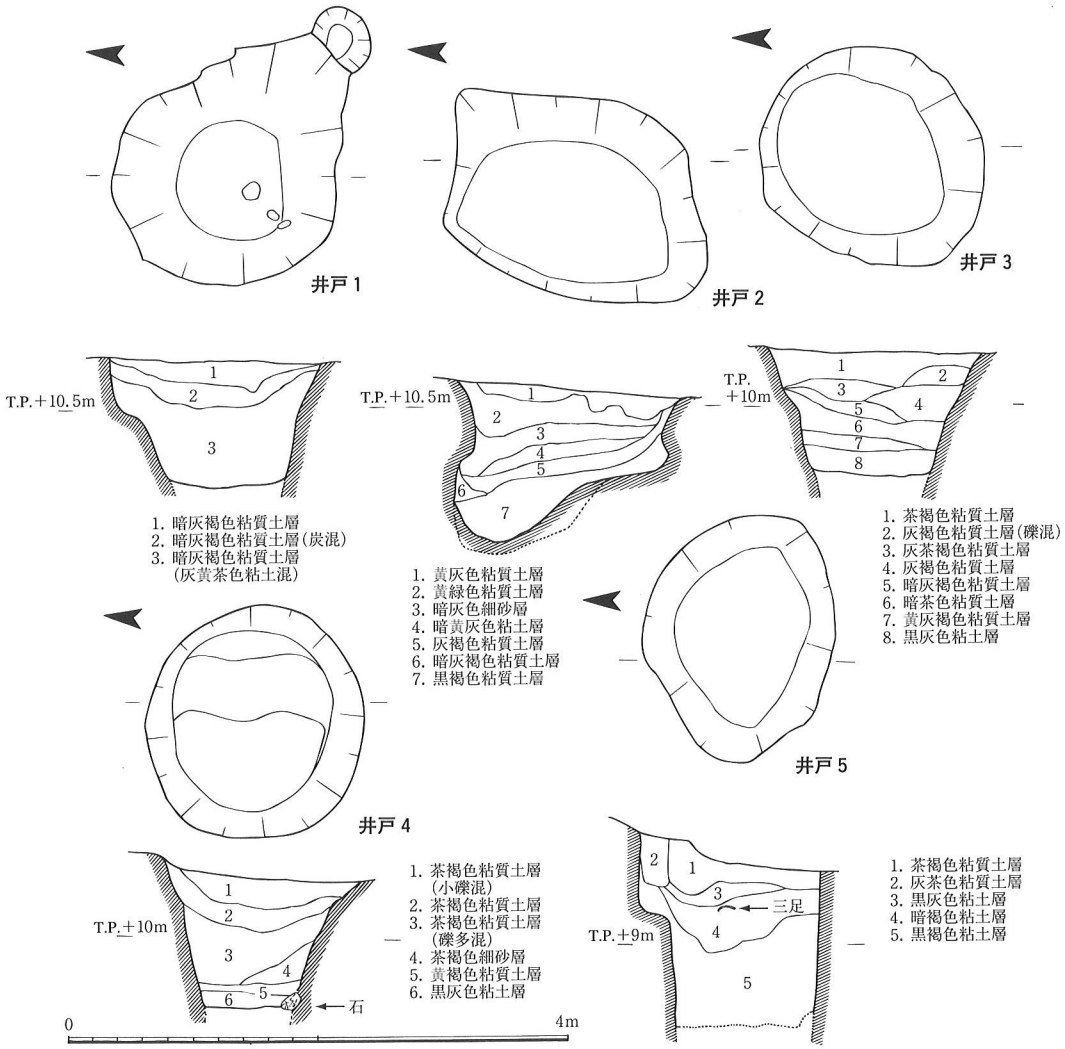
調査区北半部東端で検出された（第37図，図版37）。平面形は東西1.6ｍ，南北2.0ｍの楕円形で，南西隅が少し外に伸びている。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋6.21ｍ。枠はなく，素掘りで，深さは北側のみが斜めに深くなっているが，それでも1.2ｍと非常に浅い。埋土は，上層から下層まで厚さ10～45㎝の粘質土層や粘土層・細砂層が順番に堆積していた。断面で見る限り，井戸ざらえもしくは掘り直し等は認められなかった。埋土中から，瓦器椀，土師質皿・羽釜，瓦質三足，東播系練鉢，瓦等の破片が少量出土した。井戸の年代は鎌倉後期と推定された。

井戸３

調査区北半部東端，井戸２の南１ｍで検出された（第37図，図版38・39）。平面形は東西1.8ｍ，南北1.8ｍの楕円形である。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋5.83ｍ。枠はなく，素掘りで，深さは，3.0＋α。埋土は上層から１ｍまでは，厚さ10～30㎝の茶褐色や灰褐色・灰茶褐色・黒灰色の粘質土層・粘土層が順番に堆積していた。断面で見る限り，井戸ざらえもしくは掘り直し等は認められなかった。この埋土中から瓦質羽釜・火鉢，備前焼すり鉢等の破片が出土した。この埋土を除去すると，東側壁際を中心にドブ貝・オオタニシの貝殻が多量に出土した。同時に子亀



第36図　58－５区 遺構 平面図（1／200）



第37図　58－５区 井戸１～５ 平面・断面図（1／60）

やスッポンの親亀等も計４匹検出された（図版39）。誤って落ちたものだろう。この貝層より下には，暗灰色の粘土層が充満しているのみで，土器・曲物桶等も一切出土しなかった。井戸の年代は室町時代と推定される。

井戸４

調査区北半部南東寄りで検出された（第37図，図版40）。平面形は東西1.9ｍ，南北1.8ｍの円形である。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋6.13ｍ。枠はなく，素掘りで，深さは4.3ｍ。埋土は，上面から1.1ｍ下まで，茶褐色・黄褐色・黒灰色の礫混りあるいは小礫混りの粘質土層・細砂層・粘土層が順番に堆積しており，断面で見る限り，井戸ざらえ，もしくは掘り直し等は認められなかった。この埋土中から，亀や動物骨等と共に，土師質羽釜，備前焼すり鉢，常滑焼甕，瓦質火

鉢・すり鉢，瓦等の破片が多数出土した。この埋土層の下には暗灰色粘土層が充満していた。底近くからは，漆塗りの曲物桶が出土した。井戸の年代は室町時代と推定される。

井戸5

調査区南半部東寄り，自然河川の肩部で検出された（第37図，図版41・42）。平面形は東西2.0m，南北1.6mの楕円形である。坑底のレベルはT．P．+6.41m。枠はなく，素掘りで，深さは，1.6m＋α。埋土は，茶褐色・暗褐色・黒褐色の粘質土層・粘土層が順番に堆積していた。断面で見ると，北壁際に径23cm深さ42cmのピットが掘られていることが分かる。後世のものかも知れない。検出面下50cmで小形の瓦質三足や大形の瓦質三足の大破片が幾つも検出された（図版42a）。植物遺体を大量に含んだ層中にあったので，壊れた三足を井戸が埋まってじめじめした土坑になっている中に次々と投棄したものと推定された。三足を取り上げると，下から漆器椀がバラバラになって出土した。この漆器椀は，内外面に黒漆を塗り，その上に朱漆で丸に十字を描いた美しいものであった。この漆器椀の下に，短刀の鉄の部分のみが2片に分かれて出土した（図版42b）。短刀の横からは，ヒョウタンが押しつぶされた状況で出土した（図版41c）。ヒョウタンより下層には，黒灰色の粘土層が堆積していて，底近くから曲物桶が出土した（図版42c）。井戸の年代は鎌倉後期と推定される。

井戸6

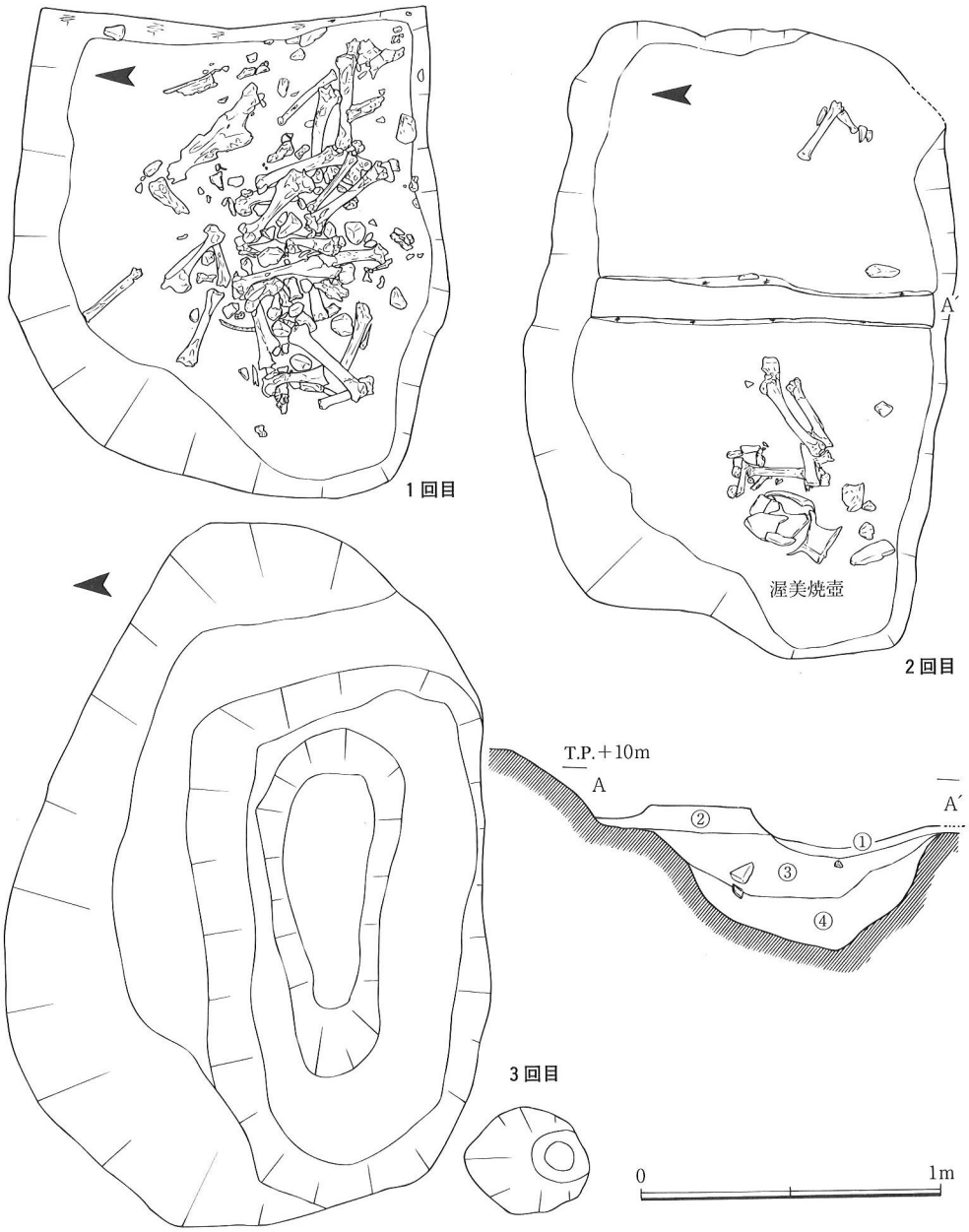
調査区南端部中央で，北半部のみが検出された（第36図）。平面形は東西1.1m以上，南北0.8m以上。枠はなく，素掘りと思われ，深さは，0.8m以上。埋土は，黒灰色の粘土層が詰っていて，土師質小皿・羽釜，瓦等の細片および用途不明木製品が出土した。自然河川の堆積状況からすると，この井戸は平安後期の自然河川堆積層の下面から掘り込みが行なわれているから，年代も自づとそれ以前のものになる。

土坑

土坑1

調査区南半部中央，自然河川の肩から少し下がった所で検出された（第38図，図版43・44）。平面形は東西2.4m，南北1.6mの楕円形。深さは75cm。底は3段に落ち込んでゆき，舟底状を呈していた。

埋土は，上層の炭混りの灰褐色粘質土層と下層の砂礫を含む黄褐色粘質土層の2層に分かれる。上層中には，馬の足の骨を中心に馬の頭の骨や鹿の骨等多数が投棄されていた。骨がばらばらに集積されていたので，死んだ馬や鹿をそのまま埋納したものではなかった。骨の間には拳大の石や瓦器椀，土師質小皿等の細片も散在していた。骨を除去すると，渥美焼広口壺が口を北東に向けて横倒しの状態で検出された。接合すると，ほぼ完形品になったので，骨を土坑に入れる際，お供え等の目的のため，納められたものだろうか。下層は無遺物で，骨も出土しなかった。土坑の年代は，出土土器から鎌倉時代後期と推定される。



第38図　58－５区 土坑１ 平面・断面図（1／25）

柱穴群

調査区北半部で検出された（図版46ｃ）。約220個あり，円形で径30～40cm，深さ20～30cmのものが多かった。柱根の残存しているものはなかった。埋土中に瓦器椀，土師質小皿等の細片が含まれているものがあり，鎌倉時代のもと推定される。うまく掘立柱建物跡が復原できるものはなかった。

第39図　58－5区 自然河川 平面図（左），列石平面図（右）（1／80）

第２項　弥生時代～中世の遺構

自然河川

調査区南半部で検出された（第39図，図版45・46）。東端に比べ西半部の方がより深くなっていたので，東から西に向かって流れていたものと推定される。調査区内では，この自然河川の北肩のみが検出された様子で相当大きな幅20～30mもある大河川と推定される。

河川内堆積層は，大別３層に分かれる。上層の灰色礫層中には鎌倉後期の土器や動物骨が大量に含まれている。中層の暗灰色砂礫層中には，平安後期の土器や動物骨が含まれている。下層の暗灰黄色細砂層中には，弥生時代中期の土器が含まれている。以上の３層は，いずれの時期も，前代と直接時間的に続くものではない訳で，相当河川による削平等の影響を受けているものと推定できる。

第３節　検出された遺物

第１項　弥生時代以前の遺物

＜弥生時代以前の石器＞（第40図273～281，図版48，第４表）

縄紋時代の石器は削器が２点（273・274）で、風化が著しい。弥生時代の石器（275～279・281）は58－３区で検出された自然河川と同一の河川中から出土したもので，伴出した土器はⅢ様式で，いずれも全面が水流によって滑らかになっている。（280）は中～近世の包含層より出土した。

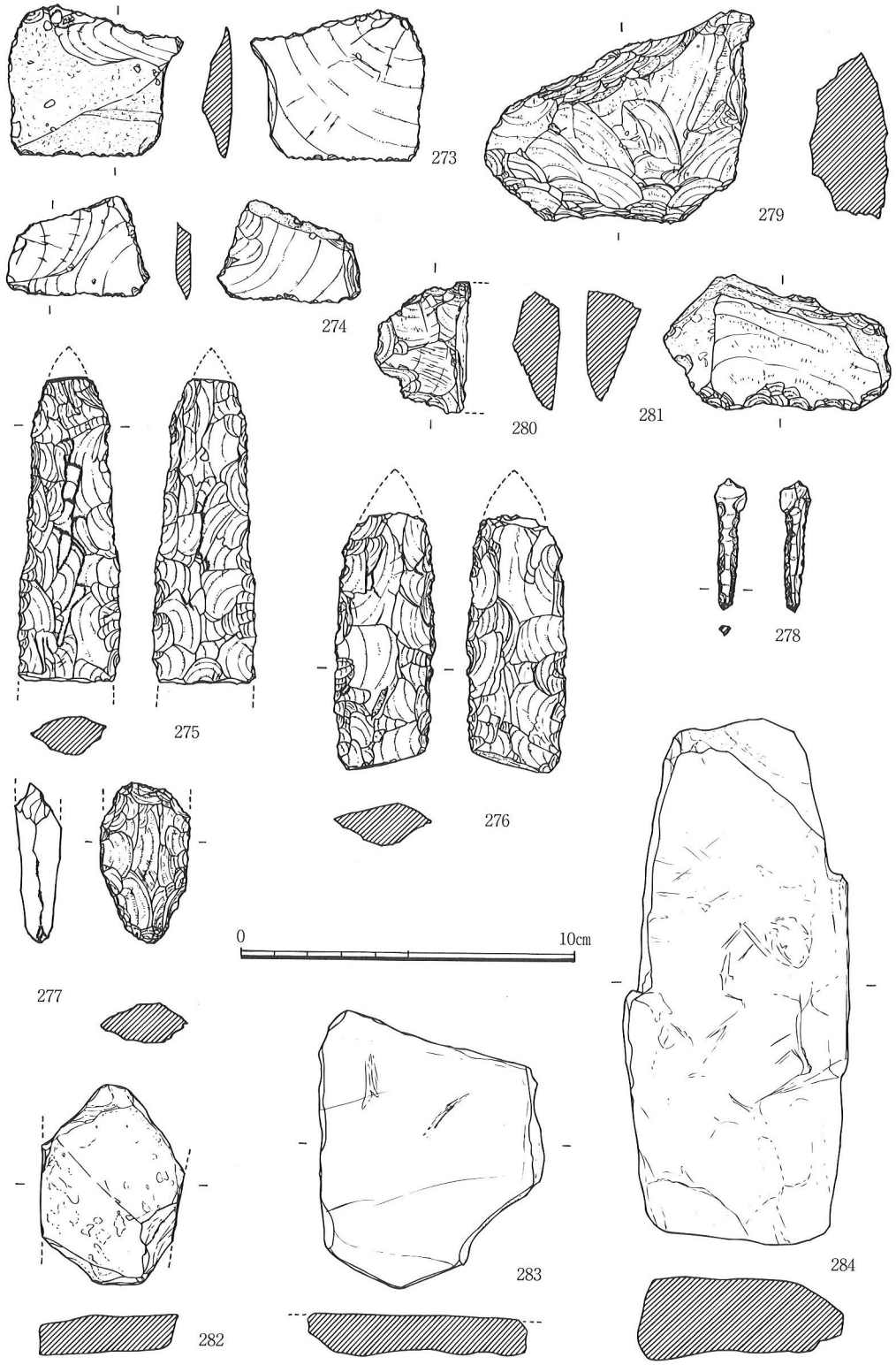
第２項　古代～中世の遺物

＜中世の石製品＞（第40図282～284，図版48，第４表）

中世の石製品は，砥石が３点出土している。

第４表　58－５区 出土石器・石製品 観察表

遺物番号	名　称	石　材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考	出土地区・層位
第40図273	削器	灰色サヌカイト	4.5	5.3	0.9	23.6	背部に表皮残存。縄紋時代。	自然河川砂礫層中
第40図274	削器	暗灰色サヌカイト	3.0	4.4	0.6	7.9	背部に表皮残存。縄紋時代。	自然河川砂礫層底
第40図275	石槍	黒色サヌカイト	9.2	3.1	1.5	47.4	表裏とも体部に磨きを施す。	自然河川配石遺構下
第40図276	石槍	黒灰色サヌカイト	7.7	3.0	1.3	37.0	表面体部に磨きを施す。	自然河川配石遺構下
第40図277	石槍	暗灰黒色サヌカイト	4.8	2.7	1.2	16.6	基部側縁突出部磨滅。	自然河川配石遺構下
第40図278	石錐	黒灰色サヌカイト	4.0	1.0	0.4	10.0	左側縁片面、右側縁両面加工施す。	自然河川中央部肩
第40図279	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	6.4	8.1	2.4	130.6	全面調整。刃部は直線、片面加工。	自然河川配石遺構下
第40図280	不定形刃器	暗灰黒色サヌカイト	4.0	2.8	1.3	13.5	背部に表皮をもつ。爪形石。	床土
第40図281	不定形刃器	黒灰色サヌカイト	4.1	6.8	1.8	46.2	背部に表皮をもつ。断面三角形。	自然河川配石遺構下
第40図282	砥石	淡黄灰色粘板岩	9.0	4.3	0.9	36.2	三面使用。	井戸２
第40図283	砥石	青灰色砂岩	8.3	6.6	1.2	99.3	一面使用。	井戸４下層
第40図284	砥石	青灰色砂岩	15.8	6.8	2.4	467.0	一面使用。砥石面に多数の傷残存。	井戸４下層



第40図　58－5区 石器・石製品 実測図（1／2）

＜古代～中世の土器＞

井戸２（第41図285～289・314，図版49）

（285・286）は和泉型瓦器椀。（285）の高台は完全には一周せず，途切れている。（285・286）ともに内面に渦巻状のヘラミガキが施されるのみである。Ⅳ－２期に相当する。

（287・288）は土師質小皿。（287）はヨコナデの下端が外方に肥厚している。（289）は東播系練鉢。口縁端部は小さな玉縁状を呈する。（314）は瓦質三足。口径1.7㎝を測るミニチュアで，用途は不明。口縁部から鍔部にかけてヨコナデ調整が施される。

（285～287）は下層，（288・289・314）は上層からの出土で，14世紀前葉～中葉頃の時期が考えられる。

井戸５（第41図290～302，図版49）

（290～293）は和泉型瓦器椀。形骸化した高台を持つもの（290～292）と高台を持たないもの（293）があり，Ⅳ－２期からⅣ－３期に相当する。（290）は口径12.3㎝，器高3.2㎝，（291）は口径11.7㎝，器高3.0㎝，（292）は口径12.5㎝，器高2.7㎝をはかる。（293）は口径12.6㎝，器高2.7㎝をはかる。

（294～299）は土師質小皿。口径8.0～8.4㎝を測る。（300・301）は瓦質三足。内面はヨコ方面の細かいハケ目調整を施す。外面の鍔部以下はほぼ全面にススが厚く付着している。（302）は口禿げの白磁皿。釉調は，ややみ青味を帯びている。14世紀前葉頃の理没と考えられる。

井戸１（第41図303～307，図版49）

（303）は和泉型瓦器椀で，井戸の断ち割りの際に出土した（図版36ｃ）。口径10.4㎝，器高2.8㎝をはかる。内面に細いヘラミガキが施され，Ⅳ－４期にあたる。

（304）は土師質大皿。立ち上がり部が大きく屈曲している。（305～307）は土師質小皿。口径7.1～8.0㎝をはかる。（307）以外はいずれも下層から出土した。鎌倉末期の理没と考えられる。

井戸４（第41図308～311，図版49・50ａ）

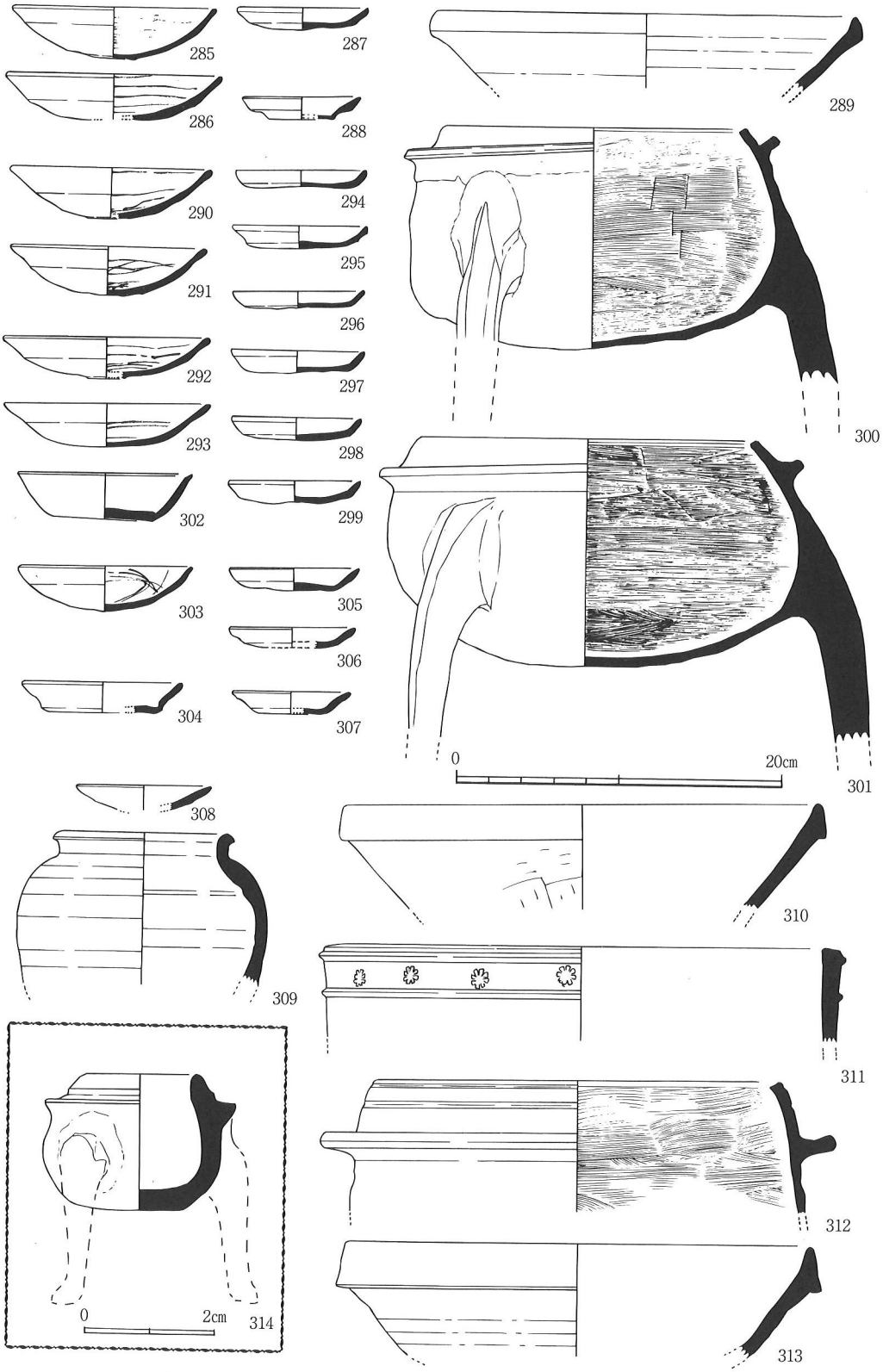
（308）は土師質小皿。金雲母を多く含む粗い胎土である。（309）は備前焼小壺。暗褐色～赤褐色を呈する。（310）は瓦質すり鉢。体部外面はヘラケズリが施される。（311）は瓦質火鉢。外面に２条の突帯があり，突帯間に８弁の花紋がスタンプされている。（309～311）は下層から出土した。15世紀代の理没と考えられる。

井戸３（第41図312・313，図版50ａ）

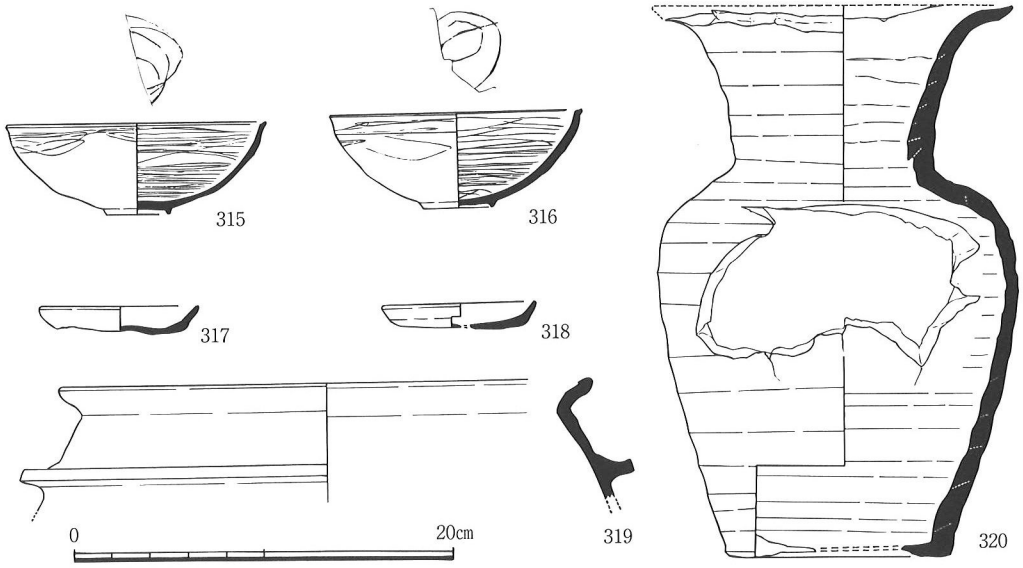
（312）は瓦質羽釜。やや内傾する口縁部の外面に２条の凹線が廻る。胴部外面は指おさえ，内面は，ヨコ方面のハケ目調整が施される。（313）は備前焼すり鉢。色調は暗赤紫色を呈する。15世紀代の埋没と考えられる。

土坑１（第42図315～320，図版50ｂ）

（315・316）は大和型瓦器椀。内面は粗い圏線ミガキ。外面はヨコ方向にジグザグのヘラミガキが施される。（315）は口径13.6㎝，器高4.8㎝，底径3.2㎝，（316）は口径13.4㎝，器高5.0㎝，



第41図　58－５区 井戸１～５ 出土土器実測図（1／4）



第42図　58－５区 土坑１ 出土土器実測図（1／4）

底径3.7cmをはかる。Ⅲ－Ｂ型式に相当する。

（317・318）は土師質小皿。口径8.2～8.4cm，器高1.3cmをはかる。（318）の底部中央付近には４×５mmの円孔が焼成後に穿たれている。（319）は土師質羽釜で，口径28.2cmをはかる。口縁端部を短く内側に折り返している。

（320）は渥美焼広口壺。口縁部・胴部・底部を意識的に打ち欠いている。土坑１から大量に出土した獣骨に対する供献のための打ち欠きであると考えられる。13世紀中葉の時期が考えられるが，（320）はやや遡る時期の所産であろう。

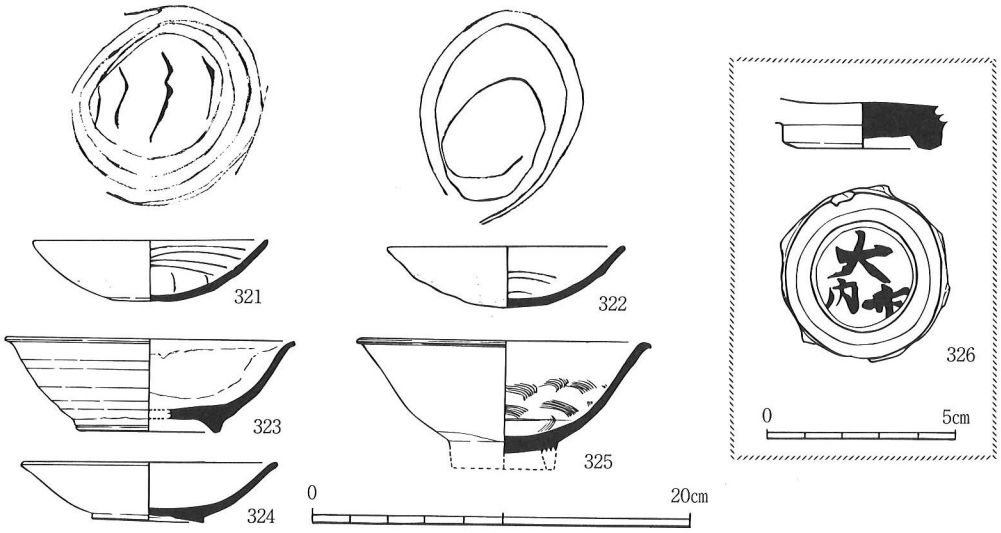
自然河川（第43図321～326，図版51ａ）

自然河川からは大量の土器が出土しているが、時期的なまとまりもみられないため特徴的なものだけを示す。

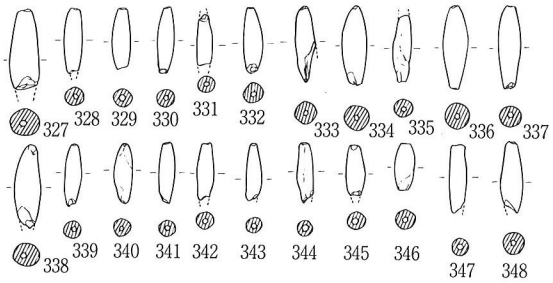
（321・322）は和泉型瓦器椀。ともに完形で口径 12.6 cmを測る。高台は伴わない。（321）は見込みに３条の平行線状暗紋を施すが、（322）は渦巻状の暗紋を施すのみである。

（323）は山茶碗。付高台で，底部外面に回転糸切り痕を残す。（324）は緑釉陶器坏。口径13.5cm，器高3.1cm，底径5.7cmをはかる。高台は蛇の目高台で，内外面の全面に黄緑色～暗緑色の釉を施す。素地は軟質である。

（325）は白磁椀。口径15cmをはかり，口縁端部は外反し尖り気味におさめる。内面に７条単位の櫛描紋が施される。内面全体と外面の高台部付近までやや黄味を帯びた釉がかかっている。（326）は白磁椀。内面は透明釉が施される。外面は露胎で、胎土に黒色微粒を含む。高台内に墨書がある。



第43図　58－５区 自然河川 出土土器 実測図（1／4，1／2）



第44図　58－５区 土錘 実測図（1／4）

＜中世の土錘＞

（第44図327～348，図版51ｂ）

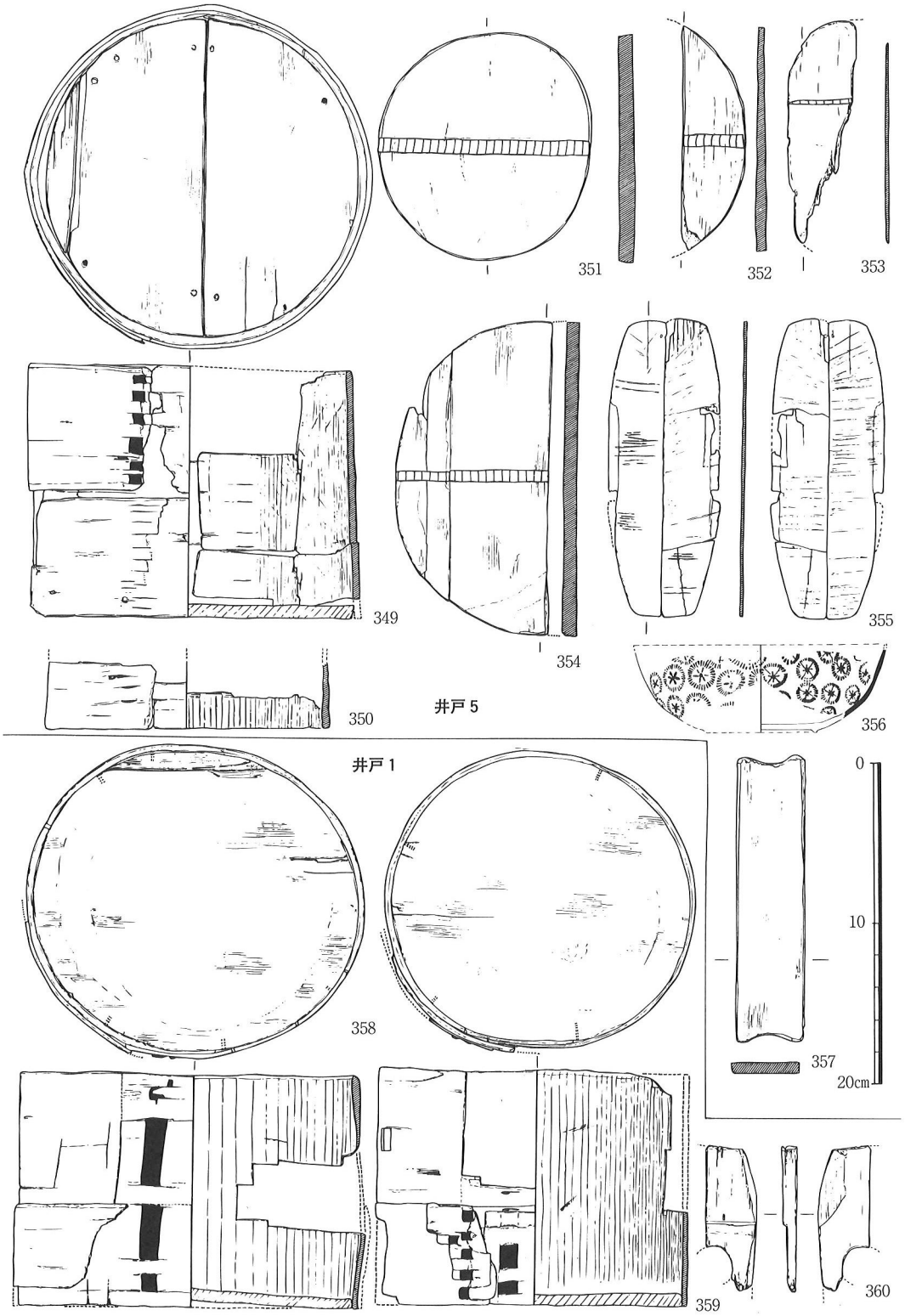
調査区各所から22点の土錘が出土した。（327～331）は，鎌倉後期の井戸５から出土したもの，（327）は２匁錘である。（332・333）は鎌倉末期の井戸1から出土したものである。（334・335）は室町時代の井戸３から出土したもの。（334）は２匁錘である。（336～348）は，平安末期から南北朝時代の自然河川中から出土したもの。（336～338）は，２匁錘である。（347）は，胎土が茶褐色で角閃石等を多量に含み，生駒西麓産。他はすべて胎土は赤橙色のものばかりで，摂津地方の産である。

＜中世の木製品＞

58－５区からは，井戸・包含層から木製品が約50点出土した。以下，代表的なもの遺構ごとに略述する。

井戸５（第45図349～357，図版52・53）

曲物桶（349～354）　６点が出土。（349）は完形の曲物。高さ 15.8 ㎝，底径 20.4 ㎝。底板は，２種の異なった材によって作られている。両者に穴をあけ，それをひもか桜皮などでとめ，固定したと考えられる。また側板は，内面に縦・斜め方向にきざみ目を入れている。側板の外に，上下２枚のまわしがまわる。底板は，まわしの外側から木釘で，平底にとめたものと思われる。最



第45図　58－５区 井戸５・１ 出土木製品 実測図（1／4）

下層から出土した（図版42ｃ）。(350) は曲物の側板ないしは，まわしであろう。かなり破損がはげしい。内面には縦方向のきざみ目が，3㎜間隔に施されている。復原直径17.8cm，残存高4.2cm。底板は4枚出土している。(352) は全体の1／4が残存。復原直径17.8cm，厚さ0.7cm。両面とも美しく仕上げられ，側面は垂直に落としてある。木釘穴などはない。(351) はややいびつな形状で，両面ともに黒漆を施してある。木釘穴はひとつもない。直径13.9cm～12.9cm，厚さ0.9cm。直径から考えて，柄杓の底板と考えられる。(354) は全体の1／2が残存。両面とも美しく仕上げられており，側面に木釘穴などはない。直径19.7cm，厚さ0.8cm。(353) は楕円形であり，全体の形状はよくわからない。木釘穴その他はない。残存長13.8cm，残存幅4.3cm。

草履（355）　長さ18.7cm，幅7.0cm，厚さ0.2cmである。ほぼ相似形の2枚の薄板をくみあわせたもので，草履の芯板と思われる。両方の板の先端の内側に穴をあけ，それを紐でとめたと考えられる。また板の両面には藁の圧痕がつく。

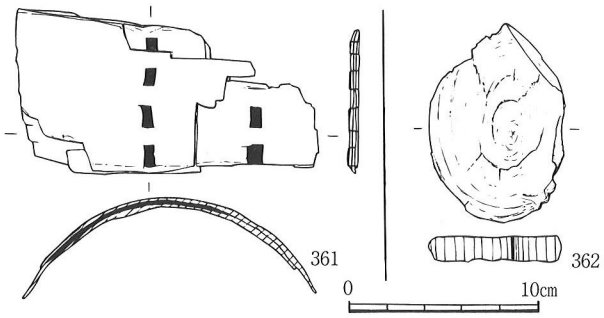
漆器椀（356）　漆器椀の一部が残存。残存長9.0cm，残存幅5.5cm，復原口径15.7cm，復原器高5.5cm。内外面ともに黒漆の地に，朱漆で矢車草状の紋様を型押ししている。

用途不明木製品（357）　長さ17.9cm，幅4.3cmの板状木製品であるが，両端の中心部を削っている。糸巻きとして利用された可能性がある。

井戸1（第45図358～360，図版53ｂ・54ａ）

曲物桶（358・359）　2点が出土している。(358) は完形曲物であるが，側版・まわしがバラバラになっていて，復原が難しい。底板は，ほぼ正しい円であり，円周の内側約2cmのところに，ぶんまわしで引いた様な線が入り，そこにやや段差がある。側板は，高さ14.6cm，厚さ0.4cm。内側に0.7～0.4cm間隔で，縦方向のきざみ目が入る。とじの桜皮は，幅1.4cmと大変広く，山も長い。まわしは1枚で，側板の下部にまわる。底径21.7cm。

(359) も完形曲物。底径19.3cm，高さ14.9cm。底板はほぼ円形であるが，側板の合わせ目のところだけ少し削る。側板とは5ヶ所の木釘で平底にとめる。側板は厚さ0.3cm，内面には0.5cm間隔で縦方向にきざみ目が入る。とじ皮は，幅1.2cmで広い。まわしは一部が残るだけであるが，側板よりも細いとじ皮でとめる。



第46図　58－5区 井戸4・6 出土木製品 実測図（1／4）

下駄（360）　残高長9.0cm，残高幅3.3cm。後穴らしきものの一部が残るが，破損が大きく，全体の復原はできない。

井戸4（第46図361，図版54ｂ）

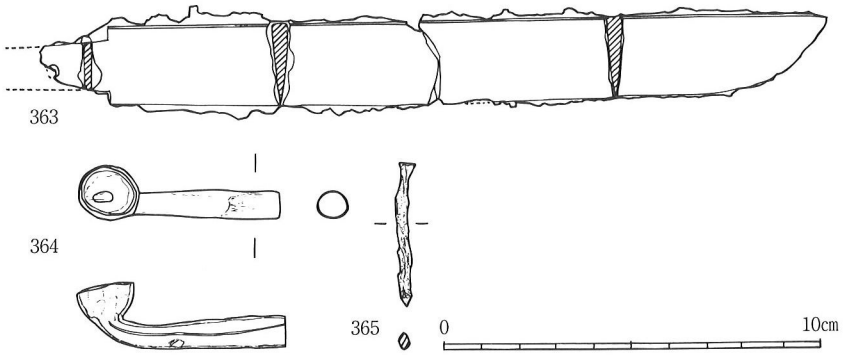
曲物（361）　側板の一部が残存する。とめは2ヶ所で，共に一列止め。おそらく側板を2重に回したのであろう。残高長20.2cm，残高8.1cm。

井戸６（第46図362）

用途不明木製品（362）　楕円形の板で，長径9.8cm，短径7.2cm，厚さ1.4cm。片面は美しく仕上げてあるが，もう一方は，荒い調整である。

＜金属製品＞（第47図363～365，図版51ｂ）

58－５区からは金属製品５点が出土した。(363）は短刀で，鎌倉時代の井戸５の断ち割りに際に出土した（図版42ｂ）。残高長20.9cm，幅2.2cm，厚さ0.4cmをはかる。棟は直線，切先は鋭い。茎に目釘穴が１つあり，径０.３cm。柄は残存していなかった。(364）は耕土層出土のキセルの雁首。長さ5.4cm，幅1.5cm。銅板の厚さは0.05cm。火皿と脂返しの接続点に補強帯はついていない。(365）は鎌倉後期の自然河川中央部の層から出土した。長さが3.8cm，太さ0.3cm。鉄釘と思われる。



第47図　58－５区 金属製品 実測図（1／2）

第４節　小　結

本調査区（面積 614 ㎡）は，事情でＬ字型の調査区になってしまったが，各種の遺構や遺物が多数検出された。以下，主要点を概説する。

１．井戸６基を検出。すべて，素掘り，枠無しで，平安後期？の井戸６，鎌倉後期の井戸２・井戸５，鎌倉末期の井戸１，室町の井戸３・井戸４に分けられる。鎌倉後期以降に中心があるようである。

２．井戸３からは，オオタニシの貝殻が大量に出土した。井戸がある程度埋まって，機能を果たしていない時期に貝塚として井戸が使用された様子である。親亀や子亀は誤って井戸に落ちたものらしい。オオタニシの出土が珍らしかった。

３．井戸５からは，短刀・漆器椀・ヒョウタン等、珍らしい遺物が出土した。触ると，今でも手

にすすがつく三足の大小が出土したのも珍しかった。

4．土坑1では，馬や鹿の骨が大量に集積されていた。骨の下から，渥美焼広口壺がほぼ完形で出土し，お供えに使用されたのであろうか。

5．鎌倉時代頃の柱穴群が検出された。地表下20～70cmで検出されたため，南北方向に幾筋も検出されたスキ跡や，不整形の各種土坑・井戸・溝等と同一面に存在した。南側では，自然河川が検出されたため，河川の岸ギリギリまで建物跡が迫っていた様子である。

6．鎌倉後期の自然河川の北岸には列石があり，護岸の縁石あるいは洗い場的な施設があった様子である。

第Ⅴ章　58－7区の調査成果

第1節　層　位

本調査区（西ノ辻遺跡14次）の基本的な層位は次の通りである（第48図）。現地表面の標高は，T．P．＋13.9mで，調査前までは宅地だった。地表下7～25cmは，新盛土であった。その下に，厚さ5～15cmの暗灰色粘質土層があり，よく肥えた土であったので，近・現代の耕土層と思われた。その下に，厚さ5～15cmの黄褐色粘質土層があり，酸化鉄の沈着が認められたので，床土層と思われた。その下に，厚さ20～25cmの灰褐色粘質土層があり，土器片が少量出土した。遺物包含層と思われた。調査区北東端で円筒埴輪片，銅片，土錘等が出土した。

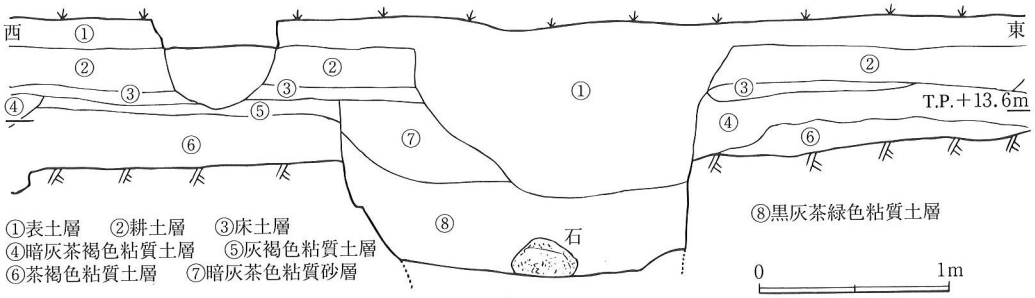
この遺物包含層は，調査区の北端と西端のみに存在し，南西端には存在しなかった。南西端は一段低くなっていて，直角に削平されていたので，後世，整地されていた可能性があった。

遺物包含層を除去すると，調査区の北端では柱穴・土坑等の検出された遺構面が存在した。この層の下に厚さ7～20cmの灰褐色砂質土層が部分的に堆積し，除去すると，柱穴群が現われた。共に柱穴群・土坑中に瓦器椀，土師質小皿等の細片が少量出土したので，中世の時期の遺構面と思われた。

調査区北端では，地表下40cmで，厚さ35cmの茶褐色粘質土層があり，弥生土器の細片等が出土した。この層を除去すると，方形周溝墓が現われた。溝中から高坏・甕が出土したので，Ⅲ様式（古）の時期と判明した。

調査区の北端部以外は，調査区西端で，床土・包含層を除去すると，時期不明の東西方向のスキ跡が検出された以外では，すぐ・いきなり地山面上に中世の遺構が現われた。

調査区の北端と西端では，約1mの比高差があり，かつてもそのように緩やかに南に行く程低くなっていたものと推定された（第49図）。



第48図　58－7区 北壁土層断面図（1／40）

第2節　検出された遺構

第1項　古代～中世の遺構

井戸

井戸1

調査区東端の中央部で検出された（第50図，図版56）。東半部は調査区外であった。平面形は長楕円形を呈し，長軸2.1ｍ以上，短軸2.0ｍをはかり，深さは約0.62ｍ。検出面のレベルはＴ．Ｐ．＋13.06m，坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋12.44m。底が浅いことから，あるいは土坑になるかもしれない。

検出面下55cmまでに，瓦器椀や土師質小皿の完形品等を含む多量の遺物が投棄されていた。中には小児頭大の石や，須恵器・白磁も混じり，箸や用途不明木製品等も出土した。

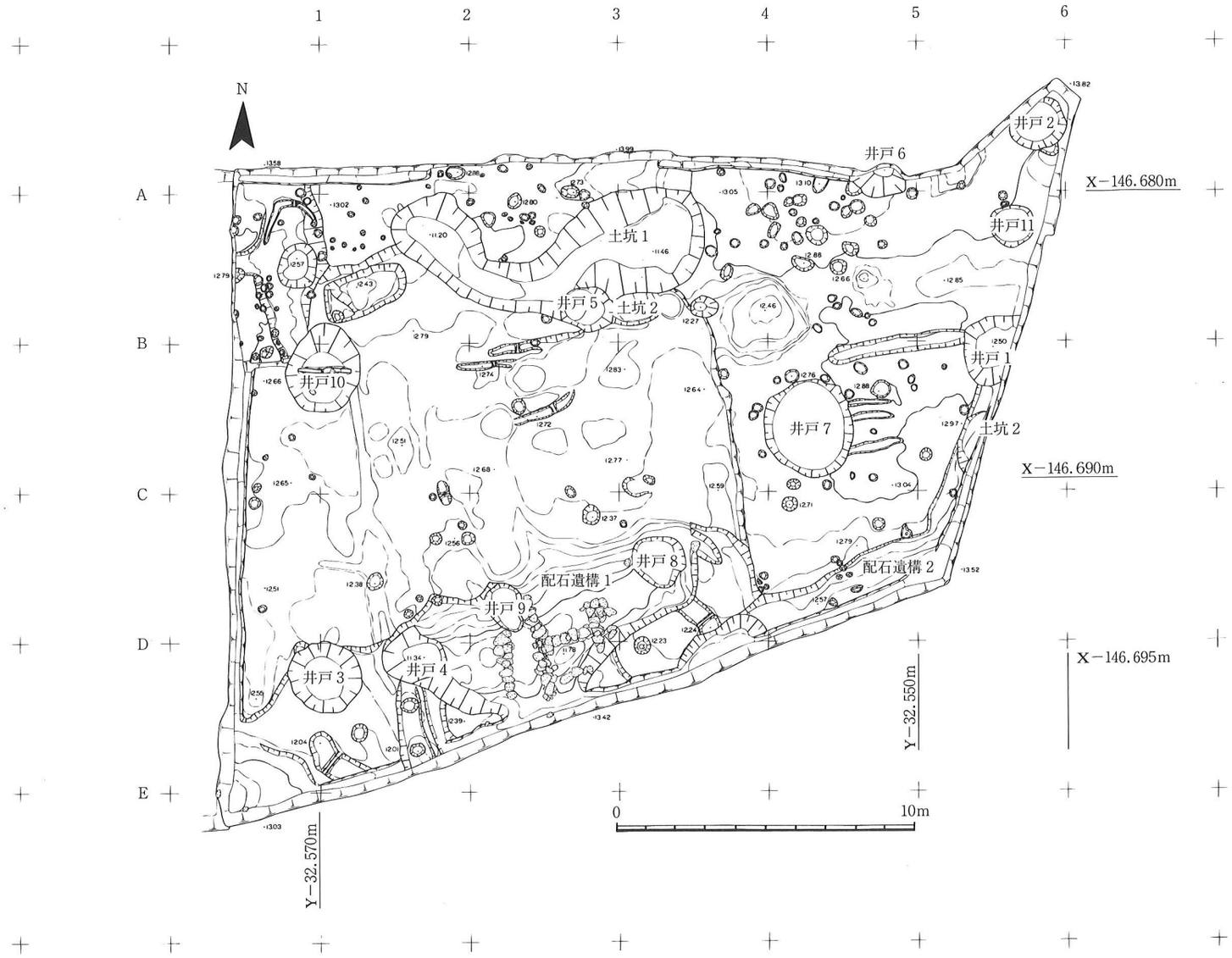
埋土は，大きく3つに分けられる。遺物の取り上げは便宜的に各々を1回目(上層)・2回目(中層)・3回目土器群（下層）として行った。出土土器から平安末期と推定されたが，瓦器椀にわずかばかりの型式差を認めることが出来た。

井戸2

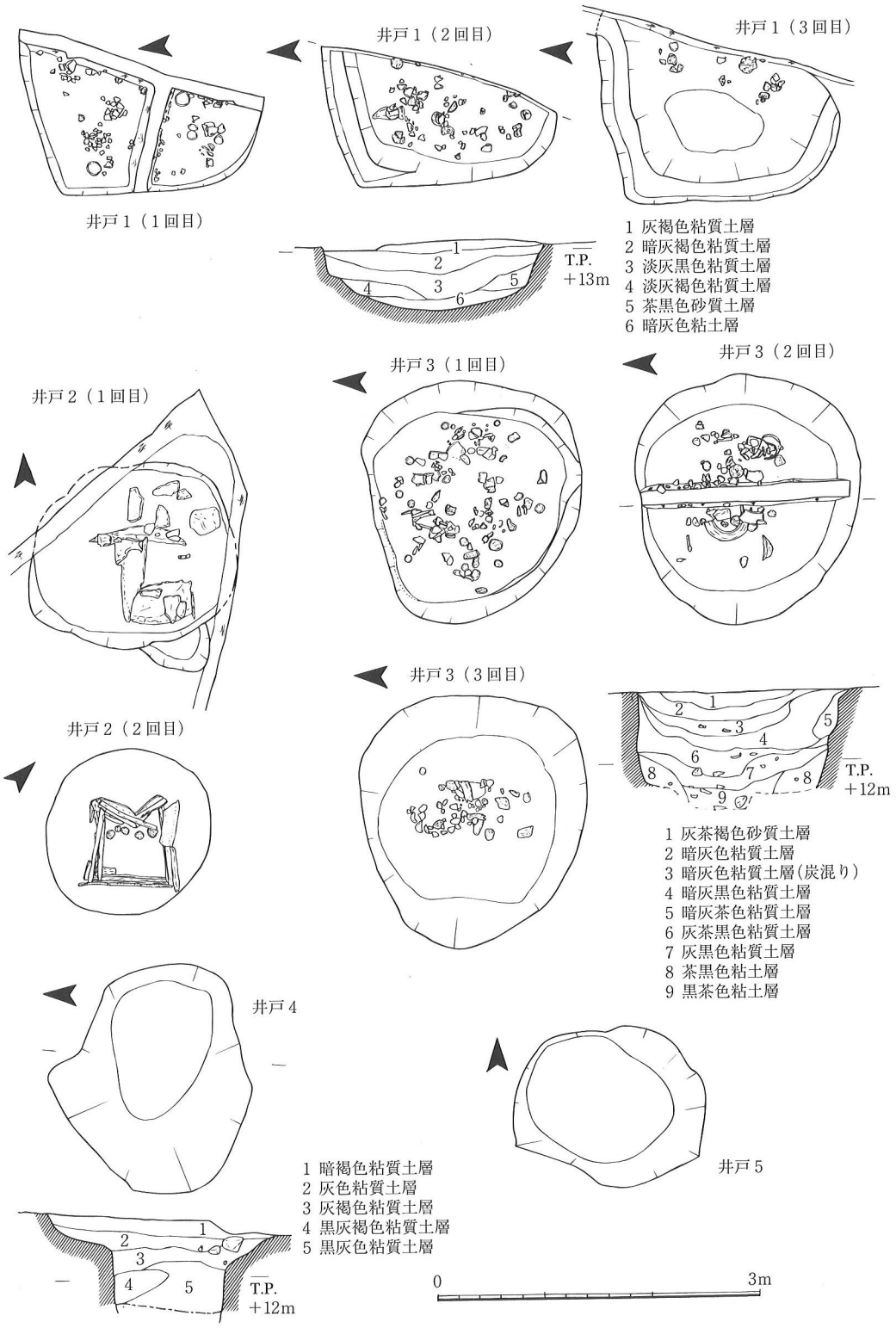
調査区北東部で検出された（第50図，図版57～59）。西端・東端の一部は調査区外であった。井戸の径は南北1.7m，東西2.0m。平面形は隅丸長方形で，上下二段にわたって木枠が存在した。検出面のレベルはＴ．Ｐ．＋13.2mで，深さは5.0m以上。

検出面下1.2ｍまでに灰褐色粘質土層が落ち込んでおり，土師質羽釜，瓦質すり鉢，瀬戸焼瓶子等が出土した。室町時代の遺物と思われた。この遺物包含層を除去すると，木枠（上段井側）があらわれた（図版57ａ）。この木枠は東側を除く3方向のみ存在した。南側の枠板は一枚板で，幅60cm，長さ1.8ｍ，厚さ8cmの大きなものであった。西側は同様の板を3枚横に並べていた。北側は南側同様の一枚板であったが腐食が進み，所々穴があいていた。東側には板材がなく，井戸が埋められた跡に抜きさられたものか。この板枠は板同士を鉄釘で止め，固定していた（図版57b)。木枠の南側と西側は内側に少し傾いていた。この木枠の内部には暗灰色粘土が充満しており，北東の隅には，径3cmの竹が一本斜めに刺さっていた。井戸を埋めるときのガス抜きパイプか。北側の枠の裏側には，径10～40cmの石が十数個詰っていた。井戸築造時の踏み石にでも使用されたのであろうか。木枠のいずれも内外面下方には，手斧(ちょうな)痕の残存が著しかった（図版58ｂ)。井戸の掘方内の東側に枠の位置が片寄るのは，西側に人が入って組み立てたからであろうか。上段井側内から，瓦器椀，土師質羽釜・皿，白磁椀，柄杓，スッポン等が出土している（図版59ａ)。

この木枠（上段井側）を除去すると，下に幅50～60cm，厚さ5cm，長さ2.1ｍの長細い板が一辺に3・4枚連続的に打ち込まれ，方形枠を作っていた（図版59ｂ)。上層の木枠が一枚板を組み合わせただけのものであるのに対し，下層の木枠は，板を連ねて内側に桟を組み合わせて，木



第49図　58－７区 遺構 平面図（1／200）



第50図　58－７区 井戸１～５ 平面・断面図（1／60）

枠を構築していた点が非常に異なっていた。一辺1.4ｍの正方形の木枠内部（下段井側）には，鎌倉中期の瓦器椀，土師質小皿・羽釜，曲物桶底板等が落ち込んでいた。

下層の木枠の直上に上層の木枠を乗せて構築したこの井戸は他の井戸と比べ，非常に丁寧に作られていた。井戸の年代は，出土土器から鎌倉中期と推定された。

井戸3

調査区南西隅で検出された（第50図，図版60・61）。径は南北2.1ｍ，東西2.3ｍ。平面形は楕円形。底まで枠等はなく，素掘りであった。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋8.44ｍ。深さは4.23ｍ。

検出面下40㎝で，多量の土器や拳大の石が出土した（１回目土器群）。破片が多いが，土師質小皿等はまったくの完形品も多く含まれていた（図版60）。この土器群を除去すると，検出面下80㎝で，再び多量の土器や拳大の石が出土した（２回目土器群）。一層目の土器群と比べると，土師質羽釜や瓦質三足の大破片が多かった（図版61ａ）。この土器群を除去すると，三度土器群（３回目土器群）が現われた（図版61ｂ）。ほぼ近接した時期に相継いで，井戸中に土器や石が投棄されたものと推定された。なお，２回目土器群中からはオナモミの果実が一個出土した。

検出面下1.1ｍ以下は，自然堆積土である。底から1.8ｍ上で小さな完形の曲物桶（第88図788）が斜め上向きで出土した（図版61ｃ）。釣瓶（つるべ）に使われたものが，誤って井戸中に落ち込んだものらしい。井戸の年代は出土土器から鎌倉後期と推定される。

井戸4

調査区南西隅，井戸３の東80㎝で検出された（第50図，図版62ａ）。径は南北1.9ｍ，東西2.2ｍ，深さは4.42ｍをはかる。平面形は凹凸のある楕円形を呈する。室町時代の配石遺構１の西端にあり，上層が配石遺構によって削られていた。底まで枠等はなく，素掘りであった。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋8.255ｍ。

検出面下50㎝で黒灰色粘土層になるが，同層中からは，瓦器椀や土師質小皿・羽釜，常滑焼甕等が出土した。底近くの同層中からは，瓦器椀，土師質皿，東播系練鉢，下駄片方や曲物桶の底板が二枚出土した。底板は，水を組み上げる際，重さに耐えかね，桶の底板だけが抜け落ちたらしい。

なお，最下層から接して出土した大和型瓦器椀（第77図630）と和泉型瓦器椀（第77図634）の共存は，両地域の併行関係を知る上で注目される。井戸の年代は出土土器から鎌倉末期と推定される。

井戸5

調査区北半部中央で検出された（第50図）。径は南北1.5ｍ，東西1.8ｍ，深さは4.4ｍをはかる。平面形は凹凸のある楕円形を呈し，底まで枠等はなく，素掘りであった。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋8.3ｍ。内部には黒灰色粘土が充満していて，瓦質すり鉢，常滑焼甕等の破片が出土した。底近くからは，籠か箕か不明だが，編物断片も出土した。井戸の年代は出土土器から室町時代と推定される。

井戸６

調査区北端東壁際で南半部が検出された（図版62ｂ）。北半部は調査区外である。径は南北1.1ｍ以上，東西１.８ｍ。平面形は，恐らく楕円形。底に木枠があったが，大半が調査区外にあったので，調査できなかった。深さも2.3ｍ以上としか不明。検出面下75㎝で長径35㎝の人頭大の石が一つ井戸中央に落ち込んでいた。検出面下２ｍで南壁に接して用途不明木製品が出土した。埋土内部から，瓦器椀・皿，土師質小皿・羽釜等が多く出土している。

井戸の年代は出土土器から平安末期と推定された。なお，出土した東播系練鉢や瓦器椀・皿，土師質皿が南東10ｍの位置にある井戸１出土品と接合したことは，珍しい事例であった。井戸１も井戸６も共に出土土器から平安末期に埋められたと推定されるので，両者の井戸が同時に使用されたことが判明した。

井戸７

調査区中央の東寄りで検出された（第51図）。平面プランは，ほぼ円形を呈し，径3.3×3.0ｍ，深さ4.47ｍをはかる大井戸である。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋8.3ｍ。周囲に径25㎝，深さ25㎝程のピットが11個ほぼ等間隔に並び，履い屋の存在が想定された（図版64ｂ）。なお，井戸は２段に掘削されている。上段の断面形態は下膨れのフラスコ状を呈し，深さは約２ｍ。下段は，径約１ｍの円筒形を呈し，上段底のほぼ中央部から掘られている。

埋土は，坑中の土層堆積状況から大きく５層に大別される。上層は焼土塊・炭・有機物を大量に混えた灰茶褐色の粘質土層で，小片ではあるが多量の遺物（12～14世紀前半代）を含んでいた。遺物の主体は12～13世紀代のものがほとんどで，瓦質羽釜や土師質羽釜，青磁椀等の破片とともに，鉄釘・砥石・土錘・石硯等が出土した。この硯の裏面には「□福二年甲午」と年号が刻まれていた。これらは出土状況から考えて，井戸の機能消失後の窪みをゴミ穴として利用したもので，人為的に埋められた整地層で，層厚は約80㎝をはかる。

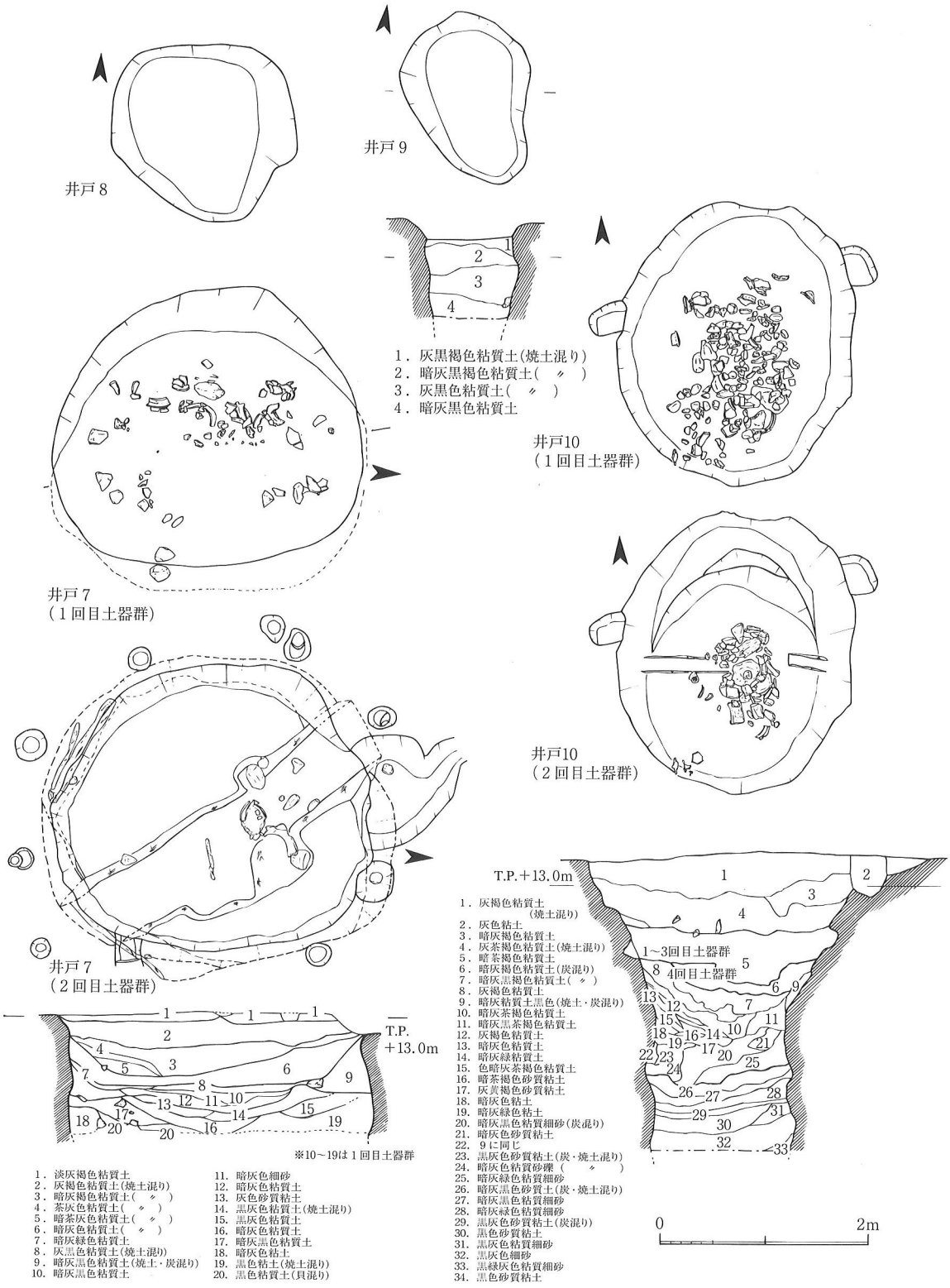
中層は黒灰色粘質土層，下層上位はオオタニシを主体とした貝層，下層下位は暗青灰色砂質シルト層，最下層は暗青灰色微砂層である。中層及び下層は，層厚約60㎝をはかる。これらの層は井戸の機能停止後に，自然堆積と土器等の投棄によって形成されたと考えられた。

最下層の堆積は井戸の使用時からその機能消失後までの間に形成された自然堆積土及び流れ込み土で，層中より多くの木製品が出土している。

中層では検出面下0.8ｍで，土器群が検出された（１回目土器群）。土器群中には，長径30㎝大の石が十数個混じっており，土器片等と共に一括して投棄されたものと推定された（図版64ａ）。

検出面下約１.１ｍの下層上位では井戸の南東隅を中心にオオタニシの貝殻が大量に検出された（図版65）。オオタニシの中には，ハマグリやイシガイの貝殻も混じっており，当時の人々が井戸を貝塚として使用したことが判明した。オオタニシはコンテナにして７箱，個数にして，約4500個出土した。

この貝殻の下面（下層下位）で，井戸の南南東から頭部を南壁に接して，やや北下がりで文字



第51図　58－７区 井戸７～10 平面・断面図（1／60）

面を上にして木簡が一枚出土した（図版65）。この木簡には，「元徳二年」と年号が書いてあった。このため，この木簡は井戸の年代を知る上で，さらには供伴した瓦器椀等の土器の歴年代を推定する上で好資料といえる。また，井戸東側壁際に接して，柄付きの鉄斧や鉄鎌二本等が相継いで出土した（図版66ｂ）。なお，南北に残したセクションの中から，ほぼ完形の土師質羽釜がうつ伏せになって出土した（二回目土器群）。

最下層では，検出面下1.8～2.0ｍで，漆器椀が２個出土した。黒漆塗で上に朱漆で紋様を書いた立派な美しいもので，一個はほぼ完形，一個は細かく押し潰された状態で共に上向きで出土した（図版66ａ・ｃ）。検出面下2.9～3.0ｍでは，漆器椀の大破片や曲物桶の完形品２個が相継いで出土した（図版66ｄ・ｆ）。さらに検出面下４ｍで，再び曲物桶完形品と羽子板状木製品が出土した（図版66ｅ）。また，これらの遺物が出土した暗灰色粘土層中からは，瓦器椀やヘソ皿と呼ばれる土師質小皿，土錘等も出土した。

井戸の時期は，１回目の土器群および２回目の土器群中から出土した瓦器椀，土師質小皿と底近くから出土した瓦器椀，土師質小皿とでは，大きな時期差は認められなかったので，この井戸は比較的短期間に埋もれたものと推定された。年号のある木簡が出土したので，その時期は1330年を前後する頃に比定されると考える。

なお，井戸底から採集した土壌サンプルをふるいで洗浄すると，ネズミやカエルの骨が出土した。誤って落ちたものらしい。

井戸８

調査区中央南寄りで検出された（第51図，図版67・68）。上層が配石遺構によって削られていた。径は南北1.7ｍ，東西1.8ｍ，深さは4.1ｍ。平面形は凹凸のある楕円形。底まで枠等はなく，素掘りであった。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋8.288ｍ。下層の調査では，検出面下2.3ｍで親亀二匹と子亀一匹が壁際にて検出された（図版67ｃ）。かたまって三匹揃って落ち込んだものらしい。同じ深さから曲物桶底板の完形品と灰釉陶器の底の破片が出土した（図版67ｂ）。検出面下3.3ｍで足を欠いた瓦質三足と曲物桶底板の破片が出土した（図版67ｄ）。その20㎝下でほぼ完形の白磁台付皿と曲物桶底板が出土した（図版67ｅ）。さらに13㎝下から白磁の細片と曲物桶底板の完形品が出土した（図版67ｆ）。この白磁片は先の白磁台付皿に接合した。さらに18㎝下からは径20㎝の石と箱型の釣瓶が坑底に接した状態で出土した（図版68ａ・ｂ）。箱型の釣瓶の把手部分中央は著しく磨滅していて，長期間使用されたことが明らかなものであった。釣り紐は検出されなかったから，結び目がほどけて釣り紐だけが上に上っていったものらしい。井戸の年代は出土土器により，室町時代と推定される。

井戸９

調査区南半部西寄りで検出された（第51図，図版68ｂ）。上部は，配石遺構によって削られていた。径は南北１.５ｍ，東西１.３ｍ，深さは３.１ｍ。平面形は凹凸のある楕円形。底まで枠等はなく，素掘りであった。坑底のレベルはＴ．Ｐ．＋9.29ｍ。検出面下70㎝までの灰黒色の粘質土層

中には，焼土を含んでいた。下層からは瓦質羽釜，土師質羽釜や瓦等の破片が少量出土している。井戸の年代は，出土土器により14世紀中葉頃と推定される。

井戸10

調査区北西部で検出された（第51図，図版69・70）。径は南北3.0m，東西2.5m。平面形は楕円形。底まで枠等はなく，素掘りであった。深さは3.885m。坑底のレベルはT．P．＋9.445m。検出面下1.1mまでは，茶褐色の粘質土層が堆積しており，焼土や土器細片等を包含していた。この層を除去すると，井戸の中央部から南端にかけて，土器，瓦や長径30cmまでの石がぎっしりと密集していた（図版69a）。1回目の土器群を除去すると，より小さい範囲で2回目の土器群が検出された（図版69b）。やはり拳大の石と共に土器・瓦の破片が密集していた。2回目の土器群を除去すると，さらに小さい範囲で3回目の土器群が検出された（図版69c）。この土器群は，ほぼ完形の土師質羽釜や瓦器椀をうつぶせや斜め，あるいは上向きに置いた上に人頭大の石を重ねていた。これを除去すると4回目土器群が検出された（図版70a）。1～4回目の土器群は整理してみると，ほぼ同一時期のものであったので，この土器群は，井戸がほとんど埋まって土坑状になっている所にあまり時を経ずして投棄されたものと推定された。

検出面下1.5mで，壁際に接して斜めになって曲物桶の完成品が出土した（図版70b）。また，底近くからは，曲物桶底板の大破片も出土した。井戸の年代は，出土土器により平安時代末と推定される。

井戸11

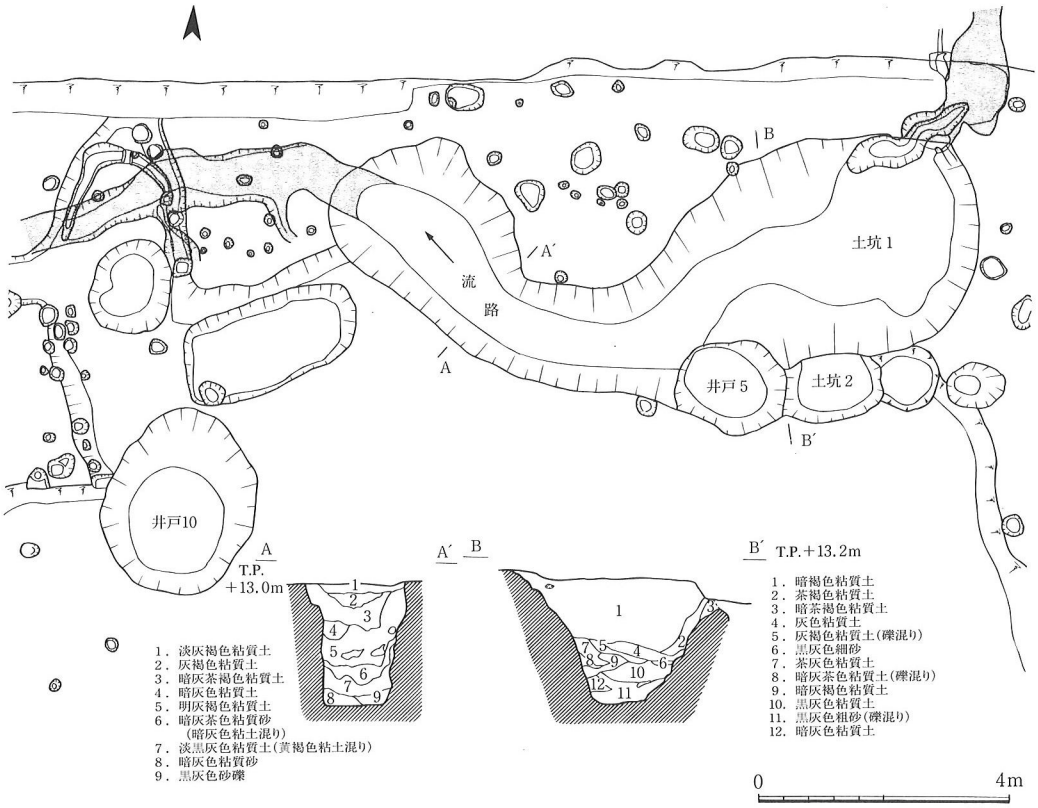
調査区北東部で検出された（第49図）。径は南北1.4m，東西1.5m，深さは4.3m。平面形は円形。底まで枠等はなく素掘りであった。坑底のレベルはT．P．＋8.723m。内部には，黒灰色粘土が充満していて，備前焼すり鉢や瓦質すり鉢，瓦等の破片が出土した。井戸の年代は出土土器により室町時代と推定される。

土坑

土坑1

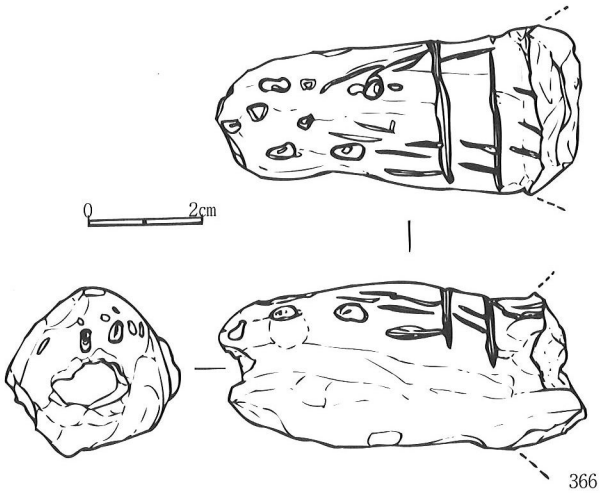
調査区北半部中央で検出された（第52図，図版71～74）。土坑の長さは，10.5m，幅3.5m，深さ2.2m。平面形は勾玉形。土坑の最上層には，厚さ1.3mにわたって暗褐色粘質土が厚く堆積し，平安時代末の瓦器椀の完形品が1点出土している。検出面下1.6mで礫混じりの黒灰色粗砂層が現われ，同層中には多量の黒色土器や土師器皿等，平安時代の土器が包含されていた（図版71b）。硯と推定される須恵器の亀の頭（第53図366）や灰釉陶器，「大満」・「知」（図版99－869）と書かれていた墨書土器，弥生土器，サヌカイト製不定形刃器，古銭等が出土した。これらの遺物を取り上げると，底は平らでつるつるしていた。土坑の底の高さは，東が高く，西が低かったので（20cm間で0.6m）東から西へと水が流れていたことが判明した。

土坑の東端と西端にはそれぞれ縦0.6m，横0.5mの横穴が調査区外に伸びており，西端では完

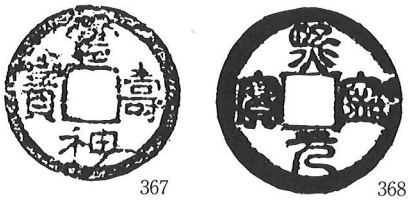


第52図　58－７区 土坑１ 平面・断面図（1／120）

形の黒色土器の椀がうつぶせで出土し（図版73ａ），東端では小さな穴のあいた用途不明木製品が検出された。当初，この横穴を人間が掘ったトンネルと考えたが，続きを機械で掘削すると地山面の下1.7ｍをトンネルは蛇行しながら，長さ30ｍ以上にわたって西へ西へと伸びていたので，天然にできた地下水脈の穴と考えたほうが妥当と思われた。すると，この勾玉形の土坑がオープンであったのか，地下トンネルが落盤したのかであるが，断面で見ると周囲から土砂が流れ込んだ様相を呈していたので，もとはオープンと推定された。土坑の底およびトンネル部の埋土中に含有されている土器で一番新しいのは平安時代



第53図　58－７区 土坑１ 出土陶硯（4／3）



第54図　58－7区 土坑1 出土銭貨 拓本 (1／1)

中期の土器であったのと出土古銭が『富寿神寶（818年）』と『熙寧元寶（1068年）』であったので（第54図367・368），その時期までオープンで，埋没したのは上層出土の瓦器椀から考えて，平安時代末と推定された。

柱穴群

調査区北端で検出された（図版75）。北端は南北幅6m程の部分が一段高くなっており，その上に約110個の柱穴や焼土の入った土坑・小溝等が検出された。柱穴は径30cm，深さ20cm程度の円形のものが多かった。残存部分が狭かったことや土坑1のため，建物跡の復原は充分にできなかった。柱根の残存しているものはなかった。井戸10の北側では，南北に主軸をもつ長さ140cm，幅80cm，深さ40cm程の隅丸長方形土坑が接近して3基検出されたが，遺物は出土しなかった。柱穴群中には瓦器椀，土師質小皿等の細片が少量含まれていたので，時期は中世のものと推定された。

柱穴群は，調査区北端では部分的に2面にわたって検出された。調査区南西部は，後世の削平によって，かろうじて柱穴群の基部だけが若干数検出された。もともとは，調査区全面に柱穴群が存在したものと推定された。西接する57－4区でも調査区北東端にのみ柱穴群が検出されていたので，今回の柱穴群と合せて，57－4区・58－7区の北側一帯が中世の集落址の中心であった可能性がある。

配石遺構

配石遺溝1

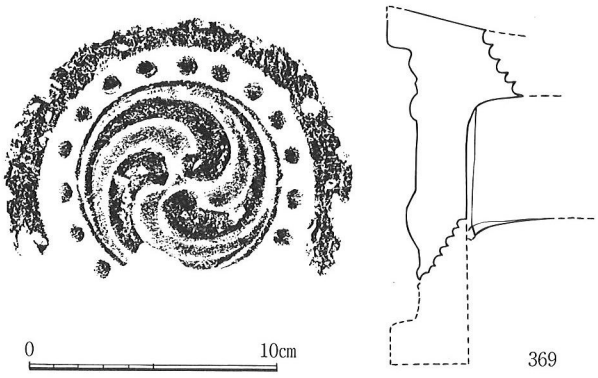
調査区南端中央西寄りで検出された（第55図，図版76・77）。石を並べた土坑の大きさは南北4.5m，東西11.1mの楕円形。深さは0.5m。北側は緩やかに南に下っているが，南側はやや急角度に掘り込まれている。底は中央がやや緩やかにくぼんでいる。この土坑中に，径30cm程の河原石が多い所では5段積み重ねられていた。石列は直線的できれいな面を揃えて並べられていた。崩れた石を取り上げ，旧の姿を伺ったが，配石列が確認されただけで，何の施設なのか用途不明であった。石の中には五輪塔の空輪が混じっていたり，埋土中に巴紋軒丸瓦（第56図）や鉄製クマデ（第95図829），瓦質桶形土器，石硯等が混在していた。出土土器により年代は室町時代と推定される。

配石遺構2

調査区南東端で東西に検出された（第57図，図版78a）。調査は溝101～104で行っている。溝の肩部に径5cm程の小さい石を2箇所にわたって集中的に敷きつめたもので，東側の配石の東端には径30cm程の数個並べていた。

第55図　58－７区 配石遺構１ 平面・断面図（1／60）

西側の配石はやや疎らなもので，溝下に崩れ落ちた可能性がある。石の間から馬歯，雷紋付青磁椀の破片（図版97ｂ）が出土しているので，年代は室町時代と推定される。配石の目的は，手洗場・水汲み場の足許整備のためか？。



第56図　58－７区 配石遺構１ 出土巴紋軒丸瓦 拓本（1／3）

スキ跡（うね溝）

調査区東半部で検出された（図版78b）。東西方向に11本，断片的に検出され，幅15～90㎝，深さは10～50㎝。中世の遺物を含む包含層を除去すると検出されたので，古ければ中世，新しければ近世・近現代まで遡る可能性がある。理土から瓦器椀や土師質皿の細片等が出土したが，年代は特定できなかった。

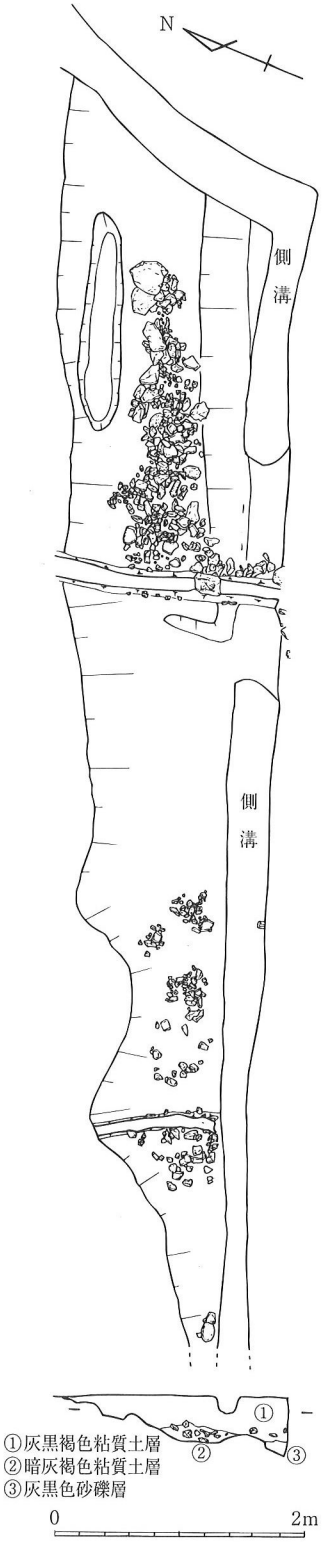
第２項　弥生時代の遺構

方形周溝墓

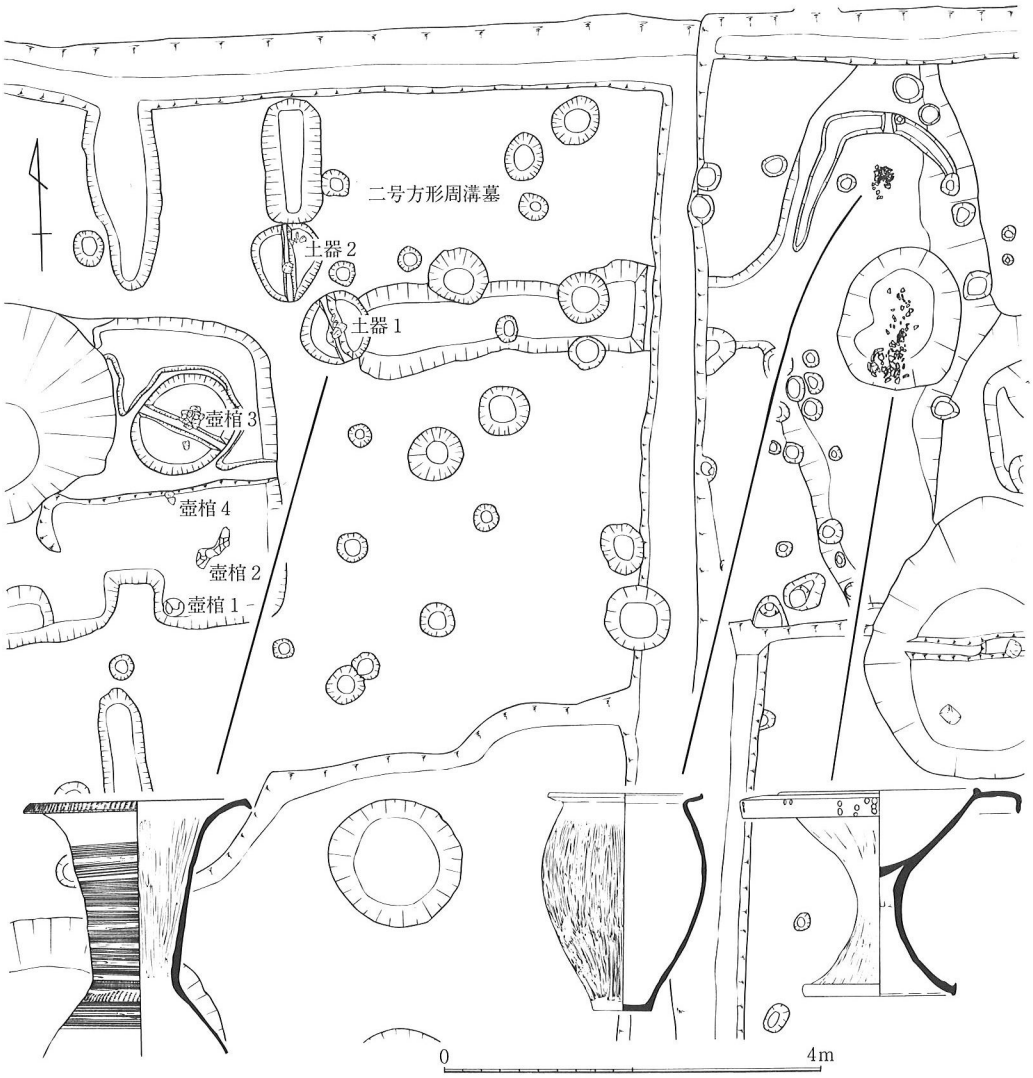
調査区北西隅で検出された（第58図，図版79）。西接する57－４区で検出されていた２号方形周溝墓の南溝・東溝の一部が検出された。主体部および盛土は削平されて存在しなかった。

南溝の幅は80㎝，深さ20㎝。東溝は南北の大きな溝に切られている。この溝の幅は2.2ｍ，深さ20㎝。北端は調査区外に伸びており，南端は井戸10および段によって切られている。この溝の中央部で長さ1.5ｍ，幅1.3ｍ，深さ20㎝の楕円形土坑が検出された。この土坑の南端寄りの埋土上層で高坏完形品及び甕の破片が若干出土した。高坏の４ｍ北側の溝底からは甕のほぼ完形品が細片となって出土した。この２つの土器が供献土器であるとすれば，２号方形周溝墓の東で検出された南北溝も方形周溝墓である可能性がある。

方形周溝墓の時期は，出土土器からⅢ様式（古）段階のもの



第57図　58－７区配石遺構２ 平面・断面図（1／60）



第58図　58－７区　２号方形周溝墓 平面図（1／80）

と推定される。なお，高坏中からサヌカイト製凸基有茎式石鏃が１点出土した。

第3節　検出された遺物

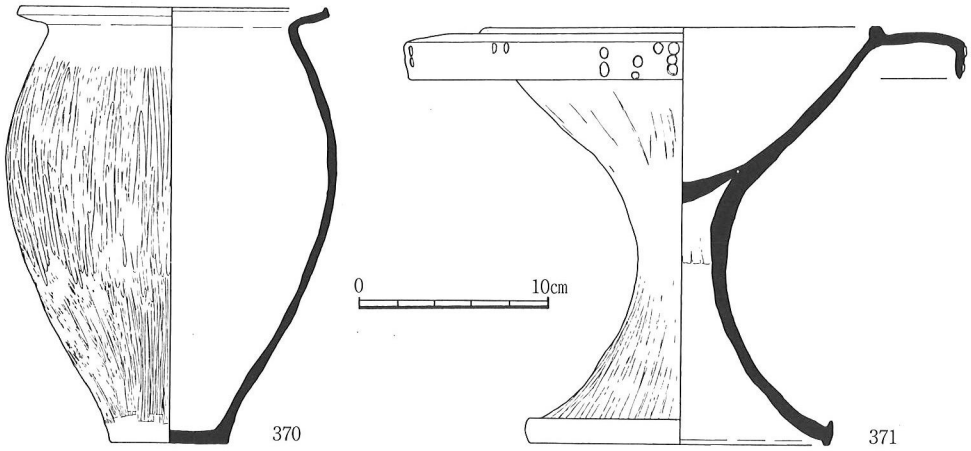
第1項　弥生時代以前の遺物

＜弥生土器＞（第59図370・371，図版80）

調査区北西隅，2号方形周溝墓の南西角で，ほぼ完形の甕と高坏が各々1点出土した（図版79b・c）。甕（370）は口径16.2cm，器高23.2cmはかる。外面は下半部が細かいハケ目，上半部は縦方向にヘラミガキ調整を施す。胎土は明るい茶褐色を呈し，角閃石・雲母・石英・長石等を含む。焼成は良。生駒西麓産。

高坏（371）は口径29.7cm，器高21.1cmはかる。坏部端面は大きく外側に伸び，下方に垂れ下る。円形浮紋が縦方向に2個ないし3個連なり，横方向に間断的に連なるが，もとの姿がどのようであったのかは，表面の風化が進み，良く分からない。坏部外面はヘラケズリし，脚部外面は縦方向にヘラミガキ調整を施す。胎土は灰白色を呈し，クサリ礫・長石・石英・チャート等を含む。焼成は甘い。摂津の土器か。

以上の土器は第Ⅲ様式でも古い様相をもつものである。

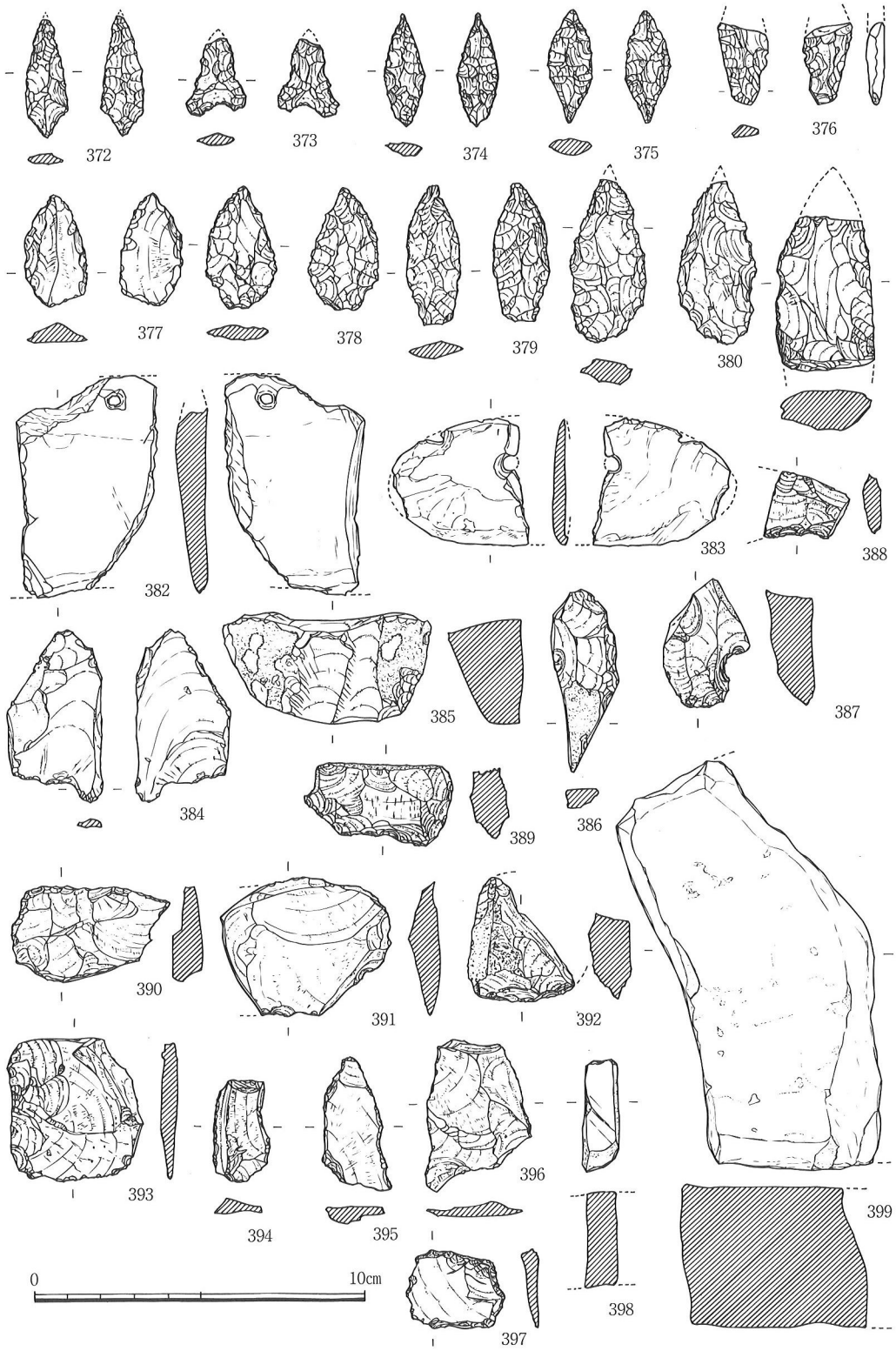


第59図　58－7区　2号方形周溝墓 出土弥生土器 実測図（1／4）

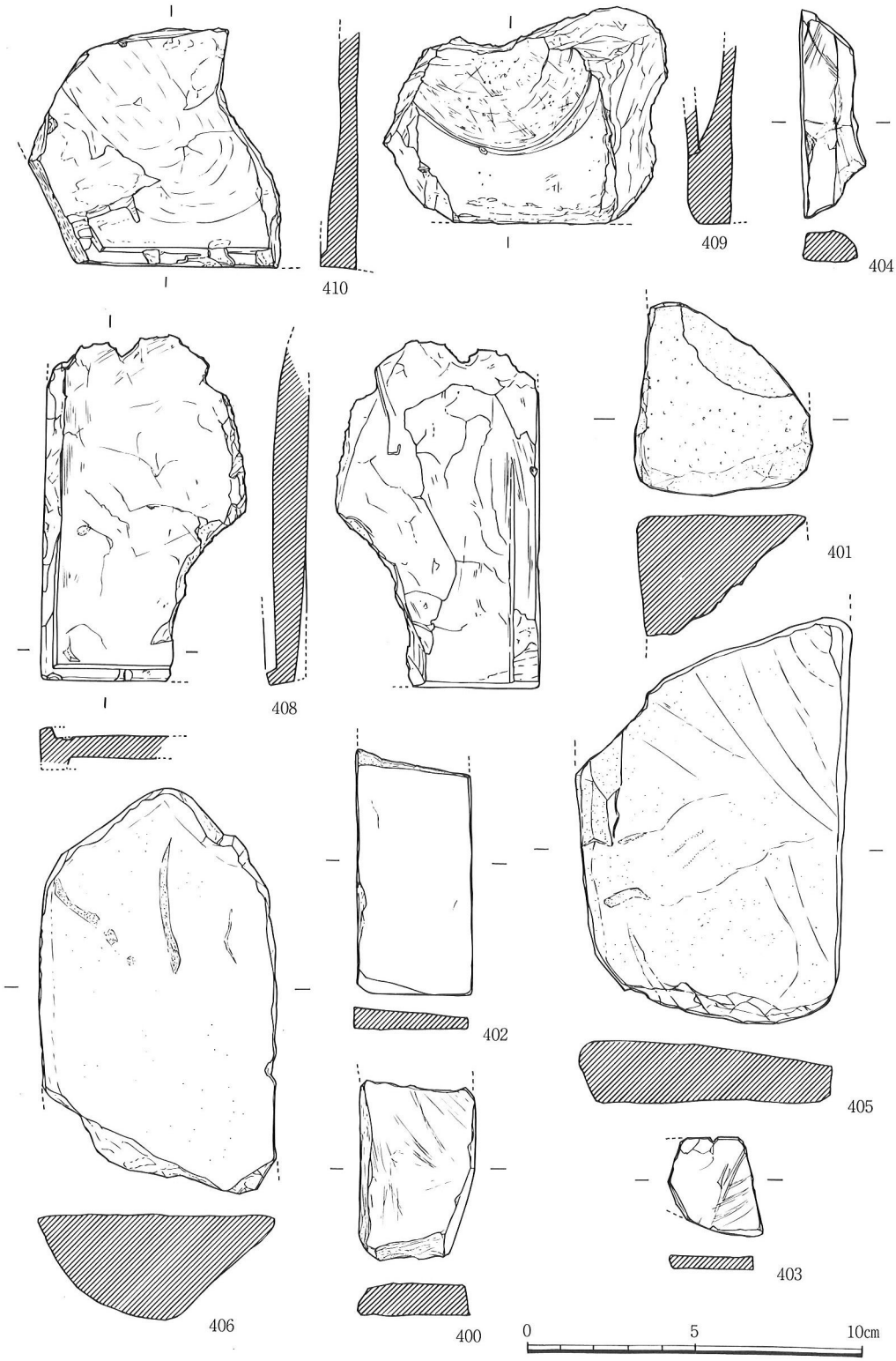
＜弥生時代以前の石器＞（第60図372～397，図版80b・81，第5表）

縄紋時代の石器が2点，弥生時代の石器が24点出土した。58－7区の中世の遺構・包含層中から出土し（575m²），面積比はm²当り0.04個と非常に少ない

縄紋時代の石鏃の1点（372）は小さな有舌尖頭器であろう。もう1点は凹基式石鏃（373）で，共に風化が著しいものである。

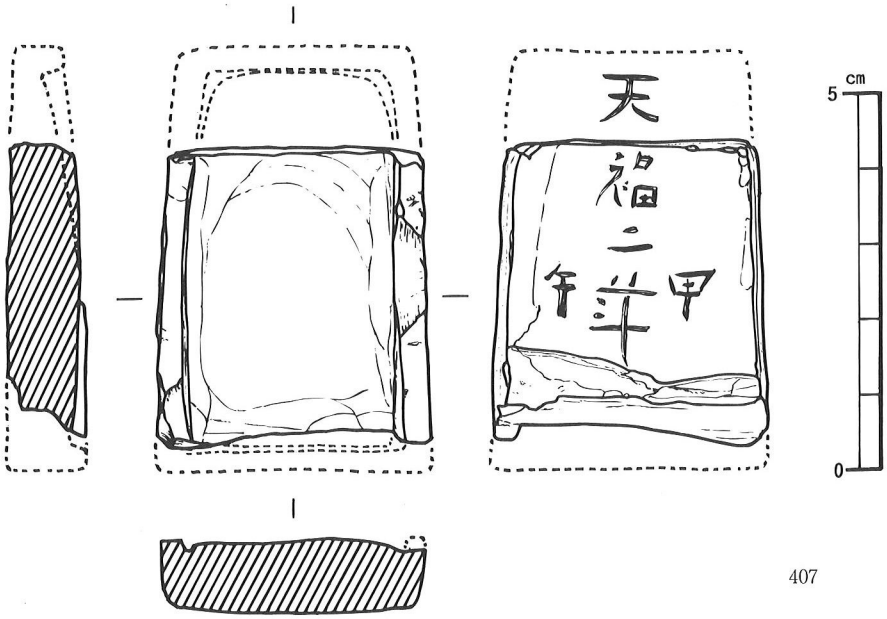


第60図　58－７区 石器 実測図（1／2）



第61図　58－７区 石器 実測図（1／2）

弥生時代の石器（374～397）は，いずれもが後世の撹乱を蒙った層中から出土したものだが，石鏃が凸基有茎式や片刃の石庖丁，不定形刃器が多い（10点）等，中期のものと推定される。



第62図　58－７区 井戸７ 出土石硯 実測図（1／1）

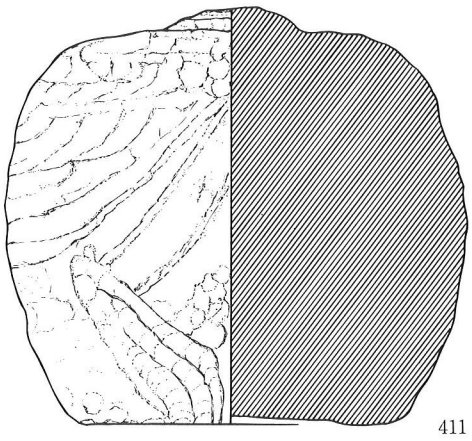
第２項　古代～中世の遺物

＜中世の石製品＞（第60～63図398～411，図版81～83，第５表）

砥石が９点，石硯が４点，五輪塔が１点出土した。砥石（398～406）は砂岩・粘板岩・凝灰岩製で，１～４面と使用の違いがある。

石硯は包含層出土のもの１点（410），遺構出土のもの３点（407～409）である。

（407）は井戸７の上層から出土した。緑灰色粘板岩で黒色斑をもつことから，高島石の中でも虎斑石と思われる。ほぼ全体の３分の２残り，上下端を欠矢する。裾ひろがりの長方形小型硯。裏面に「□福二年甲午」と線刻されていた。甲午で□福二年となるのは，日本の鎌倉時代の天福二年より他にはないことから，年号は天福二年（1234）と推定できた。（408）は（407）と同じ井戸７から出土したが，より下層からであっ



第63図　58－７区 配石遺構１ 出土 五輪塔 実測図（1／4）

た。裏面に脚台がついており，表面には縁が巡る。赤紫色の頁岩で，赤間石と推定できる。ただ，別の意見では，幻の高島石と呼ばれる赤紫色の粘板岩とする意見もあり，詳細は今後の課題である。(409) は硯面が丸いもので，中央程くぼんでいる。黒色粘板岩で，やや粗雑な質で，不純物を多く含む。京都の高雄石と推定される。(410) は縁のある六角形？で，茶灰色粘板岩製，高島石の中でも粗悪なものと推定される。

(411) は五輪塔の空輪で，灰黄色凝灰岩製。他の部品は，配石中に存在しなかった。

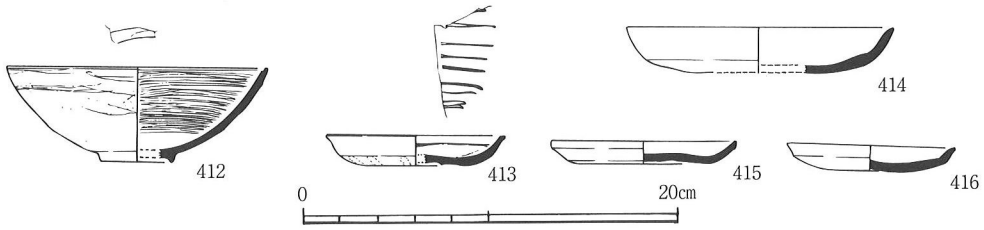
第5表　58－7区 出土石器・石製品 観察表

遺物番号	名　称	石　材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備　考	出土地区・層位
第60図372	石鏃	暗灰色サヌカイト	3.7	1.3	0.4	1.6	凸基有茎式。有舌尖頭器？	土坑1　あぜ内 10層
第60図373	石鏃	黒色サヌカイト	2.4	1.9	0.4	1.3	凹茎式。縄紋時代。	方形周溝 高坏土坑
第60図374	石鏃	黒灰色サヌカイト	3.4	1.3	0.4	1.4	凸基有茎式。	方形周溝 高坏土坑
第60図375	石鏃	黒灰色サヌカイト	3.4	1.4	0.5	2.0	凸基有茎式。基部側縁磨滅。回転線条痕？	井戸1　上層
第60図376	石鏃	黒灰色サヌカイト	2.5	1.6	0.5	1.9	凸基無茎式。先端部欠損のため石錐に転用。	土坑1　A区最下層
第60図377	石鏃	黒色サヌカイト	3.4	1.9	0.7	4.0	凸基無茎式。	調査区中央部表採
第60図378	石鏃	黒色サヌカイト	3.7	2.1	0.5	3.9	凸基有茎式。	井戸7 黒灰褐色粘質土
第60図379	石鏃	黒色サヌカイト	4.3	1.7	0.7	4.4	凸基無茎式。	池？遺構中央部
第60図380	石槍	黒色サヌカイト	5.0	2.3	1.0	10.8	先端部欠損。	調査区中央北段上包含層中
第60図381	石槍	黒灰色サヌカイト	4.7	3.1	1.4	25.9	上下端欠損。片方の側縁のみ磨く。	配石遺構
第60図382	石庖丁	灰色片岩	6.8	4.3	1.1	33.1	両刃。紐穴の位置がおかしいので、何か装飾品類か？	中央部包含層中
第60図383	石庖丁	暗緑色緑色片岩	3.9	4.2	0.5	11.4	片方。	井戸3 中央あぜ 6層
第60図384	石錐	黒色サヌカイト	5.3	2.9	0.7	12.1	一部表皮残存。	土坑1　C地点バラス
第60図385	石核	灰色サヌカイト	3.4	6.3	2.5	60.5	長さ2.9cm、幅1.4cmの剥片を3枚割り取る。	配石遺構
第60図386	用途不明	暗灰色サヌカイト	4.6	2.1	1.0	10.9	両側縁の突出部を磨く。	土坑1
第60図387	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	3.9	2.7	1.4	13.0	抉れ刃の不定形刃器。	北西端弥生包含層
第60図388	不定形刃器	黒色サヌカイト	2.0	2.6	0.7	3.6	背部に表皮をもつ不定形刃器。石小刀？	土坑1　C地点バラス
第60図389	不定形刃器	黒色サヌカイト	2.5	4.5	1.2	15.9	抉れ刃の不定形刃器。	B－4地区東西溝中
第60図390	不定形刃器	黒色サヌカイト	2.9	4.8	1.3	14.4	石器未製品。	中央部南端西より包含層
第60図391	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	4.3	5.2	1.1	23.9	一部片面加工調整のエンドスクレイパー。	土坑1　C地点バラス
第60図392	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	3.9	3.2	1.3	14.2	背部に表皮をもつ不定形刃器。爪形石。	方形周溝 高坏土坑
第60図393	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	4.4	4.1	0.6	12.6	ほぼ側縁に加工部をもつ不定形刃器。	土坑1　あぜ内 10層
第60図394	不定形刃器	黒色サヌカイト	3.1	1.7	0.5	3.3	石器未製品。	井戸7　2回目土器群
第60図395	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	4.1	2.1	0.6	4.9	石器未製品。	0－4地区配石遺構
第60図396	不定形刃器	暗灰色サヌカイト	4.7	3.7	0.5	6.3	石器未製品。	北西隅弥生包含層中
第60図397	不定形刃器	黒灰色サヌカイト	2.4	3.0	0.5	3.7	背部に表皮をもつ不定形刃器。	井戸7
第60図398	砥石	暗茶褐色砂岩	3.5	1.1	1.1	20.7	一面使用。	井戸5　東半部
第60図399	砥石	黒灰色花崗岩	12.3	5.6	4.9	742.0	一面使用。全面焼け？	土坑2
第61図400	砥石	灰白色粘板岩	5.4	3.2	0.9	27.8	三面使用。	井戸2　下段下層
第61図401	砥石	乳白色凝灰岩	5.7	5.0	3.7	115.3	二面使用。	井戸2　下段下層
第61図402	砥石	淡黄灰色粘板岩	7.4	3.4	0.8	30.7	四面とも使用。	井戸7　最上層
第61図403	砥石	淡茶灰色粘板岩	2.9	2.5	0.4	4.9	一面使用。	井戸8
第61図404	砥石	黄灰色粘板岩	6.3	1.9	0.8	13.6	三面使用。	調査区中央北段
第61図405	砥石	暗灰色砂岩	12.3	8.1	2.2	314.5	四面とも使用。仕上げと石。	溝101～105
第61図406	砥石	青灰色結晶片岩	12.2	7.2	3.2	333.2	三面使用。	井戸7
第62図407	石硯	緑灰色粘板岩	4.0	3.7	1.0		高島石製。長方形。「□福二年甲午」と線刻。	井戸7　上層
第61図408	石硯	赤紫色頁岩	10.4	6.1	1.2	94.9	赤間石製。長方形。	井戸7の東半部マイナス1m
第61図409	石硯	黒色粘板岩	6.5	8.5	1.6	93.1	上面にくすんだ銀色の霜降りのような石の紋様あり。	E－3地区配石遺構
第61図410	石硯	茶灰色粘板岩	7.2	7.7	1.1	60.9	高島石製。六角形？	中央部南端西より包含層
第63図411	五輪塔	灰黄色凝灰岩	22.4	24.9	24.5	11800.0	焼け痕あり。	配石遺構1

＜古代～中世の土器＞

井戸６（第64図412～416）

(412) は大和型瓦器椀。外面の分割ヘラミガキはやや乱れている。Ⅲ－Ａ型式にあたる。(413) は瓦器小皿。口径9.4cm，器高1.6cmをはかる。内底面にジグザク状暗紋を施し，口縁部内面にもヘラミガキが施されている。(414) は土師質大皿。口縁部は直線的に開き，端部を丸くおさめる。(415・416) は土師質小皿である。時期は12世紀後半と考えられる。



第64図　58－７区 井戸６ 出土土器 実測図（1／4）

井戸１（第65・66図417～470，図版84～86ａ）

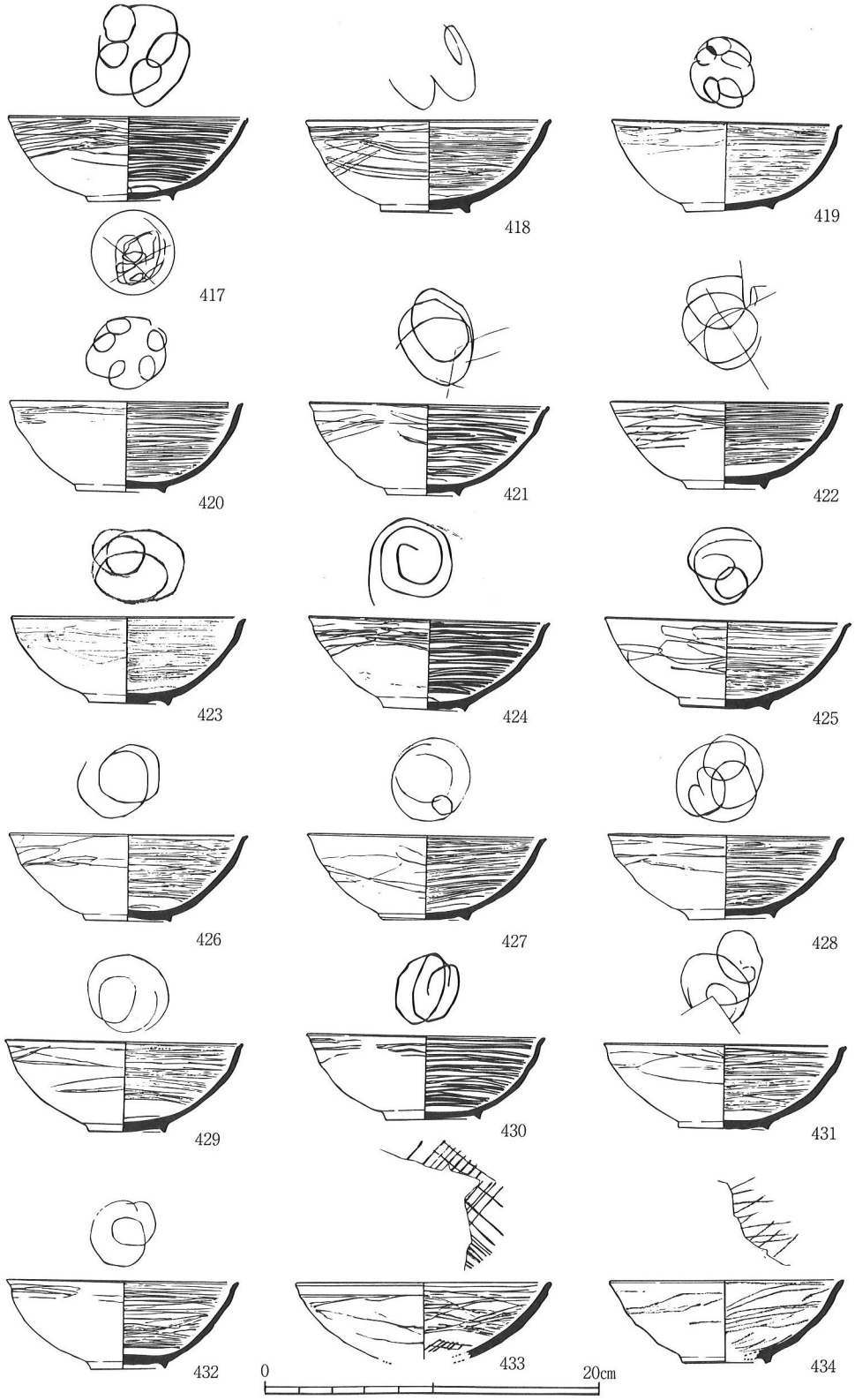
上層から (421・432・437・439・441・449・452・453・455・456・459・464・466・468・469)，中層から（417・418・423～426・428・430・431・438・440・444～448・450・451・454・458・463・470)，下層から (422・427・429・436・442・461・462・467) が出土した。(420・433・457・460) は上層と中層のものが接合した資料である。

(417～434) は瓦器椀で，(417～432) が大和型，(433・434) が和泉型である。大和型は，外面に整った分割ヘラミガキを施し，内面に密な圏線ミガキを施すものから，外面のヘラミガキの分割性が乱れ，内面のミガキの条線間にやや空白が見られるものまでがあり，Ⅱ－Ｂ型式からⅢ－Ａ型式にあたる。(417) は高台内にも，見込みと同様の暗紋が施されている。また，(417・421・422) には焼成後の刻線が認められる。和泉型は内面のヘラミガキが急速に粗略化されていく段階のもので，Ⅱ－３期（433）とⅢ－１期（434）にあたる。

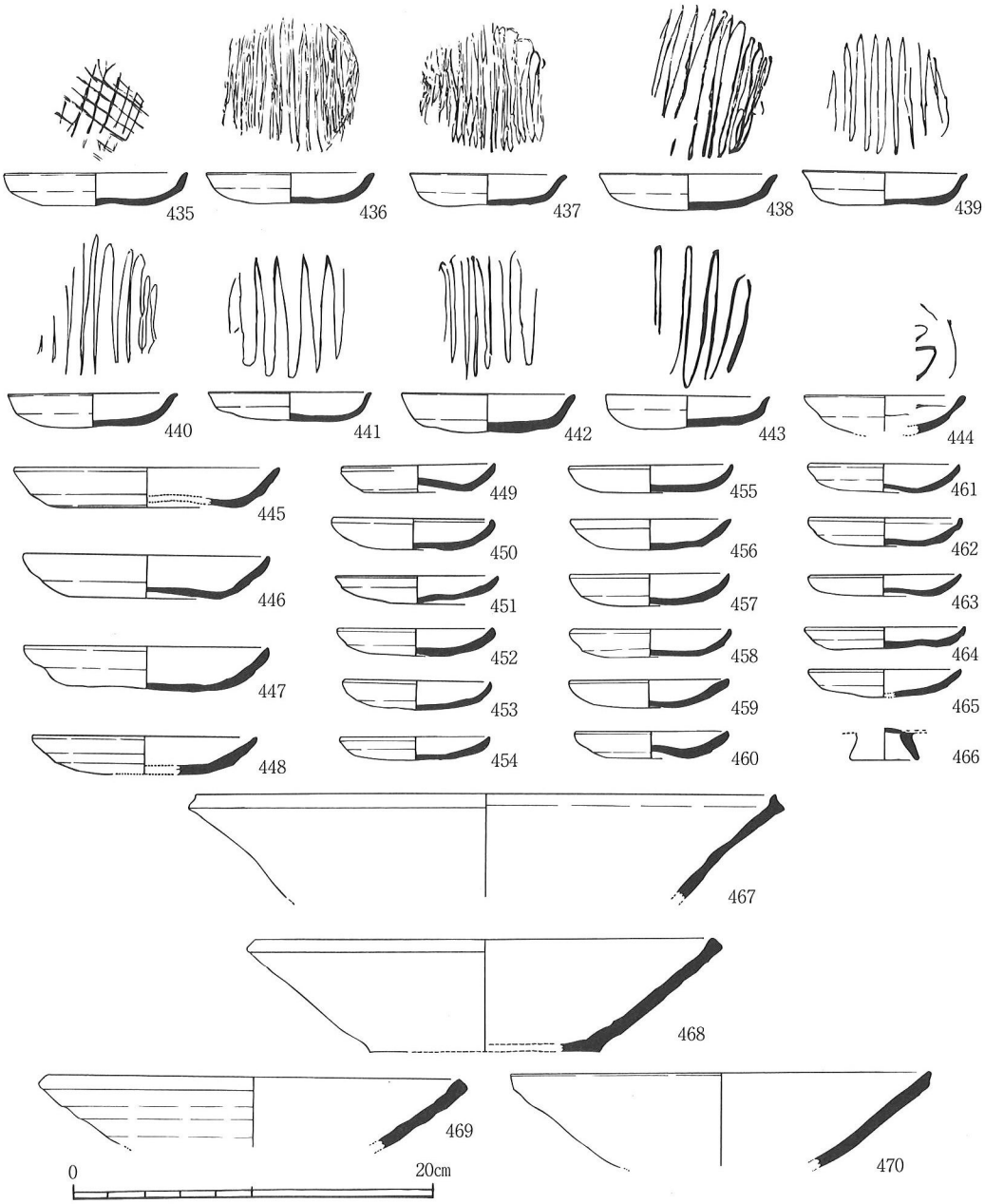
なお，大和型瓦器椀と和泉型瓦器椀の割合は，86.2％対13.8％で圧倒的に大和型が多い。また，下層から出土した大和型瓦器椀はいずれもⅢ－Ａ型式（古）で，中層から上層にかけてⅢ－Ａ型式（新）が認められるようになる。下層～上層の堆積は，漸進的に移り変わっていく様子を伺うことが出来た。

(435～444) は瓦器小皿。(435) はジグザク状暗紋を直交させて格子状暗紋とし，(436～443) はジグザグ状暗紋を施している。(444) は器形，胎土，暗紋ともに他と異なり，河内・和泉地方に多くみられるタイプである。

(445～448) は土師質大皿でいずれも中層出土。(449～466) は土師質小皿である。(466) は台



第65図　58－７区 井戸１ 出土土器 実測図（1／4）



第66図　58－７区 井戸１ 出土土器 実測図（1／4）

付の小皿となるもので，類例は少ない。

（467～469）は東播系練鉢。（470）は須恵器系の練鉢であるが，焼成が不良で瓦質に近く，口縁部の形態も他とまったく異なり，生産地を特定することができない。

井戸の埋没は12世紀後葉頃と考えられる。なお，（469・470）は近接する井戸６出土の破片と接合した。

井戸10（第67～72図471～520，図版86b～88）

最上層から（489～491・493），1回目土器群から（472・474～478・480～486・492・497・499・505・507・509・510・512・514・517・519），2回目土器群から（487・508・520），3回目土器群から（471・473・494・503），下層から（488）が出土した。なお，（479・501・506・513・515）は1回土器群と2回目土器群のものが，（518）は1回土器群と3回目土器群のものが，（495・504・511）は1回土器群～3回目土器群のものが，（516）は3回土器群と4回目土器群のものが，（496・498・500）は最上層と1回目土器群のものが，（502）は最上層～2回目土器群のものが接合した資料である。また，（500・510）は井戸1中層のものと接合した資料である。

（471～479）は瓦器椀。（471～478）は大和型でⅡ－B型式ないしⅢ－A型式（古相）に相当するが，Ⅲ－A型式（古相）を中心とする。口径13.9～14.7cm，器高4.9～5.4cm，底径4.3～5.3cmをはかる。（479）は和泉型で，口径14.7cm，器高4.85cm，底径5.0cmをはかる。内面上半のヘラミガキがかなり疎になっている。Ⅱ－3期にあたる。大和型瓦器椀と和泉型瓦器椀の割合は，95.7%対4.3%で，ほとんどが大和型である。なお、3回目土器群から出土した大和型瓦器椀はいずれもⅡ－B型式で，1回目土器群から出土したものにはⅢ－A（古相）型式が加わる。1回目および2回目土器群での大和型と和泉型瓦器椀の供伴関係から，Ⅲ－A型式（古相）とⅡ－3期は併行関係にあると考えられる。

（480）は瓦器小椀。口径8.9cm，器高3.3cmをはかる。胎土・ヘラミガキ・暗紋・口縁内端面の沈線などの調整ともに，大和型瓦器椀と共通している。（481～483）は瓦器小皿。口径8.6～9.0cm，器高1.4～2.0cmをはかる。内底面に10回前後のジグザグ状暗紋を施す。なお，（483）は器形，胎土，暗紋ともに他の2点とは異なり，河内・和泉地方に多く見られるタイプである。

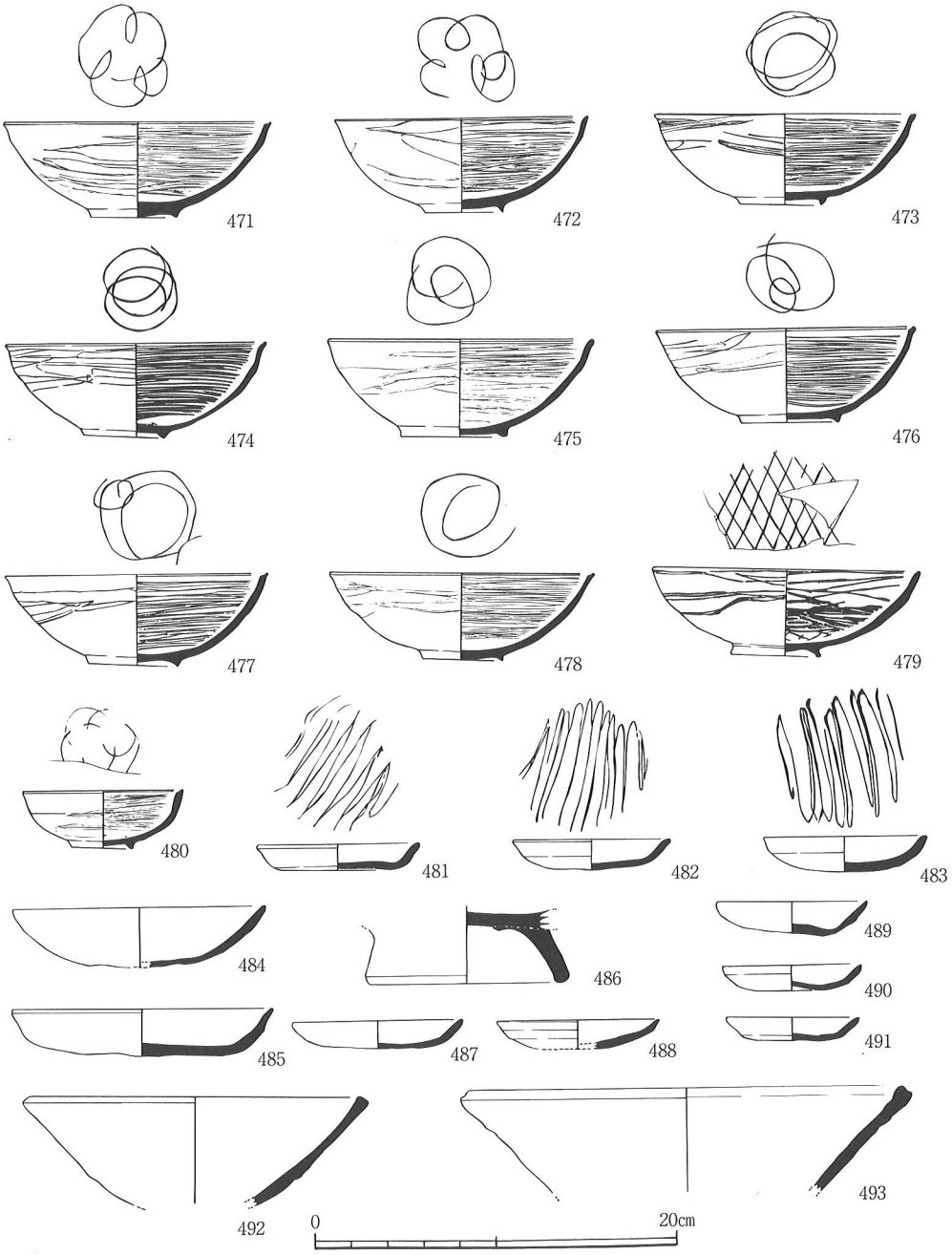
（484・485）は土師質大皿。（486）は土師質の高台であるが全体の器形は不明。（487～491）は土師質小皿である。（492・493）は東播系練鉢。（493）の口縁端部は浅い凹線上に凹んでいる。

（494～519）は土師質羽釜。「く」の字に外反する口縁部の端部を内側に折り返すもの（494～512）がほとんどである。このタイプには口径24cm程度のものと口径30cm程度のものの2種ある。胴部内外面はナデ調整であるが，内面のハケメが十分にナデ消されていないものも少数存在する。胎土は細かい石英を多く含み，やや粗い。色調は灰色系であるが，（512）のみは橙色を呈する。大和地方に類例が多く，大和産と考えられる。

（515・516）は河内地方に広く分布するもので，胴部内外面を板ナデにより調整する。胎土は石英粒などを多く含み粗い。色調は橙褐色系である。

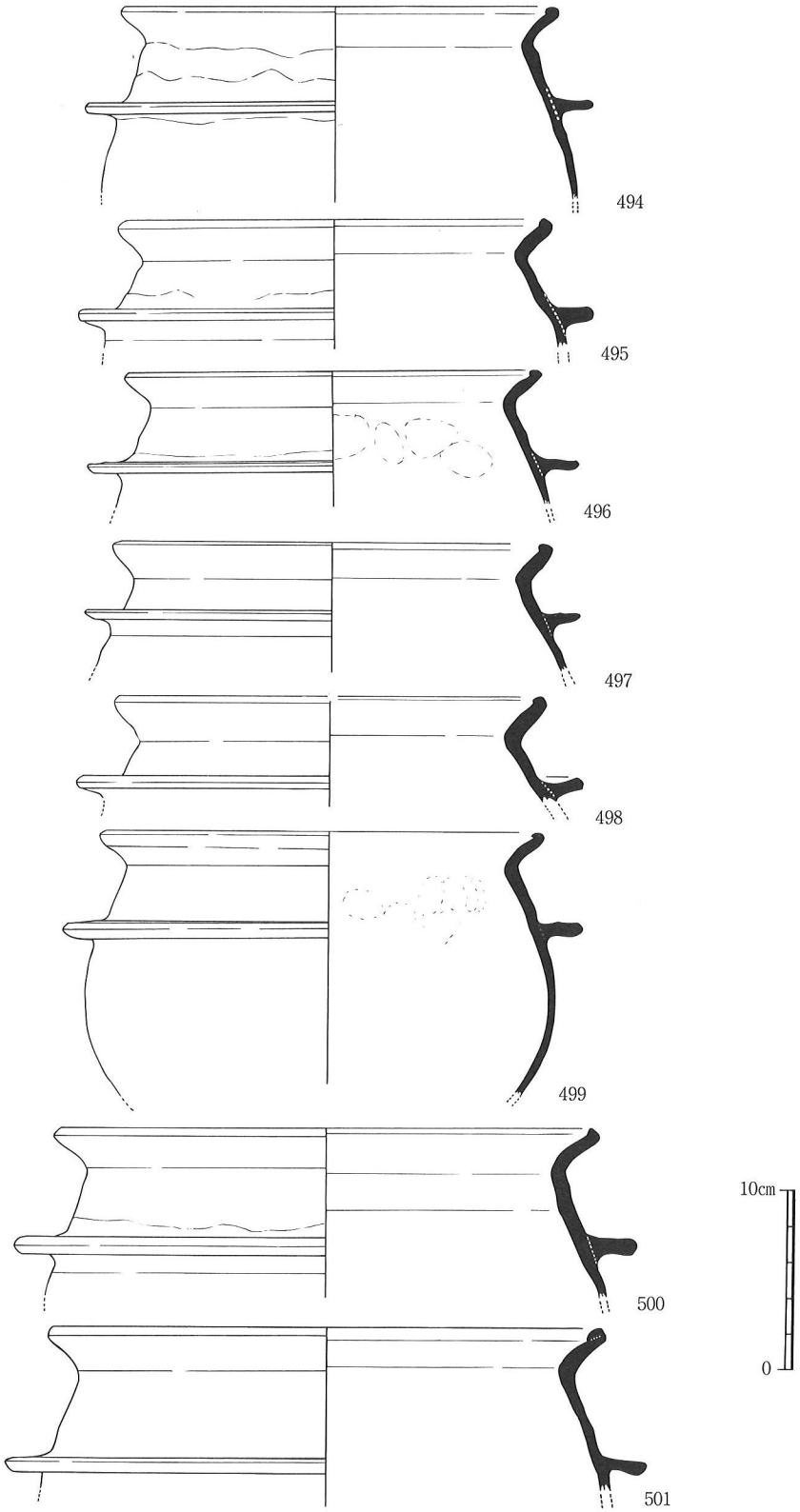
（517～519）は胴部外面をヘラケズリするものである。胎土はやや粗く，色調は橙褐色系である。（513）は口縁部が内傾するもので，当地域では類例がないタイプである。（514）は胎土に角閃石を含む，いわゆる生駒西麓産の土器であるが，古代のそれに比べると胎土は良質である。内外面は丁寧なナデ調整である。

（520）は土師質竈形（かまどがた）土器。上部と底部の破片があり，接合しないが同一個体であることは確

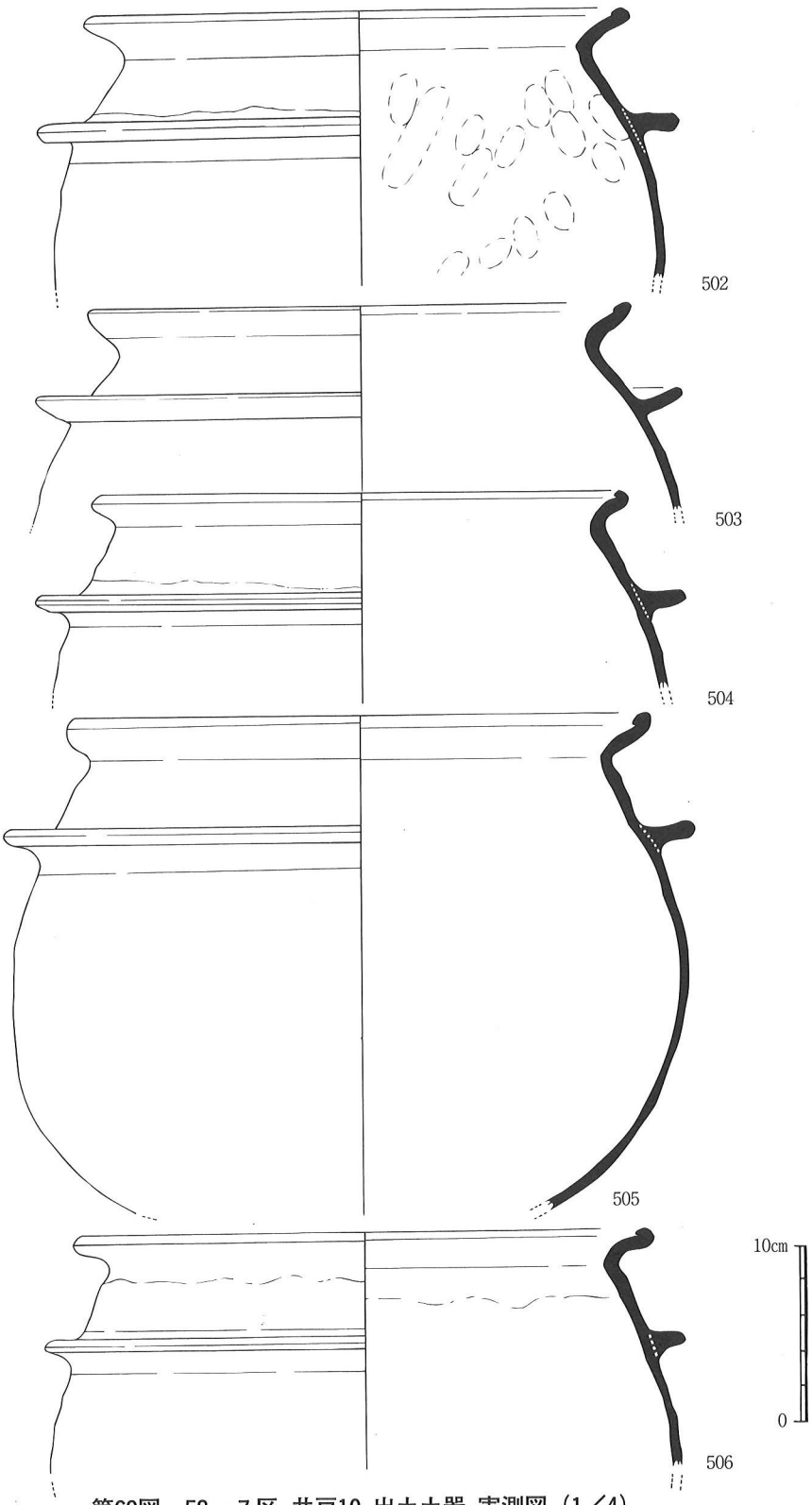


第67図　58－７区 井戸10 出土土器 実測図（1／4）

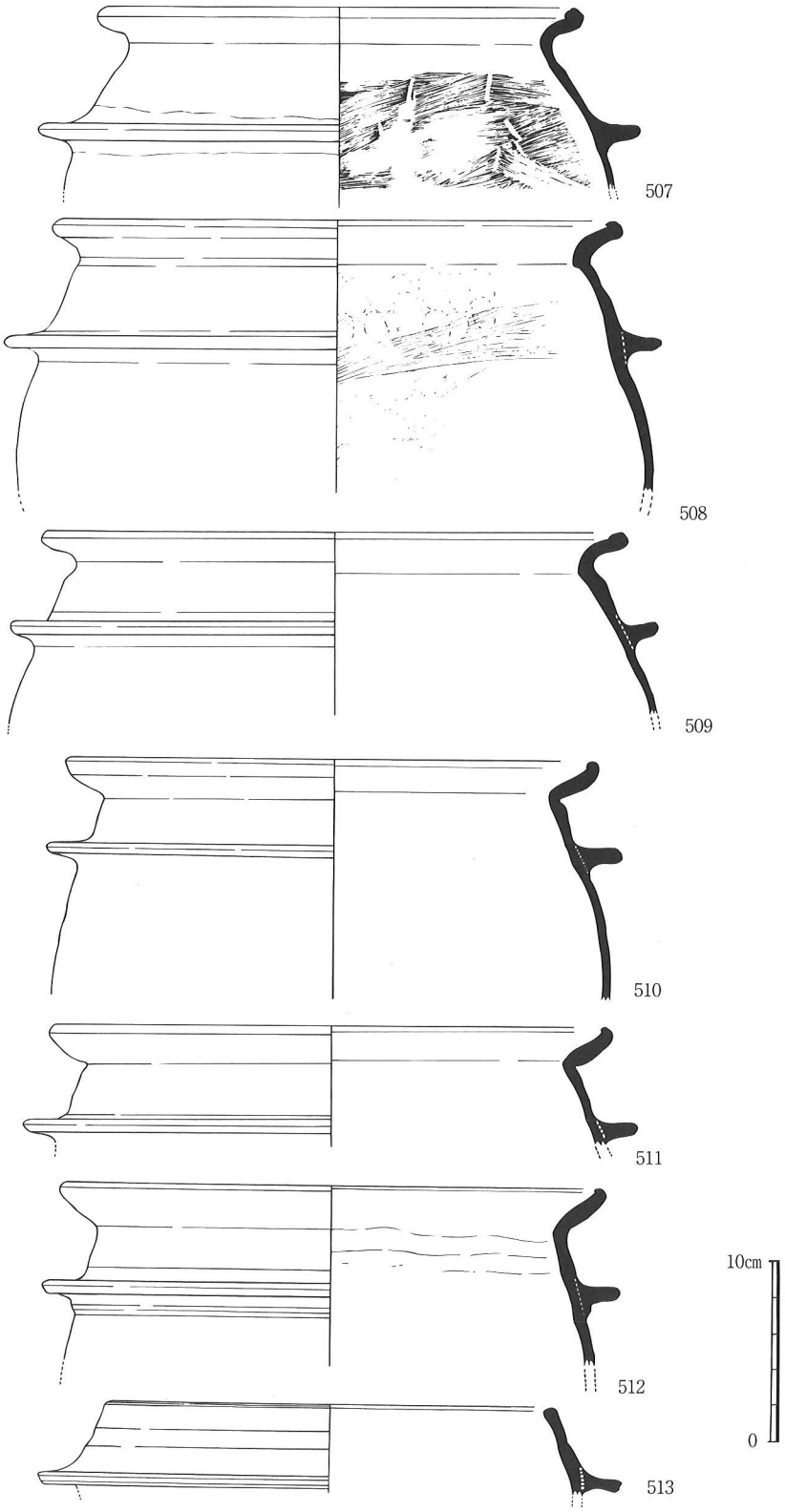
実と思われる。庇（ひさし）は釜口に接して斜め上方に伸びている。側面上部には把手（とって）の痕跡と考えられる乳状の突起が付いている。調整は外面はタテ方向，内面がヨコ方向のハケメである。井戸の埋没は12世紀後半である。



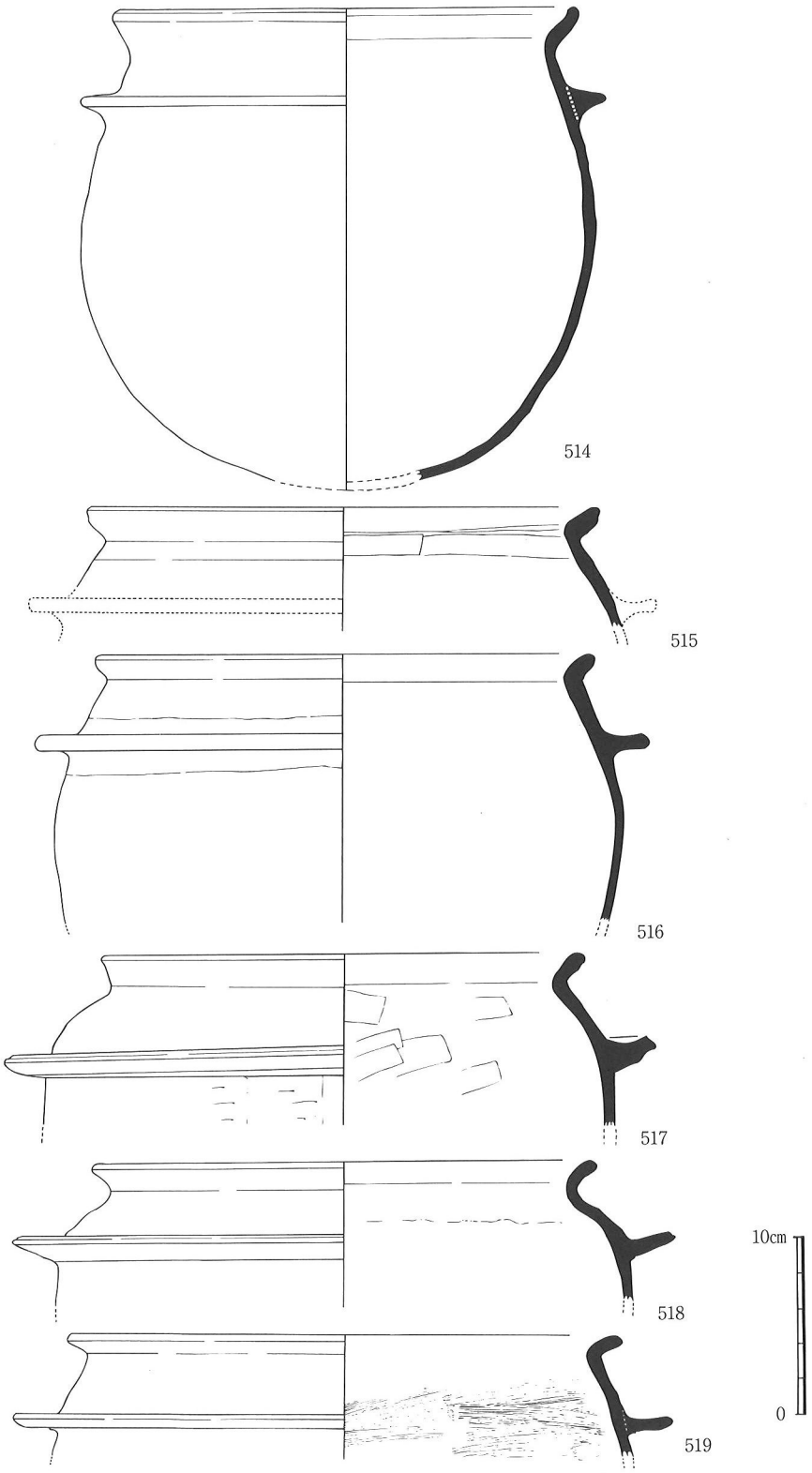
第68図　58－７区 井戸10 出土土器 実測図（1／4）



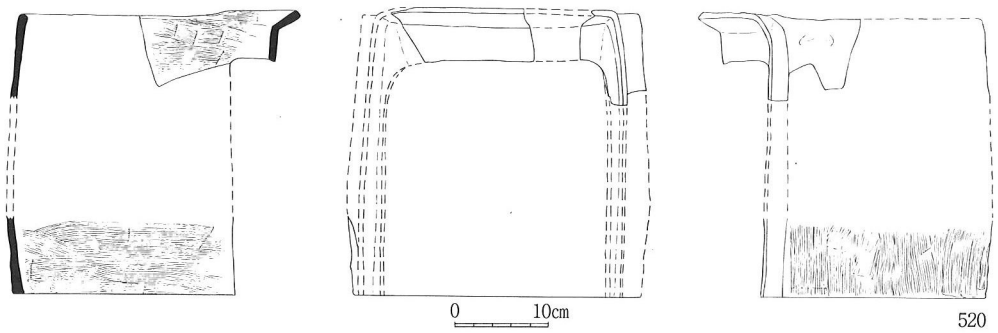
第69図　58－７区 井戸10 出土土器 実測図（1／4）



第70図　58－７区 井戸10 出土土器 実測図（1／4）



第71図　58－７区 井戸10 出土土器 実測図（1／4）



第72図　58－7区 井戸10 出土土器 実測図（1／8）

井戸2（第73図，図版89）

井戸の機能消失後の窪みに堆積したと考えられる上層から（533），井戸の掘り方から（544・547），上段井側内から（525・535・538・540・546・549），下段井側内から（521～524・526～532・534・536・537・539・541～543・545・548）が出土した。

（521～533）は瓦器椀。（521～526）は大和型で，Ⅲ－A型式（新相）からⅢ－B型式に相当する。（521～525）は口径13.7～14.3cm，器高4.5～4.7cm，底径4.3～4.8cmをはかる。Ⅲ－A型式（新相）。（526）は口径13.0cm，器高4.6cm，底径4.8cmをはかる。Ⅲ－B型式。なかには底部が高台より下に出て，高台が充分に機能しないもの（525・526）がみられる。

（527～533）は和泉型で，見込みの暗紋には平行線状，連結輪状，ジグザグ状のものがある。上層出土の（５３３）を除いてⅢ－３期～Ⅳ－１期にあたる。

なお，上下段井側内出土の大和型瓦器椀と和泉型瓦器椀の割合は56.7対43.3で，ほぼ拮抗している。

また，下段井側内出土の大和型瓦器椀と和泉型瓦器椀の供伴関係から，大和型Ⅲ－A型式（新相）と和泉型Ⅲ－３期，Ⅲ－B型式とⅣ－１期はそれぞれ併行関係にあると考えら，両地域の時間軸を窺い知る上で良好な資料といえる。

（534～538）は瓦器小皿。口径8.2～9.8cm，器高1.3～1.7cmをはかる。いずれも内底面にジグザグ状暗紋を施す。

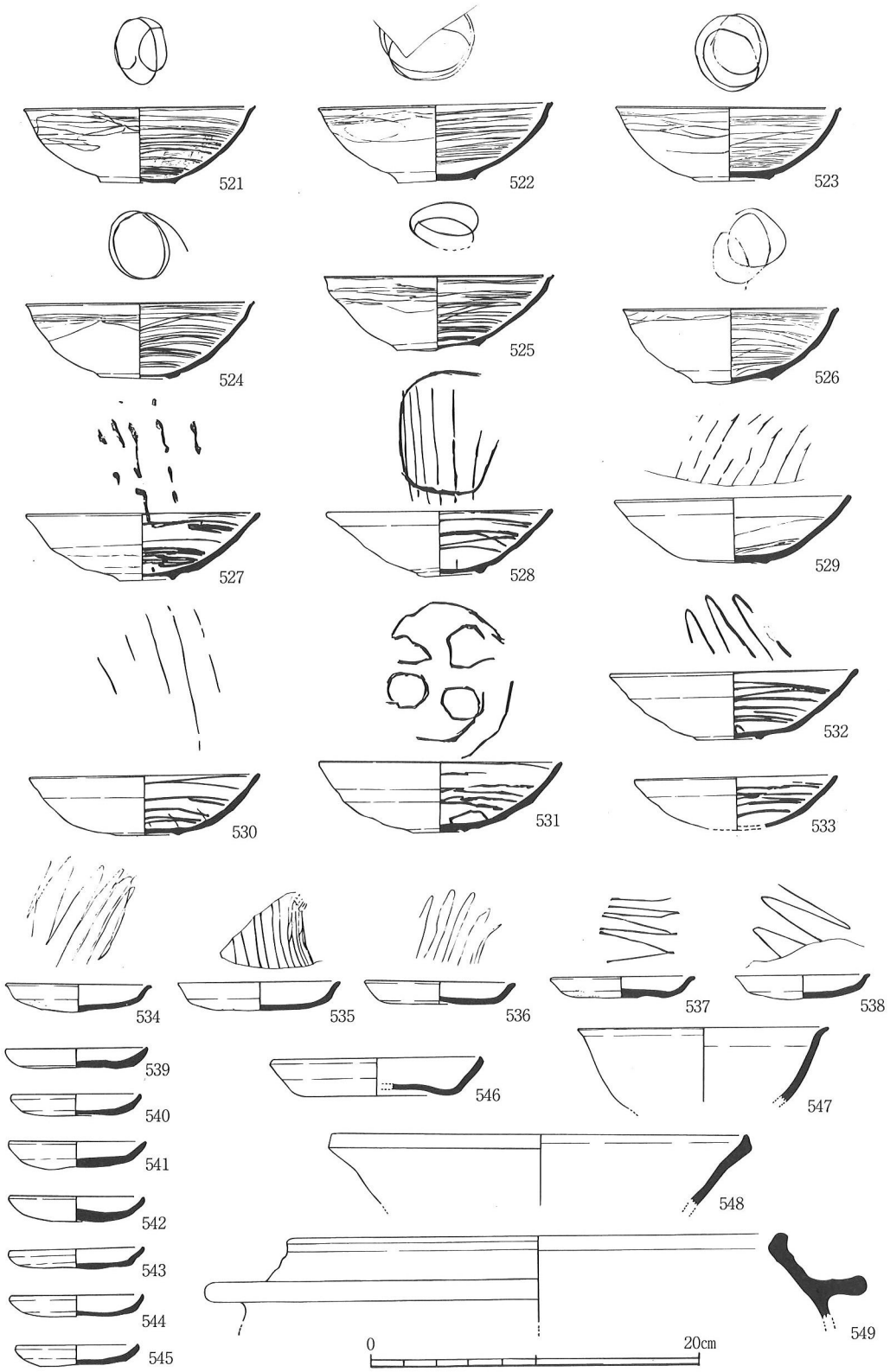
（539～545）は土師質小皿で，口径7.4～8.6cm，器高1.15～1.55cmをはかる。

（546）は土師質大皿で，口径12.6cmをはかり，立ち上がり部が強く屈曲している。

（547）は口径14cmをはかる白磁碗で，横田・森田氏の分類によればⅤ類に相当する。(註1)

（548）は東播系練鉢で，口径は25.2cmをはかる。口縁端部は軽く上方につまんでいる。

（549）は土師質羽釜で河内地方に一般的にみられるもので，口径30.1cmをはかる。口縁部の屈曲が短くなり，上方に伸びている。これらの資料から，井戸の時期は13世紀前葉～中葉頃と考えられる。



第73図　58－７区 井戸２ 出土土器 実測図（1／4）

井戸3（第74～76図550～629，図版90～92）

1回目土器群より（550・552・555～558・561・564・568・571・572・575・579～584・588～590・592・594・596～599・603～605・609～611・613・615・616・619・620～623），2回目土器群から（551・553・562・563・565・567・569・570・572・576～578・586・591・593・600～602・606・608・626・628），3回目土器群から（566・574・587・607・612・629）が出土した。

なお，（614・624）は1回目土器群と2回目土器群のものが，（554・585・617・618・625）は2回目土器群と3回目土器群のものが接合した資料である。

（550～562）は瓦器椀。（550～556）は大和型でⅢ－C型にあたる。口径は12.3～12.9cm，器高3.8～4.3cm，底径3.8～4.8cmをはかる。内面の圏線ミガキと見込みの暗紋に重なりのあるものが多く，内面から見込みまで一連の圏線ミガキになるものもある。高台はほとんど形骸化し，ナデつけが不十分なため，焼成時の剥離が目立つ。

（557～561）は和泉型でⅣ－Ⅰ期ないしⅣ－2期にあたる。見込みに平行線状暗紋を施すものがⅣ－2期まで見られることは，西ノ辻遺跡57－4区土坑19においても認められた。(註2)

大和型瓦器椀と和泉型瓦器椀の割合は82.4％対17.6％で大和型が多い。なお，大和型はⅢ－C型式でまとまるが，1回目土器群のものは2・3回目土器群のものと比べて全体に小ぶりで器高が低いという傾向を指摘することが出来る。この二つのタイプは和泉型瓦器椀のⅣ－Ⅰ期・Ⅳ－2期にそれぞれ対応するのかも知れない。

（562）はロクロ成形の瓦器椀で，高台は貼りつけている。口径14.2cm，器高4.5cm，底径4.8cmをはかる。口縁内端部と外面上位幅約2cmだけが黒灰色を呈し，他は乳白色を呈する。香川県に類例が見られる。

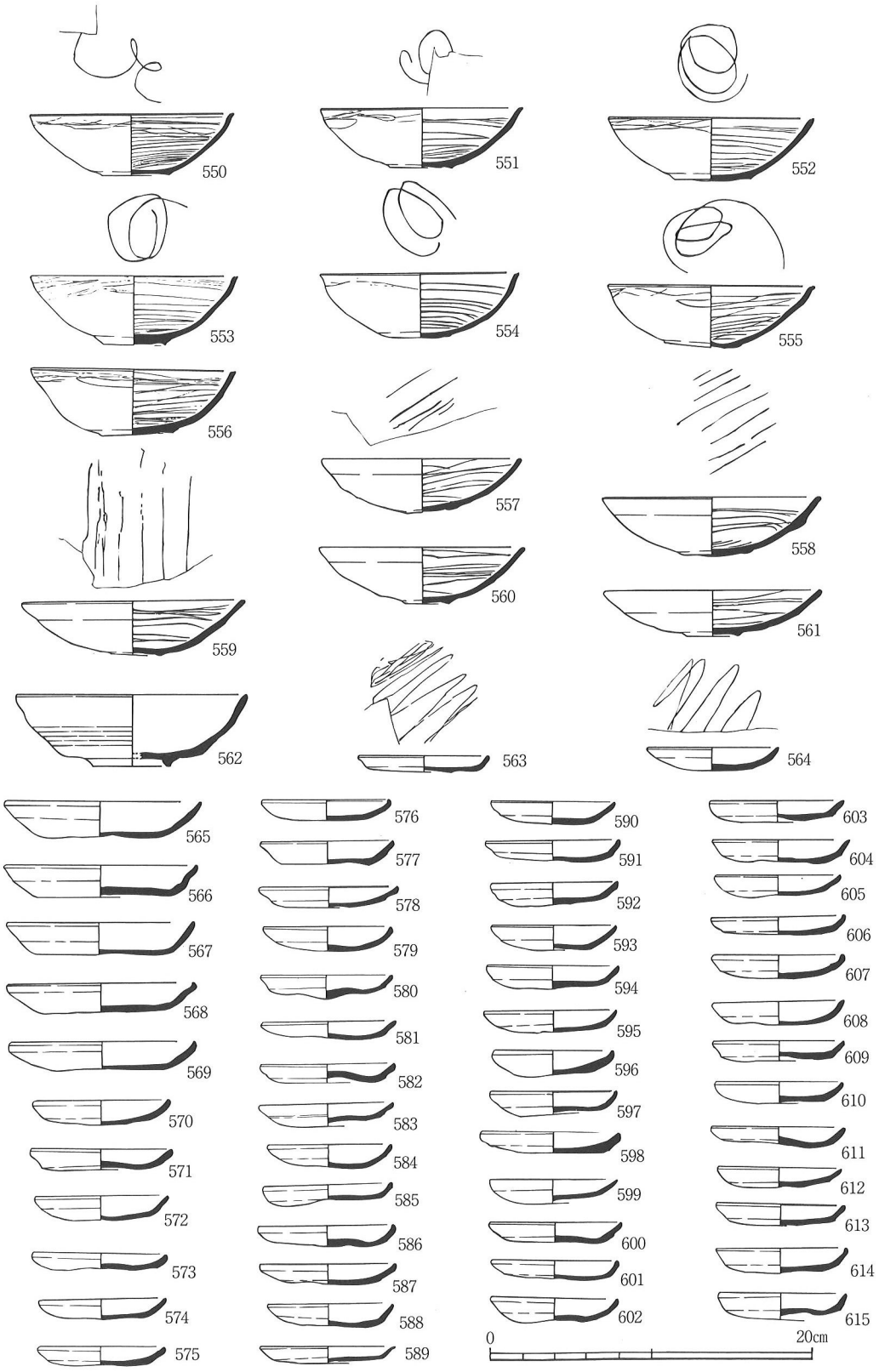
（563・564）は瓦器小皿で，口径8.1cm，器高1.0～1.5cmをはかる。

（565～569）は土師質大皿。いずれも立ち上がり部が強く屈曲するもので，口径は11.3～12.0cm，器高1.8～2.2cmをはかる。（570～615）は土師質小皿で，口径は7.2～8.6cmをはかる。

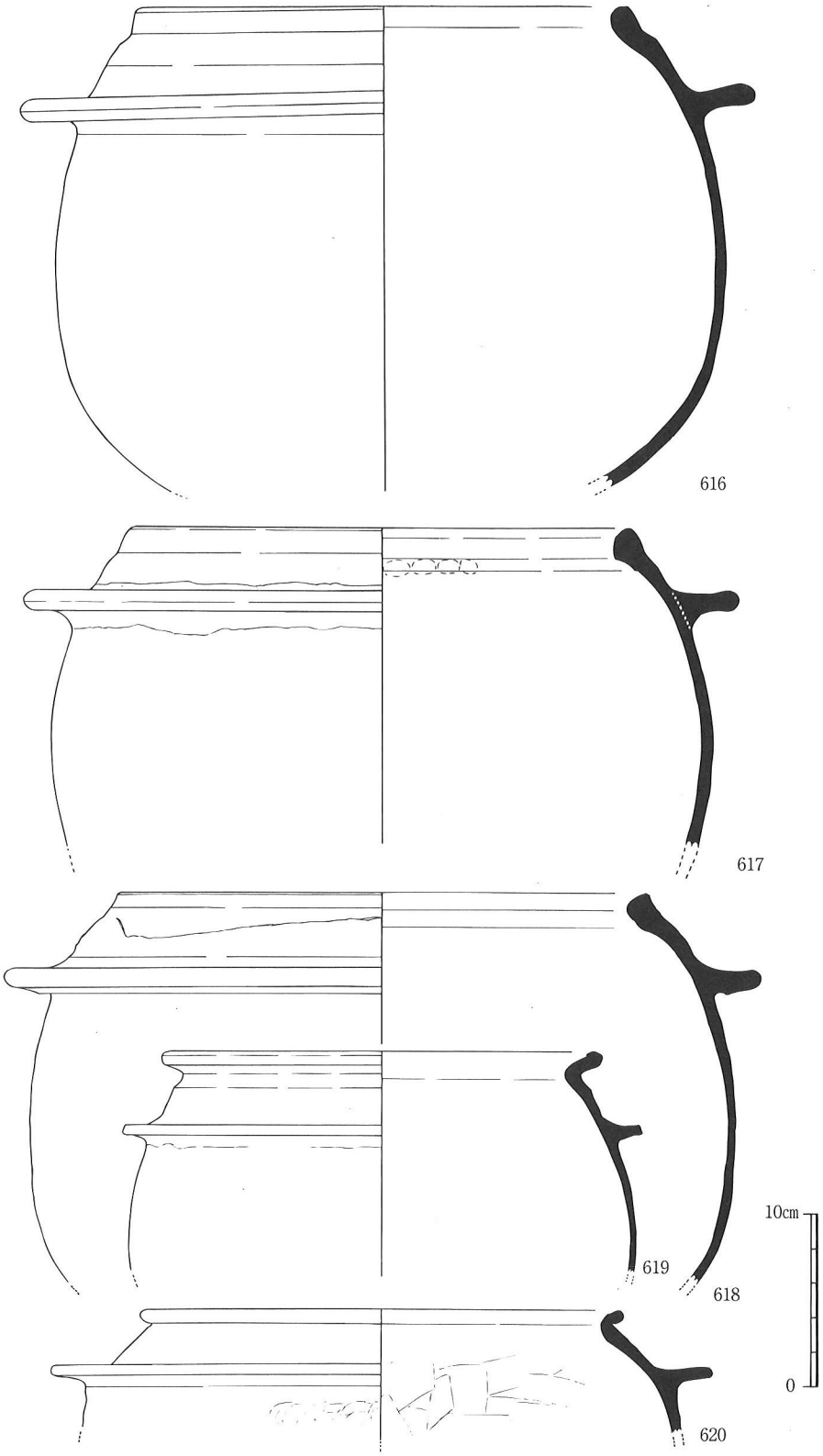
（616～620）は土師質羽釜。（616～618）は河内地方に多く見られるタイプもので，口縁部の肥厚が著しい。口径は28.0～30.5cmをはかる。（619）は大和地方からの搬入品である。口径は24.3cmをはかる。（620）は口径27.1cmをはかる。胴部外面をヨコ方向にヘラケズリ調整した後，下から上にかけて更にヘラケズリ調整を施す。祖形と思われる同タイプのものが井戸10から出土している（第71図517～519）。

（621～628）は瓦質三足。口径16～20cm程度で，胴部最大径23cm前後をはかるもの（621～625）と口径14cm程度で，胴部最大径19cm前後のもの（626～628）の2種がある。いずれも外面は指おさえで，凸凹が激しく，煤が厚く付着している。内面はヨコ方向の非常に細かいハケ調整である。（625）は足の付く位置，口縁部の形態が他のタイプと異なっている。

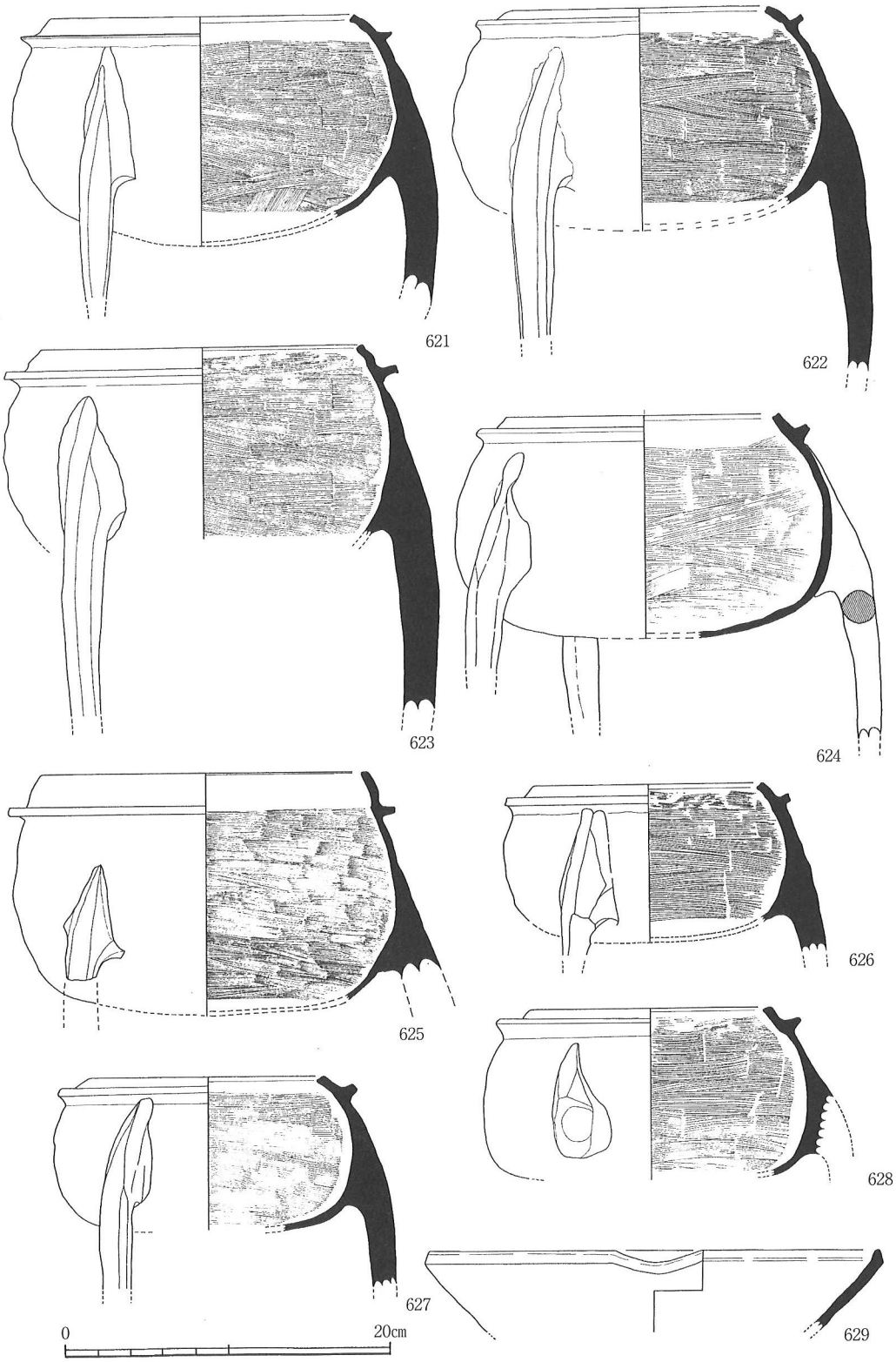
（629）は東播系練鉢。口縁端部やや上方に伸びている。井戸の埋没は，13世紀中頃から後葉頃と考えられる。



第74図　58－７区 井戸３ 出土土器 実測図（1／4）



第75図　58－７区 井戸３ 出土土器 実測図（1／4）



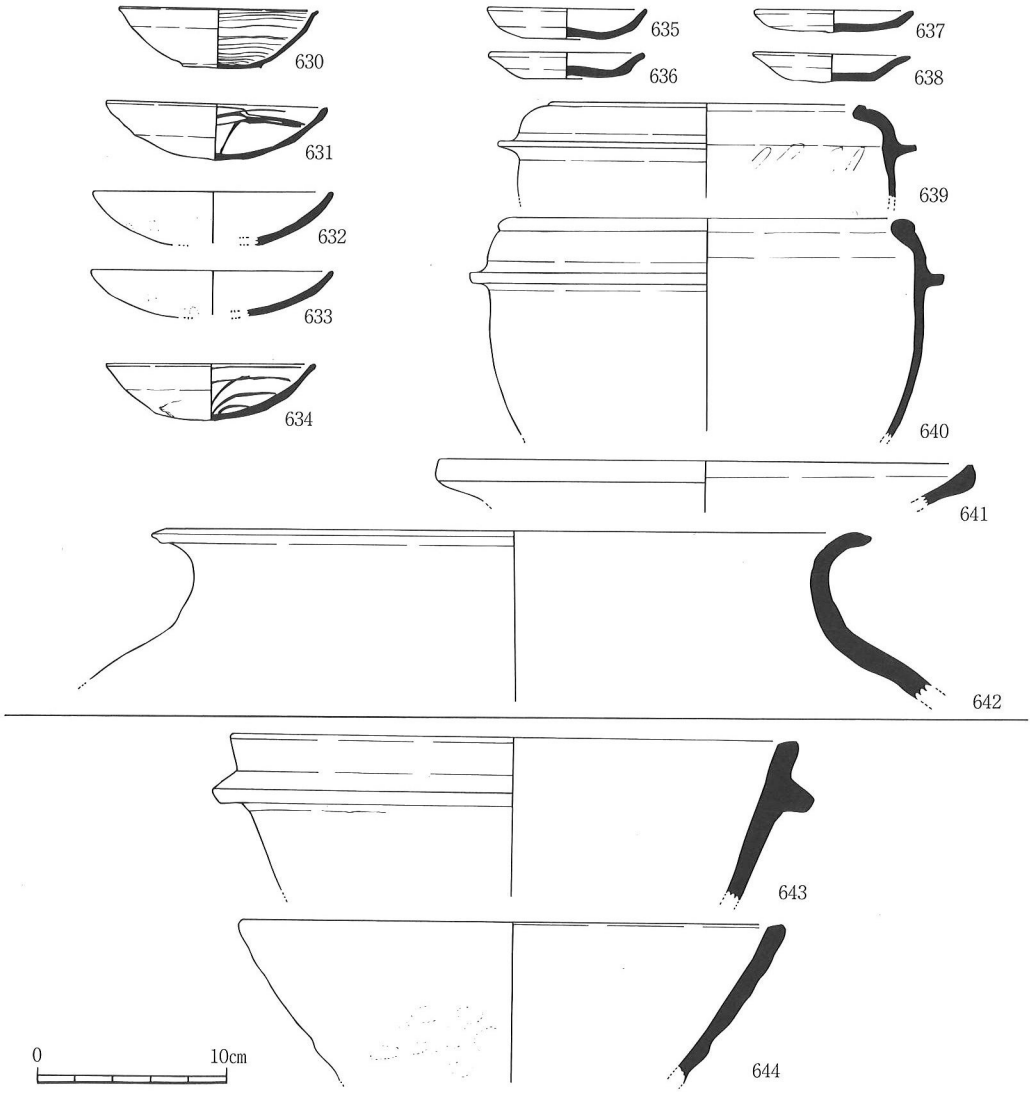
第76図　58－７区 井戸３ 出土土器 実測図（1／4）

井戸4（第77図630～642，図版93）

上層から（631・632），下層から（633・635～637・639・640・642），最下層から（630・634・638・641）が出土した。

（630～634）は瓦器椀。（630）は口径10.5cm，器高3.2cm，底径4.1cmをはかる大和型瓦器椀で，Ⅲ－E型式にあたる。外面のヘラミガキは施されず。内面は見込みまで一連の圏線ミガキである。（631～634）は和泉型でⅣ－3期ないしⅣ－4期にあたる。見込に暗紋を施すものは見られない。

なお，（634）は口径10.8cm，器高3.0cmをはかり，（630）と最下層で接して出土した。明らか



第77図　58－7区 井戸4・9 出土土器 実測図（1／4）

に出土状況から，共存と考えられ，両地域の併行関係をうかがい知る上で貴重な例といえる。

（635～638）は土師質小皿。口径 8.0～8.4cmをはかる。（639・640）は土師質羽釜で，口径16.2～20.6cmをはかる。口縁部は内弯し，端部を上方に折り返している。内外面ともナデ調整である。大和地方によく見られるタイプである。（641）は東播系練鉢。口縁端部を下方に肥厚させている。（642）は常滑焼甕で，口径37cmをはかる。12世紀後半頃の所産と考えられる。

井戸の時期は最下層から出土した瓦器椀から，14世紀前葉頃と考えられる。

井戸9（第77図643・644）

（643）は瓦質羽釜で，口径29.6cmをはかる。石鍋を思わせる形態を示す。胎土は精良で黒灰色を呈する。器面には光沢がある。西ノ辻遺跡59－3区井戸5(註3)からも同タイプのものが出土しており，大和型瓦器椀のⅣ－B型式と和泉型Ⅳ－5期がこれに伴っていた。

（644）は瓦質すり鉢で，口径28.4cmをはかる。外面は，成形時の指おさえによる凸凹をそのまま残している。口縁端部は軽く面取りされている。すり目はかなり磨り減っている。

以上，これらの資料から井戸9の時期は，14世紀中葉頃と考えられる。

井戸7（第78～81図645～688，図版94～96a）

上層から（650・651・653・657・660・661・668・681・683～687），中層から（648・655・658・669・674～676・678～680・682・688），下層上位から（646・652・656・662・663・667・671・672），下層下位から（647・654・664・665・670・673・677），最下層から（645・649・659）が出土している。

（645～649）は瓦器椀。（645・646）は大和型で，口縁内端面の沈線はかすかにその痕跡をとどめるだけになっている。Ⅳ－B型式に相当する。（647～649）は和泉型。内面に粗略なミガキが施されているのみで，Ⅳ－4期ないしⅣ－5期に相当する。

（650～653）は土師質大皿。立ち上がりの屈曲部の器壁が薄くなり，口縁部のヨコナデの下端付近が肥厚している。（650）は立ち上がり部に近い底部に一ヶ所，焼成後の穿孔がなされている。

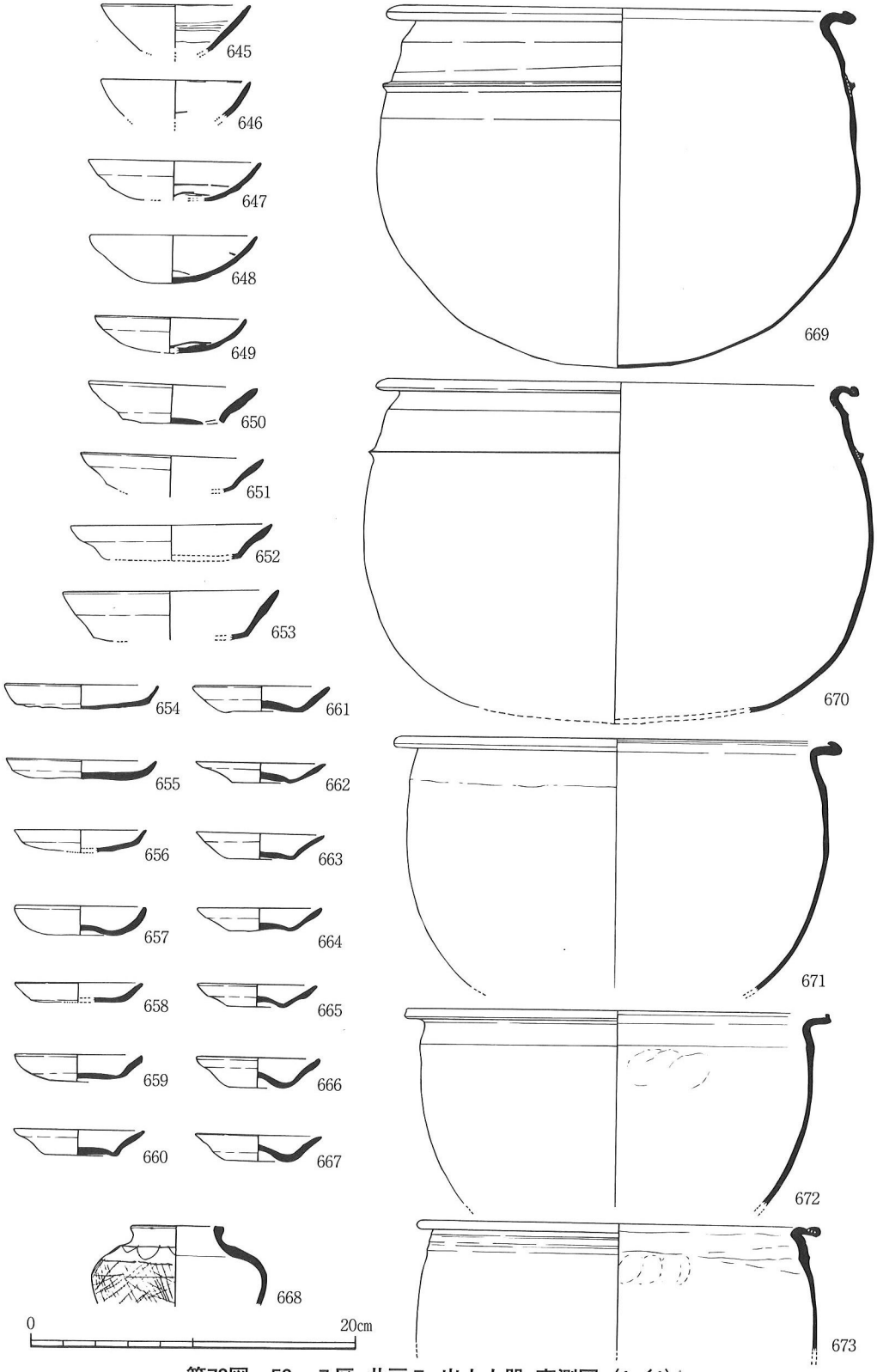
（654～667）は土師質小皿。大皿同様の形態をもつものの他，いわゆる「ヘソ皿」となるものなどがある。胎土はいずれも褐色系である。

（668）は瓦器小型壺。肩部に直線と螺旋を組み合わせた暗紋を施し，胴部にはヘラミガキを施す。

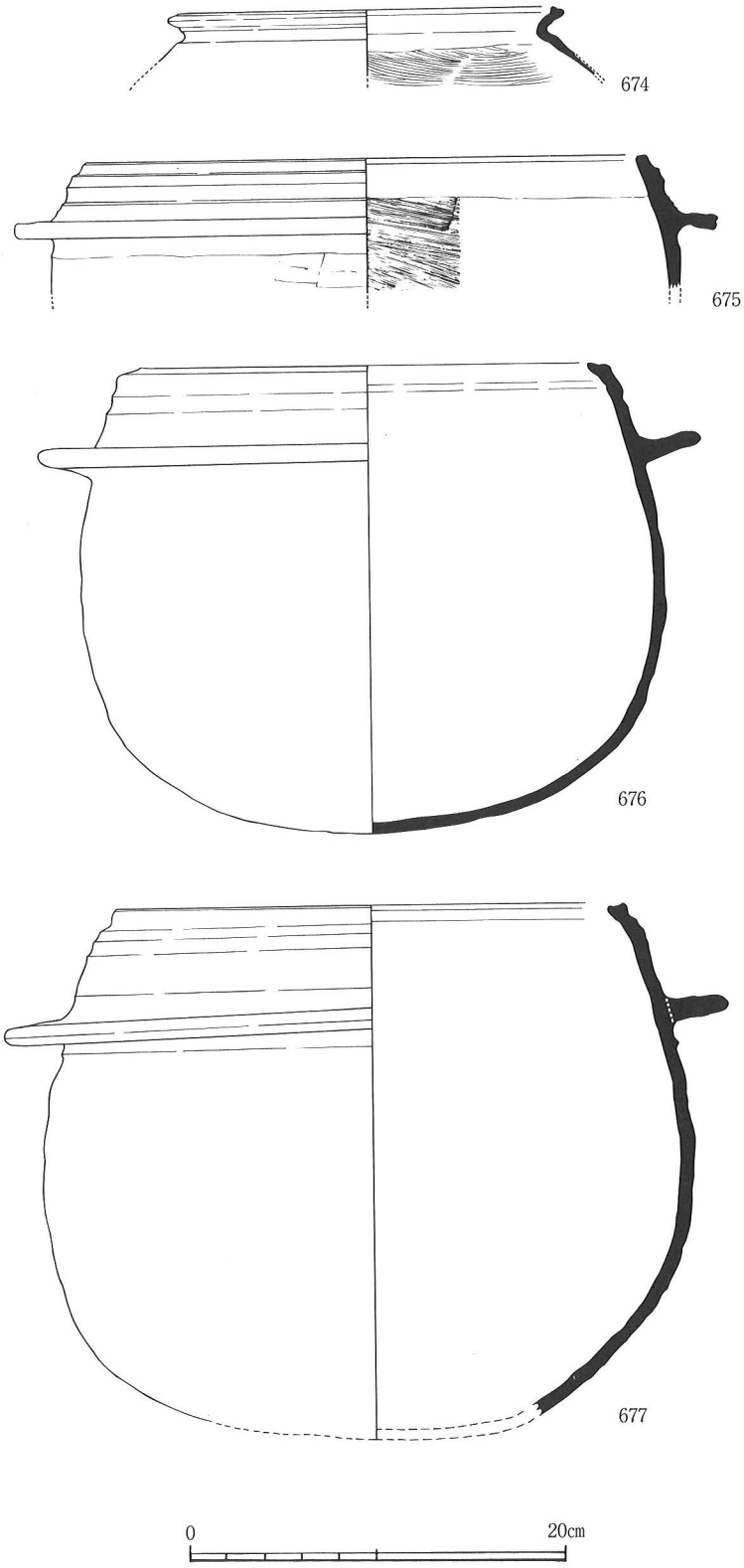
（669・670）は土師質羽釜で，口径27.2～29.0cmをはかる。鍔は著しく退化している。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。大和地方からの搬入品と考えられる。

（671～674）は土師質鍋。（671～673）は，（669・670）の羽釜から鍔を取った形態で，同じ系譜になるものであろう。（674）は内面にハケ目を施し，形態的にも他とは異なるが，胎土は共通しており，精良である。

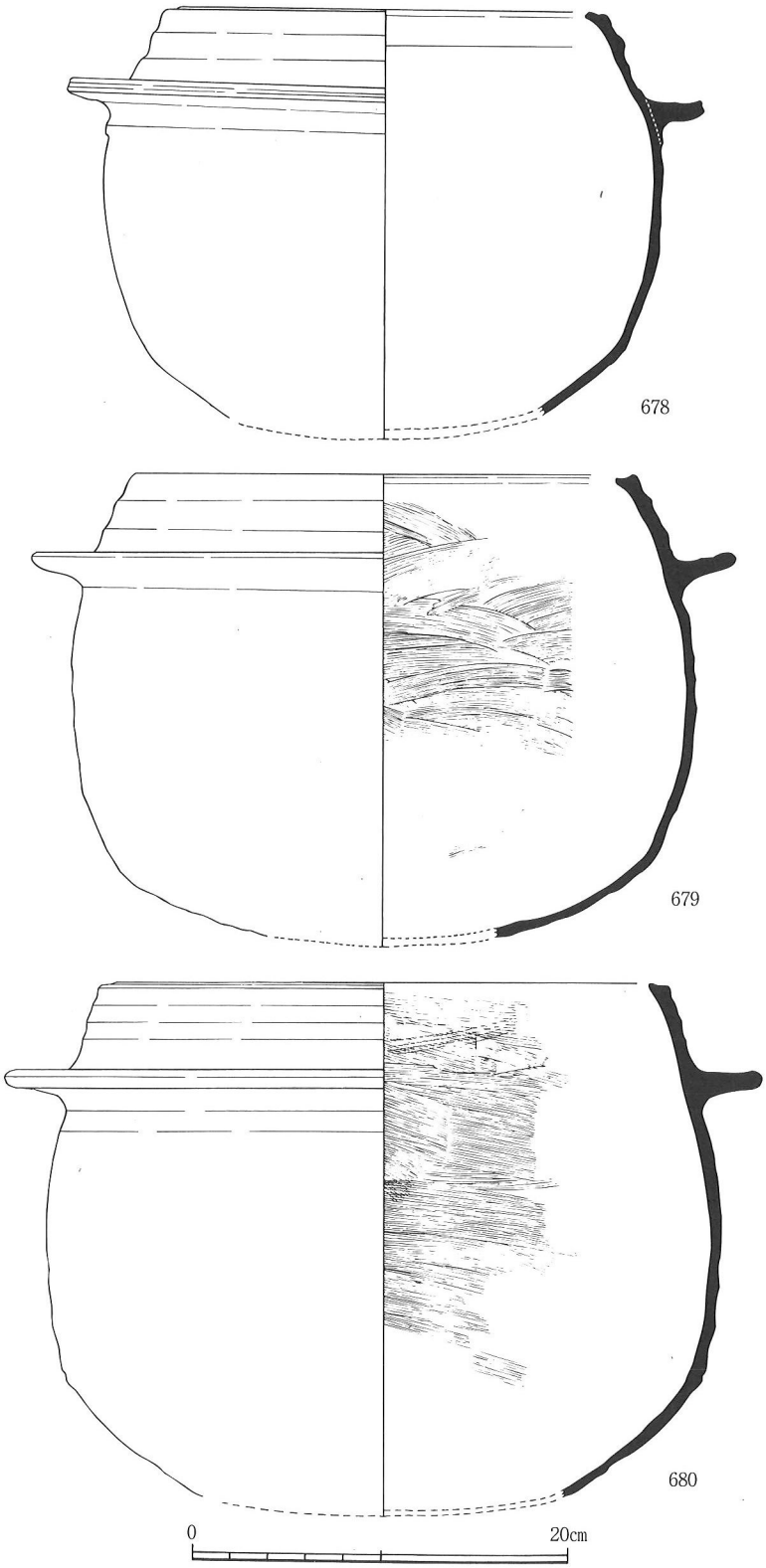
（675～680）瓦質羽釜。（675）は口径29.7cmをはかり，内面にヨコ方向のハケ目，胴部外面にヨコ方向のヘラケズリ調整を施す。形態から瓦質羽釜としたが，炭素を全く吸着しておらず，黄



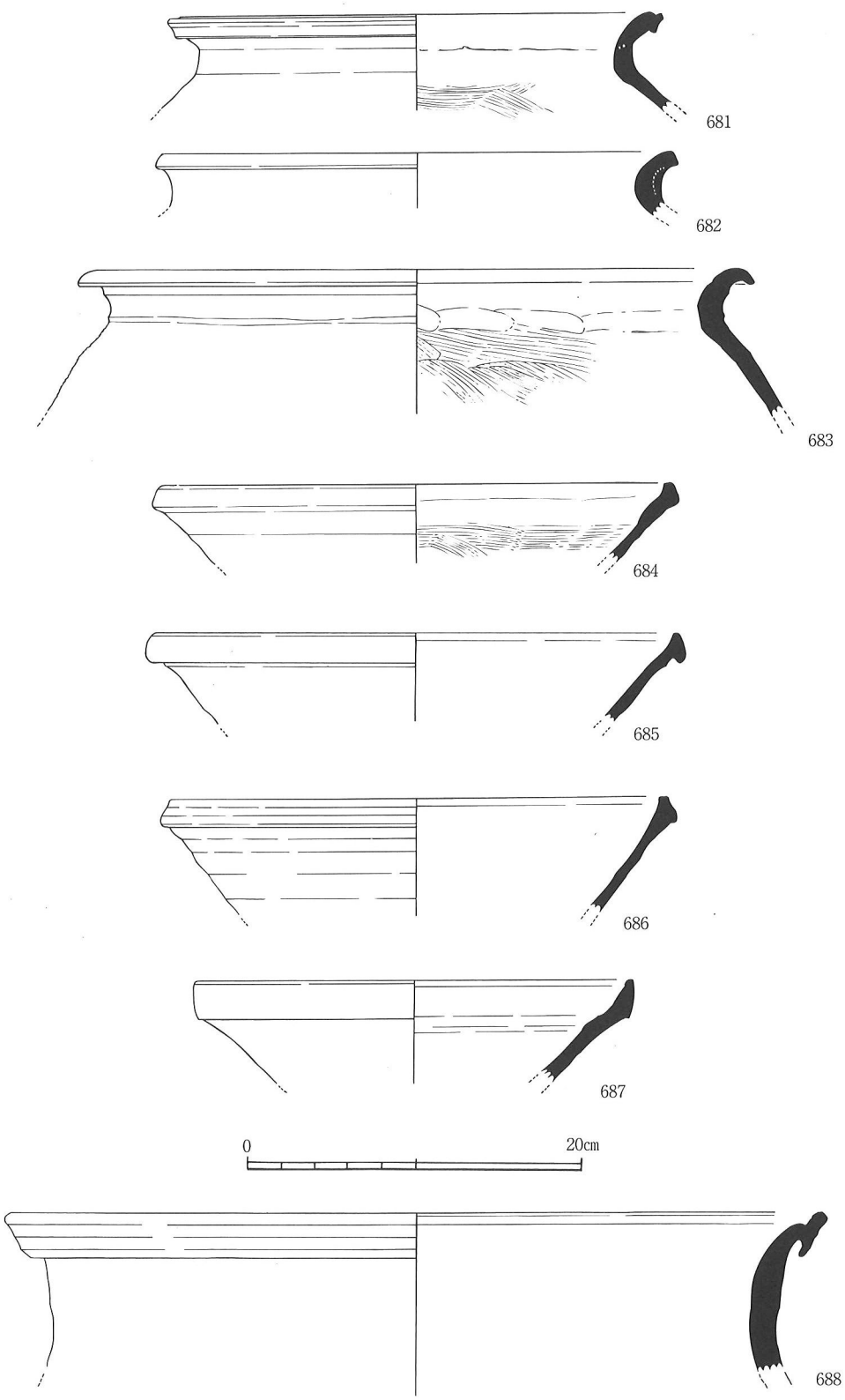
第78図　58－7区 井戸7 出土土器 実測図（1／4）



第79図　58－７区 井戸７ 出土土器 実測図（1／4）



第80図　58－７区 井戸７ 出土土器 実測図（1／4）



第81図　58－７区 井戸７ 出土土器 実測図（1／4）

灰色～灰白色を呈する。(676～680) は内傾する口縁部をもち，胴部外面に成形時の指押さえの後，特に調整を施さない点で共通するが，(679・680) は内面にヨコ方向のハケ目を施す。炭素吸着により，灰黒色を呈するものは (677) のみで，他は灰白色を呈し，部分的に赤橙色を呈するものもある。胎土はやや粗い。

(681) は東播系甕で，口径28.2cmをはかる。(682・683) は瓦質甕である。(683) の口縁部には2回のヨコナデが施されている。

(684～687) は東播系練鉢。口縁端部を上下方に拡張している。(688) は常滑焼甕で，口径は49.2cmをはかる。口縁部を上下に大きく拡張して，幅約2.7cmの縁帯をつくっている。全体に茶褐色～紫褐色の自然釉がかかっている。胎土は紫を帯びた灰色で，やや粗い。

井戸の時期は，下層下位から元徳二年 (1330) 銘の木簡 (第92図808) が出土していることなどから，1330年を上限とする14世紀中葉から後半頃とみられる。

井戸8 (第82図689～693，図版96b)

(689) は土師質小皿。口縁部は外反し，端部は丸くおさめる。色調は赤褐色を呈する。(690) は瓦質小型三足で，口径6.7cm，体部高4.8cmをはかる。口縁直下に短い鍔をもつ。外面は指押さえで丁寧に仕上げられている。香炉として用いられたものであろうか。

(691) は白磁台付皿で，口径9.2cm，器高2.3cm，底径3.1cmをはかる。胎土は灰白色で内面から外面の高台付近まで黄色を帯びた透明釉がかかる。釉には細かい貫入が見られる。高台には4ヶ所に弧状の抉り込みがある。高台の突出部の畳付には釉が付着し，反対に内底面には釉の剥がれた部分が4ヶ所あることから，直接重ねて焼成されたことが知られる。内底面にはヘラ描きによる紋様 (焼成前) があり，高台内には「＋」字の墨書がある。

(692) は瓦質羽釜で，口径19.4cmをはかる。内面はハケ目を施すが，外面は特に調整を施さない。

(693) は瓦質火鉢で，口径28.8cmをはかる。内面は成形時の凹凸がそのまま残るが，外面は弱いヘラミガミによって極めて平滑に仕上げられていて，光沢がある。胎土は精良である。

これらの資料から，井戸の時期は15世紀代と考えられる。

井戸11 (第82図694～697，図版97a)

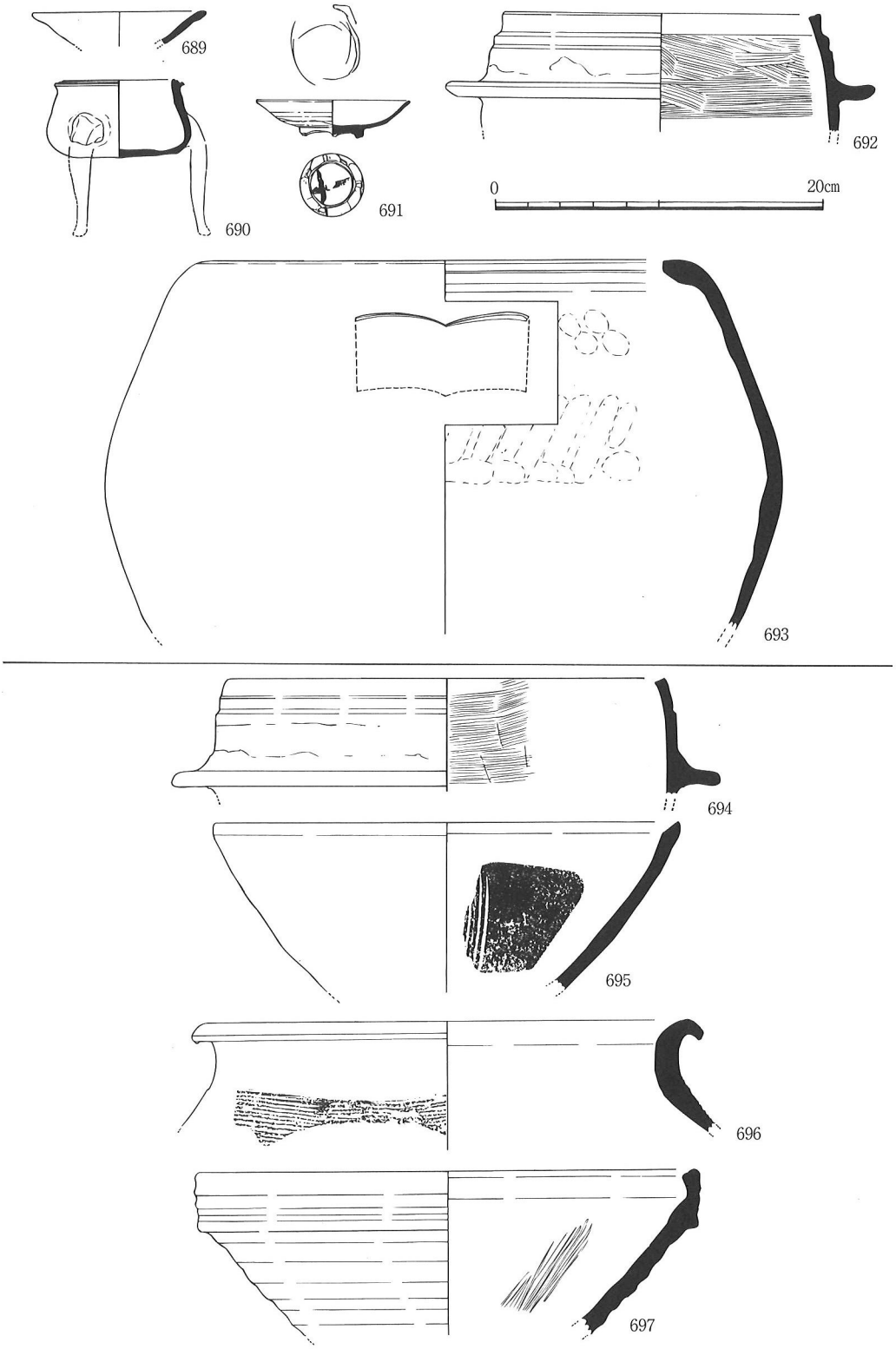
(694) は瓦質羽釜。内面にヨコ方向のハケ目を施す。色調は淡灰色を呈し，鍔下面に煤が付着している。

(695) は瓦質すり鉢。口縁端部は内傾する面をつくって尖り気味におさめている。焼成はやや甘い。

(696) は瓦質甕で，口径29.0cmをはかる。頸部から口縁部はヨコナデ調整を施し，以下は平行タタキ調整を施す。炭素は吸着しておらず，淡灰色を呈する。

(697) は備前焼すり鉢で，口径29.7cmをはかる。口縁端面が上下に拡張されている。

以上の遺物から，井戸の時期は16世紀代と考えられる。いずれも下層より出土した。

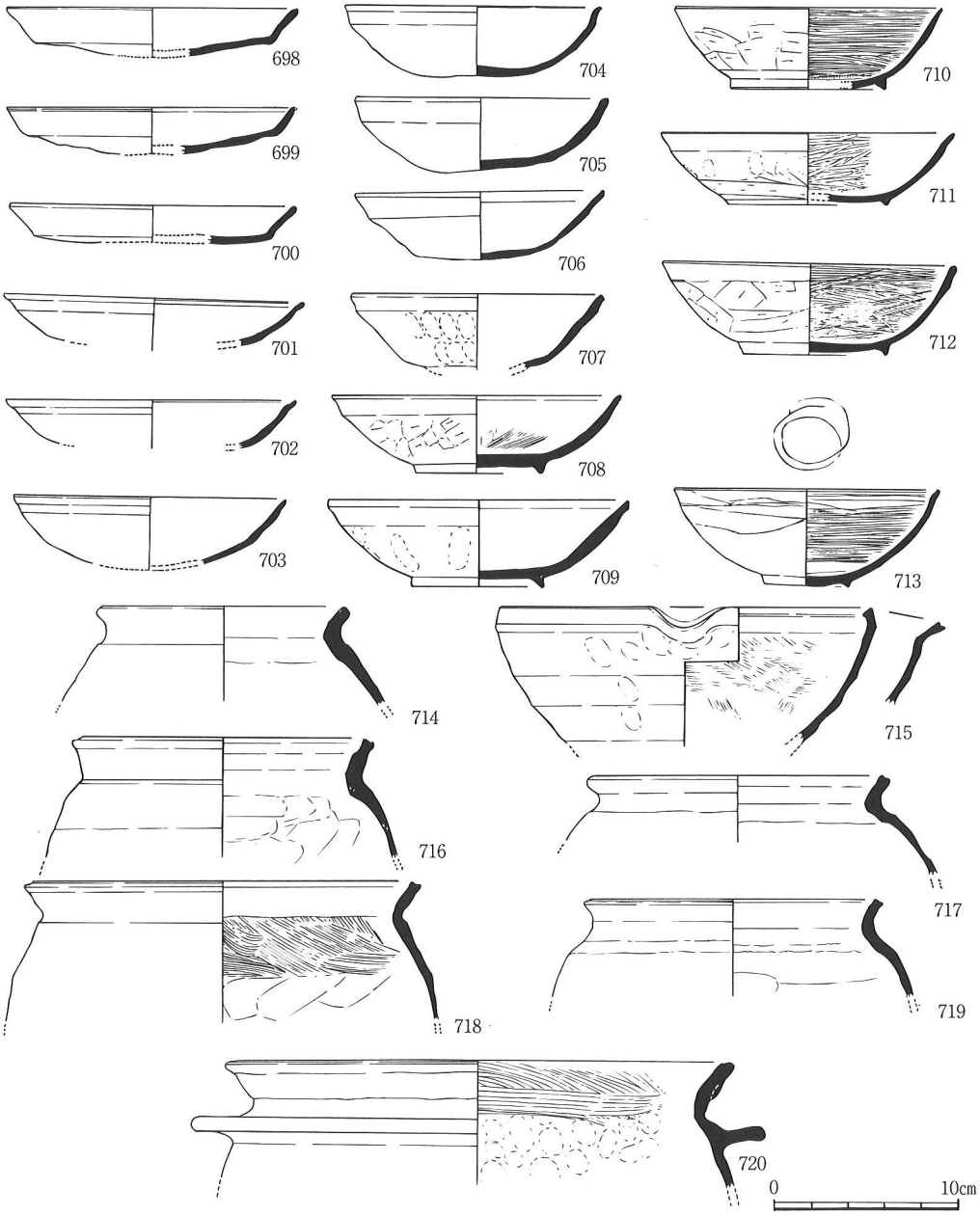


第82図　58－７区 井戸８・11 出土土器 実測図（1／4）

土坑1（第83・84図698～722，図版98・99）

（698～702・722）は土師器大皿。口径16cm前後をはかる。底部から急激に立ち上がるもの（698～700）と，ゆるやかに立ち上がり，口縁端部近くで屈曲するもの（701・702）がある。（722）の底部外面には「大満」の墨書がある。

（703～710・721）は土師器坏（椀）である。無高台のもの（703～707・721）と有高台のもの



第83図　58－7区 土坑1 出土土器 実測図（1／4）

(708～710) がある。無高台のものには茶灰色系のもの (703～706・721) と橙色系で指押さえの凹凸の目立つもの (707) がある。(721) は口径13.6cm，器高3.8cmをはかる。底部外面には (722) 同様，「大満」の墨書があるが，意味は不明である。有高台のもののうち，(708) は外面をヘラケズリし，内面にはハケ目調整が施されている。口径15.9cm，器高4.3cmをはかる。

(709) は口径16.6cm，器高5.0cmをはかる。外面には，成形時の指押さえの他に特に調整が施されていない。(710) は口径14.5cm，器高4.5cmをはかる。外面をヘラケズリし，内面には見込みに密な平行のヘラミガキを施した後，水平方向の密なヘラミガキを施している。口縁内端面には沈線が一条入る。(710) は椀とした方が良いと思われる。

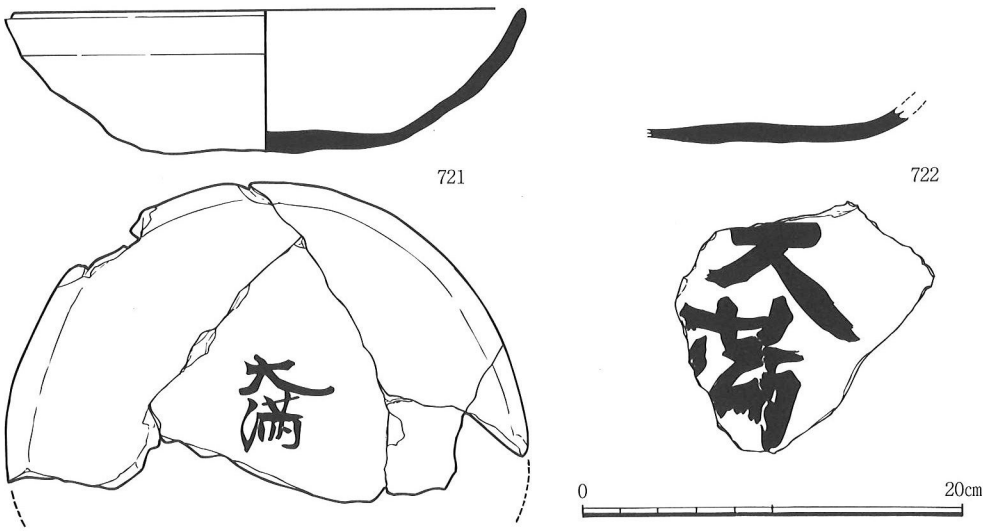
(711・712) は黒色土器Ａ類。坏 (711) は口径16.0cm，器高4.0cmをはかる。外面下半のみをヘラケズリし，内面には密なヘラミガキが施される。椀 (712) は口径15.8cm，器高5.1cm，底径7.7cmをはかる。外面をヘラケズリ，内面を密なヘラミガキで調整する。

(713) は上層から出土したもので，口径14.4cm，器高5.3cm，底径4.6cmをはかる大和型瓦器椀。Ⅲ－Ａ型式に相当する。

(714・716～719) は土師器甕。胴部外面は成形時の凹凸が目立ち，内面は板ナデにより調整する。いずれも橙褐色系の色調を呈する。(715) は土師器鉢で，口径15.7cmをはかる。外面は指押さえのみで，特に調整を施さない。

(720) は口径27.0cmをはかる。土師器羽釜。胴部外面はナデ調整を施している。生駒西麓産の胎土である。

以上の遺物は，上層出土の瓦器椀を除いて９～10世紀中葉頃のものと考えられる。



第84図　58－７区 土坑１ 出土墨書土器 実測図 (1／2)

配石遺構（第85図723～730，図版97b）

（723～725）は土師質小皿で，口径7.6～8.6cm，器高1.22～1.4cmをはかる。口縁部は外反して丸くおさめている。

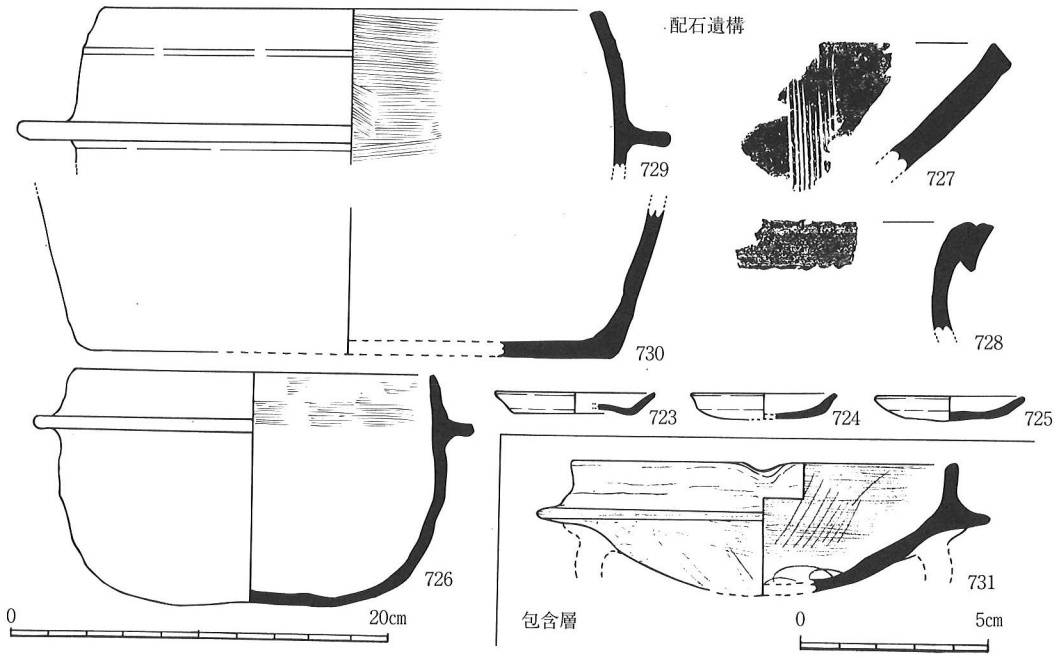
（726）は土師質羽釜で，口径19.2cm，器高12.4cmをはかる。内面は，口縁部付近だけヨコ方向のハケ目調整を施し，以下はナデ調整。胴部外面は特に調整を施さない。

（727）は備前焼すり鉢。口縁端部は斜めに切られ，外傾する面をもって終わる。（728）は常滑焼甕である。（729）は瓦質羽釜。内面にヨコ方向のハメ目を施す。色調は灰色を呈する。

（730）は瓦質桶形土器。底部外面は砂地で他はナデ調整を施す。出土土器に時期幅があり，16世紀代の埋没と考えられる。

包含層（第85図731，図版97b）

瓦質の片口付羽釜である。口径は10.2cmをはかる。外面の鍔部以下は粗いジグザク状のヘラミガキを重ねて斜格子状としている。内面は放射状の暗紋と圏線ミガキが重ねて施され，見込みには連結輪状の暗紋が施される。足の痕跡が認められ，三足が付いていたものと思われる。



第85図　58－7区 配石遺構・包含層 出土土器 実測図（1／4，1／2）

＜中世の土錘＞（第86図732～768，図版100b）

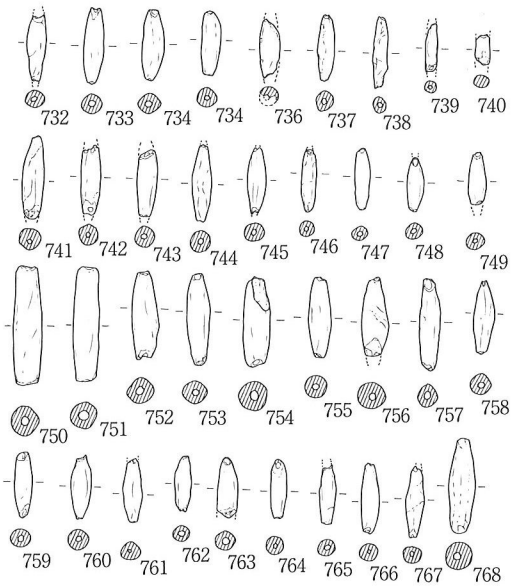
調査区各所から37点の土錘が出土している。（732）は土坑1の上層（平安時代末期）から出土したもの。（733～735）は平安時代末期の井戸1から出土したもの。（736～746）は平安時代末期の井戸10から出土したもの。（740）は生駒西麓産で，紐穴がなく，未製品と思われる。（741）は

下部を欠失しているが，２匁錘と推定される。(745) は生駒西麓産の１匁錘。(747～756) は鎌倉時代後期の井戸３から出土したもの。(750・751) は珍しい４匁錘。(754) も珍しい３匁錘。(752・753・755・756) は２匁錘。

(757～763) は鎌倉時代末期の井戸７から出土したもの。(757) は２匁錘。

(764・765) は室町時代の配石遺構から出土したもの。(766～768) は包含層から出土したもの。(768) は３匁錘。

以上の土錘は，平安時代末期から室町時代に至るまで，形を変えることなく，使い続けられている。地元の生駒西麓産の土錘が少量混じることから，網を修繕する際，地元の粘土を焼いて補ったものらしい。その他の土錘は，クサリ礫を多量に含有するので，摂津地方産と推定される。摂津地方でも大阪湾岸の地域と推定される。



第86図　58－７区 土錘 実測図（1／4）

＜古代～中世の木製品＞

58－７区からは，井戸や土坑，包含層から木製品が約 170 点出土した。代表的なものを以下略述する。

土坑１（第87図769，図版101ａ）

用途不明木製品（769）　トンネル中より出土。中央に方形（3.8×3.0cm）の穴をあけ，その四角に一辺0.4cm程度の方形小孔をもつ。ただし，左上の穴のみは不貫通である。長さ10.5cm，幅6.7cm，厚さ0.6cm。

井戸６（第87図770，図版101ａ）

円形曲物底板（770）　１／４強の残存であるが，いびつなため直径復原はむつかしい。20cm前後か。割れ口は人工のもので，それに並行して２ヶ所の円孔がある。恐らくここに桜皮等を通して，他の板に接続したのであろう。円周部側面に木釘穴などはない。

用途不明木製品（771・772）　(771) は長さ9.8cm，幅1.8cm，厚さ0.5cmの棒状の木製品で，表面は丸く仕上げられている。(772) は長さ23.2cm，幅9.7cm，厚さ1.9cmの板状木製品である。

井戸10（第87図773・774，図版101ｂ・102ａ）

曲物桶（773・774）　(773) は底板で全体の２／３が残存。直径14.0cm，厚さ0.6cm。側面部に木釘穴などはない。表面には黒漆を施し，その一部が残っている。直径から考えて，柄杓と考え

られる。(774) はぬい目部分が破損している他はほぼ完形で，直径28.2cm，高さ9.7cm。側板は一重で，内面には縦方向のきざみ目が0.6cmごとに入るほか，所々に斜め方向のきざみ目が入る。まわしは一重で，高さ2.4cm，底板の周囲にまわる。まわしの外から7ヶ所の木釘を打ち，底板と接続する。

井戸2（第87・88図775～786，図版102b・102c・103・104a）

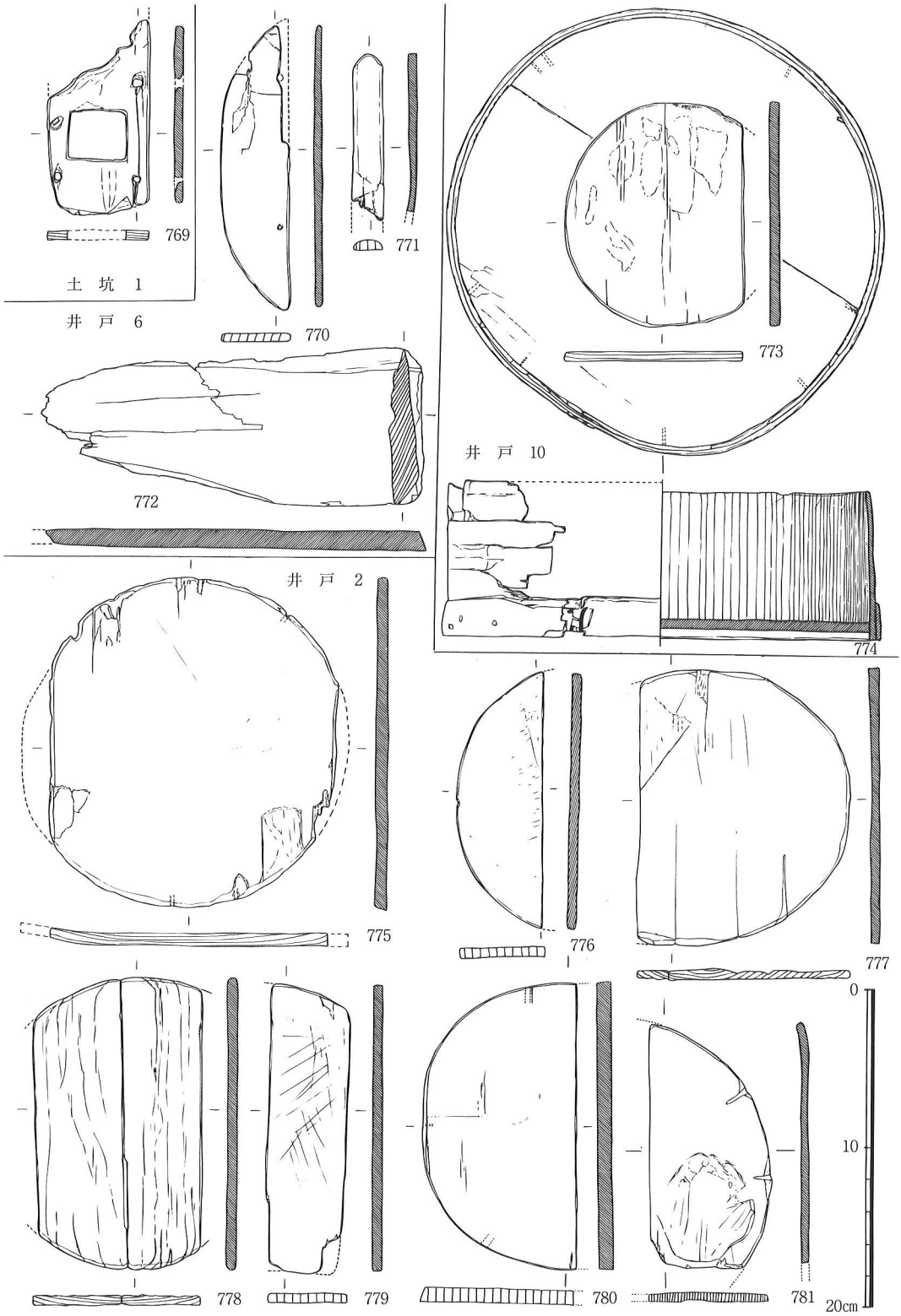
曲物（775～781）　7点はいずれも底板である。(775) は直径20.5cm，厚さ0.8cm，9割方残存。最低7ヶ所の木釘穴があり，うち2本の木釘が残っている。(776) は，全体の1／3が残存。復原直径17.8cm，厚さ0.6cm。木釘穴1つが残る。また同一方向に無数の刃物傷がある。(777) は長円形の底板。1／2強が残存すると思われる。残存長13.1cm，幅17.0cm。荒い仕上げで，表裏面共にかなりデコボコである。また表裏両面には，刃物傷が何本か残る。(778) は1／2残存。直径18.3cm，厚さ0.6cm。(779) は1／4程度が残存。方形ないしは楕円形の底板。これにも無数の刃物傷が入るが，方向はバラバラである。残存長17.9cm，厚さ0.6cm。(780) はややいびつな円形の底板。3ヶ所に木釘穴が確認できる。全体の1／2が残存。直径18.0cm，厚さ0.9cm。(781) は全体の1／3が残存。復原直径20.4cm，厚さ0.5cm。3ヶ所の木釘穴が残る。

柄杓（782）　上段井戸側内下位から検出された（図版59a）。直径13.5cm，高さ10.9cm。底板は残らない。底板の綴り方は一列。内面には0.6cm幅に縦のきざみ目を入れ，所々に斜めのきざみ目を入れている。内外面共に黒漆を施す。木釘穴は4ヶ所残る。また対角線に柄を通すための穴2ヶ所があけられている。一方は綴りのすぐ横で，側板が重なり合った部分に2.5cm×2.0cmの方形の穴をあけ，もう一方は，0.9cm×0.6cmほどの小さな穴である。この部分に入る柄も同時に出土している。半折しているが，残存長24.2cm，最大幅2.7cm，厚さ1.3cmで，先端を削って尖らせている。先を小さい方の穴につっこみ，大きな穴の内側で上から木釘を入れて固定させたらしく，穴が残っている。

用途不明木製品（783～786）　(786) は同一個体と思われる板状木製品。ただし接合不可能。一方は，長さ9.6cm，幅3.3cm，厚さ0.5cmで丸く削ってある。もう一方は，長さ18.2cm，幅3.4cm，厚さ0.5cm。ともに木釘穴が残り，また無数の刃物傷がついている。(783・784) も同一個体と思われる板状木製品。一方は，長さ19.1cm，残存幅9.7cm，厚さ0.2cm。もう一方は，長さ19.1cm，幅9.4cm，厚さ0.2cm。ともに大変薄いため，曲物底板とは思えない。2枚を重ね利用したものか。(785) は長さ18.0cm，残存幅4.4cm，厚さ0.5cm。曲物底板の可能性がある。

井戸3（第88図787・788，図版104b・105a）

円形曲物（787・788）　(788) は完形曲物。直径17.4cm，高さ12.8cm。内面全体に黒漆を施す。側板内面には，約0.4cm幅に縦のきざみ目を入れ，所々に斜め方向のきざみ目も入れる。綴じは，ほとんど残らないが，切り目より一列止めであったことがわかる。まわしは上下2枚。内側に斜めのきざみ目を入れる。ともに二列止め。(787) は底板。直径17.2cm，厚さ1.2cm。木釘穴は1ヶ所しか確認できない。やや厚いため結桶の可能性がある。

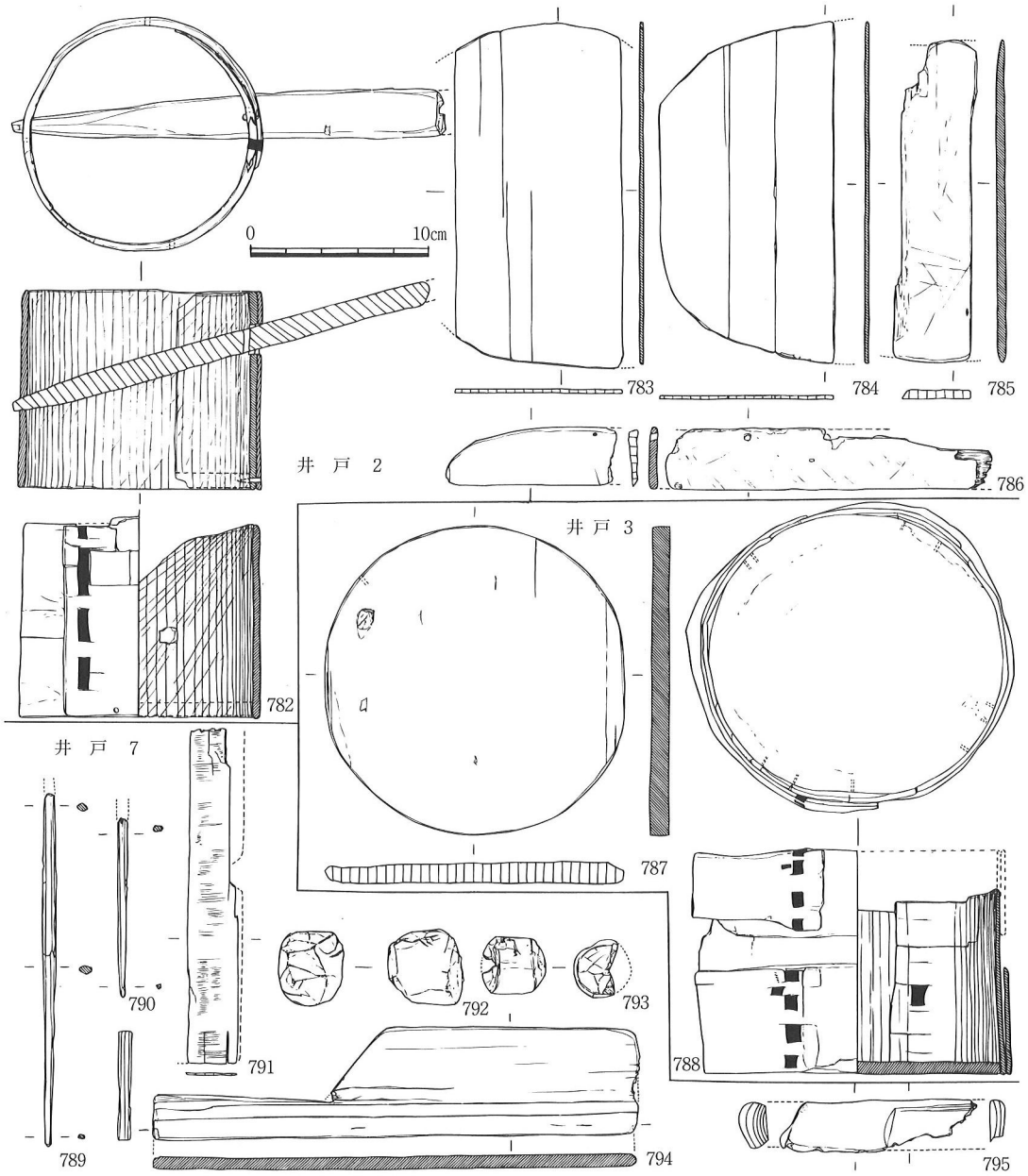


第87図　58－７区 土坑１・井戸６・10・２ 出土木製品 実測図（1／4）

井戸7（第88～93図789～811，図版105b～110）

箸（789・790）　いずれも半損の箸。(789) は残存長19.7cm，厚さ最大0.8cm。断面は楕円形であるが，端部は四角形に成形してある。

草履（791）　破損が大きく，全体像は明瞭ではないが，その形状と一部に残る藁の圧痕のようなものより，草履の芯板であると思われる。残存長18.8cm，残存幅2.9cm。切り込みの痕跡も



第88図　58－7区 井戸2・3・7 出土木製品 実測図（1／4）

わずかに認められる。

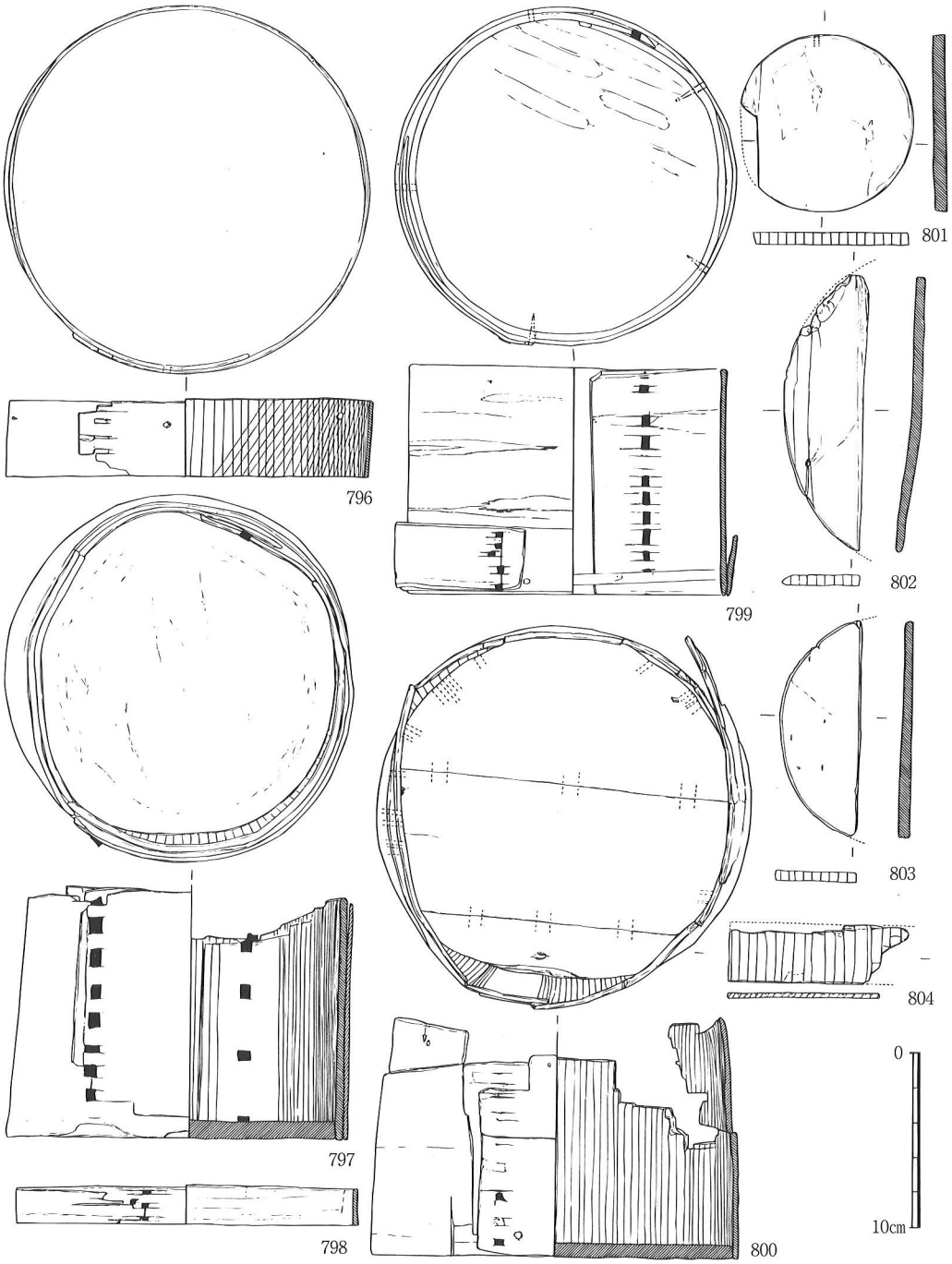
木球（792・793）　（792）は長さ4.1cm，幅4.3cm。著しいノミ痕があり，荒い仕上げなので未製品か。（793）は１／２が残存。長さ3.6cm，幅3.2cm。木の枝を短く切り，丸く皮をはぎ，両端を外側からノミで削る。

しゃもじ状木製品（794）　最下層から曲物桶（799）に接して出土した（図版66ｅ）。用途不明。庖丁状の形態であるが，長辺は割れであり，原型は羽子板のような形態であったと推測している。長さ27.1cm，残存幅6.1cm，厚さ0.7cm。表面には，木目を利用して段を作っている。裏面には，刃物傷が少し入っている。

用途不明木製品（795）　現存長11.2cm，最大幅2.8cm。何かの柄か。

曲物（796～804）　完形曲物５個，底板３枚，側板破片１個が出土。（800）は底径20.5cm，高さ13.8cmの完形曲物桶。側板は一重で，内面に縦方向のきざみ目が0.4cm間隔で入る。また綴じ方は，縦一列。底板は，３つの部材から成り，互いを３本の木釘で止めている。また底板の表面から裏面にむけて，６ヶ所の穴があき，それと側板にあけられた穴が対応することから，桜皮や紐などを通して底板を通したことがわかる。ただ，底板の側面には，18ヶ所の木釘穴が残ることより，曲物製作時には，側板の外から木釘を打ち込んで底板を止めていたのだが，使用中に底板がぬけ，紐などによって補修したのであろう。内面全体に黒漆を施す。（799）は底板18.1cm，高さ12.9cmの完形曲物。側板内側のきざみ目は，とじ目付近だけ縦方向につく。綴じ方は，縦方向一列止め。また，まわし１枚が，底板付近にまわる。まわしの高さ3.8cm。止め方は二列止め。底板は，アゲ底にとめる。５ヶ所の木釘で止める。（797）は直径19.0cm，高さ14.5cm。側板は，２枚の板をまわし，それぞれを一列で止めてある。綴じ目は，対角線上に来る。側板の内面には，縦方向のきざみ目が入る。また，底板は直径18.6cm，厚さ1.0cm。内面には，黒漆が施してあるが，ひっかいたような痕跡がある。側板と底板を接続する木釘穴はない。（796）は直径21.0cm，高さ4.6cm。側板のみが出土している。内面には0.6cmごとに縦方向のきざみ目があり，所々斜めのきざみ目も入れる。一部に黒漆が残る。同時に出土した（797）の蓋の可能性がある。（798）も側板のみ出土。直径19.4cm，高さ2.3cm。綴じ方は，二列止めである。（804）は曲物側板の一部。長さ10.3cm，幅3.3cm，厚さ0.3cm。内側には少しだけ黒漆が残っている。（803）は曲物底板の一部。全体の１／４が残存する。復原直径13.8cm，厚さ0.6cm。仕上げは丁寧で，側面に木釘穴などはない。柄杓の底板であろう。（801）も柄杓の底板。９割が残存。直径10.2cm，厚さ0.7cm。表裏面ともに，黒漆を施してある。側面の木釘穴は，１ヶ所のみ確認できる。（802）は全体の１／４程度が残る。表面には黒漆を施す。復原直径20.8cm，厚さ0.6cm。

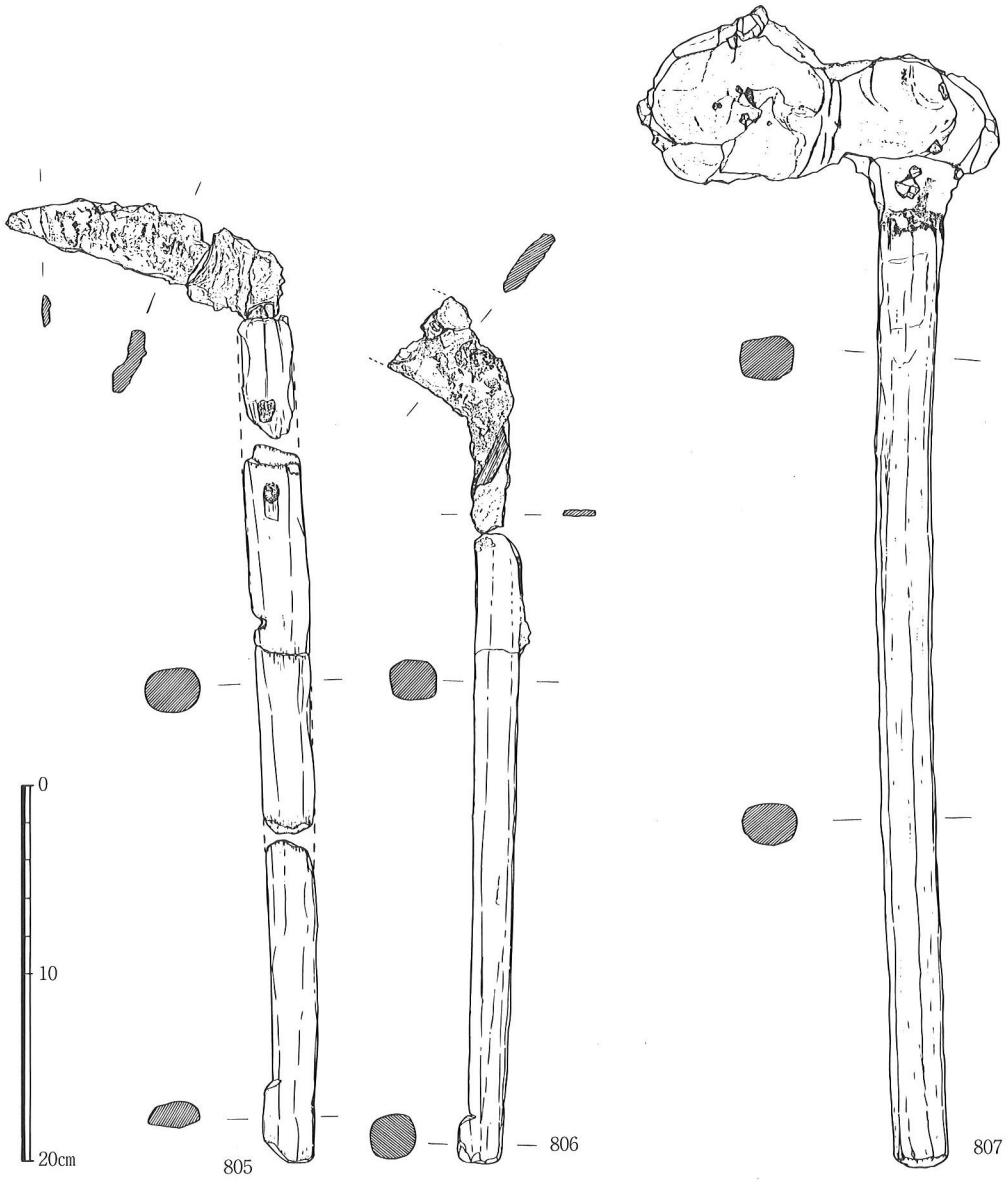
鉄鎌（805・806）　下層下位から出土した。中世の鉄鎌の例としては貴重なものである。（805）は刃の長さ13.5cm，最大幅3.5cm。刃は，ほぼ直線をなす。柄は楕円形で，幅3.2cm，現存長44.9cmである。柄の端部には，内側にむけてすべり止めの突起がつく。着柄方法は，破損のため明瞭ではないが，刃身の先端に穴をあけ，柄のそとから木釘を打って固定したものと思われる。



第89図　58－7区 井戸7 出土木製品 実測図（1／4）

(806) は鎌身が失損しており，全貌は明らかではないが，ほぼ (807) と同サイズのものと思われる。柄の現存長39.4cm，最大幅2.3cm。やはり端部に内側方向への突起がつく。

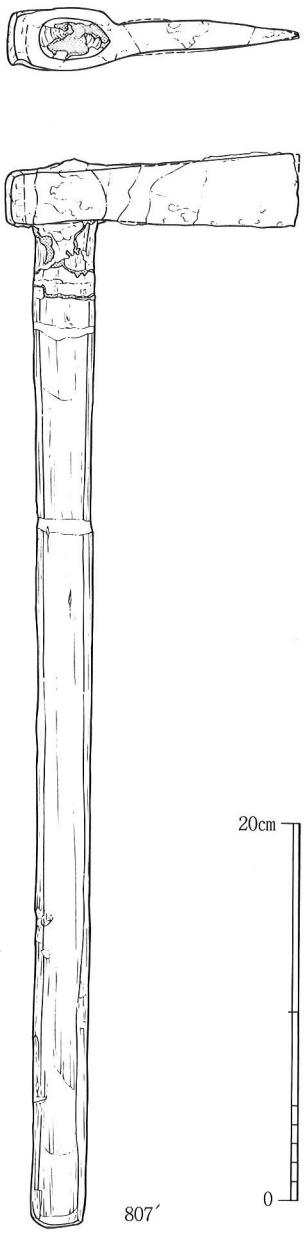
鉄斧（807）　下層下位から出土した（図版66ｂ）。全長 58 cm，柄の幅 3 cm，厚さ 2.2 cm。頭



第90図　58－７区 井戸７ 出土木製品 実測図（1／4）

部の幅19cm，長さ９cm。当初，頭部は厚くサビに覆われ，斧の形状，カシ製の柄と頭部の接合関係も不明であった。また，頭部が厚いことから，あるいは玄翁（げんのう）である可能性もあった。しかし，保存処理の結果，当初の状態が明らかとなった（図版109b，第91図807′）。

木簡（808）　下層上位から出土した（図版65）。長さ41.9cm，幅3.2cm，厚さ0.5cm。ほぼ完形。上端は丸く，下部に行く程細くなり，下端は斜めに切られている。表面に「奉伽持仏頂尊勝陀羅尼一千遍右切也（ほうかじぶっちょうそんしょうだらにいっせんべんみぎりなり）」と大文字で書かれ，その下に「元徳（げんとく）二年正月廿七日」と小文字で２行に分けて



第91図　58－7区 井戸7 出土鉄斧 実測図（1／4）

書かれていた。裏面に墨書はなかった。元徳二年は鎌倉時代最後の元号で，西暦1330年にあたり，供伴した土器群の歴年代を知る上で貴重な資料となった。

漆器椀（809～811）　最下層から3点出土している（図版66）。（809）は高台付の椀。高台径7.3㎝，器厚・体部0.4㎝，口縁部付近0.3㎝，残存高5.0㎝。内外面とも黒漆を施した上に，朱漆で2種類の草花状の紋様と背景を，見込み部に大きく描き，体部内面にその紋様を簡略化したものを，3ヶ所に描いている。紋様はすべて筆描き。木地は横木取り。（810）は高台付の椀。口径8.0㎝，器厚・底部0.3㎝，口縁部0.2㎝，高台径7.0㎝，器高4.7㎝。変形が著しいため正確ではない。内外面とも黒漆を施した上に，朱漆で草花状の紋様を見込み部に大きく描き，体部内面にその紋様の草状のものを3ヶ所に描いている。外面にもまた同種の草状の紋様をより簡略化したものを2個一組で描かれている。紋様はすべて筆描き。木地は横木取り。（811）は高台付の椀。高台径7.8㎝，器厚・底部0.5㎝，口縁部付近0.2㎝，残存高4.4㎝。内外面とも黒漆を施した上に，朱漆で1種類の草花状の紋様と背景を見込み部に大きく描き，体部内面にその文様を簡略化したものを描いている。外面にも同様のものが描かれている。文様はすべて筆描き。木地は横木取り。

井戸4（第93図812～814，図版111a・b）

下駄（812）　長さ20.8㎝，幅9.9㎝，台部厚さ1.5㎝。表面よりつま先部を右斜下に削り，右足用と考えられる。三孔穿は，ほぼ二等辺三角形の位置にあり，前緒孔は台部に対して垂直に穿孔し，径0.6㎝と小さい。横緒孔は，内方向に向かって斜めに穿孔し，径1.4㎝と大きい。どちらもノミで穿孔されている。全体の長さ・幅・三孔の間隔より小さい形なので，女性用と考えられる。歯の残存状態は，前歯2.7㎝，後歯1.4㎝で前歯に比べて後歯の摩耗がはげしい。遺存状態不良の為，削り調整不明。全体に楕円形。一木作りの連歯下駄である。

曲物桶底板（813・814）　（814）は直径17.8㎝，厚さ0.6㎝。側面には6ヶ所等間隔に，木釘がはいる。また表面にも4ヶ所ほぼ等間隔に貫通する穴があく。この穴にも木釘が残る。側板との接続法については不明である。（813）は直径19.0㎝，厚さ0.6㎝。表面には一面に黒漆を

808

第92図　58－7区　井戸7
出土木簡　実測図（1／2）

施す。また側面には，９ヶ所の木釘穴が残るが，間隔は不均等である。

井戸５（第93図815）

箕（815）　残存長31cm，幅13cm。部分的に残存し，全体の形は不明。ワラを縦横に編み込んでおり，ムシロの可能性もある。

井戸８（第94図816～825，図版112・113）

曲物（816～820・822～825）　計９点出土しているが，すべて側板か底板である。（816）は完形の底板。直径18.5cm，厚さ1.5cmで大変厚い。表裏面とも荒っぽい削りである。合計12ヶ所の木釘穴が，４ヶ所に集中してあいている。

（819）も底板。杉と桧を合わせて１枚にしたもので，断面に木釘穴をあけて止めている。周囲に木釘穴はない。直径19.0cm，厚さ1.1cm。

（820）は，直径16.7cm，厚さ0.7cm。美しく仕上げられており，細い木釘穴が３ヶ所ある。

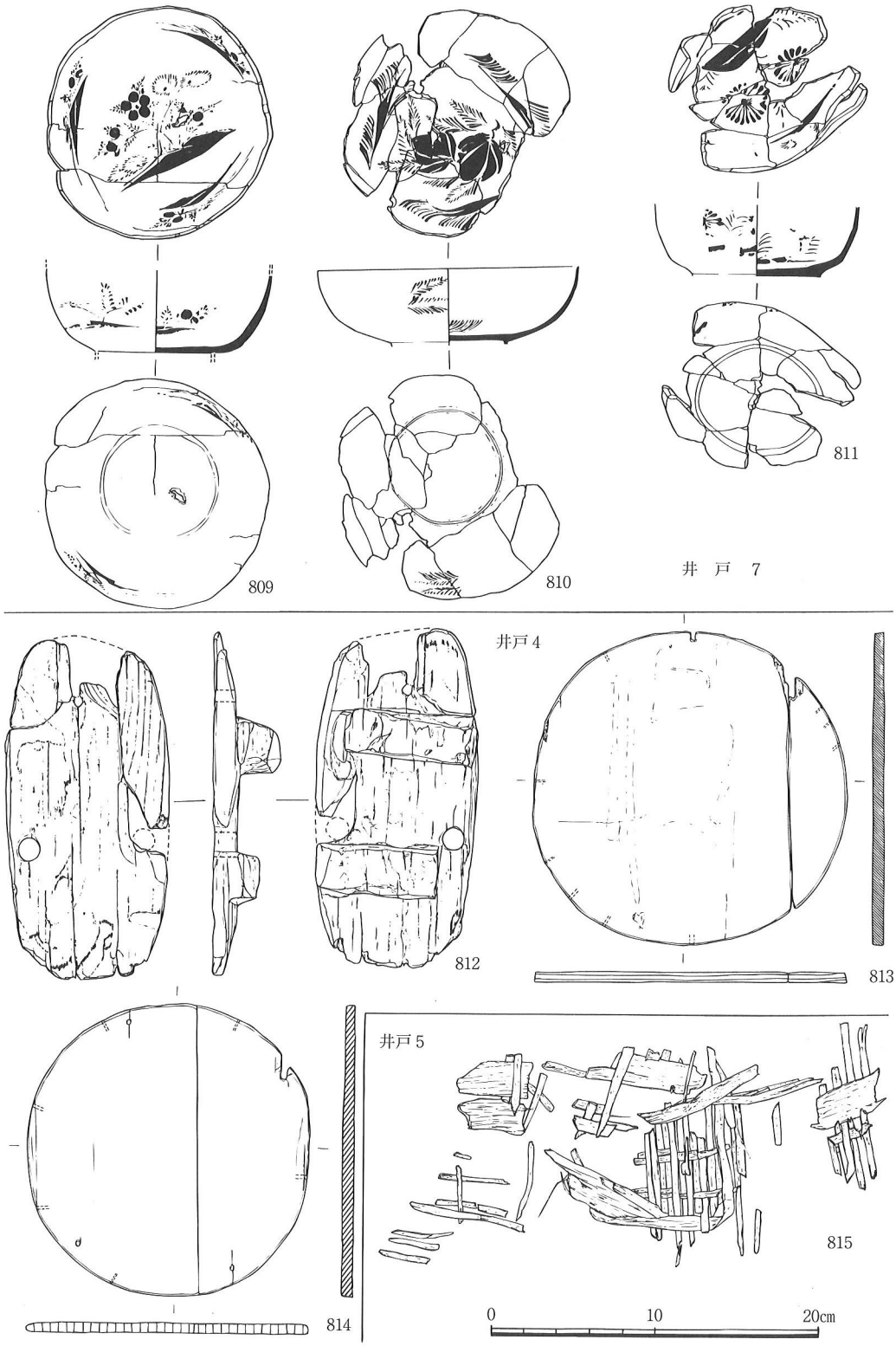
（818）は円形曲物底板が１／３ほど残存したもの。他の板と合わせるため，断面に木釘穴が２ヶ所残る。側面にも２つの木釘穴がかたまってあく。復原直径18.8cm，厚さ0.9cm。（817）も全体の１／３ほどが残存。これにも断面に，２ヶ所の木釘穴が残る。復原直径19.2cm，厚さ1.0cm。（824）は曲物の側板の一部。全体の復原は無理であるが，残存長15.5cm，幅5.0cm，厚さ0.1cm。桜皮のとめが少し残る。

（822・823・825）も，ともに曲物側板と思われ，同一個体の可能性がある。ともに黒漆を施した痕跡が残る。

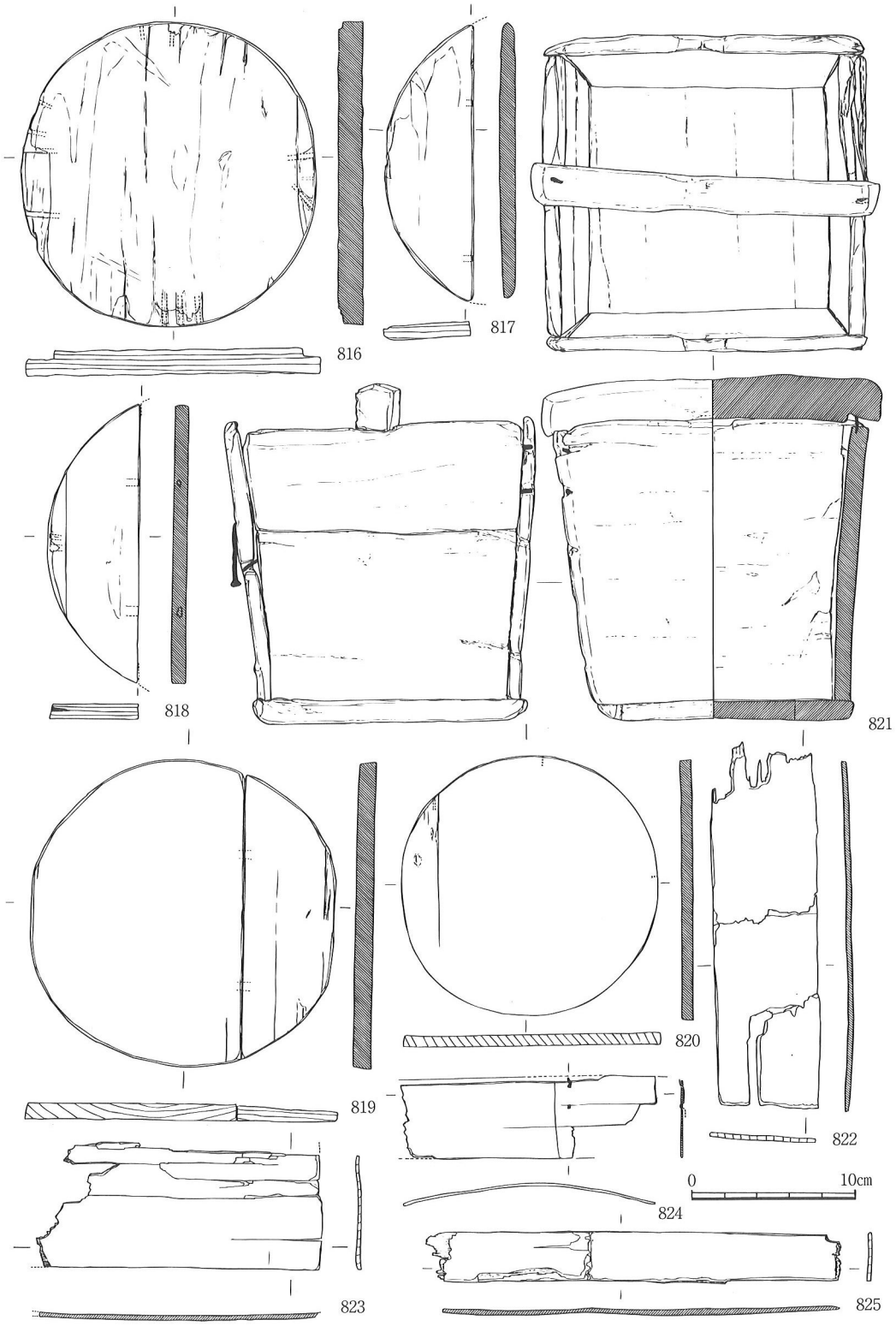
箱型つるべ（821）　最下層から出土した（図版66a・b）。４枚の側板を底板の上にのせ，それぞれを釘で止め，箱を作り，さらに上部に横木をわたしてつるべとしている。

側板は，一方にややほり込みを入れ，そこに他方を入れ，釘やかすがいで固定している。また，底板の裏側から８ヶ所の釘を打ち込み，側板を止めている。

また，横木も釘を上から打ち込んで，側板に固定しているが，横木に直交してひもがわたされていたようで，横木側板の上部に痕跡が残っている。全体の高さ20.9cm，口径19.6cm，底径15.8cm，側板の厚さ1.3cm。



第93図　58－７区 井戸７・４・５ 出土木製品 実測図（1／4）



第94図　58－７区 井戸８ 出土木製品 実測図（1／4）

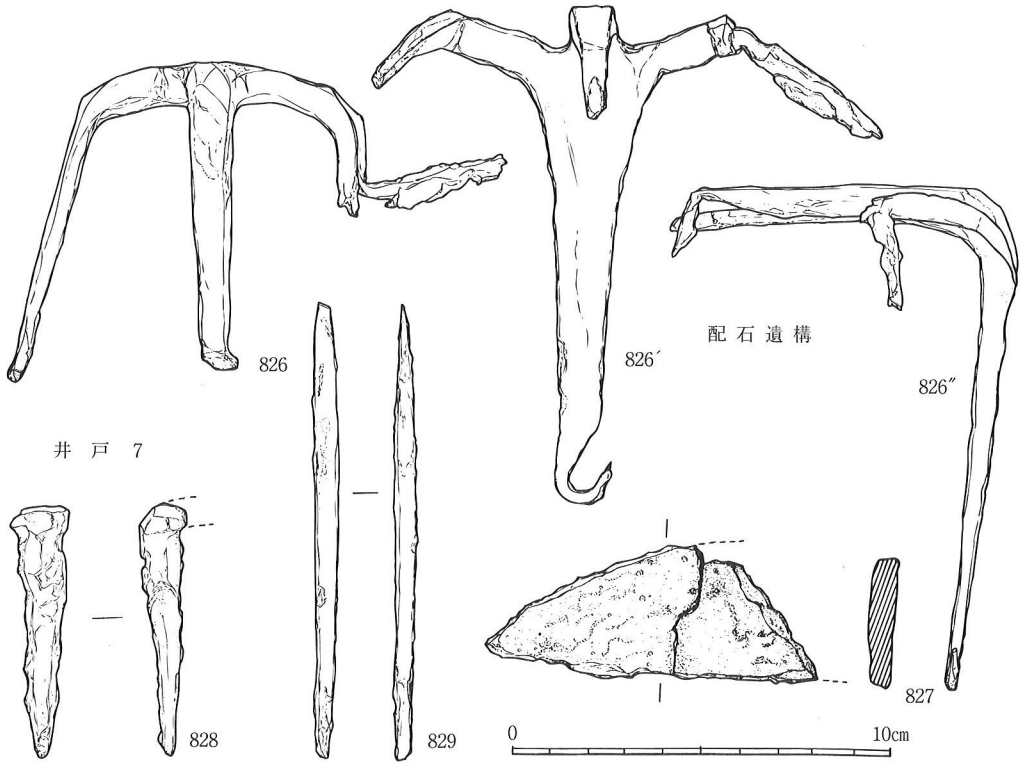
＜金属製品＞（第54図367・368，第95図826～829，図版100a）

58－7区からは金属製品6点が出土した。（367・368）は，いずれも土坑1から出土した古銭。

（826）は室町時代の配石遺構1出土の鉄製熊手。完形品。歯は3本で，外側の1本は大きく，真中の1本は小さく内に折れ曲がっている。歯の長さは8.2㎝，最大幅1.2㎝。軸部は長さ13.3㎝，最大幅3.5㎝。軸部は先細りで，先端部は鉤状で，目釘穴代わりになっていた。草取り等に使用されたのであろうか。

（827～829）は鎌倉末期の井戸7出土。（827）は鉄鎌の刃。破損が大きく，先端のみが残る。刃は直線で，内彎しない。残存長8.8㎝，幅3.5㎝。（828）は鉄製かすがいの破片。長さ6.7㎝，最大幅1.5㎝。（829）は建築用の鉄釘か。先端を尖らしているので，あるいは火箸の破片か。長さ12.1㎝，幅0.7㎝。

その他に，井戸7から鉄鎌（第90図805・806），鉄斧（第90・91図807）が出土しているが，木製品のところで触れいている（115～117頁参照）。



第95図　58－7区 金属製品 実測図（1／2）

第4節　小　結

本調査区（面積575㎡）は，大阪府が担当した西ノ辻遺跡の東端に当たる。西接する57－4区では，井戸や掘立柱建物跡等が多数検出され，中世の集落跡の中心部と推定されたが，本調査区でも同様な結果を得た。以下，主要点を列記する。

1．井戸11基を検出。井戸2と井戸6に木枠が認められたが，他はすべて素掘り，枠無しであった。平安末期の井戸1・6・10，鎌倉中期の井戸2，鎌倉後期の井戸3，鎌倉末期の井戸7，南北朝の井戸9，室町の井戸5・8・11に分けられる。鎌倉前期の井戸が検出されなかったが，平安末期以降代々と井戸は掘り続けられた様子である。

2．井戸2の木枠は，上下二段にわたって組まれたもので，下段は板材を四角に打ち込み，横桟を入れたものである。その上に大きな一枚板を並べて，方形枠を形作っている。西ノ辻遺跡で，枠のあるものは極めて稀で，それだけに隣接する井戸2と井戸6に枠があったのが珍しかった。

3．井戸1・3・7・10の埋土上層には，多量の平安～鎌倉時代の土器が投棄されていた。すべて一括資料と思われ，土器の編年作業にとって貴重な資料を提供してくれた。中でも，井戸7出土の元徳二年（1330）銘の木簡は，供伴した瓦器椀の歴年代を考える上で貴重な資料となった。また，元徳二年銘のある木簡は，内容が尊勝陀羅尼を一千遍お唱えしましたということだけに，僧が施主に渡したレシートとみることができる。この陀羅尼を1回読むのに3分かかるだけに，一千遍だと50時間かかる訳である。それだけのお布施を渡せる人物といえば，かなり高貴な階級の人と推定できる。きっと近くに住んでいたのだろう。中世の庶民信仰を知る上で，貴重な資料であった。

4．井戸7からは，「□福二年」銘のある石硯も出土している。天福二年は西暦1234年なので，年号の彫られた石硯としては日本最古で，貴重なものであった。なお，材質は粘板岩であるが，伴出したもう1点の石硯も紫色の粘板岩で，共に高島石と推定された。高島石使用の歴史が判明した点も重要であった。

5．井戸7からは，大量のオオタニシが出土したが，河内湖で採ったものを食用にした結果なのだろう。58－5区井戸3，57－4区井戸23(註4)からもオオタニシは出土しており，鎌倉中期から室町時代にかけて，盛んに採られたものらしい。ゆがき，酢味噌をかけて食べるとおいしいので，河内特産のものとして，京都や近隣諸地域に搬出されている可能性がある。

6．井戸2・3・4・6・7・8・10からは，曲物桶が完形もしくは破片で出土し，釣瓶として盛んに使用されている事実が判明した。また，井戸底にはカエル・ネズミ・カメ等の動物遺存体が多数落ち込んでいた。素掘りの井戸がほとんどであったので，近辺から土砂および雨水の移動に伴って落ち込んだものらしい。

7．土坑1からは，多量の平安時代中期の土器が出土して，この時期の遺構と推定された。当初，

両端底に検出された横穴を人間が掘ったものと推定したが，延々50m以上，当時の地表下2mを東から西へと蛇行しながら続いていたので，到底人間では掘削不可能なものと推定された。その後，神並遺跡59－5区井戸1でも同様なトンネルが検出されたので，58－7区や59－5区のような段立上の遺跡では粘土層と砂利層の間に地下水路が何本も流れていた様子である。埋土に砂礫と粘土と土器が含まれていることからすると，地下水路を下水道代りにでも使用していたのだろうか。奇妙な遺構であった。

8．調査区北半部で鎌倉～室町時代の柱穴群が検出された。西接する57－4区でも調査区北半部で同様な二面の柱穴群が検出されていたので，57－4区・58－7区の北半部より北側に当時の掘立柱建物群が集中している地域の存在が推定される。段立上の高い地域に集落跡の存在が推定され，南側の自然河川に面する低い地域に多数の井戸が集中して掘られた様子である。

9．57－4区で検出されていた2号方形周溝墓の西半部が検出された。供献土器として高坏と甕が出土したが，共にⅢ様式（古）段階のものと思われた。57－4区北半部や58－7区北西部が弥生時代中期中頃に墓域であったことが確認された。

〔第Ⅴ章の註〕

（註1）　横田賢次郎・森田勉　1987「太宰府出土の輸入中国陶器について－型式分類と編年を中心として」（『九州歴史資料館研究論集4』）

（註2）　宮崎泰史編　1986『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅱ』大阪府教育委員会

（註3）　宮崎泰史・西口陽一編　1995『鬼虎川遺跡26次・西ノ辻遺跡18～20次調査概要報告』大阪府教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会

（註4）　宮崎泰史編　1986『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅱ』大阪府教育委員会

第Ⅵ章　58－2区の調査成果

第1節　概　要

本調査区は前年度，上層遺構の調査と併行して，南側に断面観察用の側溝を掘削すると，従前の大阪府や東大阪市の調査で検出されていた幅約40mもある自然河川は，この調査区中央で北に急に曲ること，深さが約4.7mになること，等が判明したため，新たな土留処置が必要となった。そこで，ひとまず調査を中断し，次年度に自然河川の調査をすることとなった。

調査は土留処置の都合上，調査区を北半部と南半部に二分し，北半部の調査区から着手することとした。旧耕土を除去すると第3～5層上面にて、調査区一面に南北に走る鋤跡が検出された（図版114)。出土した遺物から，近代から鎌倉時代の耕作面と考えられた。写真及び実測終了後，掘り下げると第6層上面で井戸1（土坑の可能性もある)，自然河川，溝，ピット等が検出された（第97図，図版115)。井戸1は径5.35×3.70m，深さ0.7cm以上をはかる（図版116)。中から平安時代後期の瓦器碗，土師質土器とともに墨書の認められる板状木製品（図版133・134a)，ゲタ，つちのこ等が出土した。第6層を除去すると，重複して弥生時代後期～奈良時代の自然河川，弥生時代後期の自然河川1条，古墳時代の自然河川2条（自然河川2・6）を検出した（第98図，図版117)。さらに、弥生時代後期～奈良時代の自然河川を掘削すると，調査区の東側で弥生時代中期の自然河川1条（自然河川8)，西側で弥生時代中期の自然河川2条（自然河川1・7）を検出した（第99図，図版118・119)。河川内より多量の中期中頃の土器，石器，木製品，イノシシ，ニホンジカ等の動物遺存体等が出土した。鹿を描いた絵画土器（第96図）も出土している。これらの自然河川は，弥生時代前期～縄紋時代晩期の包含層をベースにしている。この包含層を除去すると，縄紋時代の自然河川（自然河川9）を検出した（第100図，図版120～123)。自然河川9からは，コンテナ1杯分の縄紋時代中期後半の土器が出土した。

南半部の調査は、北半部と同じく旧表土を除去すると、調査区一面に北半部から続く鋤跡を検出した（図版124・125)。写真及び実測終了後，近世から中世の耕作面を掘り下げると，中世の自然河川3条（中世自然河川1～3）を検出した（第101図，図版126)。とりわけ中世自然河川2の下層から，馬・牛等の動物遺存体が集中して出土している。これらを除去すると、古墳時代の自然河川3条（自然河川3・4・7）を検出する（第102～104図，図版127a

第96図　58－2区(北）自然河川出土絵画土器拓本（1／1）

～c)。さらに掘り下げると、調査区の東側で弥生時代後期の自然河川を検出した（図版127d)。ほぼ完形の土器が数個集中して出土している。また，弥生時代前期～中期の包含層掘削中に壺棺，甕棺を検出した（図版127f・128a)。この包含層を除去すると縄紋時代の自然河川を検出した（第102図，図版128)。

第2節　縄紋土器

58－2区の調査において縄紋土器を検出したのは，弥生時代包含層，弥生時代自然河川，縄紋時代自然河川の3地点においてである。その総数は，約120片を数える。時期的には縄紋中期から晩期までを含んでいるが，各地点によって傾向は異なっている。

弥生時代包含層はⅠ～Ⅳに分けられるが，縄紋土器を確認したのはⅠ層とⅣ層の2層であり，かつ大部分はⅠ層から検出している。後期の土器片を一部含むほかは晩期が主体で，突帯紋土器片や，貝殻条痕，原体不明の条痕を有する体部変，さらに，体部に矢羽状紋を施した壺形土器などがある。Ⅳ層からは，後期・晩期の体部片を検出している。

弥生時代自然河川に含まれる縄紋土器は少なく，12片ほどである。晩期を主体としている。図示したものから考えると，晩期中葉から末にかけての土器を多く包含するようである。

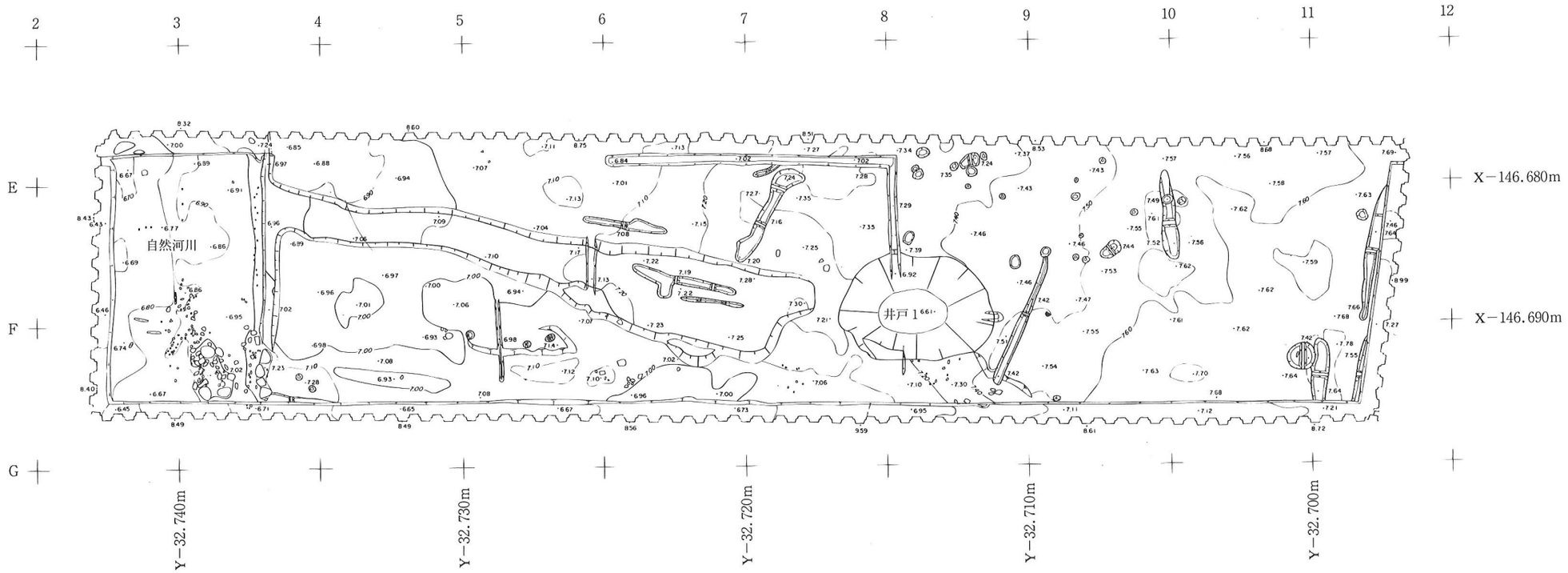
縄紋時代自然河川からは，もっとも多くの土器片を確認しており，破片ではあるが遺存状況の良好なものも多い。早期の土器1片を含むほか，中期・後期・晩期の土器片約50片を検出している。特に，中期の土器は後半のもので，大阪では類例の少ないものである。

以下，図示したものについて時期毎に記述する。(第105図～第107図)

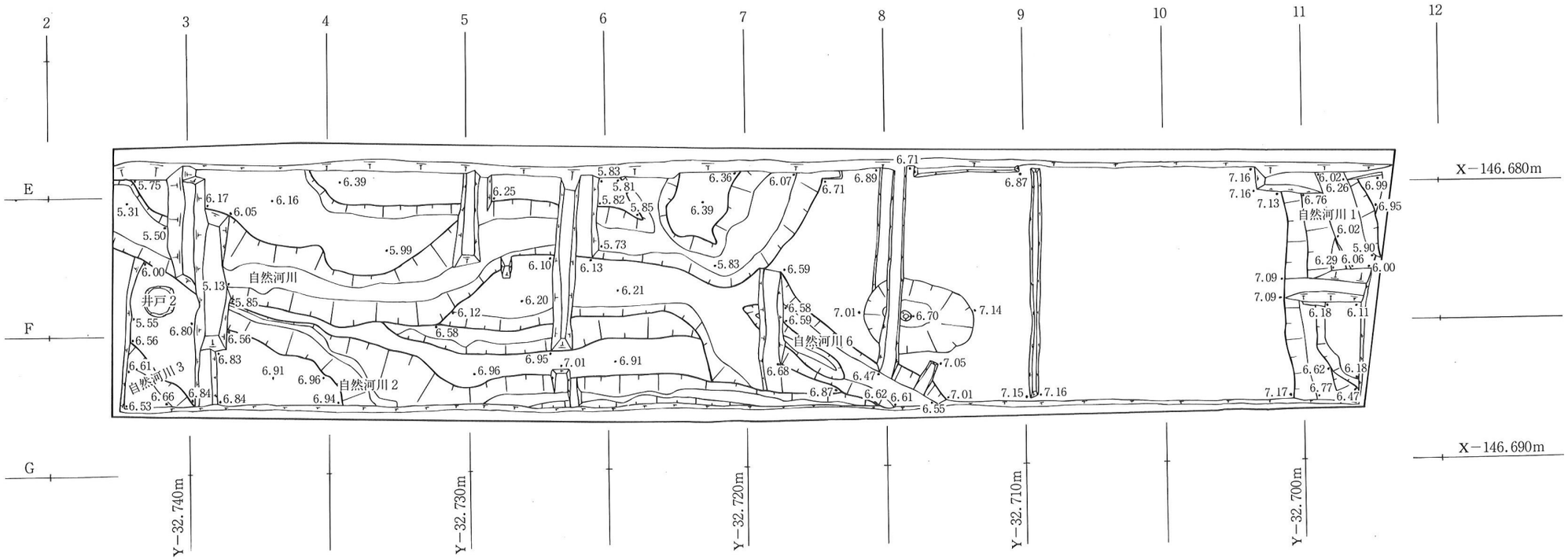
(871) は早期の土器で，体部外面にネガティブな楕円押型紋（舟形沈紋）を有する神宮寺式土器である。全体に磨滅するが，器厚3㎜～4㎜を測る。灰茶褐色を呈し，胎土中には角閃石を多く含む。縄紋時代自然河川から出土した。確実に早期に属するものは，この1点のみである。

(870) および (872～876) は，中期の土器である。(870) は破片数は少ないが，口縁部から底部までを復原でき，全体の器形を想定することができる。胴部の張るキャリパー形を呈し，口縁部は波状をなす。底部は平底と考えられる。推定器高43.5cm，底部の復元径13.4cmを測る。紋様はすべて沈線と縄紋によるもので，口縁部，頸部，胴部の各紋様帯は，口縁に平行する2条の沈線と，沈線間を充填する縄紋帯（LR)，さらに波頭状沈線紋をめぐらし，不定方向に施された縄紋によって構成されている。内傾する口縁端面にも縄紋を施している。頸部紋様帯は7条のヘラ描き弧状沈線で，口縁部と胴部を画している。胴部紋様帯はH状の垂下沈線と蛇行沈線の交互施紋で，間隙に縦位を基調とした縄紋を施している。内面は，横位の条痕様の調整痕が残る。外面黒褐色～褐灰色を呈し，胎土には角閃石・金雲母を含む。縄紋時代自然河川から出土。

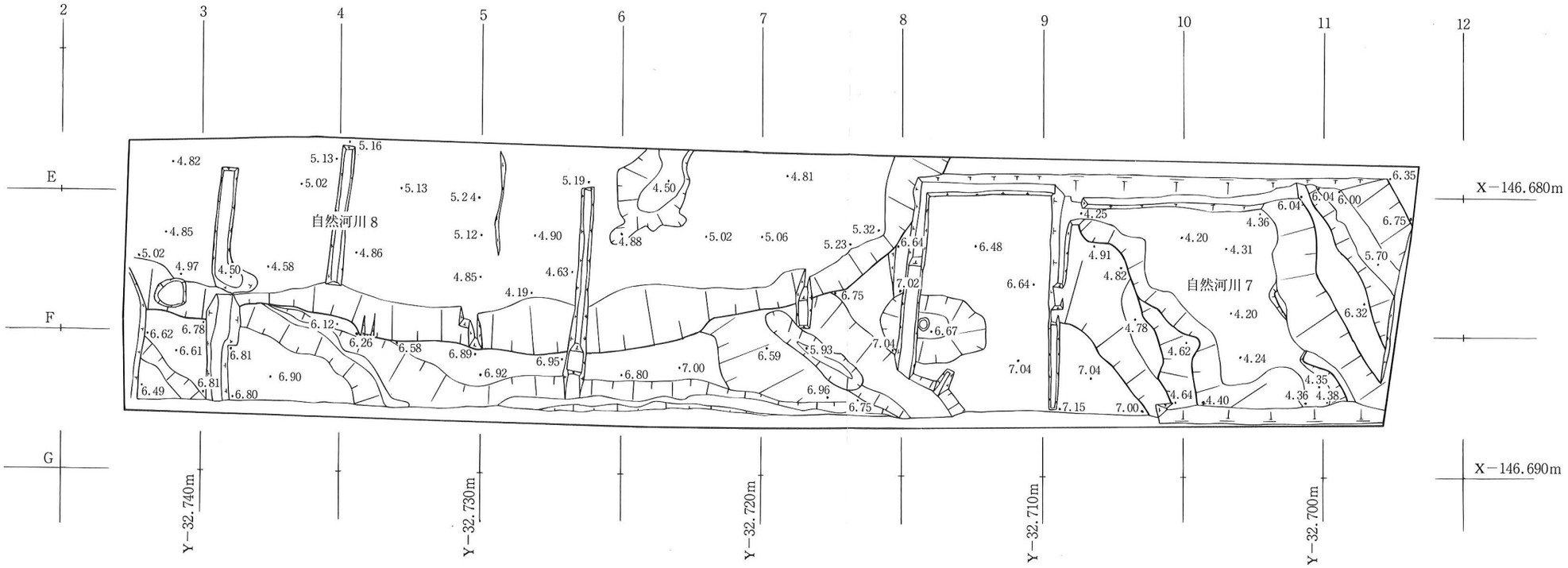
(872) は，キャリパー状を呈する口縁部片である。外面に幅5㎜～6㎜の2条の沈線が残る。内外面ともナデ調整で，灰褐色を呈する。縄紋時代自然河川出土。(873) は胴部上位の破片と考



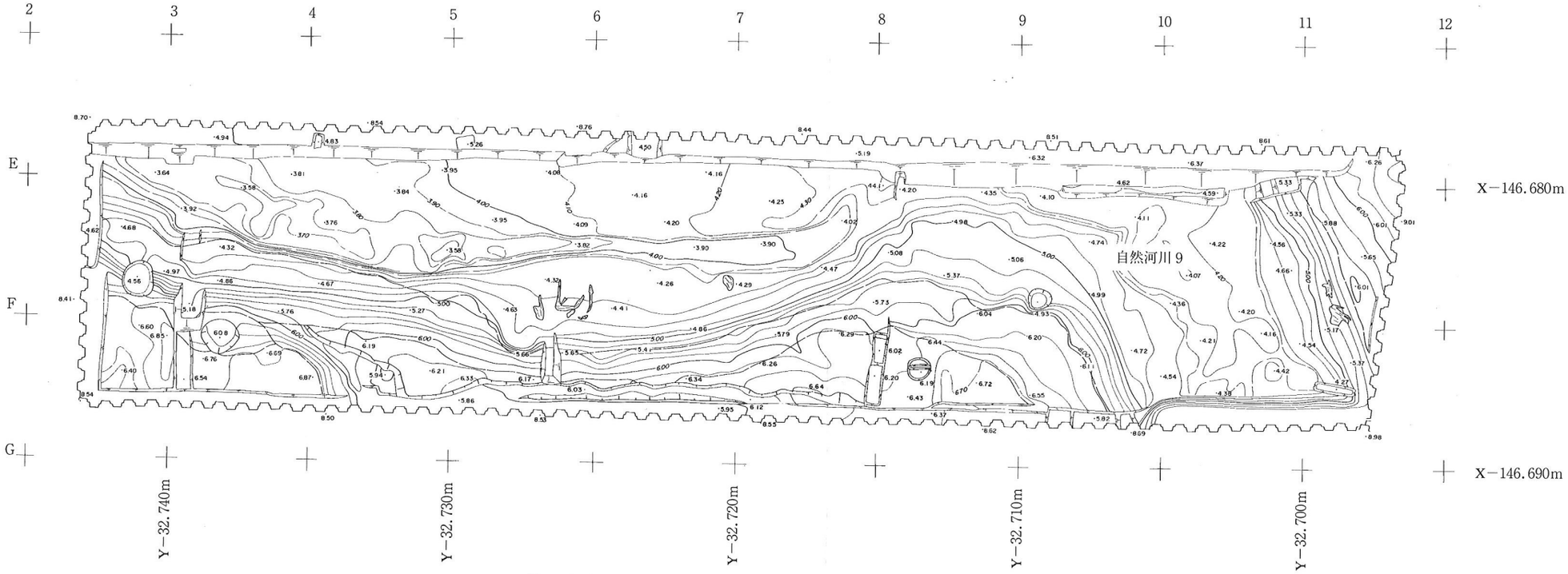
第97図　58－２区（北）平安時代の遺構 平面図（1／200）



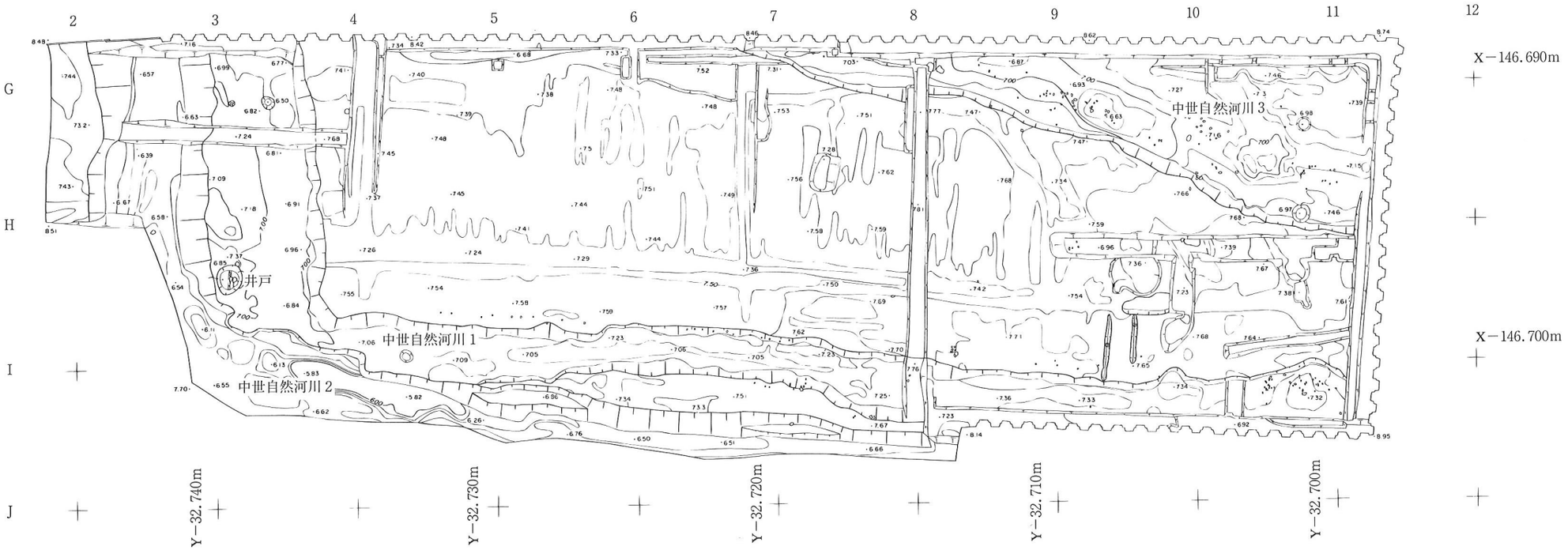
第98図　58－２区（北）弥生時代～奈良時代の遺構 平面図（1／200）



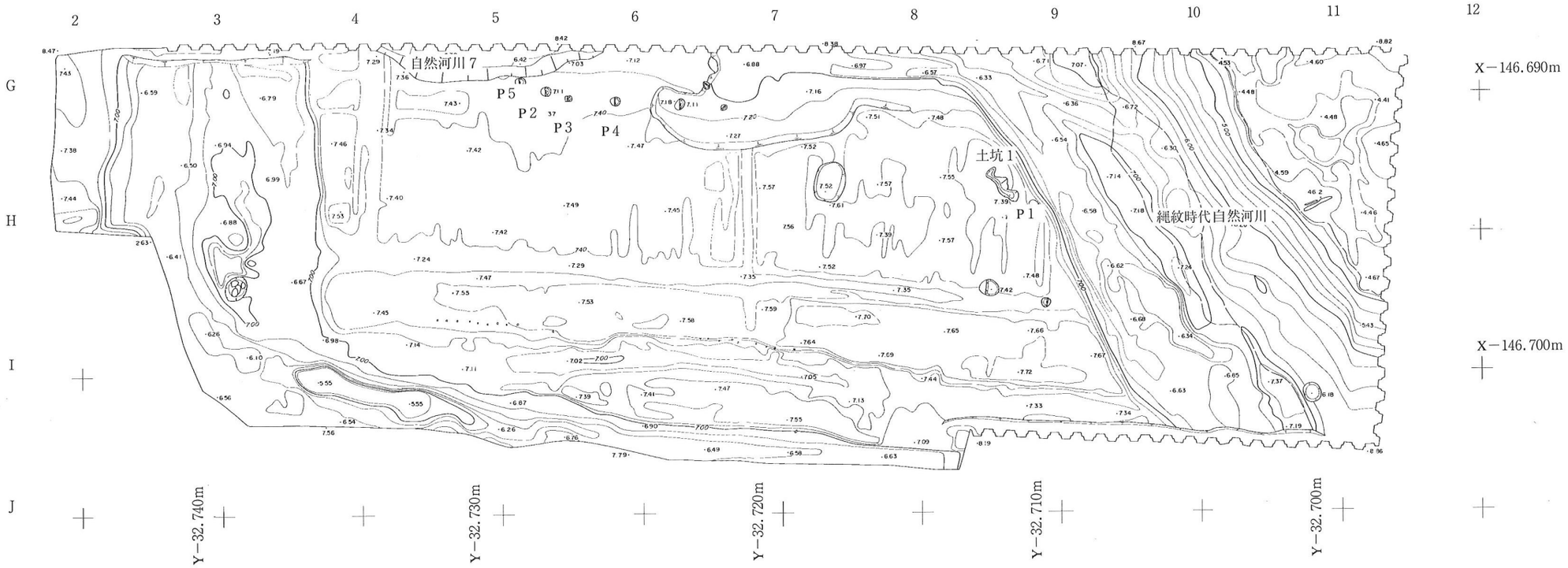
第99図　58－２区(北) 弥生時代中期の遺構 平面図 (1／200)



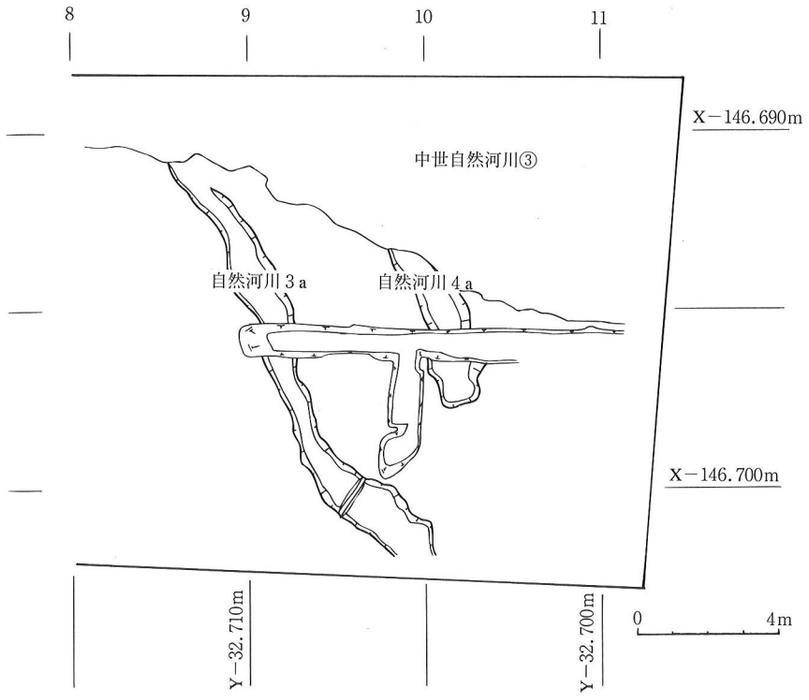
第100図　58－２区(北) 縄紋時代の遺構 平面図 (1／200)



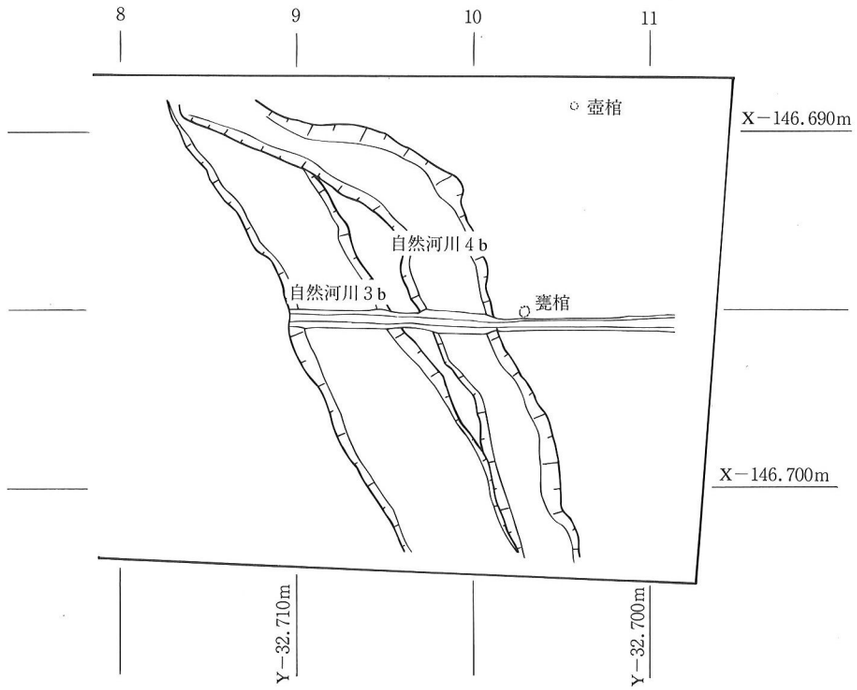
第101図　58－２区（南）平安時代～鎌倉時代の遺構 平面図（1／200）



第102図　58－２区（南）縄紋時代～古墳時代の遺構 平面図（1／200）

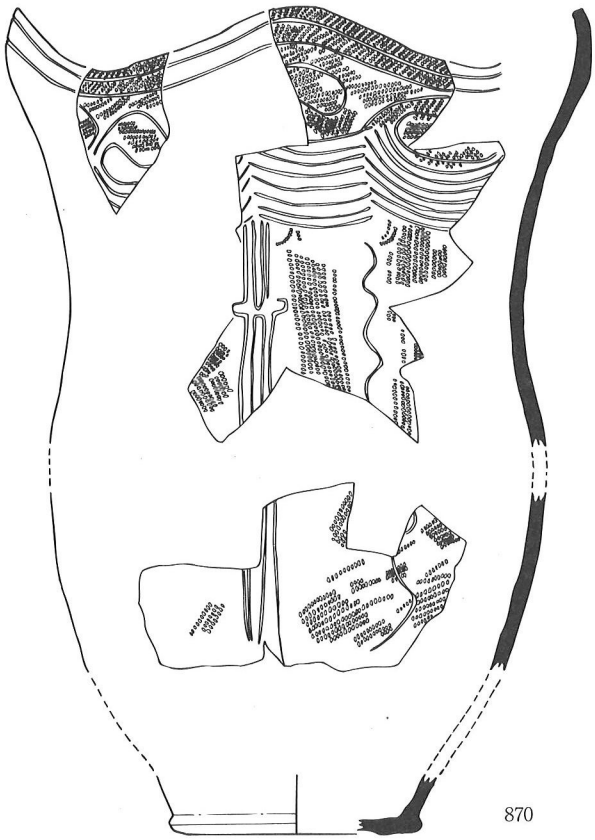


第103図　58－２区（南）古墳時代第１面の遺構 平面図（1／200）



第104図　58－２区（南）古墳時代第２面の遺構 平面図（1／200）

えられる。Ｌの撚糸紋地に，細い施紋具（半截竹管か）による８～９条の弧状沈線を施している。灰褐色を呈する。縄紋時代自然河川出土。(874) は同一固体と判断できる破片が多いため，口縁部から胴部下半までを推定復元した。胴部径を基準としたため，口径は確定できない。キャリパー形を呈し，平縁である。口縁端面および外面全面に縄紋（ＬＲ）を施し，口縁直下に１条の押引沈線をめぐらす。沈線下には円形刺突紋を施し，頚部以下胴部には３条単位の垂下沈線と，蛇行沈線を交互施紋する。垂下沈線と蛇行沈線は，同一原体によるものであろう。内面は，横方向のナデ調整である。胴部最大径は約14.6cmを測る。口辺部は暗茶褐色，体部は灰褐色を呈する。縄紋時代自然河川出土。



第105図　58－２区 縄紋土器 実測図 (1)（1／4）

(875) は，やや内湾する体部片である。固い撚りの縄紋（ＲＬ）が施される。内面はナデ調整。灰褐色を呈する。縄紋時代自然河川出土。

(876) は胴部上位と考えられる破片で，縄紋（ＲＬ）は１条おきに深く押捺される。条線紋は４本単位で，図の左右の条線紋それぞれが単位紋様を構成するものと思われる。縄紋時代自然河川出土。

(877～879) は，後期の土器である。

(877) は，やや薄い器壁であるが，深鉢の口縁部と考えられる。口辺部に５条以上の横位の平行沈線を施している。沈線間は，ナデている。縄紋時代自然河川出土。

(878) は，鉢もしくは深鉢の口縁部で，(877) と同様に口縁に平行して沈線を施すが，(877) と比べて細く雑な線である。縄紋時代自然河川出土。

(879) も鉢もしくは深鉢の口縁部で，口縁端部を肥厚させ，縄紋（ＬＲ）を施した縁帯紋土器である。縄紋時代自然河川出土。

(880) 以下は，晩期の土器である。

（880・881）は同形態の深鉢口縁部で，内局したのち外反する口縁を有する。（880）は復原口径20.4cm。外面ナデ調整であるが，原体不明の擦痕が残る。内面は，横位条痕をナデ消している。縄紋時代自然河川出土。

（881）は復原口径21cm。内外面ともナデ仕上げである。弥生時代自然河川出土。

（882）は浅鉢の体部片で，口縁部と胴部の間は段をなしている。段の稜の部位で復元径17cmである。内外面ともナデ調整。色調は，外面灰褐色～茶黒色，内面茶黒色を呈する。弥生時代自然河川出土。

（883）から（888）は，突帯紋土器である。

（883）は口縁直下に突帯をめぐらし，突帯上と口縁面にD字状の刻目を施す。内外面ともナデ調整である。茶褐色を呈し，胎土中に角閃石を含む。弥生時代自然河川出土。

（884）は体部の突帯で，D字状の刻みを施す。内外面とも原体不明の軽い横位条痕調整。外面白褐色，内面灰黒色を呈する。弥生時代包含層Ⅰ出土。

（885）は復原口径27.4cmを測り，口縁面と突帯上にD字状の刻みを施す。外面はナデ調整，内面は横位の条痕調整である。灰褐色を呈する。弥生時代自然河川出土。

（886）は口縁部と体部に2条の突帯を有し，突帯上には軽い刻みを施す。口縁部中位で復元図化したため口径は確定できないが，図では34.8cmである。口縁部には，幅1.8cm～2.0cmの粘土紐の接合痕が残る。内外面ともナデ仕上げであるが，内面には条痕の痕跡が残っている。褐灰色を呈し，胎土中には角閃石・金雲母を含んでいる。縄紋時代自然河川出土。

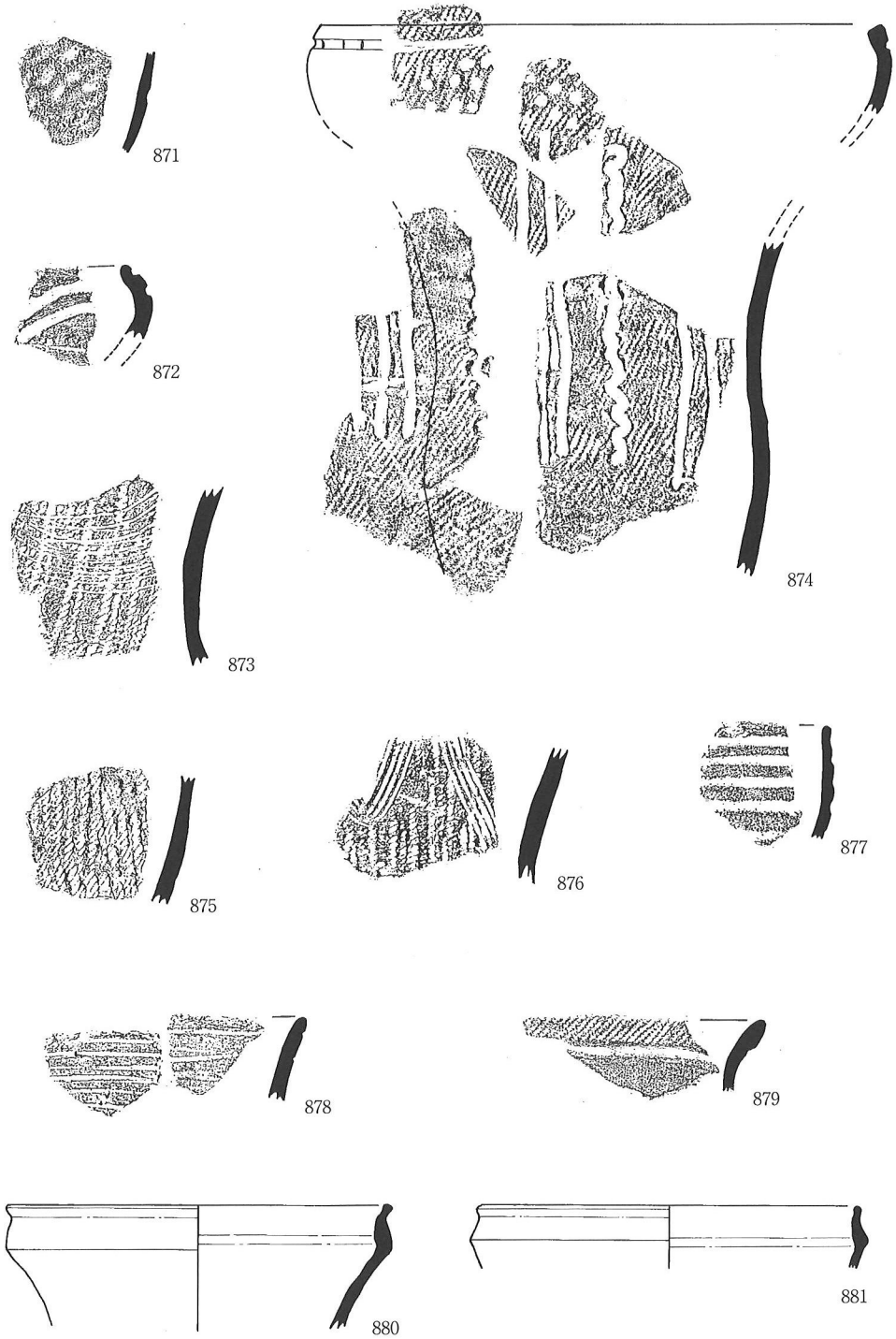
（887）は突帯下を強く横ナデしている。内外面ともナデ調整。褐灰色を呈し，胎土中には角閃石を多量に含んでいる。弥生時代自然河川出土。

（888）は口縁端部に突帯をめぐらし，突帯上には軽い刻みを施す。復元口径19.2cmを測る。外面はナデ調整。内面は条痕調整の後ナデ調整。褐灰色を呈し，胎土中には角閃石・金雲母を含んでいる。弥生時代自然河川出土。

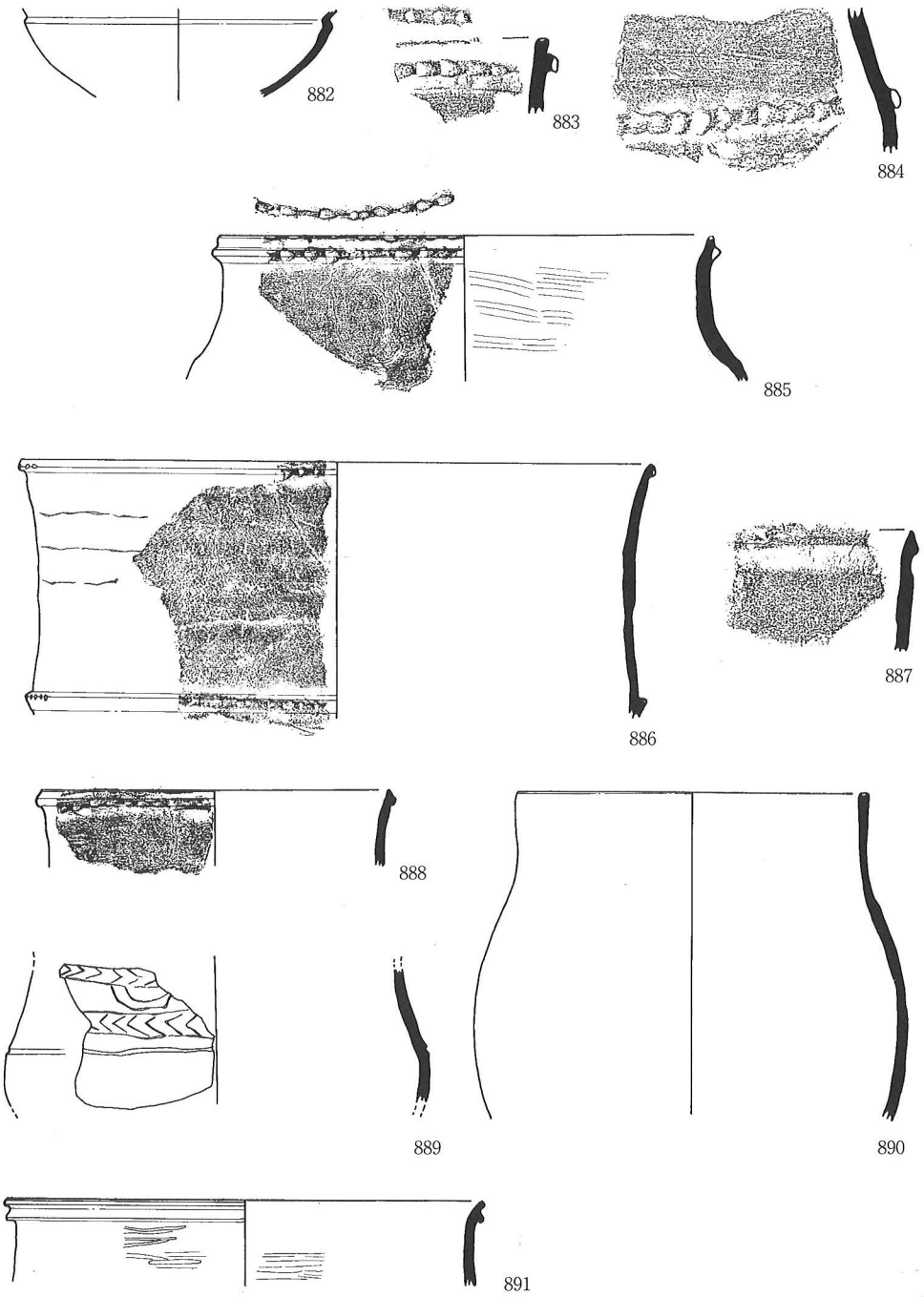
（889）は壺形土器の体部中位と考えられるものである。中位に1条の沈線をめぐらし，体部上位には針先のように細い施紋具で描かれた矢羽状紋が，沈線によって区画されて帯状に施紋されている。また，矢羽状紋に挟まれて弧状の沈線紋もみられるが，どのように展開するかは判断できない。外面中位の沈線以下はケズリ痕が残り，内面ナデ調整である。体部の最大径は復原で，約23.4cmを測る。内外面とも灰褐色を呈する。弥生時代包含層Ⅰ出土。

（890）は口縁部が直立する直口壺形土器で，復原口径19cmを測る。全体に磨滅しているが，無紋地と考えられる。口端面には軽い刻み目がある。外面褐灰色，内面暗灰褐色を呈する。弥生時代包含層ⅠとⅣから出土した破片が接合した。

（891）は壺形土器もしくは深鉢の口縁部で，復原口径26cmを測る。口縁直下に，1条の突帯をめぐらしている。外面口縁端部から2cmほどの幅で赤色顔料が塗布されていたようである。外面は横位のヘラミガキ状の調整，内面は条痕調整の後ナデ調整。外面暗褐色，内面灰褐色を呈す



第106図　58－２区 縄紋土器 実測図（2）（871～879は1／3，880・881は1／4）



第107図　58－２区 縄紋土器 実測図 (3)
(883・884・887は1／3，882・885・886・888～891は1／4)

る。精良な土器である。縄紋時代自然河川と弥生時代自然河川から出土した破片が接合した。

以上が，58－2区から検出した主な縄紋土器で，前期を除く，早期・中期・後期・晩期の各期の土器が含まれている。早期の神宮寺式は近年類例が増え，隣接する神並遺跡では有茎尖頭器を伴い，多量に検出されている。中期の土器はいずれも後半のもので，(870) は加曾利E式期前半の影響を受けるが，胎土中に角閃石や金雲母を含み，在地の土器の可能性が認められる。それに対し，(873～876) は搬入品と考えられる。後期の土器3点のうち，(878) と (879) は北白川上層式に含まれよう。(877) は，元住吉山式であろう。

晩期で重要な資料となるのは，(889～891) の土器である。(889) は弥生土器の可能性もあるが，胎土，調整から判断して縄紋土器としたものである。形態的には晩期長原式の範疇に含めて考えてよいと思われるが，矢羽状紋は板付式との関連も考えられ，今後，問題になる土器である。(890) も晩期終末に位置づけられようが，従来の長原式には口縁部突帯の形状を示し，また，赤色顔料の塗布という特徴を有するが，晩期終末の土器として位置づけておきたい。

いずれも編年上貴重な資料であるが，検出されたのが河川や包含層であり，共伴関係を明らかにすることはできない。また，河川と弥生包含層の遺物は膨大な量に達しており，今後も整理中に縄紋土器が確認されることも十分に予想できる。さらに，周辺遺跡の過去の，そして現在の調査においても縄紋土器が検出されているようである。遺物整理が完了し，周辺遺跡の状況が明確になった段階で，再度検討を重ねたい。

第3節　小　結

本調査区（面積 1,082 ㎡）は，前年度に上層遺構を調査しているので，今回は下層遺構が対象。縄紋時代中期から近世までの遺構面が検出され，多量の遺物が出土している。

以下，主要点を列記する。

1．縄紋時代の自然河川から，比較的まとまって中期後半の土器が出土した。さらに河川埋没後に堆積した包含層中より後期～晩期の土器が出土している。

2．弥生時代の自然河川，甕棺1基，壺棺1基を検出。河川中から多量の弥生時代中期から後期の土器，石器，木製品，イノシシ等の動物遺存体が出土。

3．古墳時代の自然河川を検出。河川中から5世紀後半の須恵器，土師器とともに剣，刀形木製品等の武器形木製品が出土している。

4．中世の自然河川三条を検出。各々の自然河川からは多量の土器，木製品，動物遺存体等が出土している。特に中世自然河川2からは，平安時代末の土器とともに保存状態が良好なイヌの頭蓋骨やウマー体分の骨格を検出した。

5．井戸1からは，平安時代後半の瓦器椀，土師質土器，墨書のみとめられる板状木製品，つちのこ，ゲタ等が出土。

６．井戸２基を検出。井戸１は室町時代，井戸２は南北朝と推定される。出土遺物はいずれも少量であるが，井戸１からは，ウマの中手骨が出土。

第Ⅶ章　まとめ

58－2・3・5・7区を調査した結果，大約，西ノ辻遺跡の遺構の変遷が明らかとなった。以下，時代順に概略を述べ，併せて遺物の特徴も明らかにしたい。

1．59－3区(註1)，57－4区(註2)，58－7区のいずれも調査区北端で弥生時代中期の方形周溝墓を3基検出した。59－3区の方形周溝墓は，溝の一部が検出されただけで，周溝墓になるかどうかについては明確でないが，溝中からⅢ様式（古）の壺や碧玉製管玉が出土したので，周溝墓と推定した。3墓の周溝墓は，いずれもマウンドは後世削平されており，主体部も検出されなかった。3墓の周溝墓は，その辺を東西南北に合致させて，互いに連接することなく，間隔を開けて並んでいた。

　1号・2号方形周溝墓では，周溝に接して壺棺・甕棺が数基検出された。棺に使用された土器は，いずれもⅢ様式（古）のもので，方形周溝墓の供献土器と同時期と推定された。その一方で，周溝から30～70m離れた自然河川の肩や中洲から，やはり同時期の壺棺・甕棺が3基検出された。壺棺・甕棺にしても，設置する場所に若干の違いがみとめられるようである。

2．弥生時代以降，平安時代まで，遺構は検出されない。その時代の遺物は破片が包含層中等から若干出土するが，ほとんど，人がこの池を利用した結果とは考えられない。

3．58－7区土坑1からは，平安時代中期の遺物が出土した。「大満」「知」と書かれた墨書土器・黒色土器碗・土師器皿・二彩皿・銭貨・用途不明木器等。地下に自然に出来たトンネル水路をたまたま発見した古代人が，土坑を掘削して何らかの目的に使用したのであろう。

4．平安中期から平安末期まで遺構は検出されない。その時代の遺物も出土しない。人がこの土地を利用しなかった様子である。

5．58－3区・59－2区で，平安時代末期の井戸が6基と配石遺構が検出された。57－4区・59－4区で，同時期の井戸が8基検出された。時期が明確でない58－5区井戸6を除くと，西の井戸群と東の井戸群との間に約70mの空白地帯がある。

6．鎌倉時代になると，58－3区から58－7区の東西150m，南北26～48m間に30基の井戸が検出された。各調査区万遍なく井戸が検出されている。57－4区では，中に多量の遺物を含む土坑が3基検出され，砥石を使う作業所遺構が検出され，柱穴群もこの時期のものも含まれていると推定され，集落の中心部を調査した模様である。集落の西端・自然河川の肩に，58－3区では，土壙墓が検出された。中年男性を葬ったこの墓は，無縁仏を納めたものだろうか。

7．鎌倉時代の井戸は，大概が検出面下1m位までは，大量の土器や石器・瓦等が投棄されており，人が埋めた結果と考えられる。狭い土地にかくも多数の井戸が掘削されると，使用不能になった井戸は，次々に埋めてゆかなくては，危なくて仕方なかったはずである。また，井戸の中程から底にかけては，釣瓶代わりに使われた曲物桶が，完形品もしくは底板だけが落ち込ん

でおり，水汲みに曲物桶が相当使われた様子が伺える。また，井戸は99％までが素掘り・枠無しであるから，少し雨でも降ると，周囲から雨水がどんどん井戸中に入った模様で，カエル・ネズミ・亀等の骨が多量に出土するのも，その際，押し流されてきて閉じ込められた結果と考えられる。

8．58－7区井戸7では鎌2本・斧・漆器椀3個がほぼ完形で出土し，57－4区井戸23ではコモゲタ，同井戸15では籐箕がほぼ完形で出土したりと，井戸中に使用不可能な木製品がそのまま投げ込まれている場合がある。完形品の瓦器碗，土師質皿・羽釜が井戸中に投げ込まれている現象と同じで，意識的に何らかの目的があって埋められたものなのだろう。

9．南北朝時代には，自然河川がほぼ埋りかかっており，58－3区から58－7区までの間に11基の井戸が検出された。59－2区井戸1からは「蘇民将来」の木簡が出土しており，やはり同時期の59－1区でも同じ木簡が出土していることから，無病息災を願ったお礼を井戸中に投棄する風習があったと推定された。

10．室町時代には，自然河川は埋っており，58－3区から58－7区までの間に，12基の井戸と配石遺構が4箇所で検出された。57－4区・58－7区・59－4区で検出された柱穴群もこの時代のものと推定され，鎌倉時代以降集落の中心がこの場所に存続した様子である。

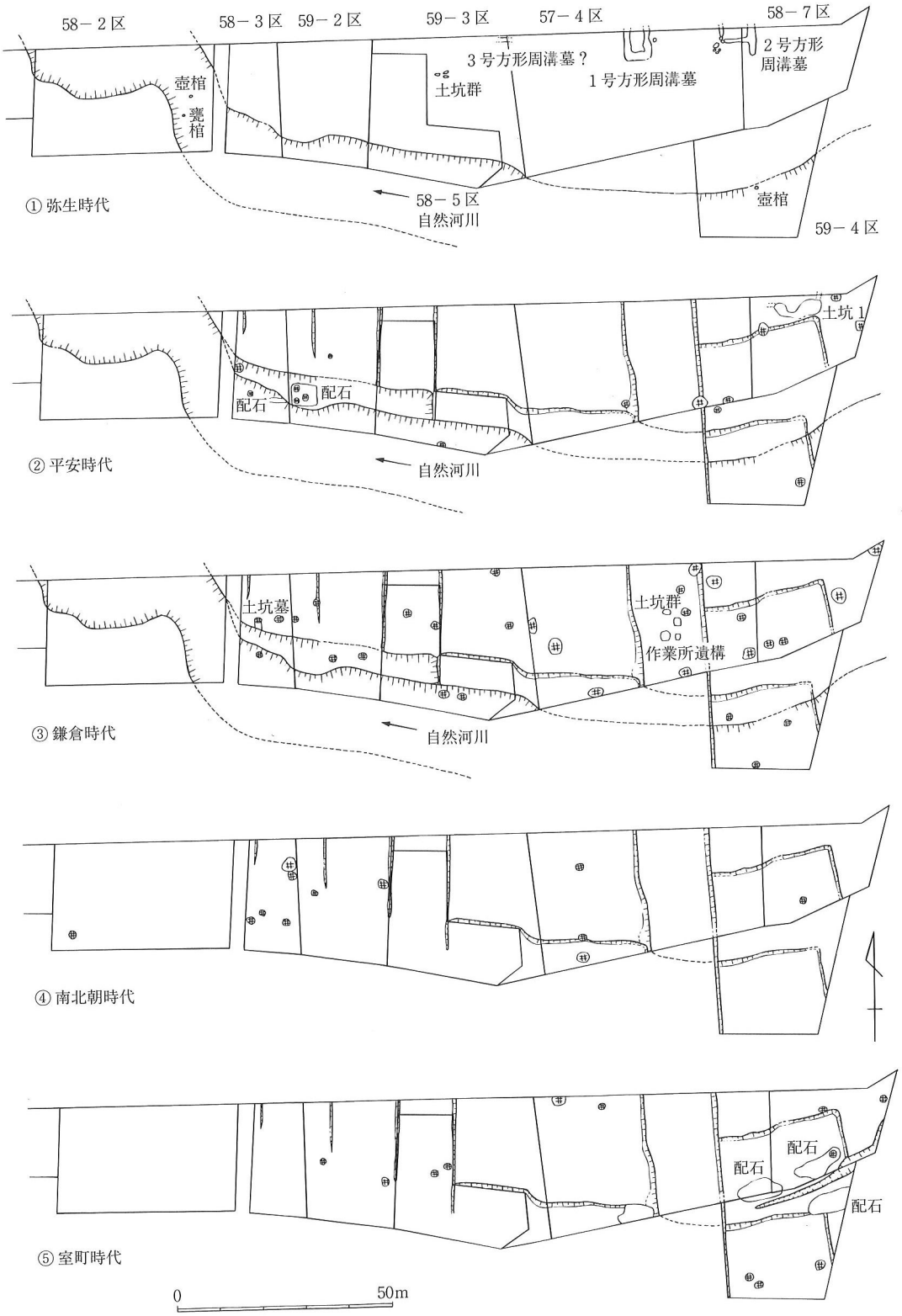
11．室町以降の遺構は検出されず，遺物も出土しない。江戸時代以降では，59－2区でため池が築造され，肥桶が57－4区で検出されたりしているが，だいたいは水田・畑だったらしく，スキ跡・溝等が58－5区・58－7区・59－4等で断片的に検出されている。

12．以上，この主として中世に盛えた西ノ辻集落は，出土遺構や遺物から集落址とは推定できても，それ以上に集落の名前とか住人の名前を伺わせるものはなかった。ただ，河内地方の他の中世の集落址に比べると，少し異なった点も多々認められるものである。たとえば，大和地方の立派な瓦器碗や羽釜等の食器類が多量に出土したり，日本最古の石臼や茶臼・石硯等，京都と関連のある当時としては，最新式の遺物が出土したり，土錘の大量出土，オオタニシの大量出土等，河内湖を大いに利用した姿が復元される点等である。また，「蘇民将来」「奉伽持仏頂尊勝陀羅尼」「馬の頭と鹿の足を井戸中で組み合わせた遺構」等，信仰の姿を伺わせる資料も多い。遺構の点で特に変わっているのは，この調査範囲だけで102基も検出された井戸の多さであった。段丘上にある西ノ辻集落で，南に接して自然河川もあるのに，何故このような井戸が掘り続けられたのか，甚だ不可解であった。この集落の性格に関しては，まだまだ不明な点が多く，今後の東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会の調査成果とも併せて，究明してゆかねばならない課題であろう。

〔第Ⅵ章の註〕

（註1）　宮崎泰史・西口陽一編　1995『鬼虎川遺跡26次・西ノ辻遺跡18～20次調査概要報告』大阪府教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会

（註2）　宮崎泰史編　1986『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅱ』大阪府教育委員会



第108図　西ノ辻遺跡時代別主要遺構概略図